

イナズマイレブン～蘇る雷鳴～

暁の教徒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼い頃からサッカーの才能に恵まれた少年、伊槌鳴哉は自身の才能の証明の為海を渡り、そこで現実を知った。絶望だけを胸に残した伊槌は日本に戻り、サッカーから逃げるように地元青森の『憲戸中』で普通を享受しようとする。

自らの力に絶望しながらも、サッカーを諦めきれない伊槌。そんな彼の前に、憲戸中サッカー部キャプテンを名乗る女が声をかけてきた。

これは、折れた天才が再び光を取り戻す物語。

(※12／11、『原作後』・『独自解釈』タグを追加)

目次

再起への道程 編

プロローグ：消えた天才

1話：歩き出すために

2話：入部と、勧誘

3話：初練習

4話：絶対王者

5話：交流大会練習試合 vs 青森大学附属中学

6話：恐るるに足らず

7話：つかんだ

8話：伊槌鳴哉

フットボールフロンティア青森県予選 編

9話：パルティード・ア・パルティード

10話：FF青森県予選第1回戦 vs 泰山中学

11話：拮抗勝負

12話：反撃の狼煙

13話：山本希望

14話：特訓の日々

15話：FF青森県予選第2回戦 vs 亜蘭中学

16話：執念

17話：胸を焼く

18話：鼓動の衝突

19話：進化への道

20話：FF青森県予選準決勝 vs 四壁恒星学院中学

21話：見えない光

416 399 378 356 332 302 275 261 235 216 200 182 167 131 112 90 74 61 44 32 14 1

2 2 話：諦めろ

2 3 話：夢見る月夜

2 4 話：逆境のマインド

426

440

464

再起への道程 編 プロローグ：消えた天才

スタディオ・マドリードの雨のピッチ、右サイドをドリブルで駆け上がる白い人影。その動きに呼応するように中央、白髪のセンターフォワードがディフェンスラインの裏へ走り出す。パスは出ない、忌々しく舌打ちをしながらも追ってきた長身ディフェンダーのマークをいなし、ポジションを取り直す。

ディフェンスと対峙するウイングを追い越して上がったサイドバックにスルーパスが渡り、相手を引きつけるワンクッションを置いて速いグラウンダーがセンターフォワードの元へ。横からのパスで体勢が悪い。このままでは前を向けないと判断し、先程のディフェンダーを背負いながら落ち着いてフリーのミッドフィールダーにパスを落とすと、間を置かず反転して裏へ走る。落としを受けたミッドフィールダーは、この未来が見えていたかのように極上のスルーパスを供給してくれた。

「来た……！」

思わず日本語が漏れる。スタジアムに響くスペイン語のチャントに背中を押されながらボールを右足でコントロール下に置き、19試合ぶりのゴールを、チームを逆転優勝に導く最高のゴールを取るために、ドリブルを開始する。

（この伊槌鳴哉いづちなりやの名を！ 再び世界に轟かしてやる！）

脳裏に過ぎる苦渋の記憶。日本で天才と持て囃され、自信を燃やしてスペインの強豪、キング・マドリードの下部組織に入団し、しかし大した数字を残せていない。ついに代表にも選ばれなくなり、もはや母国ではコアなサッカーファンの中でしか話題に登らなくなってしまう。

それも、今日で終わりだ。やっと終わりだ。

（俺は変わる。再び光を取り戻す！ そのために！ この試合で、FCカタルーニャから点を奪う！）

ゴール前、完璧に抜け出した。腰を落として構えるゴールキーパーの手からは炎が溢れている。その姿を認めた伊槌は、スピードを緩めて絶対の自信を持つ必殺のシュートを放つモーションに入ろうとした時——剥がしたはずのデイフェンダーが、背後から軸足に足を絡めてきた。

「うわっ！」

当然バランスを崩してもんどり打った伊槌を見て、カタルーニャデイフェンス陣に緊張が走る。そしてその懸念は杞憂とはならず、主審は笛を吹くと共にペナルティアークを指差し、PKの判定。詰め寄るカタルーニャ選手達を尻目に、伊槌は芝を叩いた。

「ハアツ、ハアツ……」

PKを得た嬉しさよりも、自身の手でゴールに沈められなかった悔しさが、ゴールが遠のく痛みが襲ってくる。キング・マドリードでのPKキッカーは伊槌にラストパスを供給したミッドフィールダーだ。血が出そうなほど強く唇を噛みながら立ち上がり、主審に詰め寄り抗議するカタルーニャ選手達を見やる。主審の手には赤いカードが握られていた。退場を誘発させることもできたようだ。さらに大きくなったチャントに押されるように、心の奥にあるゴールへの渴望を誤魔化してボールを拾い、いつの間にか寄ってきていた味方の中からキッカーにボールを差し出す。

『せっかく取ってやったんだ。決めろよ』

注意を払っておどけた調子で、しかし吐き捨てるように言葉を溢す。

『いいや、君が蹴るんだ』

耳を疑った。後半の28分、試合の最終盤のスコアレスで、引き分けでは優勝できない局面。確実に仕留めなければならぬこのチャンス、本職のPKキッカーではなくこの場面以外ではほとんど消えていた、途中出場のフォワードに任せるのはどう考えても得策ではない。

『……本気か？』

理性が警鐘を鳴らす。伊槌は一瞬逡巡した。

『ああ。君に点をとって欲しい』

——点を取れる。悪魔の囁きのような甘美な響きは、無得点のストレスに強く晒されていた伊槌の張り詰めた心に嫌に木霊した。

『……分かった。ありがとう』

最後には、自分の活躍を優先した。このまま終わりたいくない。再び輝きたい。燃えたぎる野心が口について出た。

そもそも、決めれば何も問題はないと、心の中で嘯く。差し出したボールを、ゆつくり下ろしてゴールへ振り向いた。カタルーニヤの選手は、既にペナルティエリアを出ており威圧感を放つキーパーと後ろのゴール、そして控室に上がる退場したディフェンダーしか視界に入らない。妙に寒くて、観客も、雨粒も、ぼやけて見えた。耳には破裂するほどの拍動しか聞こえない。

「確実に…決める」

祈るように口に出す。スタジアムに降り注ぐ雨が白いユニフォームと同色の髪を濡らす。軽く口元を拭い、伊槌は何故か震える手ではボールを持ち上げ、ゴールのわずか9・15m先、ペナルティアーケへ押し付けるようにボールをセットし数歩助走をとった。

息をついて感情を押し込める。笛の音を認めた数秒後、薄く目を開け、ゆつたりと走り始めればゴール前に対峙する灰色の人影から、背後の選手達から緊張が迸る。彼も同じだ。

ボールとの距離を半分詰めた彼は、急激にスピードを上げ、渾身の力で右の膝下を振り抜いた。

1秒後に聞こえた音は、彼の求めたネットの摩擦音と歓声。

——ではなく、しとしと注ぐ雨の音。先ほどとは違う歓声と、聞き覚えのある怒号。

そのゴールの後ろには、遠く遠くに白黒の点が見え——

——伊槌鳴哉は、ただ立ち尽くすしかなかった。

降り注ぐ春の陽光が、伊槌を微睡みから浮かび上がらせる。公園のベンチで眠ってしまったようだった。短時間とはいえ座った体勢で

眠ってしまったために酷く凝った身体をほぐしながら、ゆったりと立ち上がる。

地元の僻地にある小さな公園では、少数の子供がボールを蹴って遊んでいた。大した技術はないが、誰もが楽しそうにボールを追いかけている。陽の光にやられたのか、伊槌は眩しそうに目を細めながらぼんやりと子供たちを見ていた。

「いくぞー！ フアィア……トルネード！」

大層な口上とともに放たれた普通のシュートは、しかし大きく逸れて伊槌の足元に転がってくる。その瞬間、薄ぼんやりした伊槌の表情が、一転して苦しむかのように歪められた。

すいませーん、と子供が呼ぶ声が聞こえるが、伊槌はそれどころではなかった。足元のボールを飛んできた方向に雑に放り投げ、苦虫を噛み潰したような表情で息を弾ませながら足早に去っていく。

ボールに触れた手が震えている。白と黒のコントラストを見るたびに、チームを救えなかったあの日が、自分の才能の限界を見せつけられた、忌々しい雨のピッチを思い出してしまう。俯きながら、震えた手をもう片方の手で握って無理矢理抑える。

「うわっ」

「いてっ」

足下だけを見て歩いていたために、同年代ほどの少年とぶつかってしまった。状況をいち早く飲み込んだ伊槌は慌てて頭を下げる。

「すいません、注意力不足でした」

「あ、いや、こつちこそ……って」

少年の目が驚きとともに開かれ、同時に歓喜の色が現れる。その瞳に映る伊槌は、先ほどよりも苦しみを訴える顔をしていた。

「伊槌選手!?! え、本物!?!」

ギリッ、と伊槌は歯を食いしばる。腹の奥から湧き上がる不快感を押さえつけ、人違いです、と呪うように吐き捨てて逃げるように横を抜ける。

角を曲がって軽く背後を確認してももう誰もいない。伊槌は深く溜め息をついて張り詰めた心を緩めた。

「はあ……クソ」

引つ越しや転校の作業の気分転換に久々の地元を散歩していただけで忘れたいことを思い出してしまった。やりよしの無い怒りに軽く悪態をつきながら幽鬼のような気怠げな足取りで帰路に着く。心地よくそよぐ風と春の陽射しは、伊槌の心など映すわけもなく穏やかだった。

伊槌がこれから通う中学は『憲戸中』と言う名の私立中学だ。選んだ理由は主に二つ。家から近かったこと、そして、サッカーに力を入れていない学校だったからだ。軽く調べた伊槌は、フットボールフロンティアここが一昨年も、F 県予選で一回戦敗退の記録を叩き出していることを知っている。誰も覚えていないような弱小校であることは、マドリッドから離れた上でサッカーを忘れたい伊槌にとって、渡りに船だった。

とはいえ、転校初日というのは、思春期の少年にとっては胃が痛くなる事柄であることは間違いない。現に、伊槌は教室の前で悩ましげに、稲妻のようなメツシユが入ったその白髪をいじくっていた。

緊張と不安に苛まれ歪んだ表情を隠せない伊槌だったが、背後の教室の扉が開いたことで無理矢理表情を引き締める。

「さあ、入って」

教師に入室を促され、軽く会釈しながら敷居を跨ぐ。それと同時に晒される好奇の視線は、サッカー選手としての顔を捨てた伊槌にとってはあまり快くないものだった。

「彼が今日からこのクラスに転校してきた生徒だ。さあ、自己紹介を」隣の教卓に立った教師が言う。針の筵のような視線から一刻も早く逃れるべく、口元を手のひらで拭って、軽く深呼吸をしてから滔々と口を開いた。

「伊槌鳴哉です。ちょっとした都合でスペインの方にはいましたが三日前に帰ってきて、この学校に来ることになりました。お願いします」何度もシミュレートしたその言葉を機械的に吐き出し頭を下げる。

肩の荷が下りた心地よい感覚に包まれながら、ばちぱちとクラスメイ卜達のどこか沸きたった拍手を受け、あらかじめ知らされていた机に、早々と着席する。何人かの生徒は伊槌のことが気になっている様子だったが、都合よくなつた予鈴のおかげで伊槌に話しかけてくることはなかった。

授業後の彼らの動向が手にとるように分かつて、伊槌は細い溜め息をついた。

それからは質問責めだった。

スペインのこと、好きなこと、趣味。

学校という変化の少ないコミュニケーションにいる学生にとって伊槌という新しい風は、伊槌が望まずともとても新鮮に映つたのだろう。

元々饒舌では無いことに加えて、精神的にも十全と言ひ難い伊槌にはひどく体力を持つていかれることだったが、これも何とか乗り越えた。帰路に着く伊槌の顔には色濃い疲労が現れていた。

それと、誤算も一つ。『伊槌鳴哉』というサッカー選手は、やはりというべきか日本ではもうあまり有名では無いらしい。クラスメイトにも、他の学友にも一度も聞かれなかった。となると、いつかの少年は低い確率を引いてしまったということなのだろう。

サッカーを捨てたい伊槌にとって、その顔を知られていないことは僥倖のはず。しかし、胸の中にはその喜びの他に、言い知れぬ不愉快な感情もあつた。

「はあ……」

重い感情を抱えた伊槌は肉体と心の疲れから、通学路にある公園のベンチに腰を下ろしていた。

サッカーグラウンドが中央に鎮座する、大きな公園だ。青森は地元だが、ここは初めて来る地域。子供の頃に来たかったな、と、ふと現れた思考を頭を振って飛ばし、自嘲する。子供の頃のサッカーなど、もう自分には関係ない。

カバンを下ろし、ただただ無心で沈み出した太陽の光を感じてい

た。すると、その足元に、忌々しいあの白黒が転がってくる。伊槌はどこか既視感のある光景に顔を顰め、軽く蹴り飛ばす。

「おっと、せんきゅー！」

少女の声に、ふと顔を上げる。長いピンク色の髪をした、透き通るような瞳を持つ大人びた見た目の綺麗な少女だった。彼女はその髪と同じピンクを基調としたユニフォームに身を包んでおり、その胸元には『憲戸』の校章があしらわれている。

「サッカー部……」

ふと言葉を漏らした。彼女が、憲戸中の弱小サッカー部の一人。ボールを抱えて笑う少女の姿に、伊槌は少し嫉妬した。

少女が、伊槌の姿を観察するようにしやがみ込んで顔を覗き込んでくる。反射的に目を逸らした。

「君い、うちの中学の子だね？」

「はあ……たしかに憲戸中ですけど」

ぱつと立ち上がった少女の突拍子のない質問に、気が抜けた声で返す。年がわからなかったので、とりあえず敬語で返した。

少女は伊槌の肯定に笑みを浮かべ、びしつと擬音がつきそうなほど鋭い動きでこちらを指差してきた。

「私は憲戸中サッカー部キャプテンの様崎咲夜さまさきさくや！ 単刀直入に言うけどサッカーやろう！」

突然指を突きつけられて少し驚いた様子で伊槌がのけぞる。様崎は大人びた容姿に反して行動は何処か無邪気で、言い方を考えなければ子供のようだった。

気を取り直した伊槌は、軽く息を吐いてから返す。

「すいません、嫌です」

その言葉に様崎は顔を曇らせ、えー、と不満げな声を漏らす。その様子に伊槌は少し心を痛めた。

「いいじゃーん、君センスありそうだしさー」

「……ちなみに、何でそう思うんです？」

様崎のふとした問いに伊槌が危機感を覚える。サッカーを志すものなら、小学生でスペインのクラブに入団したかつての自分を知って

いてもおかしくない。それを知られば、執拗な勧誘を受けることになることは火を見るよりも明らかだった。

いやだって、と様崎は軽い調子で話す。

「さっきさ、ぽーんってボール蹴ったときすごい上手かったもん。一流っていうのはボールタッチだけでも上手いもんなんだよ」

伊槌は、様崎のその観察眼に僅かに目を見開く。

伊槌の僅かに発揮された錆びていない技術に気づけるということ、様崎もかなりのやり手なのだろうか。伊槌の脳内に疑問が浮かぶ。

この弱小サッカー部のキャプテンは何者なのか、降って沸いた問いを溜め息と共に忘れ、立ち上がる。

「とりあえず、やる気ありませんので他を当たってください。すいません」

カバンを持って、さっさと立ち去ろうとする伊槌の前に、流れるような動作で様崎が立ち塞がった。

「まあまあ、体験ってことでちよつとだけ私と遊ぼーよ」

「……嫌ですが」

「君に拒否権はないよーだ」

へらへら笑う様崎に少し腹を立てた伊槌は、かわしてやろうとフェイントを織り交ぜて様崎の横を狙う。しかし、彼女は伊槌のそのステップワークに軽々としてきた。

「足捌きいいーね！ やっぱセンスあるよ君ー！」

「それはっ、どうもー！」

少し熱くなってきた伊槌は大人気なく本気のステップでかわしていくものの、様崎も負けじと食らいつく。

三分ほどの格闘の末、折れたのは息を弾ませた伊槌だった。

「分かりました、分かりました！ やりますよ、一回やったら帰りますからー！」

白旗を挙げるように両手を掲げた承の言葉を言わされた苦い顔の伊槌を見て、様崎はひどく愉快そうに破顔した。

制服の上着を脱ぎ、白いシャツ1枚に姿を変えた伊槌が、コート半ばほどにてボールをセットする。その腕一本分ほど距離を空けた前で、様崎がゴールを背に構えていた。

ルールはーフコートでの1 on 1。ゴールを決めれば伊槌の勝ちで、ボールを奪えば様崎の勝ちと至極単純なものだ。

「ディフェンスでいいんですか?」

「そりゃー私DFだし!もちろん!」

軽くりフティングをしながら、深くため息を吐く。伊槌にとってこの勝負は何の利点もないため、真面目に取り合う必要などない。だが、手を抜いて弱小校のキャプテンに負けるのは伊槌の小さなプライドが許さなかった。

「いつでもはじめていいよー」

様崎が変わらず軽い調子で手を振る。ボールを地面に落とし、伊槌は前を見据えた。

「じゃあ、遠慮なく」

その言葉とともに、ドリブルを開始する。

背筋をしっかりと伸ばした体勢で、細かいタッチのドリブル。フェイントは全く入れていないが、相手のアクションに対して即座に反応できる理想的なフォームに、様崎はボールヘチェックできず、シュートコースに体を入れて切り、スタンスを保ったまま後退していく。

ゴールまで約25m。シュートレンジに入ったことを認識した伊槌が仕掛ける。

左へのボディフェイント、一瞬つられたのを見てすかさず右足でボールを跨ぎフェイントを重ねる、左に右に振られた様崎は軸をずらしてしまい、一瞬たたらを踏んだ。

「上手いね……っ!」

「そこっ!」

その機を逃す訳もなく、右にボールを持ち出してかわしに行く。何とか後追いつてくる様崎を認めた伊槌は、それに構わず右足を振り抜く体勢に入った。

「っ！」

すかさず様崎が体を持つていって、目一杯伸ばした足でシュートブ
ロックを試みる。伊槌はほくそ笑んだ。

瞬間、伊槌は右足で蹴り抜きかけたボールを舐めるように扱い、軸
足の後ろを通して様崎を置き去りにする。

「わっ、うまつ……い！」

ハイレベルなクライフターン。リアリティのあるシュートフェイ
クにかかった様崎は、体を倒しながら実に楽しそうに笑んだ。

「終わり……い！」

後はボールを左足に持ち変え、完全に空いたコースへ打つだけで
ゴール。勝利を確信した伊槌は、しかしその刹那感じた寒気に、動作
を直前でキャンセルして、ボールごと後退した。

「おっ!？」

結論から言えば、その判断は正解だった。

完全に剥がしたはずの様崎が、先ほどまでボールを置いていた位置
に鋭いスライディングを仕掛けてきたいたからだ。

「嘘だろ……完全にかわしたはずだ……」

「ふふん、すごいでしょー」

ケラケラと様崎が笑う。軽薄そうな雰囲気にして、守備力は、特
にその敏捷性は伊槌から見ても高い次元にある。ギャツプまみれの
女だ、伊槌は心の中でつぶやいた。

息を整えて思考を回す。伊槌は先ほどのような「剥がす」ドリブル
はともかく、「抜く」ドリブルは不得手だ。となれば、前よりも速いテ
ンポで様崎を剥がし、より早く、ブロックできないようなシュートを
打ち込むべきかと結論付け、再び様崎を見やると、今日だけで何度見
たかわからない愉快そうな表情の彼女がいた。

「……? 何笑ってんだ？」

「ふふ……いやー、君の楽しそうな表情見てたらさあ、こっちも楽しく
て」

楽しそうな表情、という言葉に、訝しげに目を細めた伊槌だが、頬
に手を当てると、自分が笑っていることに気がつき、動揺する。

マドリードで全ての自信を打ち砕かれ、失意と怒りの思い出しかないサッカーを、自分が楽しんでる。その奇妙な状況に、しかし伊槌は合点がいった。

「ああ……楽しいよ。卒業試合には最高の相手だ」

「卒業試合？　なんかよく分かんないけど、今の君の方が面白い子だね！」

崩れた口調を直そうともせず、伊槌は笑みを深める。彼女とひとしきり笑い合った後、思考を切り替えゴールまでの道筋を探して感覚に没頭する。

一秒経たないうちに息をついた伊槌は先ほどと同じように背筋を伸ばして、より細かいタッチで様崎と相対した。

彼女はまた待ちを選択する。伊槌の手に対して後出しジャンケンができる都合、様崎からアクションを起こす必要はない。この重要な局面でも、互いにクレバーさを失っていないかった。無駄口を叩くこともなく、相手の動きに集中する。

やはり先に仕掛けるのは伊槌。広く幅をとったダブルタッチで右に動き前を開けようとするが、当然様崎も着いていく。伊槌はまた同じように、様崎の動きの逆を突いて左へ突破を図り、そしてリプレイのように彼女は立ち塞がる。

ここからが新たな局面。伊槌はボールに足を乗せながら先ほどと同じように後退する仕草を見せた。下がればコースが空く、その思考を読んだ様崎が一気に距離を詰めボールを奪おうと、足に力を込めた。

それを認めて、伊槌が笑う。彼はボールに乗せた足を軽く左斜め前に押し出し、縦に動いた様崎の横へ逃げた。

いくら高いアジリティを持つとは言えど、行った動作を止めるためには一瞬を要する。そして、伊槌はその一瞬を利用して置き去りにできるほどのプレイヤーだった。

「やばっー」

様崎が咄嗟にバックステップを踏み、シュートブロックを試みる。既に伊槌は、シュートフォームに入っていた。

左のつま先でボールを上げる。刹那、目にも止まらぬスピードで左足を引き、ボールの下側を擦りその場で強い回転エネルギーを注入。引いた勢いのまま、大きく振りかぶった左足がその場で回転を続けるボールの芯を蹴り抜き、回転による足とボールの摩擦は電撃を生み出し始めた。

これこそが伊槌の切り札。様崎が着いて来れないほどのスピード、そしてブロック不可能な威力を兼ね備えた、マドリードへの切符を掴んだ彼の代名詞。

左足に収まるボールは既にバリバリと音を立てて電撃を散らす。自身最強の一撃を渾身のボレーとともに振り抜いた。

「――電閃^{デンセン}ッ！」

稲妻をまとったシュートは様崎の足を弾き、風切り音、炸裂音とともにゴールへまっしぐら打ち出された。

シュートは威力を増して伸び上がり、空気を切り裂き――そしてクロスバーに激突してゴールを逸れた。

「……え」

バーに弾かれたボールを見上げていた伊槌は自身の中で灯火のように燃えていた何かが急速に冷めていくのを感じた。ルーズボールは様崎が押さえ、ゴールを守り切った彼女の勝利で決着となる。

「いやー惜しかったね！でもすごいシュート！やっぱサッカーやら――」

「やらないです」

様崎の言葉に乱雑に返した伊槌は、カバンを乱暴に取り上げそそくさと退散した。彼女はその様子を首を傾げて見ていたが、「いつでも待ってるよー」と声をかけるにとどめてピッチに戻っていった。

シュートを外した瞬間、伊槌の脳裏にはスタディオ・マドリードの記憶が走り回っていた。

優勝を逃したPK失敗。感情的なサポーターの容赦ない野次、少ないチャンスを活かせなかった自分への怒り、周囲の失望。その全てが伊槌の心に重くのしかかる。

あの日と違って、空は穏やかなのに。

伊槌の顔は、大雨に降られていた。

1話：歩き出すために

様崎との一件を終えた伊槌は、亡者のような足取りで帰路についていた。

網膜に焼きついた先ほどのシュートミス。サッカーの神に愛されなかったのにサッカーを楽しんでしまったことへの罰なのだろうか、そんな突拍子もないことが浮かんでくるほどに、伊槌の思考は暗闇に落ちきっていた。

「ただいま……」

力なく自宅の扉を開く。落ち窪んだ瞳と隠しきれない複雑な負の感情を目の当たりにした母親は度肝を抜かれる。

母親を無視して、伊槌はそのまま部屋へと向かう。さっさと部屋着へと着替え、泥のようにベッドに倒れ込んだ。

(……サッカー)

ぼんやりとした頭で考える。

幼少の頃から続けてきたサッカー。サッカーは自分に全てを与えてくれた。ゴールの喜び、勝利の快感、成長の嬉しさ、そして、底知れぬ野心。

それらは、キング・マドリードでの挫折を持って、全て水泡の如く消えた。サッカーで築いてきた自信のすべては、粉微塵になくなった。

確かに、サッカーは楽しい。が、それ以上に伊槌は怖かった。まだサッカーを続けていたとして。もう一度あのような大失敗をしてしまったら、二度と立ち直れないであろうことが。

それに、体が思うように動かない。シュートが上手く飛ばない、パスが上手くできない、タッチが乱れる。失敗のトラウマは、伊槌の心に深く根付いていた。

だからこそ疑問に思う。何故、様崎とのサッカーはあんなにも伸び伸びとプレーできたのだろうか、と。

シュートを外すその一瞬まで、確かに伊槌は全開のプレーが出来ていた。マドリードに飛び立ってから久しく感じることもなかった、

サッカーの楽しさに触れた気がした。

もう一度あんなサッカーを――

「……はあ」

余計なことを考えだした頭を犬のように大きく振るい、体を小さく丸めて眠りにつく。

(もう、サッカーはいい)

そう考えた時、胸の奥が、かすかに締め付けられたような気がした。

悩みに耽りながら眠った伊槌の目覚めは最悪だった。

寝不足で痛む頭を押さえながら憲戸中の門を潜る。校門を潜れば否応にも目に飛び込んでくる砂のサッカーグラウンドつきの校庭を少し見渡すと、片隅に犬小屋のようなサッカー部部室があった。

(昨日のキャプテンは強そうだったが、部全体が弱小なのは間違いないな) そうかな……)

薄ぼんやりとそう考える。

様崎は、一度相対しただけでも分かるほどに弱小校のプレイヤーを大きく逸脱した能力を持っていた。そのため、伊槌のリサーチが間違っており、他の部員もやり手なのではないか――と伊槌は疑念を抱いていたが、あの惨憺たる光景を見れば杞憂だと断定できる。

そこでふと、またサッカーのことを考えている自分に気がついた。

「ああ、もう、辞めだつての……」

自分自身にそう吐き捨てて、伊槌はため息を吐く。

その時、伊槌は自身の背後に誰かが近づいている感覚を覚え、ゆらりと振り返る。

「よっ、昨日ぶりー」

「あなたは……」

それは、腰まで伸ばされたピンク色の髪を持った少女、様崎だった。

学校なので当然だが、ユニフォームではなくブレザーとスカート、戸中の女子制服に身を包んでいる。胸元のリボンの色から、先輩であることが分かった。そして目を合わせた時、昨日は気がつかなかったが、伊槌と彼女はほとんど同じ身長なことに気づく。伊槌は微妙な気分になった。

様崎はニコニコとした表情のまま伊槌の方に腕を回して来る。伊槌の身体中に嫌な予感が走った。

「ねえー、やっぱサッカー部入ってよー、楽しいからさー」

「え、ええ……またですか……?」

伊槌の顔があからさまに歪む。昨日はすんなり帰してくれたのに、どう言う風の吹き回しなのだろうかとも思った。

「あの後やっぱ感じたんだよ、君とやるサッカーすごく楽しかったてさー」

「楽しい……ですか」

首をこくこく縦に振って肯定する様崎に、伊槌は逡巡する。

昨日までの伊槌なら即座に一蹴したであろう誘いだが、今の伊槌はあのlonelyを通してサッカーへの煮え切らない思いに苛まれていた。

この人とのサッカーが自分に与えた感情をもう一度感じたい——伊槌は自分の心に、そのような考えがあることを認めざるを得なかった。

しかし。

「……すいません、やっぱり遠慮します」

「えー、強情な子だなあー、もおー」

出来の悪い子供を見つめるような目つきで様崎が軽く頬を引っ張ってくる。

伊槌は体を捻って様崎の腕の中から抜けだし、律儀に「それでは」と別れの言葉を残し、校舎に全速力で走り去っていった。

残された様崎は、不満そうに頬を膨らませて呻くが、やがて飽きたように彼女も校舎に向かっていった。

伊槌の憲戸中での二日目は様崎との邂逅以外はイレギュラーもなく、つつがなく進んでいく。キング・マドリードでは、『全員がサッカー選手になれる訳ではないが、ここでの日々を無駄にしてほしくない』という理念のもと勉強にも取り組んでいたのも、学業においても苦勞する場面はなかった。そして、自分がその理念に掬い上げられた一人であることを認識して、伊槌は少し苛立ちを覚える。

授業間の休み時間には、時折昨日話せなかったクラスメイトと談笑を交わすこともあり、転校生というどこか特別なポジションから普通のクラスメイトへと馴染めているようだった。本来饒舌ではない伊槌にとって昨日のような質問地獄は正直言つて精神的にきついでころがあつたので、早々に興味を失つてくれたクラスメイトたちに感謝すらしていた。

だから、この男との会話も、始まるまではすぐに終わるものだろうと思つていた。

それは昼休みのことだった。机で軽く体を伸ばす伊槌の元に、逆立てた黒髪に、赤色のメッシュが入った少年が、片手を振りながら近づいてきていた。

「よう転校生！俺は木崎爆音きざきばくとつてんだ！よろしくな！」

「ああ、どうも。伊槌鳴哉です」

木崎は、挨拶だけでもわかるほどに、気怠げな伊槌とは対照的な活力が迸るような少年だった。ああよろしく、と元気に返し、人当たりのいい笑みを浮かべながら、伊槌の隣に座る。

「そーいやお前さ、朝キャプテンに絡まれてたよな？」

「キャプテン……様崎さんのことですか」

見られてたのか、伊槌は少々苦い顔をしながら肯定する。

モテ期でも来たのか、と囁し立てる木崎に対して虫を払うように手を払って強く否定する。

「冗談だよ、昨日キャプテンとサッカーしたんだろ？ 気に入られたんだな！」

そう言つて木崎は伊槌を観察するように覗き込んでくる。じつと

見つめられる伊榎は居心地が悪くなって面倒そうにため息をついた。「うちのキャプテンがわざわざ勧誘するなんて、随分面白そうなやつだなー!」

「あの人はそんなにこだわりが強いんですか?」

「こだわりって言うか、キャプテンは面白いことじゃないとすぐ飽きちゃう人なんだよ」

伊榎はその言葉を聞いて少し考えがまとまる。

昨日帰してくれたのは伊榎にサッカーをする意志が全くなくなつたためにつまらなくなつたのだろうか。ならば今日の伊榎は彼女の気を惹く何かがあつたのか、それは分からない。

ただ少なくとも、今の伊榎は彼女と出会う前よりもサッカーに対する感情が大きくなつていることは否定できなかった。

そして、サッカーを忘れることができな自分に対する苛立ちも増していることも認めざるを得ない。

「なあ、ところでさー」

妙に元気な木崎の呼びかけに、伊榎は少し腹立たしい思考を片隅に追いやつて気の抜けた相槌を打つ。そして、数秒後その選択を後悔することになる。

「伊榎ってさ、スペインのなんかめっちゃ強いクラブでサッカーしてたんだろ!? すげーな!」

「……っ!?!」

目に見えて伊榎が動揺する。目を見開いて、椅子を勢いよく引き倒して立ち上がり、木崎を睨みつけるように見つめる。

伊榎の突然の行動に、流石に驚きを隠せない木崎が心配の声をかける。

「うおっ!?! どうした急に!」

「……いや、何でもない……ですよ」

敬語を取り繕つて伊榎が椅子を直す。

何でもないと口では言っているが、手は震え、冷や汗を垂らすその様子はどう見ても尋常ではない。先ほどまでの様子とは打って変わつて木崎も戸惑つたように聞いてくる。

「な、なあ。俺バカだから分からねえけどさ、なんか変なこと聞いちやったか？」

「大丈夫ですよ……少し一人にしてください」

話すことすら面倒だと言うようなぶっきらぼうな口調で伊槌が席を立ち、教室を出ていく。伊槌の変わりように騒然としていた室内も徐々に落ち着きを取り戻していき、やがていつも通りの風景が取り戻される。

木崎も心配そうな表情で伊槌が去っていった方を見ていたが、少し経つと微妙な表情のまま自分の席に戻っていった。

(クソ……)

伊槌は陽の差さない校舎の裏手で、壁にもたれながら天を仰ぐ。曇天が彼に暗闇を落とす。

自分がどうしたいのかが分からなかった。昨日は普通にサッカーが出来ていたのに、今日はサッカーと聞くだけで苛立ちが治らない。拳句には思い出したくなかった過去まで思い出してしまった。

(俺はどうありたいんだ)

サッカーを辞めたいのか、続けたいのか。

続けたいのなら何故サッカーから逃げるのか。辞めたいなら何故昨日勝負を受けたのか。

何もかもが噛み合わない。自分が何を願っているのかさえ分からない。

(俺はサッカーをどう思っているんだ……！)

未だにサッカーボールを見るたびにキング・マドリードを思い出す。過去も捨てきれず、未来にも歩めない。

結論は出た。伊槌鳴哉が苛立つのは、サッカーに対してでも、過去の失敗に対してでもない。

(俺は、どうやって生きていきたいんだよ……！)

伊槌鳴哉は、優柔不断な自分自身に怒っていた。

そう結論づけることができれば、後は簡単だ。

選択すればいい。続けるのか、辞めるのか。伊槌の瞳に熱が宿る。

「様崎咲夜……もう一度俺と……」

この感情を認識することとなったきっかけ、その人物を思い描きながら伊槌は言葉を紡ぐ。

「俺と、サツカーをしろ……!」

拳を握りしめて、天を見上げた。雲の切れ目からは、晴れ間が見えた。

「それでさー、面白い子なんだけど全然入ってくれそうにないんだよねー」

「サクヤとゴカクの戦いをしたなんてすごいコウハイだね! 会ってみたいヨ!」

放課後、ユニフォーム姿の様崎が、同じユニフォームをまとった少女と並んで、昨日の公園へと歩を進めていた。並び立って和やかな雰囲気ですくその様子からは強い信頼関係が見てとれる。

どこか癖のある言葉を話す少女は、女子にしては身長のある様崎よりも目線ひとつ分ほど高い。顔立ちやスレンダーなスタイルもどこか日本人離れしていた。

ボールを胸に抱えて歩く様崎が、空を見上げながらなんとはなしに呟く。

「もうちょつとで練習試合もあるのに部員足りないな」

その言葉に反応して、隣を歩く少女が胸を叩いて豪語する。

「部員のカンユウならワタシにお任せ! この三刀屋^{みとや}マドレーヌがオチャノコサイサイで集めて見せるヨ!」

「流石みとちゃんは頼りになるねえ」

フフン、と誇らしげに鼻を鳴らす少女、三刀屋のオレンジの髪を、歩きながら様崎が撫でる。妙に器用だった。

その後も他愛のない話をしながら歩いていくと、公園が見えてくる。そのサッカーグラウンドの中央に、白い人影があることを三刀屋は認識した。

「だれかいるネ」

「ま、公共の場所だしね。うちの子だったりしないかなー」

様崎たちはピッチに近づいていくため、必然的にその人影にも近づいていく。

白い服はサッカーユニフォームだった。白地で縫い目に金のラインを施した高級感のあるデザイン。そして、それを纏うのは白髪の少年。様崎はその佇まいに既視感を覚える。

そして、疑念を確信に変えるように、彼はゆったりと振り向きながら口を開いた。

「来たな……」

あ、と様崎が声を漏らす。

それは昨日戦った伊槌鳴哉その人だった。

そして、纏うのはキング・マドリードのユニフォーム。胸元には王冠を被る白い円に、黒の帯が斜めにかかったマドリードのエンブレムが輝く。

状況についていけない三刀屋が、様崎の袖を引っ張って注意を引く。

「サクヤ、知り合いのヒト？」

「うん、さっき話してた面白い子だよ」

話す二人の姿を見ながら、伊槌は瞑想するように浅く深呼吸をして目を閉じていた。

そして、様崎達の意識が再びこちらに向いた瞬間を狙って、背後に置いていたボールを足で引き寄せ、様崎に蹴り渡す。少し驚いた様子で、持っていたボールを捨てて受け止めてくれた。

伊槌は彼女達を鋭く見据えながら口を開く。

「二人いるのは予想外だが……まあいいか。俺ともう一度サッカーしてくれ」

その言葉に、二人は顔を見合わせる。三刀屋は未だ戸惑った様子だ

が、様崎は面白そうに口の端を釣り上げていた。

「もつちろん！ 何度でもやろうよ！」

一歩前に出て啖呵を切る様崎に釣られて、置いてけぼりだった三刀屋も彼女の横に並び立つ。

「なんだかよく分からないケド、センパイとして負けられないネ！」

その返答に、伊槌は硬い表情ながらも満足そうに頷いた。

「1on1の3本勝負だ。1戦目は俺のオフフェンス、2戦目はディフェンス」

指を1本、2本と立てながら滔々と説明していた伊槌だが、挑発的な笑みを浮かべて、その手を縦に並べて言葉を重ねる。

「せっかく二人いるんだ。3戦目は2vs1で俺のオフフェンスで行きたい」

その発言に、二人は目を見開く。

そして、不敵な笑みを浮かべた。

「面白いじゃん、後悔しても知らないよ？」

「ズイブンとヨユウがあるみたいだね。センパイ達のスゴさを教えてあげるヨ！」

様崎が伊槌にボールを投げ渡し、ピッチをはけていく。その背後から三刀屋がすつと伊槌の前に現れ、ディフェンスの構えを取った。

投げ渡されたボールを難なくトラップしてゴールを見やる。当然、そのコースには三刀屋が立ち塞がっていた。

「初めまして。俺は伊槌鳴哉」

「ワタシは三刀屋マドレーヌだよ。コウハイとはいえ手加減しないから、そこんとこヨロシクネ！」

三刀屋の奇妙な宣戦布告に笑みを返し、伊槌がドリブルを始める。前と同じような細かいタッチで背筋を伸ばしたドリブル。だが、そのドリブルに相対した様崎だからこそ分かる。

「前よりキレがある……！」

ハイテンポで隙の少ないドリブルに、三刀屋は後手に回る対応しできない。

スピードを緩めながらも足元からボールを離さない伊槌が、笑って

三刀屋を見据える。

「俺も手加減なしだぞ、先輩！」

叩きつけるように叫んで、仕掛ける。

左へのボディフェイク、釣られた三刀屋の逆をとるように、右足でのシザース。どれも様崎にかけたフェイントの数々だが、明らかにキレもリアリティも増していた。

それは当然とも言える。様崎に流されるままボールを蹴ったあの日とは違い、伊槌はこの勝負に明確な意志を持って挑んできているからだ。面白い後輩に、様崎は溢れる笑いを押されられなかった。

「……っ！ すばやいネー！」

「どうもっ！」

右に体が振られた三刀屋に対し、左足でも鋭いシザースを掛け、体を軸をぶらした後に右へと持ち出していく。

様崎ほどではないが、三刀屋の執念も凄まじいものだった。完全に置いていかれた形だったが、右足を踏ん張って飛びつくように伊槌の前に体を入れる。

「でも、負けないヨ！」

三刀屋がボールに足を伸ばしてくる。

そのアクションに対し、伊槌は極めて冷静に、左足のアウトサイドでボールを弾いて股下を通した。

「エッ?！」

アウトサイド・バナ

外足股抜き。スペイン仕込みの派手なテクニクだ。予想だにしない対応に、三刀屋は今度こそ完全に置いていかれた。

(もらった……！)

三刀屋を完璧に抜き去り、完全なフリー。あとはゴールに流し込むだけ。伊槌は右足を振り上げ、シュートを放とうとした、その瞬間。

脳裏に蘇る苦渋の記憶。敗北の追憶。サッカーで手に入れた栄光を、そのサッカーで失った絶望感。その全てが、伊槌の脳と右足を支配した。

(……っ、くっ！)

軸足がぐらつき、判断力とコントロールが削がれた伊槌のシュート

は、再びポストに弾かれた。

詰めれば一点。なのに足が動かない。重い足を動かせず、その場に跪いてしまい、三刀屋にこぼれ球を抑えられてしまった。

「く……くそ……！」

これで一敗。伊槌は後がなくなった。

三刀屋は突然膝を折ってしまった伊槌を心配そうに見つめるが、様崎に肩を叩かれて我に帰る。

「お疲れみとちゃん、オフエンスは私がやるよっ」

「あ……サクヤ。わかったヨ……」

伊槌に後ろ髪を引かれるようにチラチラと後ろを確認しながら、様崎にボールを預けた三刀屋がピッチを出て行く。

様崎が伊槌に近づいて、その頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「ほらほらどうしたのー？ また外していじけちゃった？」

「っ、別にそんなじゃない、続けるぞ！」

昨日とは違い、伊槌の目から闘志は消えていない。それを確認した様崎は笑顔を見せ、伊槌から離れてゴールに顔を向ける。呼応するように、伊槌もその眼前を塞いだ。

「それじゃあ……第2回戦、行くよ！」

2戦目のオフエンスは様崎咲夜。FWが本職の伊槌はディフェンスを不得手とするが、苦手だからやらないが通用するほどサッカーは甘くない。それを理解し、乗り越えなければもう一度サッカーをやる資格がないと分かっているからこそ、この分の悪い勝負を挑んだ。

とはいえ、DFの様崎もドリブルは不得意だろう——そう思っていた伊槌だったが、様崎の足に吸い付いたようなドリブルを見て目の色を変える。

「ちっ……随分上手いじゃないか」

「どーもー」

右へボールが持ち出され、伊槌はゴールを背に半身で構えてついていく。様崎のテクニクが想像以上であったことを踏まえ、あらゆるアクションに対して見て対応することを選んだ。

だが、それは様崎へかかるプレッシャーが完全に無くなるというこ

とを意味する。

様崎がボールを軸足に当てて軽く浮かせる。それをシュートの予備動作だと感じ取った伊槌はすぐさま詰め、コースを塞いだ。

だが、様崎はそのアクションを狙っていたかのように、浮いたボールを右足で右に持ち出すフェイントをかけ、即座に左に切り返す。

「空中でエラシコ……!?!」

「やるもんでしょー!」

右への持ち出しには反応していたものの、予想だにできなかった足技に伊槌が一瞬虚をつかれる。だが、左を抜き去りかけた様崎にシヨルダーチャージをギリギリで掛けてドリブルを遅らせる。

「おっ……と。ディフェンスもけっこーやるねえ」

「あんだこそ……」

伊槌のチャージを受けた勢いのまま後方に下がった様崎に対し、伊槌はいつでも詰めれる程度の距離感で正対する。

様崎は迷わず仕掛けてくる。徐々に徐々にドリブルで距離を詰め、目の前の彼の動きを観察する。伊槌も彼女の動きを注視しながら、待ちの構えを見せた。

「行くよー!」

様崎が右足で叩くようにボールを蹴り、軸足である左の後ろを通し、左へと持ち込む。チョップフェイントと呼ばれるその足技に、伊槌はDF離れた様崎の技術に改めて感嘆した。

だが、それにもついていく。相手のアクションを待っていたことが功を奏し、難なく体を入ることができる。

「遅いぞ……!」

「そーかな? こんなもんじゃないよっ!」

様崎は足をクロスさせ、再びボールを右足で叩く。そのボールは軸足の前を通り、伊槌の足先を飛び越して今度は右へと振られる。伊槌は様崎の、ラボーナ・チョップとでも言うべき術中に嵌められたことを理解した。

だが――

「舐めるなっ!」

「おっとー！」

右足に力を込め、飛びつく。

間一髪かわされたが、ボールを奪い取る形はできていた。舌打ちをして様崎を見据える。

「凄いねえー、ここまでついてこれたのはみとちゃんくらいだよ」

「足技がオーバーなんだよ。上手いだけじゃ抜けない」

ため息混じりに、挑発するような言葉を吐く。案の定、様崎は目を細めて口を開いた。

「へえ、言うねえ……ならー！」

先ほどと同じように、様崎がドリブルを開始する。再び右に持ち出し、チョップフェイントで左へ持ち込む。一度見たフェイントに掛かるわけもなく、伊榎は悠々とついている。

そしてまた同じように、ラボーナ・チョップの構えを見せた。嘲るように、伊榎が詰める。

「見え見えなんだよっー！」

「…ふふっ」

瞬間、伊榎の背筋に怖気が走った。

様崎のラボーナで叩かれたボールは、今度も軸足の前を——通らず、左足に当てられて、より大きく左側へと持ち込まれた。

「なっ!?」

「じゃーねー！」

右に揺さぶられていた伊榎の体が完璧に置いていかれた。ラボーナ・ダブルフェイクとでも言うべき高度な足技に伊榎は度肝を抜かれる。

(まずい……!)

完璧に後追いの形になってしまったが、執念でどうにか様崎と並走する。足の速さで見れば、様崎より伊榎の方が早い。

取れる——そう確信して、背後から左足をボールを伸ばした。

瞬間、ボールが宙を浮く。様崎がスピードを緩め、ボールを踵に乗せて浮き上がらせたのだった。

「ヒールリフト!?!」

予想外の連続。伊槌の思考にない、魅せるようなドリブルの数々に完全に翻弄されていた。

様崎がシュートモーションに入っている。伊槌の脳裏に、打ち出されたシュートがゴールに突き刺さるビジョンが浮かぶ。このままでは失点を避けられない、伊槌の頭脳は感覚的にそう弾き出した。

負ける。その思考が浮かぶとともに、伊槌の腹の奥に熱いものが込み上げてきた。

「たまるかつ……！」

無理な体勢から、左足に力を込めて無理矢理跳躍する。体が、空中ブランコに釣られているかのように浮き上がった。伸ばされた反対側の右足、その爪先が、浮き上げられたボールに引っかかった。

「負けて、たまるかあ！」

渾身の力で爪先を叩きつけ、背後へとボールを弾き飛ばす。咄嗟のオーバーヘッドクリアに、様崎は舌を巻いた。

「……やるねっ！」

ボールはこぼれている。だが、様崎は降参の意を示すようにその場で両の手をひらひらさせた。

「これで抜けないなら無理無理、負けでいいよ！」

「……あつ、そ」

地面に叩きつけられた伊槌が、気だるそうにそう返す。白いユニフォームは土に汚れていたが、不恰好には見えなかった。

クリアしたボールは三刀屋が投げ渡してくれた。そのまま彼女もこちらに来て、彼の手を取って立ち上がらせると、様崎と並び立つてゴールと伊槌を分断するように立ち塞がる。

「これで1勝1敗、もつれ込んだねえ」

「改めて聞くケド、ワタシたち2人のディフェンスでいいんだネ？」

立ち上がった伊槌は、ユニフォームの汚れをはたき落としながら、瞳を闘志で爛々に輝かせて当然のように言う。

「二言はない。勝たせてもらう」

ボールに足を乗せ、ディフェンス陣を睨む。彼女たちは楽しそうに笑って構えた。

伊槌のドリブルが始まる。1 on 1の時と同じ細かいタッチのドリブルだが、相手のアクションを待っているように緩やかに上がる。その進路を、様崎が塞いだ。

「2対1だけどね、遠慮なく行くよ！」

「上等だ！」

様崎の足を華麗にかわし右に避ける。彼女も当然の如く食らいっいていき、伊槌にチャージをかましてバランスを崩させた。

「サクヤ、サポートするヨ！」

バランスが多少崩れたことよって生まれた隙を見逃さず、様崎の背後をカバーしていた三刀屋が咄嗟に詰めてくる。

だが、伊槌も負けていない。三刀屋のタッチルをかわし、逆に彼女の背後にボールを送って2人の間をすり抜ける。ゴールまでの道は開けた。

「逃がさないよっ！」

「……………」

だが、三刀屋のタッチルをかわすために使った一瞬の時間で様崎のプレスバックが間に合う。ボールを引き背後からの足をかわすが、様崎と三刀屋に挟まれる形になってしまった。

「終わりだヨ！」

「もらいっ！」

二人が息を合わせて前後から同時にタッチルを食らわせてくる。

伊槌はこの状況の中でも、頭の中は実に冷静だった。

「舐めるな……………」

軽くボールを引いて様崎の足をブロックし、腰を落として、半身を構え背後から突撃してくる三刀屋に備える。次の瞬間には、三刀屋が当たってきた一瞬に肩を引き、そのチャージの威力を利用して、彼女のバランスを崩す。その隙に二人の間をすり抜け、ゴールから逃げる方向にドリブルをして一旦体勢を立て直す。

「おっとト……………まさかかわされるなんてネ……………」

「凄いいんだねー！」

様崎が笑いながら伊槌を褒め称える。が、でもと続けて口を開く。

「流石に、2対1はキツイんじゃない？」

伊槌は目を細める。非常に辛い戦いであることはたしかだ。かわし切れたのは咄嗟の判断と技術もあるが、運の側面があったことも否定できない。

だが、それがどうしたと言わんばかりに、伊槌は頭を搔いて二人を睨みつける。

「キツかろうがそうでなからうが、俺は勝たなくちゃいけないんだよ。でなきやもう進めない」

伊槌は、様崎とサッカーをしたことで良くも悪くもサッカーへの感情が激化した。

だからこそ、彼女との戦いの中で何かが掴めると思い、勝負を挑んだ。そして、その予感は一瞬現実になっていた。

伊槌の体内に熱く渦巻く戦意。これは彼女たちとのギリギリの戦いが生み出してくれたものだ。久方ぶりに感じる勝利への渴望が心を支配する。

「俺は勝つ、勝者としてピッチに戻る……」

一度息を吐き、だからと続けた。

「ここで負けてられるか！」

そして、再び仕掛ける。彼女たちも先ほどと同じように様崎がアタックし三刀屋がカバーする形。無理に抜こうとしても止められるだろうことは伊槌も理解している。

故に、抜くのではなく様崎を剥がすことを選択した。振幅の大きいダブルタッチで左に釣つてから、シュートフェイクで様崎の体勢を崩し、ボールを右足に持ち変える。

爪先で軽くリフティング。刹那、目にも止まらぬスピードで右足を引き戻してボールの下を蹴り抜き、その場で回転させる。そして、引いた勢いをバネに強烈なボレーを叩き込んだ。足と回転の摩擦によつて発電が起こり、眩い光がボールを覆う。

前にも見せた伊槌最強のシュート、今回もそれを放とうとして――

「電閃……！」

――蹴り抜く瞬間、足が固まる。

思い出されるマドリードのピッチ、いつもの光景。振り払おうとしても一向に消えない染み付いた苦い思い出。それらが、伊槌の足から力を奪った。

「……………?!」

残った力だけで右足を振り抜く。それは必殺技の面目を保っていたが、とても最高火力とはいいがたいシュート。でも、入る——そう思った伊槌だが、そうは問屋が卸さなかった。

「これ以上はやらせないヨー！」

電閃の前に立ち塞がった三刀屋が、滑らかな動きで逆立ちを披露する。そしてその体勢のまま高速で回転を始め、出来上がる空気の流れがボールに絡み付いた。

その光景に伊槌は目を剥く。あれは紛れもなく必殺技。それも、とある年の日本代表、木暮夕弥の代名詞。

「旋風陣！」

電閃が空気によって絡め取られ、回転する足にかけられる。側から見ても、シュートブロックは完璧なタイミングで決められていた。

だが、嬉しい誤算というべきか、電閃は三刀屋の旋風陣とほぼ互角の戦いを繰り広げる。

「グ、グウウ……………」

迅雷を迸らせ、コマのように回転する三刀屋に抵抗する。だが彼女も一歩も引かず、正面から立ち向かう。

しかし、彼女の意思に反してブロックは既に限界を迎えていた。

「キヤア！」

ボールの威力に、三刀屋が少し吹き飛ばされる。だが、ブロックは成功と言っていいだろう。何故なら、先ほどまで溢れんばかりの電撃をまとっていたボールは、緩やかに天空に打ち上げられて、こぼれていたのだから。

（止められた……………？）

シュートを打った瞬間から、伊槌は一歩も動けていない。フラツシュバツクする過去の光景が伊槌から自由を奪っていた。

だが、彼の唯一動く脳は当然の未来を予測する。

「負ける……」

このまま見ていては、こぼれ球を抑えられて負ける。また、負ける。負けたくないのに、足が動かない。ボールを見上げるばかりで、走ることができない。

（俺は、勝ちたいのに……）

PKを外したあの瞬間から、伊槌鳴哉はサッカーの神に見捨てられていたのだろう。

プレーが何もうまくいかない。自らの思い描くビジョンを、もう形にできない。

伊槌に深い絶望が襲う。だが、次の瞬間には、それも吹き飛んだ。

こぼれていたボールが――

――なにかに導かれるように、伊槌鳴哉の足元に転がった。

それはきつと神の悪戯などではない。ピッチの中で考え続け、挑戦をしてきた伊槌に与えられたほんのちよつとの運。

「……っ！」

そのボールを認識した途端、伊槌の体は無意識的にシュートモーションに入った。考えるまでもなく、機械のように何万回と行ってきた動作をエミュレートする。

落ちてきたボールに、プレーが突き刺さる。マドリードのピッチを思い出す。足に力は、入っていた。

伊槌の足から、先ほどの電閃と比較しても劣らない最高の一撃が放たれた。体勢を崩している三刀屋も、背後にいた様崎も、見送ることしかできない。

伊槌の放ったシュートは――

ゴールのクロスバー――そのギリギリ、右上の端、最高のコースに、深々と突き刺さった。

2話：入部と、勧誘

憲戸中サッカー部は弱小である。

5年前のFFインターナショナルでのイナズマジャパンの躍進を受けて創部されたこの部は、創部以来一度の例外もなくFF予選1回戦で敗退していた。結果を出せないために部費も減らされ続け、環境や設備が改悪され続けるので部員も増えるどころか減少の一途を辿り、新チームとなった憲戸中サッカー部はたったの8名となっている。

その弱小校のキャプテンである様崎咲夜は、ボロボロの部室に部員たち全員を集めて何かを待っていた。

「まだかなーまだかなーっつと」

「……なあーキャプテン、何を待ってるのかくらい教えてくれよお」

椅子に座りながら機嫌良さそうにゆらゆら揺れる様崎を恨めしそうに見ながら、数少ないサッカー部員である木崎が問う。その背後で、事情を知る三刀屋以外の部員たちは首を縦に振っていた。

様崎は大して悪びれた様子もなく「サプライズだからネタバレはなしでしょ?」と軽い調子で言い放つ。あくまでマイペースな様崎に、木崎は頭を抱える。

「おい三刀屋ア、お前はキャプテンが隠してることを知ってんだろ? 教えろよオ」

「それは言えないオヤクソクだよ! サクヤとユビキリしたからネ!」

瘦身ながらも高身長で鋭い青い目が人相の悪さを際立てている少年が痺れを切らしたように三刀屋に詰め寄るも、彼女は気後れした様子もなく堂々と彼の言葉を蹴った。軽く舌打ちした少年は納得していなさそうな表情をしていたが、意味がないと判断して引き下がった。

椅子に座っていた金髪の少女も、我慢ならないと言った様子でバタバタと手足を動かす。

「もー! このホープちゃんをこんなに待たせるなんて許せないわ

！」

「落ち着きたまえよ子猫ちゃん、暴れたって時間は進まない……何より可憐な君に傷がついたら大変さ」

「うるさーいー！」

見事なアフロヘアをたくわえた少年が少女を宥めるも、そのまま二人でぎゃいぎゃいと騒ぎ出す。先ほどの強面の少年が見かねて注意をしてその場を収まったが、少女は待ち飽きて溜まった鬱憤を見せつけるように頬を膨らます。

「咲夜さんは相変わらずだね……彼女らしいけど」

「ああ、困ったものだな」

大柄な二人の少年が言葉を交わす。片方は麦わら帽子をかぶっており、筋肉質な体格と裏腹に画風の違う優しい顔をしており、もう片方は筋肉質な体にベストマッチな勇ましい人相をしていた。

部員たちが思い思いに騒いでいた部室内に、突如ノックの音がよく通った。様崎はその音に敏感に反応し、飛び跳ねるようにドアに近づいていく。

「いやー待たせたね諸君！　これが私の成果だよー！」

勢いよくドアを開け放ち、ノックをした少年の腕を引いて引き摺り込む。引き込まれた白髪の少年は目を剥いていたが、様崎はお構いなしに髪をくしやくしや撫でて部員たちに笑いかけた。

白髪の少年——伊槌は、状況がよく分からなかったが、目の前にいる彼ら彼女らがサッカー部員であることは理解できた。ならば、新参者としてはしっかり礼儀を果たすべきだと考え、様崎を剥がしてから改めて向き直った。

「憲戸中2年、伊槌鳴哉です」

部員の中に木崎を見つけ、伊槌は少し破顔して見せた。

「キャプテンに入部届を受理していただき、本日からサッカー部に入部しました。よろしく願います」

部室に驚愕の音が響く。

昨日のサッカーバトルに勝利した伊槌は、あらかじめ記入していた入部届を即座に様崎に渡していた。様崎と三刀屋も喜んでその紙を

受け取り、伊槌は本格的にサッカー選手として復帰の一步を踏み出すことができた。その事に充実感を覚えつつも、それで満足してはいけないと気を引き締めなおす。

木崎がいち早く驚嘆の表情から我に帰り、そして再びその表情に喜色を浮かべて伊槌に寄ってきた。

「本当に入ってくれんのか！ お前がいれば百人力だな！」

まあエースストライカーは俺だけだな、と軽口を叩きながら木崎が祝福の言葉をかける。伊槌も楽しげに笑って木崎の手を取り握手をした。

「部員が増えんのはめでてエけどよオ」

二人の背後に影が落ちる。三刀屋に詰め寄っていた人相の悪い少年が、身長差の関係から見下ろすような形で伊槌を刺すように睨んでいた。

「後輩、俺はサッカー部3年の無籐朱軌むとうあけみちだア。テメエの目標を聞きてエ」

伊槌は威圧感のある無籐の風貌に多少気圧されたものの、すぐさま取り繕って真正面からその目を見返す。

「目標、というと？」

「言うまでもねエ。テメエはこのサッカー部でどこまで行きてエんだ？」

無籐は、伊槌の見据えるものが何かを問うていた。楽しくやればそれでいいのか、勝ちを目指すのか。

聞かれるまでもないと言いたげに伊槌が口角を釣り上げる。伊槌の胸中では熱い感情が高く渦巻いていた。今日の天気話題に出すかのような気楽さで、当然のように言い放つ。

「全国制覇。それ以外に掲げるものがありますか？」

部室に静寂が訪れる。

数秒の後、口火を切ったのは麦わら帽子の少年だった。

「じよ、冗談じゃない！ 出来るわけがないよ！」

「ははははッ！ 落ち着けよ太田おおたア、夢はでけエ方がやり甲斐があるだろ？」

麦わら帽子の少年、太田を無籐が片手で制する。そして、伊槌の目を改めて見据え、圧迫するように距離を近づけてくる。もはや息もかかりそうな距離で伊槌の銀色の目に映った自分を見ながら、重ねて問われる。

「今の言葉は本気だな？ テメエは本気で弱小校の憲戸中が勝てると思ってるんだな？」

「……ええ」

目を細める。息を軽く吸って、口を開いた。

「俺がいれば、勝てる」

伊槌のその目は、弱小校である憲戸中で全国を取ることを、自らが復活する通過点としてしか捉えていなかった。

無籐の口から笑いが漏れる。悪い人相をさらに凶悪に歪めて愉快そうに声を出す。

「はははははア！ 気に入ったぞ後輩！ その言葉がビッグマウスじゃねエことを祈ってるぜ！」

そう言つて、彼は部室の奥の方へスタスタと去っていった。入れ替わるように様崎が肩を組んでくる。

「流石だねー君！ 最高だよ、無籐さんと正面切つてあんな面白いことが言えるなんて！ やっぱり私が見込んだだけあるね！」

「褒めてます？」

「サクヤを知り尽くしたワタシが保証するヨ、すつごく褒めてル！」

いつのまにか来ていた三刀屋がそう言う。そういうものか、と伊槌は理解を放棄した。

やがて様崎が離れていき、部室の中心にあるホワイトボードを叩いた。

「さて、じゃあ伊槌くんも来た事だし、今日やるべきことを伝えるよ！」

無意識的に伊槌が拳を握る。

ついに舞台上に上がることができた。その実感が伊槌の胸を焦がしていく。

サツカーがしたくてたまらない。口角が上がっていく。

伊槌鳴哉が響かせる雷鳴は、今、蘇ろうとしていた。

「……サッカー部入ってくださいーい……」

焦げるほどの熱に浮かされた伊槌は、実に不本意そうな表情で、校内の一角を陣取りキャッチをしていた。

表情を見ればわかるように、伊槌とてこんなことよりサッカーがしたい。何故駆り出されているのかというと、様崎が溜めに溜めて言い放った今日の目的。それは、新入部員の勧誘だったからだ。

ふざけるな、どうして俺がこんなことを——様々な思いが胸中で渦巻くが、仕方のないことだとも理解していた。憲戸中サッカー部員は自分以外に8名、さらに様々なポジションの選手が足りず、GKに至っては居ないという最悪のスカッドで構成されている。とても試合ができる状況ではなかった。

伊槌の機嫌が地の底に落ちている原因はそれだけではない。声をかけた1年生に懇切丁寧に断られ、溜め息をついて少し先の花壇を見る。

「おや、これは可愛い子猫ちゃん。どうだい？　僕と共にダンスでも……」

「えっ、何？　怖い……」

声をかけられた女子生徒がドン引きしている。それも仕方ないと伊槌は思えた。齒の浮くようなセリフにアフロヘアの小太りという特徴的という単語では表せないほど独創的なあの少年を見れば、誰だってああなる。

彼は梵場踊太。様崎が三刀屋を行動を共にするために、勧誘の効率を上げるためと言った建前で無理矢理作った二人組で組まされた人物である。

『僕は梵場踊太。男にや興味ないが、咲夜先輩に言われたからには仕

方ない。よろしく頼むよ』

ファーストコンタクトがフラッシュバックする。伊槌は彼のアフロヘアを叩き割ってやりたい極めて原始的な衝動を覚えた。

女子生徒に逃げられた梵場がやれやれと言った様子で首を振ってこちらに来る。

「フツ、振られてしまったね。あの子猫ちゃんには僕は刺激が強すぎたらしい」

「初見の梵場くんに驚かない人は、どれだけ過酷な環境で育ってきたんでしょね」

疲れたように額を抑えながら伊槌が皮肉を漏らす。

先ほどから梵場はずっとこの調子だった。女子生徒のみに声をかけ、逃げられるの繰り返し。このキャラの強い男が隣にいることで、実に不本意なことに同族だと思われている伊槌が男子生徒に声をかけても、化け物に話しかけられたように遁走を決められ続けていた。様崎が勧誘の効率化を求めて彼をチョイスしたというなら、彼女に人事の才能は著しく欠けていると伊槌は確信した。

「伊槌君もあまり首尾が良くないようだね。まあ、気を落とさなくていい。僕もそうだからね」

「はあ……そういえば、何でこんなところで声をかける事にしたんですか？ 人通りは少ないですけど」

伊槌がまたまた溜め息をついて話を切り替える。彼らは校舎の外れにある花壇の近くで勧誘作業に勤しんでいた。近くには園芸部の小屋がある。サッカー部のものと違ってしつかりした外装である事に、伊槌は少し悲しくなった。

梵場がそれを聞かれるのは予想外、と言外にそう言いながら話し出す。

「少し考えれば分かることさ。なんだと思う？」

「……………人の多い範囲は、他の人々に任せるため？」

少し考えた伊槌が、個人的に納得のいった推論を口にする。

口下手な伊槌と、全てがヤバイ梵場。このパーティは勧誘に絶望的に向いていない。ならば、初めから成果を出すのは諦め、人に託して

奇跡を信じて行動するのも賢い選択だと感じる。

しかし梵場は、チツチツチとでもいうように人差し指を振って否定する。指が梵場のサングラスに意味深げに反射していた。妙に様になってるのが腹立たしい。

「簡単だよ。それは……」

「それは……？」

フツ、という微笑の後に、梵場が溜めて言い放つ。

「花壇の周りには、子猫ちゃんが多いだろう？」

「……………」

伊槌の右手が怒りに震えていた。ここまで腹が立ったのはキング・マドリードでの初練習で明らかに自分にパスを出さないスペイン人に対しての怒り以来だった。

伊槌が爬虫類もかくやと言うほど目を見開いて梵場を睨みつけていたが、彼は柳に風とその熱烈な視線をかわし、伊槌の背後に目を向ける。

「おや、あの子猫ちゃんは……」

振り返ると、そこには若草色の髪をした、小柄で可憐な少女が花の世話をしていた。非常に整った顔立ちの彼女だが、伊槌は妙な違和感を覚える。女性にしては体の作りが男性的な気がする。アスリートとしての直感だった。

「どうも、子猫ちゃん。花を愛でる君はこの花壇のどれよりも美しいね」

「えっ、僕ですか？」

少女に絡み始めた梵場を目にし、流石に他人事ではいられなくなつた伊槌が死地に向かうような表情で近寄っていく。今すぐ彼女に謝りたかった。

「ああそうさ。この場に君ほど美しい女性はいないよ」

「……女性……？」

彼女が低い声で唸るように言う。伊槌は反射的に梵場を盾にしなから他人のフリをした。

少女は妙に迫力のある笑顔を見せながら梵場を威圧するように話

し出す。

「僕が女の子みたいに見えますか……？」

「どうしたんだい、そんなに怒ってしまって。美しい顔が台無しだよ、子猫ちゃん」

「ぼ、梵場くん、虫の居所が悪いようだし、この辺にしましょう。時間も経ってる」

明らかに少女の怒りを感じ始めた伊槌が梵場の肩を掴み引きずろうとする。だが、その小太りのどこにその俊敏さがあるのか、易々とかわされてしまった。

伊槌の手を避け、踊るような梵場が少女に改めてラブコールを放つ。

「……僕は」

わなわなと肩を嘶かせる少女が目を見開く。

「僕は、男です！」

少女——否、少年の張り手が、いやに乾いた音を響かせた。

「ふむ……男に興味はなかったけど、あの子ならいいね」
「やめてあげてください、おぞましい」

あの少年との一悶着が終わった伊槌達は早々に部室へと引き返していた。首尾はゼロ、当然の結果であった。

部室には誰もいなかったため、こうして梵場と話をして時間を潰している。見た目に反して、適切な距離感を空けてくれる梵場は存外話しやすい。普通にしてればモテそうなのにな、と伊槌は思う。

「しかし、こうして部員総出で勧誘だなんて、何か焦る理由でもあるんですか？
FFは一ヶ月後ですし、こんな急がなくてもいいのでは？」

ふと、伊槌がそんなことを聞いた。元々気になっていたことだが、

聞く時間がなかった。

「ああ、それかい。確かにFFFまではまだ猶予がある」

「けどね、と梵場が続ける。」

「直近でここら一带の中学で練習試合が組まれてるのさ。それにエントリーするため、最低でも11人必要だからね、焦りもするよ」

「確か応募期限は3日後だったかな、とさらに続く言葉を聞いた伊槌は、弾かれたように立ち上がる。」

「ピンチじゃないですか!」

「まあ落ち着きたまえよ。焦ったって事態は好転しないさ」

芝居がかった動作で梵場が手を動かし、伊槌に着席を促す。渋い表情で彼もそれに従った。

「咲夜キャプテンはなんとかするだろう。現に、君を連れて来たわけだからね」

「……まあ、そうですね」

「勧誘は僕らの領分じゃない、そういうことさ」

その言葉に伊槌は押し黙る。口下手で、プレーに妥協ができない自分が勧誘に向いていないことは重々承知だったからだ。

細く息をついた伊槌が背もたれに体重をかける。一瞬訪れた静寂の中、跳ねるような足音が部室の外から聞こえて来た。

足音は一目散にこちらを指しており、梵場も気づいたようにこちらに目を向けていた。そして、音が止んだかと思うと壊れそうなほどの音を立てて部室の扉が開け放たれた。

「すいませーん! 入部希望です!」

勢いよく現れたのは、紺色の長い髪と猫耳のついたニット帽が特徴的な少女だった。走って来たのか、息は弾み、少し汗もかいている。

梵場の目が鋭くなるのを感じた。伊槌にいらぬ緊張が走る。

「これは可憐な子猫ちゃん、サッカー部に興味があるのかい?」

「はい! これ、入部届です!」

そうやって少女は一枚の紙を差し出す。その裏では、梵場が妙な言葉をお走らなかつたことに伊槌は心から安堵していた。

名前の欄には明風めいなき輝夜てるよと書かれている。一年生らしい。元気の

ある後輩に伊槌は好感を持った。

「預かります。後でキャプテンの方に通しておきますね」

「まあすぐに受理されるだろう。こちらへ来たまえよ子猫ちゃん」

「はーい！ お邪魔します！」

少女、明風は名前の通り明るく元気な少女のようだ。勧誘には失敗したが、一人は捕まえられたことに伊槌はとりあえず肩の荷が降りた気分だった。

「明風さんはサッカー経験があるんですか？」

「はい！ 父さんから色々教えてもらいました！ あ、ポジションはFWです！」

「へえ、僕もFWです。ライバルですね」

伊槌が好戦的に口元を歪める。宣戦布告と受け取ったのか、明風もふふんと笑って受け止めた。

それから皆が戻ってくるまでそう時間は掛からなかった。帰ってきた様崎に入部届を渡し、明風の入部が正式に決まる。さらに、彼女らは新たな一年生も連れて来ていた。

「宵闇黒江です……別に、よろしくしなくていいですよ……」

何故かフードを目深に被っているため顔がよく見えない小柄な少女だった。

相変わらず梵場が絡みにいって、宵闇がドン引きしている。妙な既視感を思えて頭痛がして来た伊槌は、逃げるように目を逸らす。

「いやー、この短期間で3人も部員を捕まえてくるなんて、流石私だね！」

「ははは……でも、咲夜さんが頑張ってるのは本当だね」

胸を張ってそう言う様崎に麦わら帽子の少年、太田が肯定の言葉をかける。その言葉にさらに気を良くしたのか、すごいでしょー、と言いながら三刀屋に絡み出した。

收拾がつかなくなって来たカオスな空間に乾いた音が響く。驚いて音源に勢いよく振り返った伊槌は、無籐が手を叩いた音だったことに気づく。

「とりあえず勧誘活動は終わったんだ。新入部員達の実力も見

「エ」

「そうだね、じゃー今日も練習始めよつかー」

その宣言に、言葉なく伊槌の胸中に熱が滾っていく。ついにピッチに戻る、その高揚が心地よかった。

部員達が男女に分かれてユニフォームに着替え出す。伊槌も、今日支給された憲戸中の11番のユニフォームに袖を通した。ピンクを基調とし、黒がアクセントに入ったデザインのそれは存外伊槌好みのデザインだった。

少し辺りを見渡すと、当然だが皆一様に同じユニフォームを着ている。改めて、自分がサッカー選手なのだ実感した。既に着替え終えた梵場が鏡の前でポーズを決めている。即座に目を逸らした。

緊張をほぐすように深く深呼吸する。その様子を見て、太田とは違う大柄な少年が声をかけて来た。

「緊張しているのか」

「……ええ、まあ少しは」

筋肉質な体格に勇ましい人相をした少年だった。他の部員に名前を呼ばれていた記憶もなく、少し眉を顰める。伊槌の様子に気づいたのか、彼は滔々と喋り出した。

「自己紹介がまだだったな。俺は靴木くつきいちや一谷。三年でポジションはMFだ」

「伊槌鳴哉です。お願いします」

そう言って頭を下げる。礼儀はどこへいっても大事だと言うことを、子供の頃から海外へ出ていた伊槌は身をもって知っていた。

「初練習だろう。あまり緊張しなくてもいい」

「そうだぜ！ どうか伊槌なら大丈夫だろ！」

「はは……ありがとうございます」

いつの間にか来ていた木崎もそう言葉をかけてくれた。固くなっていた伊槌の肩が少し解れる。着替え終わった太田もにこやかに伊槌に近づいて来た。

「こうして話すのははじめてだね。僕は太田優おおたゆう、DFだよ」

「はい、よろしくお願いします」

握手をすると、太田の筋力がよく分かる。伊槌の体格はサッカー選手としては良い方ではないが、平均的な男子ではあるのに対し、太田は見た目よりも筋肉がついているためか、手もガッチリとしていた。眼鏡をかけた優男風の顔と体のイメージの乖離がどんどん進んでいく。

手を離して、太田が少し言いづらそうに切り出す。

「伊槌くんは……全国優勝が目標なんだよね」

「はい、二言はないです」

その言葉に、大きな体を少し震わせて、伊槌の目を力なく見返す。

「……やめておいた方がいいよ」

「……？ どういう——」

太田の意味深な言葉に伊槌が追及しようとしたところ、無籐のよく通る声が更衣室に木霊した。

「オイ！ 準備ができてんならさっさとグラウンドに出ろオ！」

その言葉に木崎達は慌てて更衣室を後にする。太田も、申し訳なきように頭を下げて走って行ってしまった。

「……まあ、何でもいいか」

どうせ自分の目標は変わらない、どんな困難があろうとも、乗り越える。

伊槌は決意を新たに、扉を開けて、復活への二歩目を踏み出した。

3話：初練習

グラウンドに出た伊槌達は、まずウォーミングアップに入った。一塊になってのランニング。アップなのでスピードはほとんど出していないものを、ハプニングもなくグラウンド2周分終え、各々さらに調整に入る。

伊槌を含め、ほとんどの部員達がボールを触って感覚を慣らししていたが、星飾りをつけた金髪の少女だけは、未だボールに触れず走り続けており、ふと気になって目で追う。

「ホープが気になんのか？」

「ホープ……あの人の名前ですか」

「おう！ あいつは山本希望やまもとほーぷってんだよ！ ポジションはDFだな！」

伊槌の言葉をにこやかな顔で木崎が肯定する。

「あいつはこだわりが強いんだよ、ルーティーン？ つつうのを曲げんのが嫌だーってずっと言ってたんだ」

「へえ……」

軽くリフティングでボールを弄びながら、そう呟く。スポーツにおいてメンタルは時に技術より重要だと伊槌は理解している。故に彼らは精神を落ち着ける術を持ち合わせており、そのコントロールの術が彼女にとってはランニングなのだろう。

軽く息をついて、次の瞬間には鋭く息を吐いて大きくボールを真上に蹴り上げた。落ちてくるボールに視線を合わせ、右足を伸ばして寸分違わぬトラップを試みる。狙い通り、ボールは一瞬で勢いを殺され伊槌の足元に収まった。調子が良い。伊槌が軽く笑んだ。

「うおっ、すげえ！ やっぱ細かいところでも上手いなあ！」

「どうも。FWにとってトラップは重要な技術ですよ」

木崎が苦笑いして目を逸らす。苦手らしい。

リフティングを続けながら、少し周りを見渡してみる。明風は優れたコントロールで軽いドリブルをしており、意外と言っては失礼になるかもしれないが、梵場も軽快にボールを操っていた。様崎も、やは

りDF離れた技術を持って、曲芸のようなリフティングで遊んでいる。

反面、宵闇のボールタッチは覚束ない。完璧に初心者ようだった。

やがて様崎が招集をかけ、2人組でのパス交換の基礎練習が始まる。相も変わらず様崎が勝手に練習相手を指名していき、伊槌は無籐と組むことになった。

「お願いします」

「ああ、無エとは思うが手は抜くなよ?」

心配ご無用、とばかりに伊槌が鋭い弾道のパスを出す。難なくトラップした無籐は、満足そうに凶悪な人相を歪めて強くパスを返してきた。伊槌も人とボールを触ることで気分が上がってくる。

「今のうちに聞きてエ、お前の得意なプレーはなんだ?」

「オフ・ザ・ボールでDFを剥がす動き、あと裏への抜け出し、とかだっ」

しばらく無言で進んでいたが、唐突に無籐が質問を挟む。返答しながらも、2人は変わらず右足で左足で、グラウンダーでループでときまざまな種類を織り交ぜながらパス練をこなしていた。やはりポジションの違いか、無籐のパスに比べ伊槌のパスは少しズレが目立ってくる。

「ハッ、とりあえず、パスは得意じゃねエみたいだな」

「……今だけだ、俺が目指すのは、得点もアシストもする完璧なストライカーだ」

「そいつは頼もしいなア」

伊槌のパスを完璧にトラップした無籐が様崎の方へ向く。そのジェスチャーが引き金になったかのようにパス練が終わり、ミニゲーム形式の練習が言い渡された。

「じゃあ、まずはこのゲームでお前の理想を見せてもらおうかア」

「……ハッ、上等」

練習内容はハーフコートを使った2on2のミニゲームだ。守備的なポジションと攻撃的なポジションの選手達で別れ、それぞれコン

ビを変えながら回していく。

最初は伊槌と梵場が組むこととなった。お誂え向きに、相手は靴木と太田の三年生コンビに決定する。

「梵場、得意なプレーはあるか？」

「かわいい子ちゃんの扱いには自信があるね」

「はっ」

直前の観察から柔らかいボールタッチを持つていることは分かっていたが、確認とばかりに聞いた伊槌の問いに意味不明な答えを返して来た。聞けば、梵場はボールのことを「かわいい子ちゃん」と呼んでいるらしい。伊槌はサングラスを叩き割りたくなかったが、ギリギリで堪える。

血管の浮き出る右手を押しさえつけないながら、梵場と並んでボールに足を乗せる。ディフェンスの二人も準備万端のようだ。

「だけどぶつかり合いは苦手さ。太田先輩は頼んだよ」

「……分かった。パスさえくれれば決めてやる」

やれやれと言いたげに肩をすくめる梵場に相槌を打つ。伊槌もフィジカル的に優れているわけでは無いが、仕方がない。口元を拭つて、軽く精神を落ち着かせる。高鳴る鼓動を押しさえつけるように、目を薄く閉じた。

「よーし、じゃ、はじめー！」

様崎の号令と共に目を開き、すかさず梵場にボールを渡す。彼は軽快に持ち上がっていき、予定通り靴木とマッチアップの形を作った。伊槌はその横を通り抜け、太田を背負い前方にパスコースを作り出す動きを見せる。

「うっ……強い……！」

「出せー！」

腕を使つて、意外なほどあっさりと太田を抑え、半身に構えてパスを要求する。梵場は伊槌の方をちらりと見たが、すぐさま視線を外し、ニヤリと笑って靴木に勝負を仕掛けた。

「今は僕のターンさー！」

「来い」

梵場がボデイフエイントや軽いフエイクで揺さぶりをかけるも、靴木は抜かれるわけにはいかないとばかりに全て対応していた。伊槌はその様子に歯噛みする。

「何してんだ、ワンツで抜くぞ！」

「君に頼らずとも、僕が抜けるさ！」

梵場はポジションを取り直しパスコースを作る伊槌に目もくれずドリブルを続ける。埒があかないと判断したのか、1度舌打ちをした後、太田を引き連れながら裏抜けを狙いつつ、梵場が1on1しやすいスペースを提供するムーブへと切り替える。

先ほどから靴木も早い対応をして、何度か足を伸ばしているが、梵場の独特のボールタッチがロストを許さない。自信があるのにも頷けるテクニクの高さを見せてくる。それに対応する靴木も、なかなかの力を持っていることが読み取れた。

「何度もやられんぞ」

「流石ですね……それなら」

状況を打破するために、梵場がボールを引き戻しながら若干距離を取る。詰めれば抜かれると感じたのか、靴木のプレッシングは少し弱い。機は逃さないとばかりに、梵場がボールを足に乗せて逆立ちの体勢になった。何か仕掛けると直感した伊槌は、ゴールから膨らむように走り出す。

「スピニングドライブ！」

「くっ、しまった……！」

コマのように激しく回転し、高速で靴木を置き去りにする。さながらブレイクダンスのような絶技を持って梵場は1on1を制してみせた。

「靴木くん！」

太田が迷ったように足を止める。梵場へプレスをかけなければノンプレッシャーでゴール前まで運ばれてしまうが、実力未知数の伊槌を放っておくのもリスクを感じる。その刹那の迷いを見逃さず、プルアウェイの動きで太田を動かし、ゴールから遠ざかっていた伊槌が、オフサイドにかからないよう、一瞬スピードを緩め、そして急激にス

ピードを上げながら進路を変えてペナルティエリアに切れ込んだ。

「今だ！」

「あつー！」

理想的なオフ・ザ・ボール。今回は梵場もその動きに反応し、自身の真正面、太田の横を通すスルーパスを出す。咄嗟のアクションに対応できず、エリア内、ゴールの正面で伊槌にフリーでボールが渡った。

「決めなよ、伊槌くん！」

「もらった……！」

得点を確認し、ダイレクトでシュートフォームに入る。

だが、その瞬間。

「……!?!」

振り上げた右足が固まる。軸足が揺らぐ感覚を覚える。足元が崩れていくような錯覚の後、ぎこちなく放たれたシュートはクロスバーの上を通り越して外れていった。

両の足から力を失った伊槌が倒れる。信じられないと雄弁に語る目を大きく見開いて自身の両足を視線を落としていた。

「…………くそっ」

震える足に叱咤するように、忌々しげに呟く。太田が近づいてきて、大丈夫かいという言葉と共に手を貸してくれた。努めて不機嫌を表に出さないよう、礼を言っつてその手を掴む。

「すごいね君！ シュートはともかく、ボールを持ってない時の動きが抜群だったよ、僕なんかじゃ止められないなあ」

「……はは、ありがとう」

伊槌が力なく返す。

——決められなきや意味ないだろ。

過ぎる思考を頭を振って振り払う。列に戻る最中、梵場に声をかけられた。

「調子が悪かったかい？ まあ気にすることないさ」

「……悪い」

労う言葉に自分への苛立ちを隠せない。不甲斐なさに頭が沸騰してきたが、目元を拭って気合を入れ直す。ふとすれ違った無籐が、感

情の読めない瞳で肩に手を置き、そのまま去っていく。伊槌は、他人に労われ続ける自分が情けなくて仕方なかった。

浅く息をついて列の最後尾へと並び直した。次のマッチアップは無籐・木崎の攻撃側と様崎・宵闇の守備側となっている。新入部員のお手並み拝見とばかりに、無籐が肩を回す。

「新入りイ、お前の力も見せてみるやア！」

「怖っ……そんな声出さなくても聞こえますよ……」

無籐の宣戦布告に宵闇がビクついている。だがすぐに切り替え、無籐たちも様崎たちも数秒戦術を確認しあつた後、4人が前を向いて相対した。

「今日こそキャプテンを負かしてやるぜ……！」

「楽しみにしてるよー」

無籐が軽く手を挙げる。準備完了の合図だ。様崎に変わって号令役に入った三刀屋がそれを見て頷いた。

「ハジメー！」

元気のいい号令と共に無籐がドリブルで持ち上がる。その進路に立ち塞がるのは様崎だ。木崎は無籐の斜め前方にパスコースを作るポジショニングをし、宵闇は様崎をカバーできる位置に陣取っている。

無籐たちのマッチアップ。ドリブルを止めて正面から向かい合い、無籐が笑う。

「当たってくるのはキャプテンだつてのは読めてたぜ」

「ふーん？　じゃあ抜き方も用意してるのかな？」

「当たり前だろうがア！」

無籐が様崎に突っ込む仕草を見せ、様崎が構えた。だがその動きはフェイクであり、ノールックで前方の木崎へと正確なパスを供給し様崎の横を抜けていく。

パスを受け取った木崎はノータイムで無籐とワンツーを狙ったが、様崎が驚異的なアシリティで無籐に追い縋っているのを確認して、仕方なく自分のドリブルで持ち上がる。

「しゃあ！　俺がぶち抜く！」

「はぁ……仕方ないですね……」

勢いよく突っ走る木崎のドリブルコースを宵闇が塞ぐ。無籐たちは並走していたため、パスの選択肢も木崎には残されていた。だが、木崎はそれを見て減速するどころか加速し始める。宵闇はその意図が読めなかったが、自棄になったわけではない。何故なら、巻き上がる炎が木崎の体を包み込んでいるのだから。

「ヒートタックル！」

「うわ、容赦なし……！」

初心者に躊躇なく必殺技を切ってきた木崎に宵闇が目を見開き、炎に包まれた強引なドリブルに吹き飛ばされる。目の前が空いた木崎は口角を上げてシュートの体勢に移行した。

「よしっ！ 食らえ、俺の必殺シュート——」

「させないよっ！」

だが、宵闇が抜かれることをいち早く察知していた様崎が無籐のデフエンスを捨てて木崎にプレスをかけてきた。慌てて振り上げた足を戻した木崎はギリギリ体を入れて、様崎からボールを保持する。様崎は手をクイクイと動かした。

なんとか背負っていた木崎にかかる様崎からのプレッシャーが途端に弱くなった。何故だかはよく分からなかったが、これはチャンスだと認識した木崎がポストの体勢のままフリーのはずの無籐へパスを出そうとする。

「無籐先輩！」

「……！ おい、今出すんじゃないエ！」

突然の指示に驚いた木崎だったが、時すでに遅く、正確性を狙った遅めのパスが彼らの間を動き始めていた。そのパスを、木崎に抜かれていたはずの宵闇が狙い澄ましたかのようインターセプトする。ここではじめて、木崎はこのパスが様崎たちに出すことを望まれているのだと理解した。

「や、やった……」

「ナイスプレー！ 黒ちゃん！ よしよーし！」

「黒ちゃん……？」

奪ったボールを信じられないような歓喜の目で見ていた宵闇に、木崎が抱きしめて頭を撫でる。宵闇は呼び名に疑問を持ちながらも、身を振ってくすぐったそうに体を預けていた。

無籐が頭を搔きながらため息をつく。

「キャプテンが新入りに手でコーチングしてたんだよ、パスカットを狙えってなア」

「うわー！ 嵌められたのかよー！」

木崎が頭を抱えて叫び、がっくりと肩を落とす。新入部員にいい格好ができなかったことを悔やんでいるらしい。

列に戻ってきた木崎を伊槌が労う。

「お疲れ。惜しかったぞ」

「くそー……なあ、お前だったらどういいうプレーした？ 教えてくれよ」

木崎の問いに無籐も少し反応した。彼も興味があると読んだ伊槌は、自分のプレーのビジョンを知ってもらうためにも話すことになる。

「俺が木崎の立場だったらか……まず、最初のワンツールの場面からだ」

先ほど木崎がボールを受けた場所を指さして言う。

「ボールを受けて、走っている出し手がDFを振り切れないと思ったら、『止まれ』と指示する」

「へえ、どうしてだい？」

「走っているDFを一瞬振り切れるからだ。そうしたらパスができる」

梵場も聞いていたようで話に入ってくる。彼の質問と共にプレーを補足し、自分の思考に理解を深める。

「そして今度こそワンツールで俺が抜け出す。そしたらカバーが当たってくるから、キープして出し手の動きを待つ」

「出し手がDFを振り切れなかったらどうすんだア？」

「ドリブルで近づきつつマッチアップしてるDFを下げていく」

今度は無籐が説明を求めてくる。その問いにも、伊槌は淀みなく対応してみせた。

「近づいて、DFがこっちに釣られたらそいつを使う。釣られなかったら、そいつに当ててスルーパスを出させて俺が決める」

「……なるほどなア、随分自分のシュートに自信があるじゃねえか」

そのような意図はないだろうが、伊槌の耳にはそれが妙に嫌味ったらしく響いた。睨むように目を見つめ返し、自分自身に宣言するように言う。

「一番点が取れる選手は俺だからな」

「随分な自信だね。僕も負けてないよ」

「俺もだぜ！ エースストライカーは俺だからな！」

その言葉で波紋が広がったように木崎たちも声をあげた。活気に溢れる彼らに、伊槌の口元が少し綻ぶ。

「……はッ、自信があるのはいいことだ。勝つことに拘らないよりずつとな」

遠くを見て、誰に言うでもなく無籐が吐き捨てるようにつぶやいた。

次は山本と三刀屋のコンビが準備をしていた。攻撃側の明風は、少しきよろきよると周囲を見渡した後、伊槌の方を見て顔を明るくしながら寄ってくる。自分への視線だと言うことにしたい梵場がポーズを取り出した。

「伊槌先輩、組んでください！」

「……ああ、そういうえば人数が足りないのか」

憲戸中の現在のスカッドはFW3人、攻撃的MFが2人、守備的MFが1人、DFが5人の計11人で構成されている。GKがいないことを除けば、そこそこバランスは良いと言えた。

伊槌は明風の頼みを唯々諾々と受け入れた。彼自身も、先ほどのプレーは自分自身の中で看過できるものでは無かったからだ。

「ありがとうございます、先輩！」

「ああ、いや……当然のことだろ」

人当たりのいい明風に伊槌がむしろ困惑する。ピッチ上では上下関係を気にせず荒い言葉使いになる伊槌にとって、丁寧に接されるのはむしろむず痒かった。

「くっ、伊槌め……子猫ちゃんを誑かしやがって……!」

「逆恨みがすぎんだろ……」

所在なさげに頭をかく伊槌に、梵場の大人気ない視線が突き刺さる。伊槌は完全に無視していた。

明風と戦術について話をしようとしたタイミングで、金髪のおさげが目につく女子がぎっぎつと足音を立てて近づいてくる。それは木崎に紹介され、そして守備側選手の山本だった。

「新入部員が相手ね! 言っとくけど、容赦しないから!」

「……俺も手なんか抜かないさ。あと、新入部員じゃなくて伊槌鳴哉、改めてよろしく、山本」

威勢のいい宣言に少し笑みを返し、伊槌が自己紹介と共に手を出す。だが山本はその手を握らず、全身で不満を表現しながらさらににじり寄ってきた。

「はあー!? 山本なんて地味な名前で呼ばないで! ホープちゃん、

分かる!? ホ・オ・プ・チャ・ン! さん、はい!」

「ほ、ホープちゃん……」

「それでよし」

突然いきり立った山本——ホープに詰め寄られ、勢いに吞まれた伊槌が引きながら声を絞り出す。ホープもその呼び名に満足したようにうんうんと頷いて三刀屋の元へと歩いていった。伊槌は調子が狂わされっぱなしなことに疲れを感じる。

「面白い先輩ですね、やっぱりサッカー部に入ってよかったです!」

「……俺は少し後悔してる」

明風との雑談もほどほどに、気を取り直して戦略を練っていく。

「得意なプレーはあるか?」

「テクニックとスピードには自信ありますよ! まあシユートは……

ちよつと……」

そういつてあはは、と乾いた笑いを出す。フィニッシュが苦手なのは、言い方は悪いが伊槌にとってはむしろ都合だった。

三刀屋たちの方を確認しながら、スペースを指さしつつお互いのタスクを明確化していく。

「ゴール前まではお前のドリブルとパスで繋ぐ。ゴール前になったら渡せ、決めてやる」

「はい！でも、私が点をとつてもいいんですね？」

明風が挑戦的に微笑む。伊槌も無意識のうちに破顔した。

「……最も得点の確率が高い選択をする。それが良いFWだ」

「分かってますよ、頼りにしてますね！」

三刀屋たちも戦術を決めたようで、既にゴール前に鎮座している。伊槌が数分前のシュートミスを脳裏に過らせ、ゴールへの渴望と共にボールに足を乗せた。

「よし、はじめ！」

恒例となった様崎の号令と共に明風にボールを渡し裏へと走る。カバリングには三刀屋が残り、相方のホープは、DFとは思えない猛烈なスピードで明風にぶち当たりに行く。

「っ、気をつけろ！ そいつ早いぞ！」

「うわっ！」

瞬く間に明風との距離をゼロにしたホープが先手必勝とばかりに足を伸ばす。だが、伊槌の言葉もあつてか明風が素晴らしいボール捌きでそのタックルを回避した。

「むう、今ので決めたかったんだけどネ」

「そう簡単に行かせるかよ……」

明風がホープに対してドリブル突破を図るが、すばしっこいホープに対して決定打を出すことができずズルズルと追い詰められていることを認識した伊槌は、ぐんと距離を詰め簡単なパスコースを作る。

「一旦預けて走れ！」

「うっ、お願いします！」

ホープを一瞬剥がした明風が下がった伊槌の足元に当てる。当然プレスに来た三刀屋を背負った伊槌は、何故か太田の時より強い圧力を感じた。

予想以上のプレスの速さに少し驚いた伊槌だが、落ち着いてボールをキープする。が、その伊槌に対しても、ホープがすかさず超スピードのタックルをお見舞いしようと突っ込んできた。

「遅いわね！ サッカーはスピードが全てよっ！」

「……っ!? 実際来ると思ったより速い……けどな！」

ホープが走ったことよって空いた明風に難なくパスを返す。明風は伊槌の要求通りしつかり走っており、フリーで右からドリブルを使つて持ち上がっていく。

その動きに呼応し、三刀屋がゴール前へ戻った。対照的にホープは猪突猛進に明風にプレスをかける。2人のプレーには一切の迷いがない。ホープはプレス、三刀屋はカバー。これは計算されたものだと伊槌が理解するのに、数秒も要らなかった。自由になった伊槌はゴール前でポジションを取る。

「逃げられないわよー！」

「さっきは驚きましたけど、2回目はい！」

背後から勇猛果敢に飛び込んでくるホープの足を、明風がしつかりと読んで回避する。その勢いのままホープが前方に立ち塞がったことを確認して、白い歯を見せた。

明風が力強く跳躍する。太陽も出ていると言うのに彼女の背後に三日月が登り、その月をなぞるように明風が回転して強い風を起こした。

「三日月の舞！」

「きやつ、必殺技!？」

虚をつかれたホープが風圧に耐えられず倒れる。完全にフリーになった明風が水を得た魚のようにスイスイと持ち上がって三刀屋と相対する。

三刀屋は距離を取り、伊槌にも明風にもカバーできるポジションに立っていた。数的不利で攻撃を遅らせる、気の利いたプレーが上手い選手だ。

「行かせないヨ！」

「私が行けなくても……先輩！」

明風が打て、とメッセージを込めたパスを上げてくる。当然三刀屋もシュートコースに入ってくるが、伊槌の目にはゴールしか見えなかった。

刹那、明風からの浮いたボールを目にも止まらぬスピードで右足を引き戻すことでボールの下を蹴り抜き、その場で回転させる。そして、引いた勢いをバネに強烈なボレーを叩き込んだ。足と回転の摩擦によって発電が起こり、眩い光がボールを覆う。

「電閃……！」

やはり足が固まる。それでも伊槌は意地で足に力を込めた。このシュートが自分を高みに連れていってくれた、このシュートが再び自分サツカーを与えてくれた、あの時のように、ネットに突き刺すために。

「いつ、けえー！」

昨日より威力が落ちているが、それでも必殺の一撃。素早いシュートに三刀屋は必殺技でのシュートブロックは間に合わないと判断し、足を伸ばすもつま先を掠めただけだった。

「まずいネ……！」

決まれ——。

だが、伊槌の心からの願いとは裏腹に、シュートは残酷にも左ポストを掠めて外れた。

「……っ!? くそっ……！」

シュートを蹴り抜いて倒れた体勢のまま、伊槌が土のグラウンドを叩く。思い通りに入らないシュートに腹が立つ。踏ん切りをつけたはずなのに過去を振り切れない女々しい自分に腹が立つ。不甲斐なくて仕方がなかった。

だが、悲劇はそれだけでは終わらない。

「……！ あ、危ない！」

太田が突如大声をあげる。

珍しげに目を見開いた様崎が太田を見やり、その視線の先には、伊槌の放ったシュートの軌道上を歩く女子生徒がいた。

「わっ、君！ 避けて！」

「え……う？ きやつー！」

黒髪で両眼が隠れた、憲戸中の制服を着た少女。異常を察知した伊槌も、弾かれたように顔を上げながらも、動けずにいた。

シュートが空を裂いて飛んでいく。曲がりなりにも、それは中学年代最高峰のFWが放ったシュートだ。距離による威力の減衰があるとは言えまともに当たればタダでは済まない。伊槌の脳裏に最悪の想像がよぎった。

「避けるー！」

「……ッ、どうにか……！」

もはや衝突は避けられない。少女は最後の抵抗とばかりに両手をパンチのように突き出した。

瞬間、ボールと接触する。拳とシュートは一瞬拮抗し、そして、シュートが苦もなく少女のパンチで跳ね返された。

「……は？」

伊槌の足元に、少女が殴り飛ばしたボールが転がってくる。ジャストミートしなかったことや距離による威力の低さを考えても、必殺技を打ち返すことない尋常ではない。伊槌は呆気にと取られていた。

だが、その場で動き出す影が1つ。ピンク色の髪を弾ませながら少女に近づく様崎だった。

「君すごいねー、名前なんて言うの？」

「え？ あ、えと……久良島くらしま 杏菜あんなです……」

距離感の近い様崎に押されているようにオドオドとした様子で久良島が自己紹介をする。様崎はニコニコと笑って彼女の手を取って立ち上がらせた。

「ねえー！ サッカー部入ってくれない？ 君すごいと思うよ！」

「え……そんな、急に……」

久良島が下を向いて困ったように頬をかく。だが、様崎の熱い視線に負けたのか、ううう、と呻きながらも前を向いて様崎と髪で隠れたその目を合わせた。

「元々、興味はありました……でも、初心者ですよ……？」

「大歓迎だよ！」

「……それじゃあ」

控えめに了承の言葉を紡いだ久良島に、様崎が今日一番の笑顔を見せて、満足そうに頷く。用意周到に、ポケットから入部届を出して久

良島の手握らせた。

「楽しみだなあ、ポジションどこやりたいとかある？」

「……えっと、GKとか……」

「わあ！　じゃあスタメン確定だね！」

控えめな久良島と少々強引な様崎。しつかり話が続いているところを見ると、2人の相性は意外と良いのかも知れなかった。

伊槌は人に怪我を負わせなかった安堵感と、少々のプライドの傷を自覚しながら久良島に近づいていく。男子が近くに来たからか、久良島が少しびくつと肩を震わせた。伊槌は努めて優しい声を出す。

「ああ、えっと……久良島さん、だよね。シュートを当てそうになってしまつて、本当にごめんよ。怪我がなくてよかった」

「あ、良いんですよ……わざとでは、ないんですから……」

お互いに頭を下げ合う謝罪合戦に入りかけたところを、様崎が制止して場を取り持ってくれた。そこから一言二言話して、伊槌も元の場所に戻っていく。

帰ると、梵場と木崎が、いつの間にか先ほどまでいた場所を陣取っていた。

「伊槌い、お前は今日随分な数の子猫ちゃんと仲良くなったみたいだけど、僕の方が美しいことを忘れないでくれたまえよお？」

「だから、逆恨みがすぎんだろ！　そもそも今のは謝りに行っただけだし！」

梵場が下から目線でガンを飛ばしてくる。木崎は律儀に突っ込んでいた。賑やかな面々に、伊槌の頬が少し緩む。

靴木も輪の中に入ってきて、厳かに口を開いた。

「とりあえず、今日の練習は終了だ。疲労を溜めるなよ」

「分かっています」

伊槌の言葉に2人も頷いて同調する。そんな4人の元に、1人の少女が走り寄ってきた。

「あ、あのー！」

「ん？　どうした」

代表して靴木が言葉を返す。声をかけてきたのは、若草色のショ-

トカットをした小柄な少女——否、梵場が以前怒らせたあの少年だった。

「君はあの時の……」

「あつ、はい！ あのアフロヘアーの人と一緒にいた方ですよね」

「知り合いなの？」

「ええ、まあちよつと色々……」

伊槌は、少年の尊厳を守るためにも色々の部分は言葉を濁した。話をしていた靴木も、知り合いならお前が対応しろと言わんばかりに、視線を投げてきている。気まづかったが、伊槌が話を繋いだ。梵場は例の平手が効いていたのか、大人しくしていた。

「それで、どうしたんですか？」

「はい、1年、たちばな橘花 おうか桜華です！ 僕を、サッカー部に入れてください！」

その言葉とともに、空気を切るほど勢いよくお辞儀をする橘花。伊槌も少し呆気にとられたが、彼の言葉をしっかりと咀嚼し終え、こやかに返事をした。

「もちろん、喜んで。僕からもキャプテンに話を通します」

「……！ ありがとうございます！」

そう言つて爛漫に笑顔を咲かせる彼の顔は、やはりどこからどう見ても少女にしか見えなかった。

伊槌の後ろでは、梵場たちがコソコソと話をしている。

「気をつけろみんな、あの子は男子だ。まあそれはそれとして美しいけどね」

「は？ 嘘だろ……名前も女の子じゃねーか」

「……人は見かけによらない、と言うやつか」

何はともあれ、部員が揃った。

これで当面の危機は回避し、憲戸中サッカー部がついにチームとして生まれ変わったことに伊槌は安堵感と、そして熱を覚える。

これで試合に出れる。今日の練習で、ネガティブな面でも、ポジティブな面でも大きな収穫があった。

勝ちたい——その思いが伊槌の胸の中を焦がす。まずは、次の練習

試合からだ、改めて気合いを入れ直す。

だが、この時はまだ誰も知らない。

よもや、新チームとしてはじめての試合が――

――青森の絶対王者になることなど、誰も知らなかった。

4話：絶対王者

「ウイングは大外で張れ！ ボランチもみんな上がってこい！」

人工芝のピッチの上、22人が入り混じるその上で、深緑色のユニフォームに、10番の黄色いビブスを身につけた少年が、ドリブルで疾走しながら空気を裂くような鋭い指示をフィールド中に飛ばす。

彼の指示を受けた、同じくビブスを身につける者たちは、その言葉を疑うことなく、従順に命令を遂行する。

局面はロングカウンター。出来るだけ手数をかけず攻め切りたいこの状況で、彼はクリアボールを収め、ハーフラインまでたった1人でボールを運んできた。

「パスコースあるぞー！」

彼の横には、こちらを伺いながら並走する少年のサポートもある。攻め切る形はイメージできた。

しかし、そのイメージをぶち壊すために、彼と同じく深緑色のユニフォームを着た、ビブスをつけていない2人の選手が立ち塞がる。

「毛利、ボールホルダーに当たれ！」

「わアーてるー！ 通さねえー！」

ドリブルで進んでいた少年に、青紫色のオールバックに髪を纏め、左目に傷を持つ少年、毛利が果敢にプレスをかけてくる。

「くっ……！」

周囲が裂けるような鋭い足音で猛進してくる毛利に少しだけ恐怖を感じるが、サポートの少年とアイコンタクトを取って頷く。

そのままぶつかるとその寸前まで引きつけて、毛利の足に引っかかるように少し浮かせたパスを斜め前に出した。

「行けー！」

「よし……！」

通った、2人がそう確信したパス。

だが、パスを受けようとした少年の前に、突然緑色が映し出される。それは、このゲームが始まってから飽きるほど見た、深緑色のユニフォームだった。

「なっ……」

突如現れたその影は、狙っていたようにそのパスを搔つ攫つていく。

「もらったぞ」

右腕に、キャプテンであることを意味する黄色い腕章を巻いた、威圧感のある白髪の少年が呟くように口を開く。間髪入れず、鋭い楔のパスを出した。

「よ〜つと、ナイスパス〜」

そのパスの先には、クリーム色のロングヘアをポニーテールにまとめた少女が待ち構えている。一瞬の出来事に置いていかれていたマークの選手が急いで少女にプレスに行くが、反転とともにするりとかわされてしまった。

開けた視界の中、無意識的に首を振って周囲を確認する。左サイドで、少年が手を挙げてパスを要求していた。

「奇崎くん〜、パスス」

緩い口調とは裏腹に鋭く地面を削って転がるボールは、奇崎と呼ばれた少年のトラップで難なくコントロール下に収まる。ぴたりと止められたボールから技術の高さが伺えた。

眼前にはデیفフェンスの選手が奇崎のアクションを待つように構えている。穏やかに笑みを浮かべながら、奇崎が言葉を紡ぐ。

「そう固くならないでくれ、僕のパフォーマンスを見て肩の力を抜くといい」

「……来るか……」

奇崎がドリブルでDFに仕掛ける。足がボールから離れた一瞬を狙い足を伸ばした彼だが、奇崎がつま先で軽くボールを浮かせただけでかわされてしまう。

半身を置いていかれた状態だが、すんでのところでついていくことはできた。その選手を認めた奇崎は、足を止めその場に静止する。

「……っ？」

当然、DFの困惑しながらも奇崎のマークを外さないようにスピードを緩めた。動きを止めたその瞬間、奇崎が軽く蹴り出したボールは

股下を通り抜けていき、完璧に剥がした。

「しまったー！」

「今日はこのくらいにしておこうかな、あとは頼んだよ」

1人が抜き去られたことでディフェンス陣に混乱が走る。とにかくドリブラーの進行を止めようと、ディフェンスラインから1人の選手が奇矯にプレスをかけたが、彼は一瞬中央を確認した後、自分を後ろから追い抜いてきた、小さな影のランコースに転がすようにスルーパスを出す。

黒と茶色の混ざった髪をして、犬の耳のような癖毛をはためかせながら、小柄な体格通りのスピードで、サイドを駆け上がったその少女に優しいパスが通る。

「あはっ、ウチに頼るなんて見る目ありますね！」

ガラ空きになった左サイドを縦に挟りながら、ペナルティエリア内に視線を入れる。

エリアに入っているのはセンターバック2人と絞ってきたサイドバックのDF3人に対して、こちらの選手は9番の1人だけ。流石に分が悪いと思い、キープして時間を作ろうとする。

だが、彼女の視界の端。ペナルティエリアの少し前。

必死に戻る相手の選手と、こちらに気を取られているDF達の間、致命的なバイタルエリアに佇む背番号10番を見つけた途端、パスこそが最善手だと、本能で理解した。

「鎌野先輩ー！」

低弾道のロブパスが問題なく狙った人物、鎌野樹かまのいつきの足元に入る。その瞬間、ディフェンス陣に今まで以上の緊張が走ったことが肌で分かった。

「ふう……やっちゃうっすかね」

鎌野がゴールを見据える。戻ってきていたMFが2人がかりで鎌野を挟み込もうと猛烈なプレスをかけてきていたが、彼は意にも介していないようにボールを運ぶ。

「舐めるなよ、2人でなら取れる！」

「パスコースは切れ！奪ってカウンターだ！」

プレスをかける2人が素晴らしい連動を見せて鎌野を追い込んでいく。挟み撃ちの形になり、潰せる——という感覚は、まやかしだったと気づく。

「コース、全然切れてないっすよ」

流れるようなモーションで鎌野が右足のアウトサイドキックを振り抜き、中弾道の鋭いパスが、針の穴を通すようにDFの顔面の横を通り抜けていった。強いカーブがかかっており、ペナルティエリアのほぼ中心に落ちていくような素晴らしいクロスボールだ。

「何!? でも、あんなエグいパス……!」

FWが収められない、そう続くはずだった言葉も途中で切れる。

9番の少女が、白灰色のポニーテールを揺らして飛んだ。比喻ではなく、突然のパスに足を止めたマークをステップで外し、鎌野からの鋭いボールを、空中で胸トラップをして収めてみせた。

「流石のパスです。グッドです」

パスの弾道も、強さも、全てその少女の能力を活かし切るかのようなギリギリのパス。何よりそのハイレベルなパスを要求通りに収めてみせた少女に度肝を抜かれる。少女は既にシュートモーションに入っていた。

「マジで一年なのかよこの化け物が……! 好き放題やらせるかよ!」

だが、DF達も出し抜かれるだけではない。すぐさま気を取り直し、決死の覚悟でシュートコースに体を投げ出す。

だが、大きく振りかぶった少女の足から放たれたのは、シュートではなかった。

前方に落とすような優しいパス。誰へ宛てたものなのか、一瞬誰もが理解できない。そのパスに、1人飛び込んでいたその少女を除いて。

「アツハハハハ! 決めるぞおおお!」

「やっっちゃえー」

少女の気の抜けた声援に押されるように走り込んできたのは、先ほどとは違う小柄な少女。赤の混じった長めを黒髪を振り乱しながら、

凜猛な笑みを浮かべてボールに突っ込んできた。GKは虚を突かれ、体勢が整っていない。

少女はお構い無しにボールを足を叩きつける。その背後にはいつものまにかハリネズミの大群が迫ってきており、皆一様に、逆立てたそのハリをゴールに向けていた。

足を叩きつけられたボールが中空に浮かぶ。少女の絶大なパワーで上げられたそのボールに、先ほどのハリネズミ達のハリが斉射され、見るだけで痛々しいスパイクボールに変貌して少女の足元へ導かれるように落ちてきた。

「うけてみるっ！ ヘッジホッグストライク！」

刺々しいボールを、力の限りのキックで少女の足から打ち出される。咄嗟のことに必殺技が打てる体勢が整っていなかったGKだったが、それでもプライドにかけて両手を叩きつけた。

「ぐ……うおおー！」

裂帛の雄叫びをあげて全身に力を込める。

だが、届かない。元より実力差があることは明白な上に、必殺技を使わずに必殺技を止めるなど、無謀という言葉ですら生温い愚行だ。

案の定、両腕が弾き飛ばされ、GKごとネットに突き刺さる。これで5失点目だった。

「おーっ！ 見たか！ リューのシュートがまた入ったぞ！ あははははー！」

「ナイスシュートです、鉢鐘はちがねさん」

得点した少女、鉢金はちがねが飛び跳ねて喜びをあらわにしている。アシストした女子もぱちぱちと乾いた拍手をしながら彼女に賞賛の言葉を送った。

そして、ピッチの外から長く笛が吹かれる。ゲーム終了の合図だった。

「練習終わりだ、スタメン組は集合、Bは10分休憩の後基礎練！」

カウンターの起点となった白髪のキャプテンが声を張り上げ、ビブスを着た11名が項垂れた様子でピッチを後にする。練習とはいえ、大敗した事が精神的にきている様子だった。

ユニフォーム組の11人は、近場のBチームメンバーを労いながら、笛を吹いた老年に差し掛かっているであろう壮年の男性の元に素早く集合する。眼鏡をかけ、白い顎ひげを蓄えた姿は、知的な雰囲気と共に、ただ者とは思えない貫禄があった。

「お願いしますー！」

キャプテンの号令と共に11人全員が一糸乱れぬ動きで礼をする。その中には目の前の男性への信頼と、チームとしての強い団結力が見て取れた。

「長宗我部^{ちようそくわべ}。5点目のカウンター……何か感じたことはあるか」

「……そうですね。繋ぐ意識が強すぎて少し前進が遅い印象がありました」

キャプテンの長宗我部がそう答える。男性は重々しく頷いた。

「そうだな。もつとシンプルにスペースに出していい。鉢鐘^{はちかね}や童部留^{どうべりゅう}と言った瞬足のプレイヤーがいるのだから、それを活かすべきだ」

犬耳の少女が名前を呼ばれてピクリと反応した。褒められた事が嬉しかったのか、少し口角が上がっている。

咳払いをして場を仕切り直した男性の視線が、鎌野を捉えた。

「鎌野^{かまの}、蓮水^{はすみ}。やはりお前たちはプレーの波長が合っていると見える」

「そうっすね。どういう事がしたいのかは何となく分かりますし、俺の想像すら超えてくれる」

「ありがとうございます。いえーい」

鎌野が頷き、アシストした少女、蓮水もピースして肯定の意を示す。礼を欠いているような行動に、隣の長宗我部が軽く頭をはたいた。

さて、という男性の声に、再び彼らに集中が戻る。「青森附属」の刺繍が施されたシャツの裾を直し、全員の視線を確認して再び語り出した。

「練習試合の日程が決まった。期日は今週の日曜、集合時間は7時にここ、青森附属中だ」

皆一様にメモを取る中、キーパーユニフォームの、頭皮で太陽光を反射している少年が手を叩きながら口を開く。

「時に陸奥監督^{むつ}！ 対戦相手は決まっていますか？」

輝く笑顔で監督の男性に質問をぶつける彼に、陸奥監督は鷹揚に頷いた。

「焦るな獅子豪。今から言おうと思っていた。確か対戦相手は——」
そう言っただけからA4サイズの紙を取り出し、少し間を開けてそれを読み上げる。

「——憲戸中学校というところだ」

金曜日。この日も何事もなく授業を終え、伊槌も部室への歩を進めていた。

オンボロだと思っていた部室も、3日見続ければなかなかどうして趣がある。住めば都は本当らしい。

伊槌は凝った体を解しながら歩き、朝に鉢合わせた様崎の言葉を思い返す。

『今日は顧問の先生から大事な話があるらしいから、放課後はすぐ部屋に来てねー』

「大切な話ねえ……」

大方、以前梵場と軽く話した練習試合の件だろう。その日程や対戦相手が決まったのか、と思えば、勉強に疲労した伊槌の体に、否応なく活力がみなぎる。

どこか弾んだ歩調で進んでいた伊槌は、気がつけば部室の前についていた。考え事をしながら歩いていた不注意を反省し、しかし期待にその思いはすぐに吹き飛んだ。

「こんにちは」

「おお、やっと来たか！」

戸を開けると、既に自分以外の全てのメンバーが集まっており、木崎の待ちくたびれたような声に出向かされた。伊槌も直接来たというのに、ずいぶん早い集合に面食らいつつも、軽く頭を下げる。

「よし、全員揃ったな！」

いつぞやか様崎が陣取っていたホワイトボードの前で、ワイシャツ姿の精悍な男性が手を叩いて注目を集めた。彼は確かこの学校の体育教師をしている月並肇つきなみはじめだったはずだと伊槌は記憶している。

月並は久良島、宵闇、橘花、そして伊槌と新入部員たちの顔を一通り見回した後、腕を組んで白い歯を見せた。

「新入部員たちもこんなに入ってきてくれたか！ これで名実ともに憲戸中サッカー新チームの始動だな！」

「いえーい！」

月並の言葉に様崎が雑に盛り上がる。踊り出した会議を諫めるように、無籐が口を開く。

「集めたからには理由があんだろ？ 時間も押してんだ」

「ああ、そうだったな！ 今日集まってもらったのは、練習試合の件についてだ！」

その言葉に、にわかには部室がざわつく。予想していた伊槌も、喜びが隠せない。

だが、ふと目についた太田は、どこか浮かない顔をしていたような気がする。伊槌が疑問に思ったのも束の間、月並がホワイトボードに何かを書いていく。

それは何かの固有名詞。はじめはわくわくとした雰囲気で見つめていた部員たちだが、進むにつれてその声も無くなっていった。伊槌と月並だけが、いまいちその理由を理解していない。

場違いに月並の声が響く。

「対戦相手は、『青森大学附属中学』だ！」

「む、無茶です！」

呆気に取られていた室内に、泡を食ったような太田の声が響き我に帰る。

椅子を蹴り倒さんばかりの勢いで立ち上がった太田に呼応するように、様崎もゆっくり立ち上がる。

「……んー、私もやめといた方がいいと思うよー」

「うん、実力差がありすぎるし、やっても楽しくないと思うわ……」

ホープも同調の声を上げる。サッカー部の中でも明るい彼女らが声を沈めているのを見て、伊槌もただ事ではないと認識を改めた。

隣で呆然としている梵場に声をかける。

「青森附属中学ってところと試合するのは、何かまずいのか？」

試合を前にして昂っているのか、伊槌の口調は崩れている。梵場はそんなことにも気づかないほど驚きに固まったまま、ぎこちなく話す。

「あ、ああ。僕はサッカーをあまり知らないけど、そんな僕ですら知ってることさ」

「……青森附属は、この青森県における『絶対王者』だ」

背後から低い声が聞こえる。靴木のものだった。

ホワイトボードの前で固まっていた月並も、ようやく回復し、少しだけ爽やかな笑みを翳らせ、太田に問う。

「え、えっと、どうしたんだ？ 無茶ってどういうことだ？」

「せ、先生はあまりサッカーを見ないから知らないかもしれませんが……とにかく、青森附属と僕たちじゃ試合になりません！ ボロボロにされて終わりです！」

穏やかな太田が声を荒らげて固辞しているのは、伊槌にとっては信じ難い光景だった。

そんな太田の背中に、か細く声が刺さる。

「えっと……私はやってみたいです……まだまともに練習も出来てませんけど、試合が一番成長できる気がするのです……」

久良島が控えめに手を上げる。他の1年を見ても、皆同じ考えのようだった。

「強いとこと試合できるなんて、大歓迎ですよ！」

「僕も、自分の実力を試してみたいです」

「私は何でもいいですけど……まあ、やるっていうなら」

それでも太田は、首を振って否定する。

「無理だよ……分かってないんだ……！ 勝てるわけがない！ 勝てないくらいなら、試合しない方がいいんだ！」

「……私もやりたくないな、楽しくなさそうだし」

「え、えつと……サクヤがそういうなら、ワタシも無理にやる必要ないと思うヨ……」

彼女らは首を振らない。

平行線をたどり始めた押し問答を引き裂くように、その男は割り込んできた。

「俺はやるべきだと思う」

白い髪をはためかせ、真摯な表情で様崎たちに視線を向けるその男は、伊槌だった。

「青森最強のところなんだろう？ 必ず得るものはある」

それに、と続け、一拍置いて、誓うように、確認するように宣言する。

「俺は優勝を目指してる。いつか倒すべき相手を前に、逃げてられない」

その言葉に、太田が絶句して、飛び出そうなほどに目を剥いて正気を疑うような表情で伊槌を見ていた。

「そんな、こと……」

「無理ってか？ 始まってもねエだろオがよ」

伊槌の肩を叩きながら、無籐が挑発的に言う。ヒートアップを感じ取ったのか、月並が場の空気を霧散させるように大きく手を打った。

「あーつと、とりあえず練習を始めよう！ やるかやらないかは、練習あがりまた集まって決める！ そうしようか！」

その言葉に、部員たちが蜘蛛の子を散らすようにさっさと部室を後にする。皆一様に思い詰めた表情をしていた。

「俺らもいくぞ」

無籐に再び肩を叩かれて、伊槌がゆらりと振り返る。

「ああ」

例えチームに炎がついておらずとも、伊槌の胸には強い闘志が爆炎をあげていた。

この思いを、みんなにも知ってほしい。

確かに敗北は恐怖だ。だが、それを乗り越えた先にこそ欲しかった未来はある。伊槌はそう確信している。

俯くメンバーの背を思い出しながら、皆が重たそうに開けていたそのドアを、軽やかにくぐり抜けた。

「これが憲戸中サッカー部だ」

練習試合に近いこともあり、メニューはかなり軽いものだった。その中で、3人でのパス回しの最中に組みになった無籐が、呟くように口を開く。

「無理もねえがな。負け続きでみんな参ってんだよ。特に太田はなア」

鋭いパスが橘花の足元に出される。ぎこちなくも、しっかりと収めてみせた。

伊槌がチラリと横を見れば、太田はプレーの精度を著しく欠いており、様崎ですらつまらないミスを連発していた。

「キャプテンたちは、試合前はいつもあんな風なのか？」

「いや、太田とホープ以外はそうでもねエ。青森附属って言う強大過ぎる敵がそうさせてんのかもなア」

橘花の柔らかいパスが伊槌の足元で止まる。受けてのことをよく考えたベルベットパスに伊槌が舌を巻いた。

無籐が言うには、太田は敗北、そして勝利への執念そのものを恐れており、ホープは楽しいサッカーに固執しているらしい。

軽いメニューながらも息を切らせて、橘花が余裕なさげに問う。

「はあ……はあ……青森附属って、そんな、強いんですか」

「……おお。なんでも今年には史上最強って言われてるらしい」

伊槌のスピードはありつつも精度を若干欠いたパスを無籐がなんとかトラップする。どうしてもシュート以外のプレーは凡庸だった。

今は、シュートも凡庸以下だが。伊槌は唇を噛む。

「だがよ、あんなにも沈んでるキャプテンは初めて見たなア」

無籐が実に意外そうな声でそう漏らす。狙い澄ました逆足でのパスが、しっかりと橘花の下へ届く。

「青森No. 2って言われてる四壁恒星しかべこうせいとやるときも普通に楽しそうにしてたはずだ。青森附属になんか思うところでもあんのかねエ」

橘花が今度はスピードを重視したパスを出してくる。難なくトラップし、時間をかけずに無籐にシュート性のパスを送り、それもしっかりと受け取ってくれた。

ホイッスルの音がピッチに木霊する。終了の合図だ。正直物足りない練習量だが、ほとんどのメンバーが身に入っていないことを考えると早く切り上げた方が良さだろうとも思う。

「今日の練習はこれで終わろう。それと……試合の件はどうするか決められたかい？」

月並の質問に、さつきも否定的だった太田や様崎たちが俯く。気は変わっていないようだ。

「俺はやりたい」

伊槌のその短い言葉に、注目が集まる。

戻ってきたばかりで、逃げたくない。万感の思いが、その一行にもついていた。

「相手が誰であれ、俺はこのメンバーでサッカーをしてみたい。俺はみんなのことを何も知らないんだ」

薄く目を閉じて、呼吸を整える。こういう、士気を高めるようなことを言うのはやはり苦手だ。それでも、こんなところで諦めたくない、諦めて欲しくないと言う思いに突き動かされていた。

「だから、みんなのプレーを見せてくれよ」

「……後輩がここまで言ってるんだぜ？」

無籐が援護するように様崎たちに問いかける。煮え切らない表情だが、それでも少し心動かされた様子だった。

「……ここで負けたら、僕たちは折れちゃうよ」

「立ち上がればいい」

自分がそうしたようにと言外に語り、太田の弱音を黙らせる。

何かを感じ取っていたのか、ホープが意を決したように目を見開い

た。

「……そうよね、相手が誰であれ、あたしたちはあたしたちのサッカーをするべきよね！ よし、目が覚めたわよ！」

そう言つて拳を突き上げる。その大きな茶色の瞳には、力が戻つていた。

「へっ、バカのかせに變に考えるから怖気付くんだぜ！」

「はー!? 木崎の方がバカでしょ！ バカバカバーカ！」

「なんだとお!？」

数秒前までの低気圧のような重苦しい空気はどこへやら、木崎たちが下らない喧嘩を始めて、靴木に諷められていた。

その様子に、様崎も思わず笑みをこぼす。

「フツ……ねえ、サクヤ。やっぱりワタシも、コウハイたちと戦いたいな」

「んー……そうだね」

三刀屋のささやきに、吹っ切れた様子の様崎が、月並の前に歩を進める。

「やるよ！ 楽しんでくる！」

「……そうか！ 先生も負けてられないな！」

様崎のその言葉に、部員たちがわっ、と沸く。

太田も青い顔をしていたが、それでも前を向いていた。決断した様崎への信頼の証とでも言うべきか、伊槌にはないものだった。

伊槌が遠く空を見上げる。未だ見ぬ『絶対王者』へ、宣戦布告を叩きつけるような、鋭い目をしていた。

「憲中サッカー部、いくぞー！」

「おー！」

サッカー部の明るい声が、沈み始めた太陽に溶けていった。

5話：交流大会練習試合　V S 青森大学附属中学

少し時間が飛び、日曜日。今から6時に差し掛かろうという早朝の柔らかな日を浴びて、伊槌鳴哉は青森附属中学の校門をくぐり抜けた。

「……早く来すぎたか」

集合時間は7時なので、かなり早いスタンバイになってしまう。だが、今日のことを考えると、胸の奥から強い感情が湧いてきて、じつとなどしていられない。

緊張を吐き出すように大きく息をつき、指定されているグラウンドに向かうと、まばらにいる青森附属の深緑色のユニフォームと距離を取った先に見慣れた影がある。

まさかと思い近づいてみれば、それはやはり憲戸中のユニフォームをまとったチームメイトの1人、山本希望がストレッチをしていた。

「あら？　随分早く来たのね！　私の方が早いけど！」

「……いつ来たんですか？　僕もかなり早く来たつもりですけど」

ホープはふふんと胸を張って、仰々しくこちらを指差しながら宣言する。

「2時間前よ！　早起きして青森附属の奴らよりも早く来たわよ！」

「何を競ってるんですか……体調は崩さないでくださいよ」

すごいでしょ、と言外に語るホープに、呆れた様子の伊槌がいそいそとスパイクを履きながら、心配するような言葉を投げかける。

「今回の試合の肝は僕らなんですから、準備は入念にしてくださいね」

「分かってるわよ！」

スパイクに履き替えた伊槌が軽くグラウンドをつま先で叩き立ち上がる。その目は目の前のホープではなくどこか遠くを見ているようにも感じる。そのまま彼も軽く体をほぐしはじめた。

何とは無しにピッチに目を向ける。整備された人工芝のピッチは、憲戸中とは比べ物にならないほど手入れが行き届いていた。少し奥に見える平屋の部室も、縄文時代から進化が見られないあの部室と次

元が違いすぎる。さすが強豪校と言うべきか、設備のレベルも高かった。

そして、その部室の前で座って話し込む複数の影。少ないが、青森附属中サッカー部のメンバーだった。

姿を認めて、闘志が膨らむ。今日のためにチームとして戦い方は準備できている。あとは――

「俺が決める……」

ゴール前で、いつも蘇るあの時の全て。マドリッドそれを振り切らなければ、伊槌は真の意味でサッカー選手として復活はないと確信していた。

「今日、勝ちましょう」

伊槌の溢れ出たようなその宣言に、ホープがきよとんとした反応を返す。

「前にも思っただけどき、別に勝たなくても良くない?」

「え?」

今度は伊槌が、ホープの言葉が全くの予想外だと、理解できないといった呆気にとられて目を見開く。

「……か、勝つ気がないなら、なんで試合を受けたんだ」

ホープは質問の意図が理解できないとでもいいかげんに、首を捻りながら言う。

「あんたは、あたしたちのサッカーをしようって言ってたでしょ?」

だから、その言葉通りにやろうと思ったの」

「……………」

伊槌が一步後ずさる。

「青森附属って名前にビビっちゃったけど、勝てなくてもサッカーは楽しめる、当たり前のことよね!」

「……………」

「それに、今日は練習試合だし、無理することないじゃない!」
いつかの練習で、無籐から話には聞いていたはずだった。

山本希望は勝利への執着が薄い。楽しむことを念頭に置いている、と。

だが、伊槌は価値観のあまりの相違に目眩さえ覚える。勝てなかつ

たからこそ全てを失いサッカーに裏切られた彼にとって、その言葉は本能が理解を拒むような代物だ。

「何を言っただよ……」

荒らげそうな声を必死で抑える。一昨日はチームを鼓舞するためにも決意表明をして見せたが、今やるべきじゃない。

ホープと伊槌は今回の試合で攻撃の中核を担う。今彼女と衝突すべきじゃない。理性はそう言っていた。

だが、喉は伊槌の意に反して震える。

「勝たなくちゃ意味ないだろうが……敗者を誰が覚えてる？ 上を指すためには、負けてもいいなんて考えはダメなんだよ……！」

血が出そうなほど拳を強く握って、伊槌の喉がその言葉を絞り出す。その声は、呪われているかのように低かった。

轢き潰されたような声音に宿る異様な迫力にたじろぎながらも、言い返してくる。

「でも、みんな楽しくないと意味ないわよ！」

「そのみんなに俺は居ないのかよ！」

ここで止まらなければならない。伊槌もホープも、頭が沸騰しているかと理解しているはずだ。

だが、お互いに真っ向からぶつかり合う思想を受け入れることは難しい。ましてや、出会って一週間も経たない人間のものなど、いくらチームメイトであれ簡単なことではなかった。

「あのー、ちよつといいですか」

一触即発の雰囲気振りまいていた2人の間に、緩い声が割って入る。

白灰色の髪を無造作に伸ばした少女だ。青森附属のユニフォームを着ていることから、対戦相手であることが分かった。

「1年の蓮水涼はすみりょうです。どーも」

「あ……ああ、伊槌鳴哉……」

「ほ、ホープちゃんよ！」

妙に緊張感のない蓮水の態度に、2人の間にあつた空気が急速に萎んでいく。その緩い空気は天然なのか故意なのか判別がつかない。

恐らくは前者だろう。

「暇なので、相手してくれませんか？ サッカーで」

伊槌とホープが顔を見合わせる。彼女の困ったような顔を見て、まだルーティーンが終わっていないことを察した。ホープは試合前になると入念にストレッチして軽くランニングするのがルーティーンらしい。木崎がポロツと言っていた。

「俺でよければ……相手するよ」

「そうですか、嬉しいです。ぴーす」

「え、ああ、ピース……」

突然、ピースサインを突き出してきた蓮水に、伊槌も咄嗟にピースを返した。控えめに言っても奇行だ。ホープが耐え切れずに吹き出す。伊槌は蓮水の独特のテンポに飲み込まれていた。

笑いを押し込んで、少し震えながらホープが言う。

「え、えつと……あたしは、ちよつと走ってくるから……」

変なツボに入ったホープが逃げるように走り去っていく。伊槌は疲れたようにため息をついた。

その足元に、ボールが転がってくる。蓮水が軽くパスしたものだっ

た。
約束通り、伊槌は彼女とのサッカーに付き合うことにして、軽く蹴り返す。

「なんでチームメイトとやらないんだ？」

「さっきまでやってました。でも、貴方が面白そうだったので」

試合前とは思えない、緩いパス交換。子供の遊びのようなそのパス達にも、確かな技術が伺えた。

伊槌が軽く上げたボールを出すと、彼女は蹴り上げられたロブパスより高く飛んで胸でトラップして見せた。

「ほー」

「こういうプレーには自信あります」

表情が変わらないながらも、どこか楽しげに蓮水が言う。今度は彼女も先ほど収めたパスのような緩いロブパスを上げてきた。

「……っ」

そのパスを挑発を受け取った伊槌は、少し頭に来て意趣返しのパレーをしてやろうと思った——ものの、冷静にその感情を押し込め、浮いたボールをほとんどロスなくトラップしてお返しとする。

「おー、うまいですね」

「どうも」

浮かれなど微塵もこもっていない声音でそう返す。目の前の少女もやろうと思えばこのくらいできるだろうという確信が、絶対王者の一員がこの程度できないはずがないという思いが伊槌の中にあった。

伊槌が蹴り出した強いグラウンダーのパスを難なく受け止め、回転をかけることで真上に跳ね上げたボールをキャッチして息をつく。もう終わりだと、その行動が示していた。

「ありがとうございます……」

礼をしようとした蓮実の動きが止まる。視線は伊槌の向こう側を見つめていた。導かれるように、伊槌も背後へ振り返る。

歩いてきていたのは、美しい顔立ちに合わない、整っていない黒髪を掻く線の細い少年。だが、袖を通すそのユニフォームに描かれている番号を見て、伊槌が目の色を変えた。

「10番……!」

背番号10。言わずと知れた、エースの証明。かつてサッカーにおいて『神』とまで称された伝説のプレイヤーがその番号を背負ったことで、この番号は特別な意味を付随するようになった。

それを追うもの達が、特別でないわけが無い。ましてや、全国を代表する強豪校の10番ともなれば、重みもまた格別なはず。だが、その少年の姿はどこか気が抜けていて、そんなプレッシャーとは無縁であるように見えた。

「ん……?」

見慣れないユニフォームを見つけたからか、少年がこちらに近寄ってくる。なんとなく、伊槌の体に力が入った。

「鎌野先輩、おはようございます」

「ちっす。こっちは、練習試合の相手さんっすか?」

「……ああ。憲戸中FWの伊槌鳴哉だ。よろしく」

伊槌の自己紹介を聞いて、鎌野と呼ばれた少年の眉がピクリと動く。そして、先ほどまで能面のように表情のなかったその顔に少し笑みを浮かび上がらせながら、伊槌の目を見て問う。

「伊槌って、あのマドリードにいた伊槌っすか？」

「……そうだ」

苦虫を噛み潰したような表情で、俯きがちに伊槌がそう吐き捨てる。鎌野もその様子に何が妙なものを感じたのか、軽い調子ながらも詫びを入れ、しかしどこか弾んだ表情でこちらを見ていた。

「そうすか、今日は面白くなりそうっすね」

楽しみにしてるっす、と言いつつ、伊槌の方に手を置いて部室の方向へ鎌野が去っていく。その背中からは、子供のように無邪気な楽しみと、獰猛とすら捉えられる戦いへの期待が漏れ出している。

話終わつたとみるや否や、蓮水が下を向いている伊槌を覗き込むような体勢を作り、顔を合わせてきた。

「貴方、すごい人だったんですね。すごく憧れてました」

「……過去形なんだな」

大人気ないと分かっているながら、目を逸らし、悪態をつくようにその言葉が漏れる。しまった、と思いつく撤回するために口を改めて開こうと蓮水の顔を見た時、喉が締まるような感覚を覚えた。

「はい。憧れるだけはもうやめてます」

蓮水涼の目は、燃えていた。

当然比喩だが、伊槌は本当に燃えているように錯覚する。この目は知っている。

マドリードの選手たちは、スタメンでも、サブメンバーでも、皆、この戦士の目をしていた。

息の詰まるような感覚に、伊槌の鼓動が速くなる。

「——超えてやろうって、思うようになったので」

無表情を崩し、口角を釣り上げて、蓮水はそう言った。

次の瞬間にはすぐにいつも通りの鉄面皮に戻り、それではと頭を下げて去っていく。まるで先ほどまでのやりとり全てが幻だったかのように、何事もなく、伊槌だけがそこに取り残された。

いまだに高鳴る鼓動だけが、伊槌に現実を教えてくれる。

「ふうー……あれ、伊槌？ 何して……」

ルーティーンのランニングを終えて戻ってきたホープが、立ち尽くす伊槌に近寄る。だが、その表情を見て、ギョツとした様子で後ずさった。

火をつけられた戦意に抗わず、伊槌は獰猛な笑みを浮かべていた。そのまま彼は、独り言のようにホープに語る。

「楽しい試合になりそうだな」

「え……う？」

呆然とするホープを気にも留めず、朗々と言葉を紡ぐ。

「あいつらは本気で俺たちと戦うつもりだろう。他はどうか知らないが、あの2人は本気だ。弱小校の俺たちに対して、全力を持って当たる、こんな嬉しいことはない」

伊槌が、散漫になっていた視線をホープに合わせる。いまだ上の空な彼女に対して、言葉を軽くぶつけるように話した。

「お前がどう思っよう、改めて俺の決意は固まった。勝ちに行くぞ……！」

鋭く睨みつけるように鎌野たちに視線を合わせ、自分自身にそう誓った。

試合開始まで、あと1時間。

「――改めて、昨日の練習でのことを確認すんぞオ」

試合開始10分前。既にお互いにベンチに入り、最後の準備に入っているその時間帯で、憲戸中サッカー部の面々は、チームの頭脳である無籐を中心に作戦ボードに話になっていた。

顧問は月並だが、作戦立案はほとんど選手に一任している。彼にサッカーの知識はほとんどないからだ。伊槌はそれを知った時流石

に動揺したが、チームの面々、特に無籐はなかなかどうして戦術を考える能力が高かった。現に、今こうして話し合っている案も、ほとんどが無籐のものだ。

「……よーし、了解！ とりあえず、はじめの5分を大事にしていこう！」

「へっ、腕がなるぜ！」

木崎がそう言って拳を握る。試合が決まる前までは通夜のような雰囲気の彼らだったが、ほとんどの者は、ここまで来ればやるしかないと思っ切れることができていた様子だった。

そのほとんどに入って居ない人物はといえば、やはりこの男だ。

「……ほ、ほんとうにやるのかい？ まだ、棄権も間に合うんじゃないかな……」

「いつまで言っている」

嫌な汗を垂らしながら震える太田を、靴木が嗜める。彼だけは、常にこの調子だった。

「や、やっぱり直前になると緊張します……大丈夫でしょうか」

「大丈夫だよ！ センパイたちがついてるからね！」

不安そうに俯く久良島の肩を三刀屋が安心させるように優しく叩く。この試合でデビューを飾る選手も憲戸中には多い。後ろ向きになるのも仕方ないだろう。

だからこそ、伊槌は立ち上がった。

「俺が必ず点を決める」

その言葉に、一瞬の静寂が訪れる。チャンスとばかりに伊槌が言葉を重ねた。

「勝つつもりで挑むぞ。相手が強いからとか言い訳にならない、最初から勝てると思っていない試合ほど、つまらない試合はない」

その言葉に、ホープがピクリと反応する。伊槌の中には、彼女に新しいサッカーの楽しみを知ってほしいという思いがあった。

「そうだね……頑張ろう！」

『おおっ！』

「よし、行っていい！」

全員で声を出し、闘志を高める。そして、月並の言葉とともにスターティングメンバー達がピッチに散らばり、センターサークルで整列を始めた。青森の選手たちも、テキパキと移動している。その誰もが、蓮水のような燃える目をしている。俄然、やる気が湧いてきた。伊槌がふと横を見る。様崎がいた。確かに様崎なのだが、その顔は普段からは想像できないほど不機嫌そうに見えた。

少し前から、気づいていた。みんなの前ではどうにか繕っているものの、視界に青森附属の生徒や校舎が映るたびに彼女は機嫌を損ねている。何かがありそうだが、彼女のプライベートに踏み込む勇氣も名分も、今の伊槌は持ち合わせていない。

「これより、青森附属中学対、憲戸中学の練習試合を始めます！ 20分ハーフ、交代枠は制限無し！」

22名が並び終えたことを確認した主審がそう宣言し、終わりとともに憲戸が青森の選手たちの列に歩み寄って行き、歩きながら握手を交わす。

伊槌と鎌野の目が合う。それだけで、お互いの戦意が汲み取れた。お願ひしますと言いつつ握りながら握手をしていると、ふと、こんな声が伊槌の耳に入った。

「久しぶりだな」

誰の声なのかは分からないし、本当に聞こえたのかも分からない。1つ確かなことは。

様崎咲夜の顔が、いつそ苦しげなほどに無表情だったことだけだ。

憲戸中スターティングメンバー（4―3―3）

――木崎――

――明風――伊槌――

――無籐――梵場――

――靴木――

三刀屋――山本――

――様崎――太田――

――久良島――

体力に不安のある橘花と、まだ初心者の宵闇がベンチに入る。経験者の明風はともかく、久良島も初心者だが、GK不在のためスクランブルで出場することと相なった。

おそらく、これが現時点でのペストメンバー。そして、青森に一泡吹かせるための初見殺しも用意している。彼らの間に、心地よい緊張が走って居た。

青森附属中スターティングメンバー（4―2―3―1）

――蓮水――

奇崎――鎌野――鉢鐘

――桜庭――氷治――

童部留――薄利――

――長宗我部――毛利――

――獅子豪――

青森は、プレーメーカーの鎌野をトップ下に据えた4―2―3―1の形だった。攻守に人数をかけられる、合理的なフォーメーション。やはり一筋縄では行かなそうだった。

キックオフは憲戸から。伊槌が木崎と並んでセンターサークルに待機し、キックオフの笛を待つ。

勝負は最初の5分。そこで確実に仕留める。

「かましてやろうぜ！」

「ああ……勝つのは俺たちだ」

改めて前を見据えた瞬間、空気を切り裂くような笛の音が木霊する。試合開始の合図。

伊槌が木崎にパスを送り、そのまま無籐へバックパス。伊槌はハーフラインを少し超えた右サイドに走り込んでいく。

「残念だけど、通せないよ」

サイドハーフの奇崎が進路を塞いでくる。だがその言葉に、あくまで伊槌は余裕を見せて答える。

「まだ通らないさ」

笑って、振り返り無籐に視線をやる。

彼はパスを受けた瞬間に迷わずデイフェンスラインまでボールを下げた。パスを受けた様崎が、今度はGKに返す。

「……慎重ですね」

最前線にポジジョンをとる蓮水が、ボールを持った久良島にプレスをかけながらそうごちる。プレッシャーに慣れていない久良島は慌ててパスコースを探し始める。

「わ……………！ えっ、えつと……………」

「杏菜、こっちー！」

ホープの声に導かれ、蓮水に奪われる前にパスを送る。見送った蓮水は、背後にちよいちよいと手を振って、プレスのコーチングを出していた。

「僕が行くしかないか……………守備は柄じゃないんだけどね」

伊槌のマークを捨てた奇崎がホープに、言葉とは裏腹に猛烈なプレッシャーをかける。その動きに連動して、サイドバックが伊槌のマークに改めてついた。

だが、ホープは慌てず横パスを太田に渡す。彼も長くボールを持たず、様崎に横パス。その動きは、青森附属の面々にはひどく消極的に思えた。

「少し慎重すぎなんじゃないっすかつ、と」

鎌野も上がってプレスをかけてくる。青森附属はボランチの面々もハーフラインを超えた前がかりのポジジョンを取っていた。

軽口を叩きながらも、ボールに対してしっかりアタックしてくる鎌野。だが、DFでありながらチーム随一の技術を持つこの少女の前では、その程度のチェックはノンプレッシャーとなんら変わらない。

「こっちも事情があるのっ！ リブバインドー！」

「うおっ？」

鎌野がボールを奪おうと足を伸ばした瞬間、様崎の体が浮いた。比喩ではなく、ボールごと物理的に、無重力にでもなったかのように空を舞う彼女が鎌野の頭上を素通りする。

称賛するように鎌野が笑みを浮かべた。

「流石っすね」

その言葉に、様崎が少し表情を歪めたが——それはそれとも言わんばかりに、手を振って前線へコーチングを送り、パスモーションに入る。

「戦術通りにー！ 鳴哉くん！」

やわらかい軌道のロングパスが伊槌の足元に入る。素晴らしい技術でそれをトラップした伊槌だが、マークについていた少女が素早くプレスをかけてくる。

「通すわけないしー！」

「……はっ」

後ろで回し、青森の陣形を前がかりに。そしてディフェンスラインから、右サイドの伊槌へロングパス。DFのチェック。何から何まで

「計画通りだ！ ホープ！」

「んなっ」

サイドバックを背負った伊槌が、軽くボールを落とす。そのボールに、とんでもないスピードを持ってホープが突っ込んできていた。

「よしっ！ やるわよ！」

ボールを持ち、ドリブルに入ってもホープのスピードは落ちない。青森の選手達ですら目を疑うようなスピードを持って右サイドを切り裂いていく。

だが、彼らもやられっぱなしではない。ホープの前に、壁のような雰囲気醸すキャプテンがプレッシャーをかけてくる。

「童部留！ そのまま戻ってこい、挟んで取るぞ！」

「はいー！」

青森附属のキャプテン——長宗我部は、あくまで一定の距離を保ち、サイドバックの童部留の戻りを待っている。

ロングパスからの攻撃と、ホープのスピードに誰もついて来れていないために憲戸の選手は敵陣にいない。彼女が孤立していることを勘定に入れて、最も確実であろう可能性を瞬時に弾き出したそのクレバーさに舌を巻きつつ、ホープは笑みを抑えられなかった。

「追いついた、先輩！」

「今だホープ！」

その声は同時に放たれた。童部留がホープに背後からアタックするや否や、彼女は迷いなく斜め後ろのスペースにパスを出した。一瞬動きを止めた2人の守備陣だが、童部留が来たことでフリーになっていたのであろうその男の存在を認め、長宗我部がボールに走り寄る。

大外をホープの後ろを、少し中のポジションで猛追していた伊槌に、ボールが入る。右サイドの攻撃、完璧に策がはまっていた。

「よし……！」

青森の守備陣が慌ただしくなる。打てる位置でボールを持った伊槌を脅威と認識し、もう1人のセンターバックである毛利もいつでもシュートブロックに入れる位置へスライドしてきた。

「打たせねえぞ！」

「……！ 毛利、来るな！」

だが、故に空く致命的なスペース。

サイドバックとセンターバックの間に来た、広大なスペースに、木崎爆音は走り込んでいた。

「よっしゃあああ！ 出せー！」

『ロングパスが出たらゴール前に走れ』。彼に与えられたのはそんな雑な指示だが、それが功を奏している。

これが、前日の練習で磨いた必殺の初見殺し。ロングパスから右サイドをコンビネーションで挟り、釣られたDFのスペースを木崎に仕留めさせる。怖いくらいに戦術が嵌まった爽快感に、笑みを浮かべながら伊槌がスルーパスを出した。

「仕留めろ、木崎！」

柔らかいパスに、木崎が獰猛に笑う。

「っしやあ！ 俺が憲戸中のストライカーだっ！ グレネード、ショットオオオ！」

強く踏み込んだ木崎の足元から、赤いエネルギーを纏ったシュートが打ち出された。初歩の必殺技ではあるが、それでも必殺シュート。パワーに優れる木崎の全力は、並のキーパーでは正面から受け止めることはできないだろう。

そう、並のキーパーであるなら。

「ぬおおっ！」

その男は、グレネードショットに正面からぶつかり、胸に抱えて押さえ込む。通常であるならショットのパワーで後ずさっていくはずだが、彼はその場で不動を貫いていた。

逆に、ショットのパワーがだんだんと失われていくのが遠目からでもわかる。押されているのだ、ノーマルキャッチに対し、渾身の必殺ショットが。

「マジかよ……」

誰の言葉だったろうか。それは分からないが、目の前の光景はそれほど信じ難いものだ。

「ハッハッハ！ 良いショットだった！ だが、小生の方が一枚上手であつたな！」

やがてその手の中で、グレネードショットは完全に動きを止め、完璧に抑えられた。GKの獅子豪は、対してダメージを負った様子もなく、呵々大笑して余裕の表情だ。

「くっそー！ 強すぎだろー！」

木崎が頭を押さえて叫ぶ。伊槌も、予想以上の実力差に流石に冷や汗をかいていた。

だが今は試合中だ。悔しんでいる余裕も、慄いている余裕もない。それを忘れたものは、手痛い思いをする。

そう、こんな風に――

「ゆけえ！ 鎌野オー！」

「ははっ、ここでも声が聞こえるっすよ」

獅子豪の大声を、鎌野が小声で茶化す。そんな和やかなやりとりをしながら、鋭いパントキックが彼に送られ、難なく受け止めてみせた。

「あ……」

1発でハーフラインを超え、打とうと思えば打てる距離。伊槌のほうけた意識は一瞬で無理に引き上げられた。

「か、カウンター警戒しろー！」

「もう遅えっすよ」

その言葉とともに、DFが駆け寄る間もなく辺りに夜のような暗闇が落ちる。その闇の中からボールだけが天空に浮き上がり、鎌野も一瞬遅れて飛び上がった。

空中で回転し、オーバーヘッドの形でボールを捉える。その足の軌道は光の筋となり、どこか三日月を連想させた。

「デスサイズオブムーン」

無感情にも聞こえる鎌野の声とともに、鋭いシュートが打ち出される。突然のミドルシュートにDFは対応できておらず、そのシュートはなんの障害もなく久良島に襲い掛かろうとしていた。

「まずいネ……！」

「クソッ、止めろお前らア！」

「……っ、止めないと……！」

三刀屋が駆け寄り、無籐が声を荒らげるも、シュートは止まらない。久良島が決死の思いで腕を振りかぶり、全力のパンチングで迎撃を試みる。

だが――

「っ……！ きゃあ！」

オブラートを突き破るように、それが当然であるように、なんの抵抗もなく、デスサイズオブムーンのパワーが久良島の腕を弾いた。一瞬の拮抗すら生まれず、シュートが強くゴールネットに突き刺さる。

重要だった『最初の5分』で示されたのは、純然たる実力差。こちらのシュートは通用せず、あちらのシュートは防御不可能の次元にある。

「こんな……ことって……」

太田が、さらに顔を青ざめさせた。様崎ですら下を向き、無籐も爪が突き刺さるほど拳を握り込んでいる。

ユニフォームを引つ張って、鎌野が軽く汗を拭いた。ゴールに喜ぶ素振りも見せず、寄ってきた味方とハイタッチするだけの軽い労い。まるでゴールなど当然であるかのような振る舞いに、伊槌が唇を噛む。

ふと、鎌野がこちらを向いた。

先ほどまでのぼんやりした表情に、その瞬間笑みが浮かぶ。伊槌の背中に、ぞくりと何かが走った。

ちよいちよいと指を動かして、挑発するように、導くように、唇を動かして、こう言っていた。

『終わりじゃないだろう?』

その言葉に、伊槌の胸についた灯火が、さらに大きくなったかのような感覚を覚える。實力を見せつけられてなお、勝ちたい思いは消えていなかった。

「取り返すぞ! 下を向くな!」

手を叩いて鼓舞する。それでも、ほとんどの人間は顔を上げない。舌打ちをしそうになるが、ぐっと押さえる。

(俺だ……)

伊槌の中に、使命感のような思いが去来する。

(俺が点を取る……!)

決意を新たに、伊槌は再び笛とともにボールを蹴り出した。全ては、自分のゴールのために。

GOAL!!?

4分 鎌野樹

アシスト：獅子豪仁

憲戸 0—1 青森附属

6話：恐るるに足らず

「戦術は変えねえ！ 効いてるんだ、貫き通すぞ！」

ファーストプレーと同じように木崎からのバックパスを受け取った無籐が叫ぶようにそう言い放つ。その言葉に、開始早々の失点で浮き足立っていた憲戸の面々の思考が強制的に引き締められ、今やるべきことを思い出す。

「無籐！」

「キャプテンに渡せ！」

靴木の要求に、無籐がさらなる指示を飛ばしながら応える。彼はそれに従って、すぐさまバックパスを送った。

「蓮水、4番へのコースカット。アタックは俺が行くつす」

「りょーかいです。リユウは先輩のサポートしてあげてください」

「おー！ わかったぞ！」

青森の面子も、憲戸の戦術が見えたことで明確に連携した守備を行始める。ボランチの選手たちは縦関係に並び攻守のバランスを取り、サイドバックは両ウイングにピツタリと張り付く。露骨なほどにロングボールを警戒していた。

「キャプテン！」

「……！」

それでも、伊槌はロングボールを受けようとする。マークにつく童部留を片腕で抑え、様崎に出せと要求。

様崎もそれが最善だと判断したのか、鎌野のプレッシャーが来る前に素早くロングキックのモーションに移った。

「いけえ！」

最終ラインから右サイドの伊槌へ狙い澄ましたパスが出される。

「……っ！」

だが、そのロングボールは少し精度を欠いていた。背負っている伊槌の足元へ届けるべきそのボールは、このままでは頭上を抜け奪われてしまう。

様崎も失点に動揺しているのか、それとも、この試合が始まってか

ら続いている妙な感覚に囚われているのか、考えている暇はなかった。

「よし、もらったー！」

「させるかあー！」

スペースに落ちるボールを回収するため、一瞬伊槌へのマークを緩める童部留。しかし、その一瞬がこの男に自由を与えた。

伊槌が大きく天を舞う。深くしゃがみ込んで渾身の跳躍を魅せ、ただ中空に漂うボールを、空中で胸トラップしてみせた。

試合前、蓮水に見せられたスーパープレー。意趣返しとばかりに見せつけ、凜猛に笑う。

「嘘っ!? でも、もうやらせないしー！」

「ホープ上がれ! ここまで収め——」

伊槌のその言葉は、言い切る前に途切れる。背後からかかった猛烈な圧力に、全身の空気を全て吐かされそうになったためだ。予想以上のパワーに、伊槌がたたらを踏む。

「ぐっ……!? なんつうパワーだ……!」

「ふんっ、『青森の狂犬』と呼ばれたウチから、そう何度も逃げられると思うなっ!」

犬が吠え声のように鋭く言い放ち、再びタックルを仕掛けてくる。小柄な体を生かした重心の低いタックルは的確に体幹を揺さぶり、それに付随して太田すら凌駕するパワーに伊槌が危機感を覚える。

「ヤバい、取られる……!」

体勢を崩され、体でボールを隠してなんとかボールを保持する伊槌の視界の端に、救いの糸のように、その特徴的なアフロヘアが過った。

伊槌は咄嗟にホープへさらに上がるよう指示し、その男にボールを渡す。

「二の矢だ! 行け、梵場ア!」

真横を疾風が抜けた伊槌の強すぎるパスを、梵場がなんとか抑える。そして不敵に笑みを浮かべ、ドリブルで持ち上がり始めた。

「フツ、負け戦するのは柄じゃないが、君の想いに感じるものもあつ

た」

ニヒルにサングラスをクイツと持ち上げ、ミュージカルの登場人物のように仰々しく声を上げる。

「その想いに免じて、僕のテクニックを披露しよう！」

パスを出した伊槌さえ置き去りにして、1人盛り上がる梵場の前に青玉のような蒼い瞳を輝かせて、ボランチの一角を担う少女が立ち塞がる。

「お楽しみ中申し訳ないけど、邪魔させてもらおうよ」

「おおっと、これは可憐なレディ。しかし私は行かねばならないのです、とある腐れ縁の友人のために！」

芝居がかった動きと歯の浮くようなセリフにも、目の前の少女、桜庭旋風は狼狽えない。間延びした口調とは裏腹に、虎視眈々とチャンスを窺う。

しかし、そんな彼女の唯一の誤算。それは、梵場も、その見た目に反した俊敏なドリブラーであったということを見透かせないでいたことだ。

「最後に私と1つの逢瀬を。シャルウイダンス！」

「ん〜？」

梵場が桜庭の手を取り、湖を舞う白鳥のように鮮やかに、流麗に踊りだす。

その姿はまるで氷の上の美女と野獣。空を舞う天使と墮天使の共演。2人の容姿のアンマッチさが、謎の世界観を生んでいた。

最後に、ファイギュアスケートのフィニッシュの様に桜庭をその場で回転させ、アディオスと最後までキザなセリフを吐いて梵場が彼女を抜き去った。

「あらく、捨てられちゃった」

軽口を叩きながらも、復帰すればすぐさま彼を追い始める。その顔には、目の前の彼らをまだどこか侮っていた、自分への怒りが浮かんでいた。

「よし、梵場！ 散らせ！」

「こつち空いてるわ！」

サイドハーフの奇崎のプレスバックが間に合っていない。ホープがオーバーラップを止めなかったことで右サイドで数的優位が生まれており、生かさない手はないとばかりに梵場の名を呼ぶ。

だが、彼はこちらをちらりと見てなお、ドリブルを選択した。

「僕のステージは終わっていない！」

「……チツ」

梵場にはスタンドプレーを楽しむ悪癖があった。以前の練習でも、決定的な場面にならなければパスを寄越さなかったことを思い出す。仕方ないとばかりに舌打ちをし、スペースに走り込みどうかパスを引き出そうとする。

だが、梵場から目を離そうとした瞬間、猛烈な勢いでカバーに入る男の姿がその眼に映った。

「ドリブルはお上手ですが判断が良くないようですねえ。……フローズンステイルツ！」

「ぐわっ!？」

もう1人のボランチ、氷治ひじきよし聖が氷を纏いながらの強烈なスライディングを真横から食らわせる。荒々しいタックルに梵場が吹き飛ばされ、呆気なくボールを失う。

「あまり調子に乗らないでいただきましょう」

氷治が嘲るように言い放つ。ボールを奪い、ゲーム全体が慌ただしく切り替わるこの瞬間は、ピッチの誰もが一瞬気を取られ足を止めるものだ。だが、この男は違った。

「こつちのセリフだ！」

「なっ……!？」

右ウイングの伊槌が、氷治に猛烈なプレスをかける。彼が梵場に走り寄るのを確認した時から奪い返すためのトランジションを始めていたのだ。

ボールと氷治の間に体を滑り込ませ、コントロール下から離す。パワーでは劣っているために、技術的にボールを奪おうと試みる。

「小癩な……!？」

氷治がより強いタックルをかますが、伊槌は逆にその力を利用し、

前方に加速してみせ、完全に振り払うことに成功した。

「くっ、すいません！」

「伊槌先輩！ こっち！」

左ウイングの明風が手をあげてパスを要求してくるが、サイドバツクの薄利はくりの距離感が絶妙で、普通のパスはカットされてしまうだろう。伊槌に非凡なパスを出すセンスはない。

持ち上がる伊槌に、DFの毛利がアタックする。走り続けていたホープはフリーだ。背後から無籐も上がってきているだろう。選択肢は無数にある。

（俺が……）

だが、伊槌鳴哉が、この局面で、この選択肢を取らないことは、初めからあり得なかつた。

「俺が点を取るッ！」

また距離はある。だが、伊槌は毛利にチェックされる前にシュートを選択した。軽く右に持ち出し、左足を地面に差し込んでコーナーを打ち抜くコントロールショット。少しブレたが、許容範囲だ。

「打ってきただと！」

流石に予想外だったのか、デイフェンスラインに残っていたもう一人のDFである長宗我部も反応しきれない。

「ぬうっ」

獅子豪も毛利が壁になって一瞬反応が遅れる。右コーナーに飛んでいく狙いすましたシュートは——小気味いい音と共に、ポストに弾かれ跳ね返った。

「クソッ！」

ルーズボールは獅子豪が抑える。降って湧いた千載一遇のチャンスを逃した伊槌は、頭を振って舌を打つ。背後からは無籐の声と拍手が聞こえた。

「いいトライだア！ 切り替えろ！」

「ああ、次があるぜ！」

「……ああ！」

木崎の言葉も受けて、汗を拭って伊槌が前を見る。既に獅子豪は

ボールを出しており、サイドバックの薄利がボールを持っていた。

「分かっているな！ 守備は左サイドだ！」

「はいっ！」

靴木の一声に明風が答える。その言葉通り、右サイドのポジションを取るホープ、伊槌は露骨に左サイドに寄っていた。右サイドにロングボールを出されれば一転してピンチだが、明風がボールホルダーの薄利へ激しくチェックに行くことでそれを許さない。

（守備の基本は同サイド……狭い局面で数的有利を取れば、俺たちでも奪える！）

伊槌の思考の通り、明風の果敢なアタックを受ける薄利は、少し戸惑った様子だった。

「うーん、やるね！ ちよつと困っちゃったかな！」

「よし、木崎先輩、挟んでください！」

「薄利、出せ！」

様々な声がピッチ上に飛び交う。薄利は指示の通り毛利にパスをつけるが、その毛利にも木崎が素早くチェックに行く。1日練習しただけの急拵えの戦術だったが、中々様になっていた。

「チツ、連携できてんな……獅子豪、作り直せ！」

荒々しい口調で、されども相手の受け取りやすい優しいパスを返しながら獅子豪に指示する毛利。だが、そのパスにも左に寄っていた伊槌が鋭くプレッシャーを与える。

「むっ、小生にも来るか！ ならば！」

伊槌のプレスを確認した獅子豪が間髪入れずにロングパスを選択する。狙いは先ほどと同じくトップ下の鎌野を狙ったボール。

だが、1度見せられたそのパスは当然織り込み済み。待っていたと言わんばかりに、その男が動き出す。

「何度も同じ手を食うかア！」

「うお……」

落下地点に入っていた鎌野の前に体を割り込ませ、素早く戻っていた無籐がボールを奪う。線の細い鎌野は、やはりその見た目通りパワーはあまり優れていないようだった。

「伊槌イ！ 決めろオ！」

「任せとけ……！」

ロングパスで少し気の抜けた青森のディフェンスラインを見逃さず、すかさず最前線へのパスを選択する無籐に、早い切り替えで反応する伊槌。だが、そう簡単に裏をかけるほど、このチームは甘くない。パスをトラップした瞬間に、センターバックの長宗我部が鋭くプレスをかける。一瞬の減速が仇となり、簡単に距離を詰められてしまった。

「くっ……」

「好きにさせるものか」

城壁のような威圧感を放ち鎮座する長宗我部に、流石に伊槌も腰が引ける。

しかし、敵陣で悠長にプレーを考えている暇はない。そして、ゴール前でシュートを打たないなど、FWとして失格だ。

「いくぞッー」

先ほどと同じようにボールを持ち出し、シュートの体勢に入る。警戒していた長宗我部は、流麗な動作でシュートコースを塞ぎにかかった。

「芸がないぞー」

長宗我部のプレッシャーにも、モーションに入った伊槌は怖気付かない。ボールに、長宗我部の足が伸びる。奪われるその瞬間、伊槌はシュートモーションを解除し、軸足の後ろに通してディフェンスを置き去りにした。

様崎との1vs1でも見せた、伊槌の得意技であるクライフターン。恐ろしいほどの練度を持つその技は、日本最高峰のDFである長宗我部さえ出し抜いて見せた。

（打てるー）

確信して、軸足を入れ替えシュートを狙う。利き足ではない左で打つことになるが、素早いカウンターの影響で獅子豪のポジションも整っていない。打てば入る。

（俺が、俺が、俺が――）

振り抜こうとするたび、マドリードでの日々をいまだに思い出す。振り払うにはゴールしかない、伊槌には確信すらあった。

だから、ゴールがしたい。チームのためではなく、自分のためだけに、伊槌鳴哉のためだけに――

「――甘いぞ」

瞬間、激しい衝撃が伊槌の体を吹き飛ばし、少し遅れて背中をしたたかに叩きつける。気づいた時には真っ青な空が視界一面に広がっていた。

「がっ……!?!」

何をされたのか、すぐには理解できなかった。だが、ピッチに倒れる自分と、しつかりと屹立する岩壁のような長宗我部を見て、否応にも、自分がこの男に止められたのだと理解せざるを得なかった。

「走れ童部留!」

「はいっ!」

状況を認識してもなお混乱する伊槌を置いて、長宗我部から左サイドバックの童部留にパスが通る。ホープは非常に高い位置をとっており、パスを妨害することは叶わず、フリーでボールを受けられてしまう。

「くっ、まずい……」

伊槌は倒れ、ホープは置き去り。ガラ空きの右サイドをドリブル突破されては敵わないとばかりに、靴木がアンカーのポジションを離れてカバーに行く。

しかし、もはや憲戸のフォーメーションは個人個人の判断によるポジションチェンジ程度では穴を埋めきれないほど、完全に崩壊していた。

「ちっ……気に入らないけどやっぱいいポジションにいるし……鎌野先輩!」

靴木が動いたことで空く、ディフェンスラインの前の致命的なスペースに、その男は即座にポジションを取っていた。無籐が、梵場が埋める間もなく、童部留からエースへのパスは通る。

「よし、いい子っすね」

「まずい、こいつを自由にさせんなア！」

「う、や、やらなくちゃ……！」

鎌野がバイタルエリアで前を向く。それは青森の攻撃の基本戦術であり、最強の戦略だ。1度やられている危機感から、無籐が、そしてデイフェンスラインからセンターバックの太田も出てきて鎌野の自由を奪おうとする。

しかし、それは最善の手ではない。むしろ最悪手とさえ言ってもよかった。

「……」

「りよーかいつす」

崩れたラインに張り付く少女が手をあげる。鎌野は間接視野でそれを確認し、がむしやらに向かってくる太田を初歩的なボディフェイントでかわしてキラーパスを放った。

「あつ……」

「決めてこいつす」

地を切り裂くようなパスが、センターフォワードの蓮水涼の足元にピタツと収まる。様崎のスライドは間に合わず、ゴール前でドリリー。久良島が咄嗟に構えるが、日本最高峰のFWのシユートを真正面から止めろというのは酷だろう。

「本気で行きますよ」

だが、相手が初心者であれど、情けをかけて手を抜く輩はこのチームに存在しない。絶対の勝者は、何事にも驕らないものだ。

蓮水の右足に、紐状の流水が絡みつく。よく見れば、それは蛇を象っており、紐の先端からはチロチロと細い水が見え隠れしている。

「今度こそ……！」

強い覇気を漂わせるその必殺技を見ても、久良島は狼狽えない。むしろ、基礎通り腰を落として真正面から迎え打つとばかりに気合を迸らせていた。

蓮水が、見逃しそうなほど薄く笑みを浮かべる。面白いとも言えるかのよう。

「決めさせてもらいます。ハイドロバイパー」

右足を鞭のように打ちつけ、強烈なボレーシュートが放たれる。低いテンションと反比例するような、絶大なパワーを内包したボールが、蛇のようにうねりながらゴールへと襲いかかってくる。

「ッ！ はあッ！」

惑わすような軌道のボールに翻弄されながらも、なんとか捉え、体重を乗せたパンチングで弾き返そうとする。

だが、やはりものが違う。くねるような軌道の分貫通力はデスサイズオブムーンより低いのか、拮抗する時間は生まれるが、押し切られるのも時間の問題と分かるほどのパワー。現に、踏ん張る足は徐々に、徐々にゴールラインに押し込まれている。

「負け、ないッ……！」

「……やりますね」

それでも、久良島は食らいつこうとさらに全身に力を入れる。その瞬間、久良島の腕を、黒いオーラが覆った気がした。

「あれは……」

気づいたのは様崎一人。それほどに薄く、微弱なオーラだ。

「う……きやあ!」

だが、その黒も瞬きの間に雲散霧消し、久良島の腕を弾いて、再びシュートが突き刺さった。

GOAL!!?

7分 蓮水涼

アシスト：鎌野樹

憲戸 0—2 青森附属

「アンナ、大丈夫!」

吹き飛ばされた久良島の安否を心配し、三刀屋が飛ぶように駆け寄ってくる。拳を強く握っており、いくら鋭い攻めだったとはいえ、

シュートブロック技を持つ自分がデイフェンスに参加できなかったことを悔やんでいる様子だった。

「大丈夫……です。止められなくてごめんなさい……」

久良島は差し出された手を掴んで立ち上がりつつ、大丈夫だと伝える。沈んだ面持ちで、ただでさえ髪に隠された目を、悔しそうに伏せていた。

慌てた様子で三刀屋が何か言葉をかけようとする。だが、顔を上げた久良島の様子に、言葉を紡ぐことができなかった。

「でも、次はいけます……」

拳を握って、何かを確認するように三刀屋と視線を合わせる。

「今のシュートで、『何か』が掴めました……!」

か細く、控えめな彼女の声。だが、その中に鋼のように硬い芯が見え隠れしている。

「止めます……! 絶対……!」

前髪の隙間から、陽の光を浴びた、美しく輝く翡翠が覗いていた。「……………」

様崎咲夜は、その輝きを、どこかくすんだ瞳で、悲痛そうに見つめていた。

(クソ……! 俺のロストからだ……!)

伊槌は激しく苛立っていた。試合開始から間もない2失点もそうだが、その失点の両方に自分が関わっていることが実に腹立たしい。

決定機逸からのカウンター、そしてロストからの速攻。やはり青森附属は素晴らしいチームだ。対比するように、伊槌のプレーは精彩を欠いている。

並々ならぬ様子の子の伊槌に、どこ吹く風と言わんばかりに木崎がいつも通りの明るい口調で声をかけてくる。

「まだ10分も経ってねえんだ！俺たちで取り返そうぜ！」

「……もちろんだ」

その言葉に、伊槌も気を取り直す。

「いくぞー！」

リスタートとともに、伊槌がバックパスを通し、木崎とともにロングパスのターゲットとなるべくDFを背負ったポジションを取る。

「上がれホープ！」

「分かったわー！」

いつも通り、無籐、靴木、様崎とバックパスを経由していき、ロングボールの体勢を整える。青森のプレッシャーは緩い。デイフェンスラインで回収しようと言う魂胆なのだろうか。なんであれ、憲戸にはこの戦術しか残されていない。

「出せー！」

「取ってやるー！」

伊槌が手をあげてパスを要求する。だが――

「……みとちゃん」

「え、ワタシ？」

様崎が選んだのは、無意味な横パス。その選択に、前線のプレイヤーたちのほとんどが目を剥く。

「何やってんだキャプテン……！クソ、出せ三刀屋！」

「……早々の2失点で折れましたかね？」

氷治のつぶやきをよそに、無籐が慌てた様子でパスを要求する。その瞬間、伊槌には見えた。

（っ、いけるー！）

「!? どこ行く気だし……！」

童部留を抑えながら、斜めに走り出す。ゴールへ一直線の軌道を描きながら、割れんばかりの声をあげて、無籐に自分の存在を認めさせる。

「縦パス！ 来いー！」

「ッ！」

木崎を追い越し、マークの長宗我部たちも置き去りにして裏へと抜

ける伊槌。デイフェンスラインの面々は反応できておらず、完璧に抜けさせた。

だが、戦術にない動きであった為に、無籐も反応できずパスのタイミングを失ってしまう。オフサイドラインに入っていることを確認した伊槌が舌打ちしてポジションを取り直す。

「ダメか……!」

「くっ、靴木イ!」

氷治に捕まえられそうになった無籐が、咄嗟にサポートに来た靴木へパスをする。

「今度は通さないよ〜?」

「厄介な……」

だが、そこにも桜庭が素早く顔を出し自由を与えない。あくまで靴木はいつも通りの冷静なスタンスを崩さないが、その額には冷や汗が浮かんでいる。流星に、2度目があるとは思っていないのだろう。

しかし、その横を流星のように駆け抜けていく1つの疾風が吹き抜ける。それが何かを知っている靴木は、ニヒルに笑みを浮かべ、その軌道上に落とすように緩やかなパスを入れる。

「いいタイミングだ、行けホープ!」

「任せてください!」

マークについていた奇崎を単純なスピードだけで振り切っていたホープが、風を切りながらパスを受ける。伊槌のランニングで中央にDFが寄っており、ガラ空きのサイドを気持ちよく駆け抜ける。

「ウチが行きます!」

だが、DF陣が即座に連携し、全体が右サイド寄って、サイドバックの童部留がしっかりとチャレンジに行く。中央には木崎と伊槌が陣取っているが、毛利・長宗我部のセンターバックコンビに挟まれており身動きが取れない。

プレスを受けながらも、ホープは慌てない。むしろ、笑ってさえいる。

「舐められたものじゃない……!」

ぐっ、と。

大地をより強く踏み締める。体を低く、矢のように疾る自分をイメージする。

「——フッ！」

刹那、突風が突き抜ける。

童部留のマークを千切るように剥がし、目にも止まらぬスピードで、ホープが一气呵成にサイドを貫いた。

「早っ……っ！」

「中央を固めろ！」

長宗我部が努めて冷静な態度でディフェンスラインを統率する。予想以上のプレーに度肝を抜かれているだろうに、その顔には焦りなど全く見えなかった。

「ホープッ、こっちだ！」

木崎がゴール前に突っ込んでいく。センターバック2人がその動きに気を取られた瞬間、伊槌がニアサイドに顔を出す。

「空いてる……っ！」

「させないっ！」

だが、ゴール前でフリーになりかけた伊槌を、剥がされた童部留が抜け目なく捕まえる。伊槌も負けじと体を前に入れ、熾烈なポジション争いを演じ始めた。

あくまで伊槌は手をあげ、パスを要求する。その目は暗く光っており、ゴールへの異常なまでの執念が見え隠れしていた。

中央に寄ったDF達。ホープがキックのモーションに入る。

「——輝夜！」

伊槌の、そして木崎の頭上すら超えていくクロスボール。そのクロスは、遠いサイドから詰めてきていた明風の足元に収まった。

「よしっ、打てる……っ！」

「させないよ！」

当然、背後から明風のサイドを守る薄利が体を寄せてボールを奪いにチェックにくる。寄せられた明風は、体をうまく使い、足元の細かいテクニックを使ってギリギリのところまでボールをキープする。

「うっ、まずい……っ！」

うまくボールを持ってているが、薄利のこのプレスは、ボールを持たせている。確実に奪うために、何かを待っているのだと明風は理解した。

そしてその予感どおり、1人の男が挟み込むように突っ込んでくる。

「ナイスだ薄利！ 奪えるッ！」

2年生DFの毛利が猛烈な勢いでボール奪取に来る。ただでさえ薄利に動きを制限されている明風は、流石にキャパオーバーだった。

「ふ、2人は無理ー！」

もう無理矢理でも打つしかない——そう考えた明風だが、ふと、彼女の視界に新たな選択肢が現れる。毛利が動いたことで空いたスペース、そこにあの男が現れた。

これこそが最も得点に繋がるプレーだと直感した明風が、なんとかパスを繰り出した。

「いけえ！ 先輩ー！」

「ああ、なんだ!?!」

突然のパスに、毛利が虚をつかれて背後を振り返る。

そこには、白い髪を振り乱し、獣のような瞳でゴールを見据える、狩人が走り込んでいた。

低弾道のクロスに合わせ、目にも止まらぬスピードで右足を引き戻してボールの下を蹴り抜き、その場で回転させる。そして、引いた足の勢いをバネに強烈なボレーを叩き込んだ。足と回転の摩擦によって発電し、眩い光がボールを覆う。

(……！ つくそー！)

伊槌鳴哉の代名詞とも言えるその必殺技——だが、やはり。伊槌の足は石像のように固まった。されど、打ち抜くしかない。ここで決めなければならぬ。

バランスを崩し、パワーがボールに伝わりきっていないそのシュートを、意地を打ち出した。

「打ち抜け……！ 電閃！」

雷鳴が至近距離からゴールを襲う。だが、その一瞬の時間に割り込

む影が1つ。キャプテン、そしてDFの長宗我部誠四朗ちようそかべせいしろうが、飛びつくようにキックブロックを挟んできた。技を出す余裕は無いと判断しての咄嗟のブロックに、判断力の高さを感じられる。

「くっ、流石に止められはしないか……。獅子豪、頼むぞ！」

「合点！」

長宗我部といえども、必殺技を止めることはできない。これ以上は無理だと判断し、獅子豪に声をかけ、彼も威勢良く返答する。

「はっはっは！　では小生のファイトをご覧いただこうか！」

そう言うと、力強く腰を落とす、両腕に赤黒いパワーを集結させる。腕をクロスさせた後、右腕にオーラを集中させ、厳かな装飾を持つ盾として顕現させた。

作り上げた盾を高々と点に掲げ、半身を下げ、ピッチが陥没するのでは無いかと錯覚するほどの力で踏み込み、電閃を正面から暑苦しい笑顔を持って睨みつけ、掲げた盾を、真っ向から叩きつけた。

「うおおお！　王家の盾エー！」

火花を散らしていると思うほど激しいパワーがぶつかり合う。だが、ブロックを受けた上に、そもそもフルパワーでは無い電閃を覆うオーラが、陽炎のように揺めき始める。

そして、瞬く間の拮抗の後。

王家の盾が弾け、獅子豪仁の腕に、完璧に静止したボールが鎮座していた。

「クソ……！」

「良いシュートだったぞ！　ラストパスも素晴らしかった！」

だが、と獅子豪が破顔する。

「今回も小生の方が上手だったようだな！　次も待っているぞ、リベンジ根性！」

獅子豪が闘志をみなぎらせながら、宣戦布告のように言い放つ。

待ってる、と言わんばかりの鋭い目を伊槌が返すと、獅子豪は緊張とかけ離れた笑顔で受け止めた。

「冗談じゃないし……」

冷や汗を垂らしながら童部留がぼやく。やはりこと男は要警戒だ

と、改めて猟犬のように鋭い視線で伊槌を睨みつけていた。

獅子豪がパントキックを前線に蹴り込む。同じ手を食わないとばかりに靴木が鎌野についていたが、それも読んでいたと言うように、今度のパスは右サイドハーフの奇崎に渡った。

「フフ、やつと僕の出番か」

口角を釣り上げ、滑らかにトラップを披露する。

しかし、その背後から、全速力で戻ってきたホープがタックルを食らわせようと突進してくる。

「行かせない！」

「おっと」

そのタックルを、軽い身のこなしで、闘牛士のようにひらりとかわす。

だが、かわされようとも素早く体勢を整え、ホープが奇崎と正面からマッチアップの形を作った。

「ははっ、やはり素晴らしいスピードだね」

「ふふん、言われなくても知ってるわよ！」

余裕綽々の態度で奇崎が手を叩いて称賛する。ホープも気を良くしたようにニヤリと笑うが、その立ち姿に隙は表われない。

ハイスピードで、しかし抜かれないように慎重な足取りでホープが距離を詰めていく。一筋縄では行かない守備に、奇崎が朗らかに笑う。

「いいディフェンスだね……けれど」

奇崎が怪しく、どこか劇のように微笑むと、その場で1回転してボールを踏み抜く。

瞬間、踏み抜かれたボールが無数のボールとなって奇崎の周りを衛星のように回転し始め、ホープの視覚と判断を迷わせる。

「うわっ、何これ!?!」

「お楽しみください、僕のショーを！ イリユージョンボール！」

仰々しい奇崎の語り口調を気にしている間もない。中空を漂うボールはホープの周りを過ぎ去っていき、奇崎が彼女の背後を取るとともに、分身したボールが1つに戻った。完璧に出し抜かれてしま

い、慌てて背中を追う。

「さて……今日の主演は……」

ホープのプレスバックを気にも留めず、チラリと奇崎がペナルティエリア内に視線を向ける。

センターバックは戻っているが、2人とも何処か上の空な様子でマークが中途半端だ。GKはいつでも来いとその構えが雄弁に語っている。

思考を巡らす奇崎の耳に、場違いなほど明るい声が耳朶を打った。ぴよこぴよこと跳ねるような小さな影が、好戦的な笑みを浮かべているのが目に写る。

「おーいー！ リューが空いてるぞー！」

「……そうだね、よし。今日の主演は君だ！」

奇崎が、ファーサイドに走り込んでいた鉢鐘はちがねりゆうひ粒閃に狙いを定める。

背後のホープを腕で抑え込んで、奇崎が全く意味のないバク転しながら、無駄に派手なパスを出す。

「ヤバい……！」

ホープがふと声を漏らす。

——その背後から、地獄の底から這い上がって来たかのような必死の形相で、ボールに体を投げ出す男が、いつの間にか現れていた。

「やらせるかア！」

「何っ」

その影は、FWの伊槌だった。先ほどまでゴール前にいたはずなのに、全速力で、一直線でこの場所に走り込んできていたのだ。流石の奇崎も度肝を抜かれる。

伊槌が決死の思いでカットしたボールは、軌道を変えてゴールラインを割る。コーナーキックだ。

「……ふむ、演目に邪魔が入ったがこれも面白いか……」

「ナイスカット伊槌！」

「……ああ、俺に任せとけ。俺がやってやる……！」

奇崎が口元を覆いながらブツブツと呟き始める。それを尻目に、スライディングの体勢で倒れ込んだ伊槌をホープが手を掴んで起き上

がらせていた。

ふと、ホープが伊槌の顔を覗き込む。

意外と整っているその顔は、汗に塗れ、髪は乱れて、どす黒い執念を瞳に宿している。並々ならぬ感情が、表情から溢れ出していた。

その顔はどこか危うい。何故だか分からないが、ホープはそう直感して、慌てた様子で、口を開く。

「い、伊槌ー！」

「……なんだ？」

錯覚だろうが、暗い声で伊槌がそう返す。だが、何も考えず声を出したホープは、挙動不審にえーとえーと、と言葉にならない言葉を出すだけだ。

怪訝そうに伊槌が眉を顰め、「何も無いなら行くぞ」と返そうとしたところで、ホープがふとこんなことを口走った。

「サッカーは楽しむものよー！」

「……？」

伊槌の顔がさらにしかめ面が変わる。ホープは気づかないのか、考えないようにしているのかはともかく、伊槌の様子を無視してさらに言葉をぶつける。

「とりあえず、それだけは忘れないで！ 守るわよー！」

「……………」

守備位置に走っていくホープを見て、伊槌も訝しげな表情を崩さないままファーポストに立って壁になる。キッカーは、鎌野樹だ。

その間、ホープの言葉がぐるぐると頭の中で渦巻いていた。

（楽しむだと……？）

何故か妙に苛立ちを覚える。

（この状況で……？ 2点差あるんだぞ、呑気してる場合かよ……！）

ポストをギリつと握りしめる。指が食い込みそうなほど強くだ。

（――俺がやるしか無い）

瞳の暗さが、深くなったような気がした。

鎌野がぼんやりとどんなボールを蹴ろうか、感じ始める。どんなボールが1番ゴールにつながりそうかを感じて捉える。

その時、伊槌の姿を目で捉えた。

「ああ……」

それを認めた瞬間、鎌野がどこか悲しそうな声をあげた。

手を挙げて中の人間に合図する。そして、挙げた手でちよいちよいと手招きをするかのような動作を見せた。

「ッー」

「えっ、何!?!」

瞬間、伊槌が持ち場を離れて一直線に鎌野へ向かっていく。手招きを受けて近づいていった童部留が目を剥いて振り返った。セオリー通りに、童部留へついていつていた三刀屋も驚いたようにそちらを見ている。

自分が奪う、自分がやるしか無い——。その思いに突き動かされ、体を倒して銃弾のように地を駆けているその時。

鎌野の口元が、『想定通り』と歪んだ気がした。

「ふっ」

「なッ……」

童部留を呼びつけながらも鎌野が選んだのは、ショートコーナーではなく普通のコーナーキック。ファーサイドに巻いて落ちていく、ゴールへ向かっていく素晴らしいボールだった。

いや、それだけでは無い——

「リユウが打つぞー!」

「やらせつかよオー!」

「……いや、このボール……」

クロスがゴールの中心あたりにたどり着いた時。

グンっと、何かに導かれるように、強く曲がった。

「あっ……!」

直前で気づいて、久良島が急いで飛びつく。だが、一步遅かった。先ほども、伊槌が立っていた場所。

ボールはファーサイドのポストに激突し、けたたましい金属音を立てながら、実にあつけなくゴールラインを破った。

「あ……」

動かなければ、入らなかった。

また自分の責任での失点に、伊槌が愕然とする。

「ちよつと、鎌野先輩！ ウチを呼んどいて無視ですか!？」

「あー、さーせん」

ふと、そんな言葉が耳に入って振り向く。

腰に手を当てて怒りを表現する童部留に、鎌野が悪びれた様子もなく軽い調子で頭を下げる。はたから見ても悪いだなんて全く思っていない様子だった。

「ま、あれが1番入りそうだったんすよ」

「……まあ、確かに入りましたけど。あいつが動かなかったらどうするつもりだったんですか」

その質問に、鎌野が子供に語りかけるような笑みを浮かべた。

「それは無いっすよ」

視線が、こちらを向いた気がする。

鎌野は、確かにこちらを見ているはずだ。なのに、何故か自分の姿が、彼の瞳に写っていない錯覚を覚える。

「周りが見えてない」

その言葉が、深く胸の内に突き刺さる。

聞きたくも無い言葉なのに、考えたこともないことなのに。正鶴を得ているような気がして、息が詰まった。

そして鎌野は、吐き捨てるようにつぶやいた。

「――恐るるに足らないやつすよ。ワンちゃんも攻めていいっすよ」

「ワンちゃんじゃないしー!」

ひらひらと手を振って自陣に帰る鎌野の背中を、野犬のようにガールとうめく童部留が見送る。

そんな兄妹のようなやりとりも、もう伊槌の耳には届いていなかった。

「恐るに、足りない……? 俺、は……」

ただただ、足元が崩れていくかのような感覚に、身を委ねることしかできないかった。

GOAL!!?

10分 鎌野樹

憲戸 0-3 青森附属

7話：つかんだ

「……………」

20分が過ぎ去り、前半が終了した。

ゲームは10分のハーフタイムに差し掛かり、青森のベンチでは選手達が活発に相手チームの癖、戦術、そしてやり方の修正などを、監督である陸奥も輪に入って意見を交換している。

「……………ちッ」

——だが、憲戸のベンチは地獄のような有り様だった。

誰も口を開けない。実力差がありすぎて、何を話せば良いのか分からない人間が大多数を占めていたが、中には完全に戦意を喪失してしまっている者もいた。

「やっぱり、無謀だったんだ……………僕たちなんかじゃ……………」
「……………」

青い顔をして震える太田と、難しい顔で黙りこくる様崎。

そして何より異様な雰囲気醸すのは。

ユニフォームを脱いで、タオルを被ったまま俯き、一向に動かない伊槌鳴哉だった。

「……………あ、えーつと。とりあえず、後半の戦術を話し合わないか……………」
「……………」

「……………何を話すんだ」

いつもの明るさに影を落としながらも、監督としての意地で月並が口火を切る。そこで、ようやく伊槌が口を開いた。内容は良くないものだったが。

我慢ならないと言った様子で、伊槌が急に立ち上がる。

「何を話すつてんだ……………この有り様で！」

そして、前半の内にベンチに入っていた橘花達によって記録されていたスコアシートを引っ掴み、目の前に叩きつけた。

憲戸 0—8 青森附属

得点者

〔青〕鎌野樹（4分・10分）蓮水涼（7分・12分・17分）鉢金
粒閃（15分・19分）童部留犬子（20分）
どうべるいぬこ

目に入った、惨憺たる内容に、ほとんどの者が目を伏せる。

出場していなかった宵闇と橘花でさえも下を向く。むしろ、出場していなかったからこと、客観的に実力差を見せつけられてしまったのだろうか。

そんな中、ふと、様崎が呟くように沈黙を破る。

「——やめよつか」

小さく放たれたその言葉は、しかし嫌に、無音の13人の耳に木霊した。

太田が肯定するように、ゆっくりと頷く。

「そっだよ……無理なんだ……」

三刀屋も、参ったような雰囲気を見せる様崎を案じた様子で、苦虫を噛み潰したような表情で、彼女に歩み寄る。

「ワタシは……みんなをソynchョウするよ」

呪われたように、諦めと失意が質量を持って渦巻き出す。並々ならぬ様子に、月並は何も言えなかった。

この状況を作り出したのは伊槌の言葉もあるだろう。彼も試合に對して諦観ととれる言葉を発していた。事実、前半10分以降の彼のプレーは精彩を欠いており、それに流されたかのようにチーム全体で効果的な攻撃を繰り出すことはなく、失望していてもなんらおかしくない。

だが、何故か。

伊槌の胸中は、ささくれだったかのように激情が渦巻き、納得できないでいた。

「——本当にそれでいいのかア？」

無籐が、淀んだ流れを打ち切った。

「おい、伊槌」

「……なんだ」

そのまま間髪入れずに、伊槌へ視線を向ける。拳を、血が出そうなほどに握りしめる彼の顔は、どう見てもこのまま敗走することを良しとしていなかった。

「3失点目の後、明らかにプレーが悪くなった。突っかかっているものがあんだろ?」

「……っ!」

凶星をつかれて、一步後ずさる。

無籐はそんな伊槌に構わず、試すような、挑発するような視線をぶつける。

「そのままでもいいのか? 青森に舐められっぱなしですよ!」

ドスの効いた声と共に、無籐が凄んで顔を寄せてくる。普段の伊槌なら、驚いて真正面から見返すことはなかっただろう。

しかし、今日の、今の伊槌は違かった。

「——いいわけないだろ!」

恐るに足らないやつ。

鎌野が悪気なく放ったようなその言葉が脳裏に蘇る。思い出すだけでなく、怒りで内臓が熱くなった。

ああそうだ、追い詰められているからと言って逃げていいわけがない。この伊槌鳴哉が舐められたままで終わっていいわけがない。

「かましてやるさ、俺一人でも!」

伊槌が、無籐を下から覗き込んで宣言する。

元より、この試合は自分のための試合だと位置付けていた。ゴールを奪い、過去を精算するためのゲームだと。

そのためには、味方など当てにしていられない。自分でなければならぬ。例え自分以外の全員が降りようとも、どうでもいい。

脱いでいたユニフォームを掴み取り、乱雑に着直す。動作の節々から苛立ちが見て取れた。

「……私も」

伊槌の背中に、ふと、か細い声がぶつけられる。

「私も、戦います」

それは、幾度も日本最高レベルのシュートに真つ向から立ち向かい、そして吹き飛ばされ続けてきたGK、久良島だった。

「何かが掴めそうなんです。私も、逃げたくありません……」

小さな声だったが、不思議と耳に届く。その裏には、伊槌すらも凌駕するような、強い意志の強さが見えた。

「……へっ、俺バカだからよ。試合放棄とか考えもしなかったぜ！ そんな気はねえけどな！」

伊槌と共にスリートップを組み、ファーストシュートを放ったパウストライカー、木崎が立ち上がる。

「ああ、この日のために仕上げてきたんだ。負けていられるか」

靴木が、いつもの仏頂面ながらも、どこか悔しさを滲ませた声音でそう言う。その様子から、彼なりに試合にかける想いが伝わってくる。

「私も、当然やります！ 先輩たちがやるのに、私だけ逃げるわけにはいかないですから！」

明凧もいつもの明るい調子で言い放つ。良くも悪くもいつも通りだが、この場においてはそのメンタルがいい影響を醸しているだろう。

無籐は彼らの様子を見て、獰猛に笑う。そして、何も言わない梵場やホープに視線をやった。

その視線に気づいた梵場は、仕方ないとばかりに肩をすくめて口角を上げる。

「男にそんな熱烈な視線もらっても嬉しくありませんよ。僕も、子猫ちゃんたちの前で尻尾巻くほど臆病になった覚えはないですね」

「……みんながやるのに、あたしが逃げるわけないわ！ やってやろうじゃないの！」

ニヒルに微笑む梵場を睨んで、ホープもそう言い放つ。衝動的な言葉にも見えるが、この際原動力などなんでも良いだろう。

(……けっこう、やるんだな)

伊槌が、人知れず驚きを見せる。

正直言って、ほとんどの人間が降りると思っていた。そもそも試合に乗り気ではなかったし、ホープなどは試合前も、試合中も『楽しさ』に固執しているように見えていた。

何より、キャプテンの様崎、3年の太田といった存在感のある彼女らに流される物だと思っていたのだ。

だが、それは全くの誤算だった。

——周りが見えてない。

鎌野の言葉が脳裏をよぎり、心臓が跳ねる感覚に襲われる。妙に頭がぐらつとくる。

(俺は、彼らのことを決め付けてたのか……?)

無籐の様崎と言葉を交わしている。

だが、伊槌にその言葉は届かない。脳内の全てを疑問が埋め尽くす。

(……俺は、彼らを理解しているのか?)

伊槌が、震え出した足を抑えて、ゆっくりとベンチに腰を下ろす。左手を口元に持っていき、表情を隠した。隣の橘花が、心配そうに見える。

鎌野の言葉が重くのしかかる。失意のままマドリードから帰還し、それでもサッカー選手として再びのしあがろうとしていた。ゼロから、伊槌鳴哉として蘇るために。

だが、まだどこかで——

(みんなを認めていないのか——?)

その思考に、体が雷に貫かれたような衝撃を与えられる。

目を見開き、明らかに正常な様子ではない伊槌を流石に見過ごせなくなっただのか、橘花が控えめに肩を揺さぶる。

「せ、先輩? どうしました?」

「!? あ、ああ。いや、考え事を」

触れられた途端、ビクリと伊槌が大袈裟な反応を返して、咄嗟に誤魔化すような言葉を吐く。橘花も少し驚いた様子だったが、クスリと淑やかに微笑んだ。

「ふふ……びっくりしすぎですよ」

「おい、伊槌。お前の考えも聞きてえから来い」

無籐が少し呆れた様子で手招きをしてくる。どこかバツの悪い表情で、伊槌が立ち上がったって話の輪に加わった。

軽く状況を説明される。様崎は無籐の説得によって、渋々試合放棄を考え直したようだ。

思考がまとまったわけではない。だが、鎌野の言う通り周りが見えてないことはたしかだと確信は持った。

(まずは話し合おうか)

まずは、彼らを理解する。

サッカーは自分1人の戦いではないということを、伊槌は今更ながら思い出した。

その折、太田が未だ俯いたまま、遠慮がちに声をあげる。

「……………ごめん。やっぱり、僕は……………無理だ」

太田に視線が集まる。彼はその大きな体を震わせながら、それでも絞り出すように思いを吐き出す。

「勝てない試合を戦えるほど……………僕は強くない。……………ごめん、交代してほしい」

震えた声だった。

その言葉は、少し前の伊槌であれば到底許容できるものではなく、感情のままに怒鳴っていたことだろう。

「……………ああ、仕方ないな」

だが、気づきを得た伊槌は、小さく、だが確かな重みを持った声でそう呟く。

まだ自分は、このチームのことを理解できていない。

誰が何を考え、背負い込んでいるかなど見当もつかない。

まずは、知るべきだ。彼らのことを。

敵を知り、己を知れば百戦危うからずと言う。今から敵について知る術はないが、己を知る術はいくらでもある。それに集中しようと、伊槌は決意を新たにした。

「……………わかった、無理はできないもんね」

「だけどよ、そうなつと太田先輩の変わり方は……………」

様崎の重々しい眩きに重ねるように木崎が疑問を呈する。最もな懸念だ。

憲戸中は層が薄く、DFの交代要員は1人しかない。その少女に、12人の視線が突き刺さった。

「……え？」

蚊の鳴くような声で、宵闇黒江がうめいた。

「——後半、逆転する心持ちでいくぞオ」

「……当たり前だろ」

無籐の音頭に、伊槌が軽く笑いながらそう返す。

前半のロングボール戦術はもう通用しない。だからこそ、選手たちの強みを生かす。そのための話し合いはできたはずだ。

だが、気がかりはある。その悩みの種の少女に、伊槌がゆつくりと視線をぶつけた。

「な、なんであんな化け物みたいなチームにデビューしなくちやいけないんですか……嫌だ……」

「大丈夫だよ黒江！ 練習通りやれば先輩たちが助けてくれるよ！」

交代出場する宵闇は、青い顔で震えて先ほどからずっとあんな調子だった。たしかに、目の前でチームの面々が手も足も出ずに失点を重ねている状況で無理もないと思うが、やはりしつかりして欲しい。

下がった太田も宵闇と変わらない様子だ。もう1人のDFである様崎もずっと浮かかない表情で、プレーも精彩を欠く。デイフェンスも不安定感、そのまま攻撃の不安定感に直結する。土台が揺れているのに建物が安定するはずがないように。

伊槌に出来ることは何もない。精神面のケアは自分より適任がいるはずだ。頼むぞ、と心の中でつぶやいて前に向き直った。

「大丈夫かい？ 子猫ちゃん。不安なら、さあ！ 僕の胸に飛び込ん

「でおいで！」

「えっ、なんですかこいつ……」

梵場の声など、伊槌には聞こえなかった。聞こえないことにした。スパイクを履き直し、息を整える。

後半で何かを掴まなければ、戻ってきた意味などない。

——周りが見えてない。

——恐るるに足りないやつつすよ。

脳内に反芻する屈辱の言葉。否定できないことが、苛立ちを助長する。その怒りに囚われてはならない。

青森のベンチから出てきた鎌野に、鋭く視線を突き刺す。反抗心と、ほんの少しの感謝を込めて。

「鎌野樹……青森附属……」

絶対——

「目にモノ見せてやるよ……!」

爛々と、目に炎を携えながら、誰にも聞こえない無はずなのに、忘れようもない声音で宣言した。

その直後、鎌野樹が、笑った気がした。

「……………」

サイドラインの脇。チームメイトから少し離れた場所で、様崎が右腕の腕章を握りしめる。キャプテンを示すその黄色の腕章を、破けるほどに。

力無い表情で、青森のペンチを見やる。どこか眩しそうに、だが、辛そうとも取れる表情だった。

「サクヤ」

突然呼ばれたことで、様崎が驚いて跳ねる。背後から声をかけてきたのは、彼女の友人、いや、親友である三刀屋だった。

「な、何みとちゃん、どーしたの?」

「……コウハイ達がこんなにする気なんだから、センパイのワタシはお腹をくくったヨ!」

少し言い方の違う慣用句に笑いそうになりながらも、にこやかなが

ら真剣な三刀屋の雰囲気気圧される。

「サクヤもそうでしょ？ だから試合を続けたもんネ」

「……んー、私はどうかな」

様崎自身も、何故試合を放棄しなかったのかよくわからなかった。試合の話が来た時から、やるつもりなど全くなかった。だと言うのに、流されるままにピッチに立っている。あの青森の選手とともに。「マア……サクヤが何を考えてるのかまではわからないケド……ワタシが隣にいるからね！ そんな顔しないで！」

その言葉に、様崎が少し息を呑む。そして、固かった表情が嘘のように破顔した。

三刀屋が右手を差し出し、同じように歯を見せて言葉を重ねる。

「やるウ！ コウハイの背中を押すのがセンパイのヤクメだからネ！」

「……ふふっ、みとちゃんはすごいなあ」

感慨深げに様崎が呟く。

心は軽くなっていた。青森に支配されていた脳が、友人たち、チムメイトたちの記憶で暖かくなっていく。

笑顔を見せた様崎が、頼りがいのある親友の手を取る。

少し遅れたが、もう迷うことなどない。この素晴らしい仲間たちと、楽しむことしか考えられない。

「もちろん、やっちゃおう！」

今日1番の笑顔で、様崎が宣言した。

憲戸中フオーメーション(4-4-2)

――木崎――伊槌――

明風――――梵場

――無籐――靴木――

三刀屋――――山本

――様崎――宵闇――

――――久良島――

「……変えてきたな」

「ですね。選手たちも、やる気を失ってるわけではないみたいです」

長宗我部の厳かな響きの呟きに、隣に立っていた童部留が返す。

ゆっくりと頷き、低い声でチーム全体に轟くような一喝を届ける。

「こちらのやることは変わらない！　だが、油断はするなよ！」

『おうっ！』

威勢よく、青森の面々がそう返す。言われるまでもなく、誰の表情にも、油断や驕りなど存在しなかった。

高らかに笛が鳴り、後半が幕を開けた。

「行きますよ、リユウ」

「任せろー！」

蓮水が鉢鐘に渡し、即座に鎌野にボールが渡る。それに合わせて前線の選手たちが一目散に憲戸陣内に走り込んでいき、それだけでも鎌野への深い信頼が読み取れた。

対する憲戸の選手たちは、不思議なほど浮き足立たない。冷静に、それぞれが守備を全うする。

「木崎、俺と鎌野に当たるぞ！」

「おう、10番は必ず2人で、だな！」

伊槌の声かけとともに、ツートップの2人が挟み込むように鎌野にプレスをかけてくる。

猪突猛進に突っ込んでくる木崎と、それをカバーするように、ゆっくり、されど蛇のように虎視眈々とボールを狙った伊槌の連動したプレス。ハーフタイムできちんと修正してきたようだ。

退屈しないとばかりに、鎌野の口元が歪む。

「はは……すぐに折れられちゃ俺たちも張り合えないっすからね」

まあ、と続けて呟き、鋭く目の前の2人を睨みつける。

「だからといって手は抜かないっすけど」

ぞわり、と伊槌たちの背筋に嫌なものが走る。

鎌野は至って冷静にボールを操り、ヒールリフトで上空にあげる。そのボールは木崎たちを抜くわけではなく、真上に緩やかに漂っていた。

瞬間、鎌野が飛び上がりそれを足で挟む。粘土細工のように器用に引き伸ばし、形を作り、それはいつしか死神のような鎌を象った。

「ブレイクスルー」

「うおっ！」

「ちっ……！」

鎌が出来上がるとともに、それを目の前の木崎たちに蹴りつける。回転しながら前方を薙ぎ払うそれに横へと弾かれ、鎌野に前方への突破を許してしまった。

「わりの、そっち行く！」

「中盤、頼む！」

伊槌たちの声を受けるまでもなく、中盤の4人が近場の選手へのマークを固める。素早い連動に、青森の選手が少し驚いたように目を見開いた。

「動きが良くなっていますねえ……何があつたのやら」

「私たちも攻め手に回った方がいいかな？」

ボランチの2人の言葉を、鎌野が手で制す。生意気とすら取られそうなその動作を、桜庭は笑って見送った。

「俺をフリーにするなんて、舐められたもんっすね……」

鎌野が愉快そうに、獰猛に笑う。その目は爬虫類のようにぎよるぎよる動き、ピッチ全体を見渡しながら最適な行動を探っている。

その折、憲戸の最終ラインから鋭い声が飛んだ、

「一谷くんがアタック、あいた子には黒ちゃんがマーク貰って！」

「了解だ」

「い、言われた通りやればいいんでしょ……」

それは、前半は置物のようだった様崎のコーチング。受けた靴木は迷わず鎌野にプレスをかけ、宵闇も不肖不肖といった様子ではあるが、すぐさま従う。

「……へえ、やる気になったわけっすか」

どうしてかは分からないが、これは面白くなる。鎌野は、先ほどとは違う、少年のような笑みを浮かべた。

「これ以上は通さんっ……」

悠々と進む鎌野の前に、靴木が立ち塞がらんとしてくる。だが、それを馬鹿正直に受けてやる道理などない。

「リユー、ワンツー！」

「りよーかいだ！」

無籐を背負う鉢鐘にボールを散らし、すぐさまリターンを返させる。靴木もワンツーまでは反応できていたが、パススピードが早すぎてカットが間に合わず背後を取られてしまう。

「……行かせるものか」

「ひゅー、しつこいつすね」

だが、それだけで諦める靴木ではなかった。余裕のあるスタミナに物を言わせて、スピードを上げて鎌野に背後からタツクルを食らわせる。

流星に効いたのか、軽口を叩きながらも彼は体制を崩した。それでも足元からボールが離れないのは、実力故だろう。

「宵闇、来い！」

「……は、はは。青森の天才も無敵じゃないってことですか……！」

減速を余儀なくされた鎌野に、容赦なく宵闇が挟み込む。

よろけた状態の鎌野は、とてもボールをコントロールできる状況にない。取れる、そう確信し、皮肉を迸らせながら慣れないスライディングタツクルで刈り取ろうとした瞬間。

「ほんと、舐められた物っすね！」

声を少し荒らげながら、鎌野の右足が閃光のように振り抜かれた。

「えっ」

奇崎のマークについていたホープからでさえ、パスを出す瞬間が見えなかった。それほどまでに早く、鋭いパス。滑り込む宵闇も、靴木もただ見送るしかない。

「また私ですな」

「……次こそ……！」

咄嗟のパス故に、少し浮いたアバウトなボールになったがこの少女には些細な問題だ。またもや空中で抑えようと、大したモーションもなく高く飛び上がる。

だが、突如蓮水に影がかかる。ピンク色の髪を靡かせながら、その少女は蓮水の前方に覆い被さるるように、突然現れた。

「もらいつー！」

その影は、憲戸中のキャプテンである様崎その人だった。身体能力に優れる蓮水とほとんど同じ高さを飛び上がり、空中で彼女が捕らえようとしていたボールを搔つ攫つて見せたのだ。

「おや、取られました！」

「サクヤ、ナイスディフェンスだヨ！」

ほとんど感情が読めないが、蓮水はたしかに驚愕していた。それとともに、先ほどまで大した脅威と認定していなかったこの選手への警戒を最大限高める。

「ふふふっ、無籐くん！」

「はア、やつとお目覚めかよ！」

三刀屋の賞賛に白い歯を見せながら、様崎がすぐさま無籐へパスを入れる。だが、彼がマークについていたということは、その背後には当然彼女がいるということだ。

「む、すぐ奪い返して点取ってやるぞ！」

「させるわけねエだろ……三刀屋ア！」

体格が勝る無籐が、マークにつく鉢鐘を抑え、サイドの三刀屋へすぐさま展開する。マークについていなかった彼女は、いつでも味方のフォロワーに回れるポジションを逐一取っていたのだった。

「よし、みんな上がっテ！」

「つしや！ ゴール前に行けばいいんだな！」

「よし、こつちのターンだ！」

その言葉に呼応して、ツートップの2人がMFのラインを超え、ディフェンスの裏へと一目散に走り込んでいく。

当然、そんなわかりやすい動き出しを青森のディフェンスが見逃すはずがない。すぐさまディフェンスリーダーの長宗我部が指揮を取った。

「裏を警戒しろ、前線もプレスをかけてロングボールを蹴らせるな！」
「了解だ！」

その言葉通り、ボランチから前の選手たちは果敢に前線へ飛び出し、ディフェンスラインの選手たちも、伊槌たちを視界に入れながら、いつ裏に抜けられてもカバーできる状況を保ちつつラインを下げていく。

「くそ、やっぱ一気には無理か!」

「ああ……だが、戦術通りだ!」

伊槌の言葉に、長宗我部が少し反応する。

ロングボール一辺倒だった前半とは戦い方が大きく変わっている。警戒しなければならないと、彼は再び兜の緒を締めた。

三刀屋はドリブルで持ち上がらず、再び無籐に返す。彼も長くは持たずに、寄ってきた靴木へとボールを渡した。

「数で攻めようということですか?　なんであれ通しませんよ」

パスを受けた瞬間、氷治が素早く靴木にプレスをかけてくる。パスを警戒しているのか、即座にアタックには来ず様子を伺っていた。

「数で、というのは少し間違いだな」

「……何です?」

その言葉には、靴木ではなく無籐が実に楽しそうな表情で、吠えるように答えた。

「数と、質で勝つんだよオ!　靴木イ、出せ!」

「ああ、ワンツーだ!」

背後から素早く靴木を追い抜いてパスを要求する。鉢鐘もついでこようとしたが、それは氷治が手で制した。

奪うことなど雑作もない。カウンターの駒を増やしておくべきという判断だ。チームとしても、ショートカウンターによる得点は狙うべきところ。故に、鉢鐘のプレスバックを止めたのだ。

「所詮は付け焼き刃……フローズンステイルツ!」

「……ハッ!」

無籐にボールが渡った瞬間、前半梵場に食らわせたような、氷を纏った殺人的なスライディングで襲いかかる。

無籐の体の向きでは、靴木にそのまま返すのは難しいボールになる。万が一リターンを選択しようと、背後にいる桜庭がない回収する

だろう——だが、無藤が出した答えは、そんな氷治の思惑のどれとも異なるものだった。

「ブチ抜け明風イ！」

「チツ、そつちか……」

前半は守備に奔走していた左ウイング、明風にボールが渡る。そのパスに、滑り込みながら氷治は舌打ちをした。

「薄利さん、止めてください！」

「もちろん、任せといてね！」

当然、鈍色の髪はためかせながら、マッチアップするサイドバツクの薄利美樹はくりみきがすぐさま目の前に立ち塞がり、出方を伺いつつも、攻撃的に笑みを見せる。だが、明風も負けじと強い瞳でその姿を捉えた。

「皆さんが信じて渡してくれたボール、無駄にはしません！」

こちらを伺う薄利の頭上へ、裏をかくために飛び上がる。背後に三日月を輝かせ、なぞるようにな回転とともに穏やかな夜風とは無縁の、激しい風圧が薄利を襲った。

「三日月の舞！」

「うわっ!? まずいかもー！」

風に体を殴りつけられ、薄利の動きが止まる。その隙を見逃さず、明風が矢のように素早くサイドを抉って縦に切り込んだ。

「チツ、俺が行く！」

「童部留、絞れ！」

「走れ木崎！」

一気に押し寄せる緊張に急かされたかのように、さまざまな指示がゴール前で飛ぶ。

「明風イイイイ！ 出せエエ！」

伊槌の指示を受けた木崎が、オフサイドすら気にせずゴール前に突っ込み喉が張り裂けそうなほど声を張り上げて存在を誇示する。長宗我部も放っておくわけにはいかず、木崎に釣られていった。

明風が、毛利に詰め切られる前に中に視線をやった。

その動きに呼応するかのように、伊槌がゴールから少し距離を取

る。長宗我部の視界から、完全に姿が消えた。

「……！」

明風と木崎に気取られ、完全に押し込まれたディフェンスライン。その少し離れた場所で、誰にも気取られずフリーで手を挙げるその男に、前半と同じように、明風の本能が得点の匂いを掴んだ。

「伊槌先輩ッ！」

「……いい子だ！」

空気を鋭く切り、明風がクロスを上げた。

ボールはペナルティエリア中央より少し後ろ、そう、伊槌の足元にドンピシャで入るピンポイントクロス。

「やばっ……！」

童部留が野生的な勘でいち早く反応し、必死に伊槌へ距離を詰める。だが、流石に遅すぎた。

「絶対……！」

鋭いクロスに対し、ピンポイントで右足を引き戻す勢いでボールの下を蹴り抜き、その場で回転させる。そして、引いた力をバネに、強烈なボレーを叩き込んだ。足と回転の摩擦によって発電が起こり、眩い光がボールを覆う。

——いつも通り、脳裏を浮かぶのは、伊槌を絶望へと導いたシュートミス。プレッシャーに震えるあの感覚と、針の筵のような罵倒が体中に毒のように思い出されていく。

「……っ、くそ……！」

足から力が奪われていく。

あれだけ大見得を切ったのに、心はこんなにも奮い立っているのに。

こんなにも戻りたいと思っているのに、戻れないのか——。

過去を振り切れない無力感が、全身を苛んだ。

その、直後。

「鳴哉くん、頑張れ——！」

明るい声が、背中に暖かく染み付いた。

「……！」

思い出させるれるは、あの時の少し前。

白いユニフォームに身を包んだサポーターたちが、拍手で自分を迎えるスタジアム。

ゴールを沈め、鎬を削るライバルたちが魂からの笑顔で伊槌に駆け寄ってくる晴れの夜。

自分にパスを出し続けてくれた、世界最高峰の選手たち。

「……………おおおおお!!」

不思議と、全身に力が漲る。

(掴んだ、掴んだ、掴んだッ！)

歓喜と、燃え盛る執念とともに。

右足を振り抜いた。

「電閃ッ！」

放たれたのは、キング・マドリードの頃と比べても遜色ない、最高の一撃。

決まった——確信のような感覚が伊槌の胸に去来する。

——だが、それも簡単にゴールを許すほど、日本最高のチームは甘くない。

「やあああッ！」

「っ！ 間に合いやがった！」

伊槌へのプレスを諦め、童部留が飛びかかるようにシユートをブロックする。ギリギリで足を盾にして、少しでも威力を削ぐようと全身に力を込める。

「すごいパワー……………！ ぐううう、がうううう！」

犬が唸るような裂帛を喉の奥からひり出し、自らを鼓舞する。

最後の砦、獅子豪は、必死に体を投げ出してディフェンスする童部留に笑みを浮かべていた。

「良き根性だ後輩！ 小生も負けてられんなあ！」

「うるっ……………さい……………」

流星に限界が近いのか、彼女の顔は苦悶に染まっていく。獅子豪がそんな童部留を励ますように、両腕に集めたパワーを高々と掲げ、祭囃子でも叩くかのように強く踏み込んだ。

「あとは、小生に任せよお！」

「くう……頼みます……！ うあ?！」

遂に電閃のパワーが童部留の足を跳ね飛ばす。だが、たしかに威力も回転も弱まっております、必殺技を使っていないのに効果的なブロックが成功していた。

シユートを真正面から見据える獅子豪が、暑苦しく口元に弧を描く。

「後輩の為にも……止めねば男ではないなあ！」

自らに言い聞かせるように叫び、右腕に顕現した盾を、シユートを叩き割るような勢いで突き出した。

「王家の盾エエ!!」

この日1番のパワーのぶつかり合いが、激しく火花を散らす。電閃は突き貫かんとばかりに猛烈に雷撃と火の粉を放ち、盾がそれを真正面から受け止めつつ、力を奪っていく。

「決まれ……！」

「止める……！」

永遠にすら感じられたその一瞬の硬直は、唐突に動きを見せる。

ビシリ、と。盾が限界を訴え、ひび割れ出した。

シユウウ、と。何かが抜けていくような音を発して、シユートが勢いを失い始める。

莫大な力と力は、お互いにノーガードで殴り合い、純粹に競い合い——そして、共倒れの様相を描こうとしていた。

「ぬうう……！」

それでも、獅子豪は最後まで諦めない。ここで倒れば、もしかするとボールがゴールラインを割ってしまうかもしれない。その思いだけで、食い下がっていた。

そして——。

「ぐおお!!」

電閃の最後のパワーと、獅子豪の意地がぶつかり合い、シユートは上に逸れ、コーナーキックになった。

完全ではなかったが、渾身の一撃が止められた。されど、伊槌は不

思議と身を焦がすような悔しさではなく、全能感にあふれていた。

「いける……」

拳を強く握る。掴んだものを二度と離さないように。

「次は決める……！必ず！」

伊槌は、怪物のように笑っていた。

コーナーキックの守備のため、鎌野も自陣に戻ってくる。身長に利があるわけではないので居てもいなくても同じだ、とは本人の弁だ。拳を握って獰猛に笑う伊槌を見て、鎌野も口角を引き上げた。そして、おもむろに薄利に近寄って、耳元で声をかける。

「伊槌鳴哉、いけるっすか？」

その言葉に、彼女はどこか不気味に笑んで、強く頷く。

「もちろん！ シュートの癖とか、動きの癖とか全部わかったよ！」

頼もしいつすね、と鎌野が呟く。

そして、薄利の肩に手を置き、伊槌を射抜くように見て笑った。

「頼んだっすよ。エースキラー」

8話：伊槌鳴哉

「靴木イ、梵場ア！ 挟んでプレス行け！」

「ああ！」

「分かりましたよつと！」

伊槌のシュートから数分後、無籐の指示で動き出した靴木たちが、飛びかかるように鎌野へ3人がかりのプレスをかける。

「ははは、中盤は連動性が出てるっすね。でも——」

靴木が足を出してボールを奪おうとしたが、鎌野が少しボールを引くことで回避される。

梵場のシヨルダータツクルは、肩を引いて力を逃すことで、のれんにでも突っ込んだかのような手応えの無さとともに梵場がたたらを踏んだ。

残された無籐が、舌打ちをしながらもスライディングで食らいつこうとするが、彼はその前にボールを少しあげ、足を使ってその形状を鎌のように作り替えてみせた。

「もう容赦はできないっすよ、ブレイクスルー」

「がア……！ クソツ！」

鎌が地面を砕くほどの力で蹴り付けられ、衝撃波で無籐の体が吹き飛ばされる。その隙に、鎌野は悠々と突破していった。

あまりにも流麗で無駄のないドリブルに、靴木が忌々しげに言葉を漏らす。

「3人がかりでも無理なのか……！」

「咲夜キャプテン、頼みます！」

突破した鎌野が、怪物のようなドリブルでゴールへ襲い掛からんとする眼前に、キャプテンマークを巻いた様崎が、ピンク色の髪を靡かせ立ち塞がる。

梵場たちの声を受けて、彼女は少し微笑んだ。

「何度もやらせないよ？」

「……はは、俺だけを見てると痛い目見るっすよ」

様崎がピクリと眉を動かして、抜かれないように重心を後ろに残し

つつも鎌野との距離を一気に詰める。だが、彼はそのプレスを受けた瞬間ヒールで背後にパスを落とす、鎌野を追い抜いて華麗に少年が様子を抜き去っていく。

「いい連携ですよ、鎌野くん！」

「ホープちゃん、お願い！」

ドリブルで切り込む少年——氷治を認識した瞬間、様崎が指示を飛ばす。

ボールを持っていなくても、鎌野から視線を外すわけにはいかない。『そこにいる』というだけでディフェンスラインを恐怖を与えられるほどの圧力を放つ背番号10番を野放しにはできなかった。

「はあああああー！」

「……っ、一度見てはいますが、流石に早いですね。ですが——」
風を切る矢のような勢いで、ホープが氷治へまっしぐらに突貫してくる。

あまりのスピードに、流石に目を剥いた彼だが、すぐさま不敵な笑みを携えて彼女を懐へ迎え入れた。

氷治が突然、ぽん、と優しくパスを送る。他の仲間ではない、ホープにだけ。

「えっ？」

突然のプレゼントに、ホープも足を止めて戸惑いを見せる。

だが、その一瞬。ボールを胸で受けた体勢の彼女に、氷治は後ろ回し蹴りをかますような動きを見せて、いつの間にか距離を詰めていた。

「喰らってみなさい！ ジャツジスルー！」

「うああ!？」

ホープの腹を、ボールを挟んで蹴り抜く。その勢いに押され、彼女は吹き飛ばされて地面へと転がった。

糸目を引いた、優しい風貌からは想像もつかないような荒々しく攻撃的なプレー。これこそが青森の中盤を支配するボール奪取の達人、氷治聖の本領だ。

「……わ、私が止めるんですか……」

問いかけるような形だが、誰に答えられずともその心は決まっている。センターバックの宵闇が、危機を察知して、有り余るスタミナにものを言わせた猛烈な勢いで氷治にプレスをかけてくる。

だが、それ故にできる致命的なスペース。1枚が既にMFに釣り出されているために、ゴール前には広大なスペースが広がっている。そして、それを突かないほど青森附属は甘くない。

全てのDFの視界から消えた少女が、パスを求めて手を挙げる。氷治はそれに微笑みで答えた。

「ええ、いいポジションです。蓮水さん！」

「あ、やば……」

宵闇の真横を、鋭いパスが通り抜ける。スパン、という小気味いいトラップの音とともに、フリーの蓮水へとボールが渡った。

「おーけーです。ナイスパス」

「まづいネ……」

焦った様子で走り寄る三刀屋を、一瞬だけ見て、すぐさまゴールに向き直る。気楽そうな言葉と合致しない冷徹なほどの無表情に、GKとして対峙する久良島の背筋に怖気が走った。

だが、それでも彼女は、その瞳を正面から見据え、髪に隠れた強い瞳を光らせる。拳を握り、息について戦意を昂らせる。

「止めます……」

「いいですね、その心意気」

蓮水がわずかに微笑む。

彼女が足を振り上げ、久良島の向こう側、ゴールネットを貫くような視線で射抜いた。

振り上げた足に流水が絡まる。次第に蛇の形を浮かび上がらせるその右足を、鞭のようにしなませ、浮いたボールへ強烈にボレーを叩き込み、水流を纏ったシュートが、渾身の一撃が放たれる。

その一瞬の溜め。駆け寄ってきた三刀屋が、打ち出される寸前で久良島の前に立ち塞がった。

「容赦はしません。ハイドロバイパー」

「コウハイだけに辛い思いはさせないヨ！」

滑り込むように間に割って入った三刀屋が鋭く言う。激しく唸りを上げ襲いかかる水の蛇にも、一步も引かずに構える。

滑らかな動きで逆立ちの体制へ移行する。そして、突風を巻き上げながらコマのように高速で回転し、空気の渦を作り上げる。それはまるで竜巻。激しく回転を重ねながら、必殺のブロックを披露し、うねる波のようなそのシユートを見据えた。

「旋風陣！」

振れるような軌道で突き進むハイドロバイパーも、流石に風の奔流から逃れることはできず、吸い込まれるようにぶつかり合った。

激しく水流を撒き散らしながら、シユートが風を振り解かんと暴れ回る。彼女は明らかに押され、苦しげな表情を浮かべる。それでも、三刀屋は回転を止めない。

「流石の強さだネ……！」

「……いいディフェンスですね。ですけど——」

蓮水の言葉に呼応するように、水飛沫がより激しく、ハイドロバイパーの唸りがさらに強くなっていく。竜巻は今にもかき消えそうだった。

「——私たちには届きません」

感情の昂りと共鳴するように、うねりはより激しく、とぐろを巻くように渦を描く。激しすぎる抵抗に、遂に三刀屋の気持ちを押し切られた。

「キヤア！」

「みとちゃん！ 杏菜ちゃん！」

「……ふうう……！」

纏う水流が幾分か少なくなりながらも、ハイドロバイパーはゴールへ突き刺さらんと空を切り裂く。立ちはだかる久良島が、強く息を吐き出して、そして大きく息を吸い、覚悟を決めたように、大袈裟なほどに振りかぶった右手を、正面から叩きつけた。

「……う、すごいパワー……！ でも、負けないっ……！」

三刀屋によって削られているとはいえ、必殺技は必殺技だ。莫大なパワーが右手を通して、波紋のように全身に広がる。

それでも拮抗を生み出せるのは三刀屋のブロックと、久良島の初心者離れした膂力だろう。弾ける水飛沫が徐々に勢いを失っていく。だが、久良島の限界もすぐそこまで来ていた。

「う……はあああ……いー」

それでも、踏ん張る足に力を込めて、噛み砕きそうなほど強く食いしばって右腕に全てを集中させる。

その思いが形になったかのように、あの時と同じく久良島の右手が黒いオーラで覆われる。空気に溶けそうなほど薄く、微弱で頼りない。だが、たしかかな存在感を持ってそこに現れていた。

「これは……」

「……必殺技の予兆ですか」

蓮水がそう溢す。

久良島がそのオーラを認識した瞬間、呆けたように、一瞬だけ全身から力を抜いてしまった。

「あつ、しまつ……いー」

纏っていた水はもはやほとんどないが、未だに威力を保って久良島の腕を吹き飛ばす。彼女の体は大きく後退させられ、ゴールネットに叩きつけられた。

ぶつかり合いを制した後は力なきげに、だが意志を持ったようにゴールラインを割ろうと緩やかに飛んでいく。

入った、ほとんどがそう思って足を止めた、その瞬間。

「やらせるかあー」

F Wの伊槌が、猛烈な勢いで滑り込み、入りかけていたボールを掻き出した。

「また彼か……」

前半に伊槌のカットを受けた奇崎が、少し忌々しげに言う。

難しい体勢でクリアされたボールは、ふんわりとペナルティエリア内を漂っている。なんとか失点は防げた——憲戸の面々に、安堵とともに、油断が生まれてしまう。

故に追いつけない。

凜猛な笑みを浮かべながら、ボールの落下地点へただ一人走り込む

鉢鐘粒閃に。

「オマエ、すごいシュートも打てるしいい守備してるなー！ だけど、リ्यूの方がすごいぞー！」

「クソ、ヤバい……！」

「打たれる……！」

鉢鐘を確認した様崎たちが走り寄る。体勢を崩している伊槌と久良島も素早く立ち上がろうとする。

だが、遅い。落ちてくるボールに合わせて、ピンポイントのボレーシュートを叩き込んできた。

「アツハハハハ！ 止めてみろー！」

目を見開いて鉢鐘が嗤う。鋭く伸び上がって右の隅に吸い込まれるボールを防ごうと、伊槌が飛び上ってブロックを試みた。

だが、届かない。髪に掠って、頭上を風が吹き抜けていくだけだ。

「畜生……！」

久良島も飛びつくが、間に合わない。

シュートは右のポストにけたたましい音を上げながら激突し、跳ね返って逆側のサイドネットに深く突き刺さった。

「ハア……ハア……！」

伊槌が荒く息をつく。絶えず流れる汗は疲れからくるものだけではない。

圧倒的な地力の差。それを目の当たりにしたことによる冷や汗が止まらない。

右の手のひらで汗を拭い、左手を強く握りしめる。後半開始直後は確実にこちらのペースだった。伊槌の中にも、次打てば入るという確信すらあった。

(なのに……！)

青森附属に、もう一瞬の油断もない。

この数分で、しかとそれを刻みつけられた。

伊槌が久良島の手を取って立ち上がらせる。彼女は悔しげに俯いて、肩を震わせていた。

「久良島……！」

「この試合中……必ず1回は止めます……! もうゴールは割らせた
くない……!」

言い聞かせるようにそう言う。

強い子だな、と伊槌は思った。この試合で最も実力差を見せつけられて
いるだろうに、折れずに立ち向かっている。彼の記憶に、過去の
自分がよぎり、より一層彼女への尊敬の念が湧いてくる。

それも、いつまで持つかわからない。強い思いで望むほどに、手が
届かないと分かった時は想像を絶する痛みを伴うものだからだ。

早く、自分が点を取らなければならない。何故なら――

「……これで15点目、か」

――もう、余裕も時間もないのだから。

GOAL!!?

33分 鉢鐘粒閃

憲戸 0―15 青森附属

伊槌がゴールを決めるにあたって、問題は大きく2つある。

「無籐、無理をするな!」

「チツ……プレスが早すぎんだろ……!」

「あはは、私たちも本気だからね」

1つは、青森の異常に強い守備。

堅いというより、強いと形容するのが適切だろう。前線の選手全
員、エースの鎌野すらプレスに加わり、絶え間なくボールホルダーに
激しいチェックをかけてプレーを大きく制限する。

この守備のせいで、ミドルサードでのボール保持が非常に難しく
なっている。いまま無籐や靴木が堪え、梵場や明凧も受けようと苦心
しているが、高いレベルで連動する青森のプレスをかわせない。

激しいプレス戦術は、現代サッカーの戦術における基本であるが故に難しい。選手の立ち位置、役割、そして技術を明確にしなければ、必ず綻びが生まれ機能しない。それを高いレベルで熟す青森は、中学生のサッカーのレベルを優に超えているだろう。

これを突破するには、青森のスタミナが切れるか、繋ぐことをやめて前線にロングボールを送るかしなければならぬ。

前者はこちらの意思でどうにもならないため、自動的に後者になる。だが、それでも上手くないからこそ失点がかさんでいるのだ。

「キャプテン、返すぞ！」

「おっけ、鳴哉くん！ 行くよ！」

無藤が桜庭のプレスをギリギリでかわし、背後の靴木をスルーして様崎まで一気にバックパス。そのまま彼女はロングキックの体勢に入った。

「ああ、来い……っ！」

伊槌がボールを受けるために、様崎の方へ体を向けた瞬間、強い圧力が背中にかかる。

「ふっふっ！ もう君に仕事はさせないよ！」

首を回して背後を確認すると、鈍色の髪を揺らし、澄んだ水色の瞳を爛々と輝かせた少女が、ビツタリと伊槌をマンマークしていた。苦虫を噛み潰したような表情で、伊槌が顔を歪める。

これが、伊槌に降りかかるもう1つの問題——6番、薄利美樹のハイレベルなマンマークだ。

あのシュートを打ってから、彼女はポジションの概念を無視して伊槌にベツタリマークをつけてきた。原始的な方法だが、それは確実に効果を発揮している。

「どけ……！」

「嫌だね！ 動きが悪くなってるよ！」

伊槌が振り切ろうと、様々な動きを織り交せて薄利を惑わそうとするが、彼女はまるで伊槌の動きが分かっているかのようについてくる。

もう1人のFWである木崎にも3番の毛利が厳しくマークしており、自由を奪われている。

激しいプレスによる中盤の支配と、原始的ながら高い技術を持ってFWを消し去るマンマークの併用。

伊槌たちは、青森の戦術に完璧に嵌められていた。

——それでも、一縷の望みに賭ける他ない。

「いけえー！」

チエイシングが間に合う前に、様崎が前線へロングボールを放り込む。伊槌を狙ったボールだ。

「今度こそー！」

「何度でも止めてあげるよー！」

伊槌の脳内が次の局面のシミュレートを開始する。

このままトラップして背負う。ダメだ、先ほど試したがパスコースを潰されて奪われた。

無理矢理反転して抜く。ダメだ、進行方向に先回りされるだろう。

木崎にパスをする。ダメだ、そもそも難易度が高いし木崎が取れるようなパスを出せない。

(くっ……)

八方塞がりだ。

だが、やるしかない。このまま反転して受け、剥がしてドリブルする。そう心に決めて、薄利を背負って準備する。

「行くぞ……！」

柔らかい軌道のロングボールを、足元で完璧にトラップ。ボールを薄利から隠すように間に体を入れキープし、素早く反転して抜き去りにかかる。だが——

「こっちでしよー！」

「なっ……！」

風のように、薄利が目の前に割り込んでくる。

動きは完璧だった。それなのに、何故——考えている暇はない。伊槌はどうか彼女からボールを遠ざけ、キープの体勢に移行しようとする。

そこで、薄利は奇妙なことを始めた。

「ふふふ、君がどう動くのか全部分かるよ！」

伊槌の動きを、一寸の狂いもなくトレースし始める。鏡に写っているかのように、彼の足捌きから体の使い方、果ては目線まで完璧に模倣する。精密機械のような異様な動きに、伊槌が流石に度肝を抜かれる。

「なんだ……!?!」

「そして——隙が出来る瞬間もね！」

一瞬だけ、伊槌の足が止まる。

その刹那を見逃さず、薄利が先ほどまでのトレースを捨て、猛烈な勢いでカットを狙ってきた。

これこそが、模倣により相手を困惑させることによって隙を生み、それを周到に射抜く薄利美樹の必殺技。

「これが私の必殺技——トレースプレス！」

「しまっ……」

一瞬の間に、伊槌が一步も動けずにボールを奪われてしまう。背後を走り去っていく薄利の背中を、目で追うことしかできなかった。

だが、ハツと息を呑んですぐに我に返り、薄利へと背後からプレスをかける。彼女はすでにパスの体勢に入っていた。

「桜庭先輩！」

「よくし、ナイスパス〜」

ボールはサファイアの瞳を乱反射させるボランチ、桜庭旋風へと渡る。目立ったプレーはしていないが、こうして中継地点となったり精度の高いプレスでこちらを攪乱してくるいぶし銀なプレーが光っている。

だが、簡単に通すほど憲戸の中盤も甘くはない。

「梵場が行け、靴木はカバーだ！ 明凧も絞れエ！」

「全く、人使いの荒い先輩ですね！」

無籐が司令塔として振る舞うことで、憲戸の中盤は連動性を持っている。梵場も、軽口のように悪態をつきながらも、指示を疑うことなく遂行し、その他の面々もすぐさま行動に移していることが無籐への

強い信頼を示している。

「俺も……」

「伊槌と木崎は来るなア！ 攻め残れエ！」

デیفフェンスに参加しようとした伊槌を、無籐が手で制する。伊槌は突然ぶつけられた言葉に面食らって足を止めた。

（大丈夫なのか……？ いや、でも……）

立ち尽くしたまま思考を回す。そうしている間にも、試合は進んでいた。

鎌野とは違うタイプの司令塔に、桜庭が口角を上げて、その鎌野へ視線をやる。小さいセンターバックのマークを振り切りながら、手を挙げていた。

「再びお会いできて光栄です、できればかわいい子ちゃんを渡して頂けると嬉しいのですが……」

「かわいい子ちゃんく？ よく分からないけど何もあげられないな」

態度には出さないが、梵場の奇天烈な言動に桜庭が困惑する。だが、今はそれを思考の外側に追いやり、最善のプレーを描くために思考を回しだした。

梵場がいやに様になるニヒルな笑みを浮かべ、サングラスに反射する桜庭を見据えた。

「フフツ、子猫ちゃんに手をあげるのは気が引けますが……強引に奪わせて頂きましょう！」

梵場が、背後の靴木をチラリと確認する。彼は親指を立て『準備できている』と言外に伝え、それを受けた梵場が迷いなく桜庭へとアタックをはじめた。

その様子を確認した桜庭は、おもむろに懐から草笛を取り出す。そしてゆっくりと口をつけ、暖かな音色を優しく奏で出した。

「草笛ドリーミング〜！」

「……っ、これは」

桜庭が奏でる澄んだ音色が耳朶を打ったび、梵場の体から力が抜け、宙に揺蕩うような感覚に襲われる。迫り来る激しい眠気に、つい膝をついてしまった。

彼女はしたり顔で、その横を通り抜けていく。

「おやすみなさ〜い」

桜庭の背中が遠くなるにつれて、梵場から眠気が抜けていくがもう遅い。完璧に抜き去られてしまった後だ。

だが、走り去ろうとする彼女の前に、カバーに入っていた靴木が抜け目なく対峙する。

「これ以上行かせるか!」

「……………」

彼女は靴木の背後の景色を見やる。鎌野は後半から入ってきたD Fに厳しくマークされており、しつこいそれを振り切れていない。蓮水に直接通すのも難しく、鉢鐘も遠すぎる。

その折、背後からゴール前へと突っ込む猛烈な足音が耳に入った。彼女はにこやかな表情で、誰もいないスペースにパスを送る。

「何だ…………!?!」

「ウチを忘れてもらっちゃ困るし!」

その足音は、薄利とポジションを変えて逆側のサイドバックに入った、童部留のオーバースラップだった。中盤のカオスを抜けてフリーでボールを受けた彼女は、そのままシュートの体勢に移行する。

「まずい!」

「来るね…………!」

構える様崎と靴木を尻目に、童部留の纏うパワーが増大していく。彼女から放たれたエネルギーが形となり、背後に三つ首の犬の怪物がビジョンとなって現れた。ボールを蹴りつけるたびに、頭の1つがボールに噛みつき力を注入する。

3回繰り返した後、今までとは比べ物にならない気迫で4回目のキックを叩き込むと、全ての頭が大口を開けてボールに食らい付き、その怪物のオーラを纏い打ち出された。

「ケルベロスショットオー!」

荒々しい足音を立てながら、地面を抉りシュートが空を切る。

その進行方向に、靴木一谷は一切の動揺を見せずに立ち塞がった。

「ぬろうろう…………!」

靴木の体を黄色いオーラが包む。数瞬の後、鋭い裂帛と共に何かを持ち上げるように両腕を天に掲げると、背後からクツキーの壁が迫り上がってシュートとぶつかり合った。

「食らえ、クツキーウォール！」

三頭の獣が菓子の壁と鎬を削りあう。

パワーとパワーが衝突し、激しい衝撃を伴って拮抗する。

だが――

「無駄……！」

「ぐ……!？」

――互角のぶつかり合いは一瞬だった。

獣が咆哮を上げ、より早く走り出す。その衝撃に耐えられず、クツキーウォールはミシリとひび割れた音を発した。

そして、始めから壁などなかったかのように、シュートがブロックを打ち砕いて靴木を吹き飛ばした。

「ぐわあー！」

余波で靴木が背後に吹き飛ばされる。厄介なブロックも乗り越え、残るは必殺技を持たないGKのみ。童部留はゴールを確信し、犬歯を見せた。

だが、靴木が生み出した一瞬の硬直。

その隙に、鎌野を押さえる宵闇の相方にしてキャプテン、様崎咲夜がシュートブロックの体勢を整えていた。

「なっ、いつの間……！」

童部留が驚きの声を上げる。一瞬時間ができたとはいえ、突然のシュートに反応できたのは、伊槌のフェイントにすら反応できる様崎の超人的なクイクネスによるものだ。

彼女が祈るように手を合わせる。手を解き、円を描くように腕を振るうと、足元から膨れ上がったボウリング球のような黒い球体が出現し、3つ、彼女の周りを漂いだした。

「止めるよー！ サテライトドローー！」

様崎が腕を振るい、球体の1つをぶつけた。しかし明らかにパワー負けしており、ジリジリと獣を纏うシュートが押している。

だが、タイミングをずらし、他の球のぶつけていくと、球体が球体と合体し、より大きなものへとなって、逆に押し返し始めた。

「くうう、強いねえー!」

様崎が苦しそうに声を上げる。手を伸ばし拮抗を保つ彼女だが、靴木がブロックが入ってなお絶大な威力に押されていた。

それでも、威力は殺せている。

その拮抗を見た童部留が、あり得ないと言いたげに口を開いた。

「くそっ……ウチを舐めるな!」

「うわっ……!?!」

焦ったような童部留の叫びに呼応するように、獣が咆哮を上げる。靴木の時と同じように、様崎へかかる圧力が一段と強くなった。

首が球体を食い破る。すでに球体とは呼べない、無残な形になったそれはついに力を失い、その場で消滅した。

「ダメだった……! 杏菜ちゃん!」

「はい……ここまで弱めてもらえれば……!」

シュートの威力は、明らかに低下している。回転数、威力共にほとんど失われ、もはや通常のシュートと変わらない。

久良島が腰を落とし、安定した重心から大振りの右でパンチングをかます。激しい力が右腕を通して全身に伝わってくる。が、

「これ……なら! 止められる……!」

そう確信する。

全身に力を込めて、歯を食いしばる。ブロックに入ってくれた2人のためにも、必ず止めたいと思うと、胸の奥から力が湧いてきた。

「ブチ抜けッ!」

童部留が祈るように叫んだ。

そして――

「きやあ!」

久良島がパワーに押され、再びゴールネットに叩きつけられる。

だが――シュートは彼女のパンチに弾かれ、力なくゴール前に溢れていた。

「嘘……!」

止められた童部留が、齒を食いしばって悔しさをあらわにする。目を見開き、久良島を、様崎を、靴木を睨みつけていた。

だが、今はそんな場合ではない。

「こぼれ球ー」

ボールはまだ生きている。誰かが言ったその言葉に、ピッチの全員が我に返った。

ゴールの真ん前でボールは緩やかに転がっており、GKは体勢を崩している。絶好のチャンスであり、憲戸の最大のピンチだ。いの1番にこぼれ球に駆けつけたのは――

「もらうつすよ、ワンちゃん！」

――鎌野だった。

間髪入れず、童部留へ軽口を叩きながら右足を振り抜く。外すわけのない至近距離で、シュートが放たれた。

だが、その瞬間、鎌野の前に1人の男が飛び込んでくる。

「やらせるかア！」

「ん……！」

それは、前線に残るよう指示されたはずの伊槌。鎌野が予想外の妨害に目を見開き、憲戸の面々も驚きを隠せない。

「あいつ………だけど助かったかア」

無籐が目を細めながらも、安堵した風にそう言う。

伊槌の足に弾かれたボールは、ペナルティエリアを出てまだ宙に漂う。ピンチは続いている。

だが、その落下地点には無籐が走り込んでいる。カウンターの局面になるはずだと、木崎が猛然と走り出した。

「よし、カウンター行くぞ………!?!」

彼が落ちてくるはずのボールをトラップしようと、足を伸ばした瞬間。

鈍色の髪が天を舞い、中空でボールを搔つ攫っていった。

「んだとオ………！」

「ふふふ！ シュートチャンス！」

ボールを奪った少女――薄利が、驚きを隠せない憲戸の面々に笑み

を見せる。

あまりにも予想外のボール奪取に、誰もが動けないままシュート体勢が整った。

そして、その動きに再び度肝を抜かれることとなる。

ボールをつま先で軽くリフティング。刹那の間に右足を引き戻しボールの下を擦り上げ、その場で回転させる。

「あれは……」

無理な体勢でクリアしたために、ペナルティエリア内で倒れている伊槌が、夢でも見ているかのような、現実味のない声でそう溢す。

薄利は回転させたボールに、右足を引いた勢いを利用して強烈なボールを叩き込んだ。回転するボールと強烈な勢いの右足が激しく電撃を生み出し、ボールを包んでいく。

間違いない、この必殺技は――

「鳴哉くんの……!」

「電閃ッ!」

様崎の言葉を待たず、鋭いシュートがゴールへ一直線に放たれる。

先ほど見せた伊槌のシュートよりは回転数も纏う電撃も弱い。だが、伊槌の代名詞であったはずのシュートが突然相手によって放たれたことは、憲戸に激しい動揺を生んだ。

「……あ」

伊槌の頭上を、空気を切り裂いて電撃が飛んでいく。

自身が苦しみの果てに、ようやく取り戻した必殺技を奪われたことは、彼からあらゆる思考を奪い去った。何故、何故、と頭の中で堂々巡りが起こる。

だが、世界はいつものように伊槌を待つてくれない。彼は見送ることしかできない。久良島も、未だ立ち上がれていない。

鋭いシュートが、何の障害もなくネットを揺らす――はずだった。「全く、こんなのは柄じゃないんだけどね!」

いつの間に来たのだろうか。梵場が、汗を垂らしながら全速力でシュートに追い継ぎしていた。

だが、このままでは追いつかない――伊槌止まった頭でそう判断し

た。そして、彼も同じことを思ったのか、歯を食いしばって裂帛の雄叫びを上げた。

「だけど、みんながこんなに頑張るなら……僕もやるしかないだろうがあー！」

そして。

自慢のアフロヘアを振り乱して、顔面からシュートに飛び込んだ。

「え!？」

「うお、ナイスガッツ」

薄利が、流石に驚きの声を上げる。鎌野も軽い調子だが、目を見開いて面食らった様子だ。

電閃がしたたかに梵場の顔面に激突する。その衝撃で、彼の髪は崩れ、地面に転がされながらネットに叩き込まれたが、シュートは上に逸れ、ゴールを割ることはなかった。

一瞬、ピッチ全体に静寂が訪れる。

「梵場くん！」

だが、様崎の声で正気に戻った憲戸の面々が、倒れたまま動かない梵場へと殺到し始めた。伊榎も、ふらつく足元で子鹿のように近づいていく。

「梵場！ ムチャしすぎだよー！」

「……ふ、ふふふ。マドレーヌ先輩に介抱していただけたら、頑張ったかいがありましたね」

梵場が、割れたサングラスに太陽を反射させながら、いつもの調子でおどけてみせる。かなりのダメージを負っているだろうに、気丈に笑みを見せていた。

その姿は、伊榎が今まで見てきたどの梵場とも合致しない。絞り出したかのような声で問う。

「どうして……」

「ん……なんだい?」

「どうしてそこまでして……」

その質問に、予想外とでもいうように梵場が少し硬直する。

だが、次の瞬間には肩をすくめて、さも当然のように答えてみせた。「フツ、さつきも言ったが、こんなのは柄じゃない。だけどねみんなが頑張ってる中で1人だけふざけているほど僕も愚かじゃない」

それに、と言葉を続ける。

ふらふらと頭を上げ、座った体勢で伊槌の目を正面から射抜いた。

「僕たちも、十分出来るということを君に伝えたかった」

「……」

伊槌は何も言えない。彼につく三刀屋も、梵場らしからぬシリアスな雰囲気に出しできなかった。

「君は……僕たちを信用できていないんだろう？」

「……それは」

「責めているわけじゃない。君はスペインでサッカーしてたんだ、僕たちの実力を信じれず、だから、戦術が通用しなかった後は攻撃も守備も自分1人でこなそうとした。だろう？」

伊槌は、何も言えない。

長宗我部がレフェリーと話している。試合を止めてくれ、とのことだった。こちらを心配してくれているようだ。

「伊槌、君のシュートも、サッカーへの思いもすごいものだ。尊敬するよ」

だが梵場は、否定するように首を振って言葉を続けた。

「だからといって、僕たちを舐めないでもらおうか」

しっかりと伊槌の目を見据えてそう言い、限界が来たように三刀屋に体を預けた。

「ごめんね！ 大丈夫!?!」

「フツ、気にしないでくれ……君にそんな表情は似合わない」

薄利の謝罪を、元の調子に戻った梵場がそう返す。だがその顔からは鼻血も出ており、プレーを続行できる雰囲気ではなかった。

そして、長宗我部と話し終わったレフェリーが笛を吹く。一旦両チームベンチに戻り、数分後再開するとのことだ。

伊槌は、ぐちゃぐちゃになった思考のまま、何も言えずに、鉛のような体を引きずって戻っていった。

「僕も出場ですか……」

「すまないが、僕はもう無理だからね……まあ、心配することはない
さ」

「ああ、無理しちゃいけないよ」

梵場は月並の指示により、交代することとなった。憲戸の控え選手はもう橘花しか残っていないため、必然的に彼が出ることになる。

視線を落とす橘花に、梵場が軽い様子で励ましている。本当に、先ほどまでの様子が嘘のようだった。

「鳴哉くん」

「……キャプテン……」

ベンチの端で項垂れていた伊槌に、優しい声がかかる。様崎が、優しい微笑みを携え、こちらの表情を覗き込むように見ていた。

「……梵場の言う通りだ。俺は、チームのことを考えてなかった」
「そっか」

伊槌の独白に、あくまで優しい声で相槌を打つ。自由奔放なように見えて、こういう時に気を遣ってくれる。その優しさが、むしろ伊槌をより昏く見せた。

「俺は、サツカー選手失格だ……」

「んなわけねえだろ！」

伊槌がふと溢した言葉に、重い空気をなんら気にしないで、ありえないほど大きな声が割り込んできた。

流石に伊槌も驚いてその方向へ視線を向けると、木崎が肩を怒らせてこちらへ向かってきていた。

「あんなシュートを打てる奴が失格なわけあるか！ お前はすごいだろ！」

「……だけど、俺はチームを省みなかった！」

伊槌が、頭を振って反論する。普通なら、こんな意味のない衝突をするほど彼も愚かではない。

だが、度重なるミスと何もできていない焦燥が、彼から正常な判断力を奪っていた。

そんな中放たれた伊槌の理論に、横から低い声が割って入ってくる。

「それなら、今から直せ」

靴木だった。

口数の多くない彼が突然話に入ってきたことに、伊槌が少し硬直する。だが、すぐに気を取り直した。

「もう遅いだろ……!」

「まだ試合は終わってないヨ!」

三刀屋も入ってくる。誰もが、伊槌の弱気な言葉を、頼もしい言葉で返してくる。

伊槌が目を泳がせる。何も反論できなくなってしまふ。それでも、何かを言おうと口を開こうとした瞬間、様崎が言葉を紡いだ。

「怖いんだよね?」

「……は……?」

様崎の言葉に、思考が真っ白になる。何を言っているのかよくわからない。なのに、どこか正鵠を得ているように感じる。

「次も失敗したらどうしよう、上手くできなかつたらどうしよう……それでもできなかつたらどうしようってさ。私も試合始まる時そうだったもん」

戸惑う伊槌に、様崎は言葉を重ねていく。不思議とその言葉は、伊槌の耳に焼きついていった。

「私ね、青森の方と色々あるんだよね。だから柄にもなくナーバスになっちゃって」

あはは、と彼女は乾いた笑いを浮かべる。

にこやかな表情を崩さず、どこか誇らしげに伊槌を見てきた。

「でもね、こごやっつていつも通りに戻れたよ。どうしてだと思っ?」
「……………」

伊槌は答えられない。

仕方ないなー、と様崎が優しい声で言う。子供に言い聞かせているかのような声だった。

「みとちゃんか……仲間が信じてくれたからだよ」

様崎が、近くの三刀屋へ視線を合わせる。彼女は満面の笑みで返し、様崎も破顔した。

その言葉に、伊槌が目を見開く。脳裏に鎌野の言葉がよぎった。

——周りが見えてない。

重くのしかかっていたその言葉が、どんどんと氷解していく。

「仲間を信じて、その上で失敗するのは怖いよね。直すべきところを直したのに、上手くないかなかったらやだよ。でも、大丈夫！」

伊槌にスカウトをした時のような、初めてサッカーをしたあの時のような笑顔で、様崎が伊槌の頭を手を乗せた。

「君ならできるよ！ 信じてる！」

「……！」

伊槌の体に、活力が戻ってくる。仲間の信頼が、心強く伊槌の体を巡る。

今なら、鎌野のあの言葉の意味がよくわかった。

先走ったプレーを連発し、ピッチ上で味方のことが見えていないと言の意味では無い。

こうして、伊槌鳴哉という個人を信じてくれている仲間のことが見えていないと言ったことだった。腑に落ちれば、実に簡単な話で、そんなことが分からなかった自分を笑ってやりたくなる。彼が笑みをこぼした。

「ふふっ、何キャプテンに撫でられてニヤけてんのよ！」

「……は!? 別にそんなんじゃない……」

「ん、何ー? 私に撫でられるのが好きなのー?」

ホープが笑みをこぼした伊槌を揶揄う。慌てて否定するが、先ほどの優しい笑みを一転させ意地悪く笑う様崎も、彼女の悪ノリに乗って揶揄ってきた。立ち上がり、頭を振って彼女らから距離を取る。

ベンチに戻ってきた時のような辛気臭い雰囲気は完全になくなってしまった。全員が笑い、次のことに目を向けている。

「ハッ、とりあえず自分が何すべきか思い出したか？」

「……ああ、もちろん！」

無籐が試すように視線を向けてくる。伊槌は彼の顔をしっかりと捉えて、当然のことだと宣言した。

「俺が点を取る！ チームを勝たせるために！」

「……ハハハ！ もう問題ねエみたいだなア」

満足したように、無籐が腕を組んで首を縦に振る。

自身に満ち溢れている伊槌に、木崎が肩を組んできた。人懐っこく笑みを浮かべ、だが挑戦的に笑っていた。

「おいおい、俺が点を取ってもいいんだぜ？」

「私も忘れてもらっちゃ困りますよ！」

「……はは、いい位置にいたらパスやるよ」

明風も入ってきて、3人で軽口を叩きあう。誰もが自信を持っている。こうして自分を信じ、仲間を信じていることがFWとして必要なことなのだと伊槌は思い出した。

「……盛り上がってるどころ悪いんですけど、まずは守備はどうするんですか」

宵闇が至極真つ当な意見を口にする。おどおどとしていて、今の声も震えてはいるが超えなければならぬことをしつかり認識できている。

大した奴だ、と伊槌は彼女に視線を送るが、責められていると勘違いしたのか肩をすくませて小さくなってしまった。居た堪れない気持ちになる。

横にいた久良島が、控えめにその肩を抱いて言った。

「私……今なら止められる気がします」

「たしかに、さっきもシュート止めてたわね」

久良島の強い意志が込められた言葉に、ホープも同調する。

確かに先ほど、彼女は童部留のケルベロスショットを弾いてみせた。それが彼女の自信となってくれたのだろうか。

DFたちも、拳を握って闘志を見せる。

「コウハイたちが頑張ってるからね、ワタシもホンキだよ！」

「私たちが弱めてあげるから、杏菜ちゃんは安心していいよー」

「ああ、止めてみせよう」

様崎たちの頼もしい言葉に、久良島が頬を緩める。宵闇も、いつも通り気怠げに、だがいつもとは違い目深に被ったフードの下の、綺麗な瞳を爛々と輝かせていた。

レフェリーが笛を吹く。試合再開の合図だ。

「ついに再開ですね……僕も、力を尽くします！」

橘花が気合を入れるような声を上げた。周りの部員たちも、彼の言葉を首肯してピッチに向かっていく。

「信じてるぞ、みんな……いくぞー！」

伊槌の音頭に、皆は気合いのこもった返事をあげた。

「……やっぱ似てんだよなあ」

「昔の無籐くん？」

みんながピッチに去っていく中、無籐がふとこぼした独り言に、様崎が横から現れて反応する。

少し驚いた無籐だが、ああ、と短く肯定した。彼女もくすくすと笑って首肯する。

「そうだねー、特に不器用なことか！」

「……たくっ、喧嘩売ってるのかア？」

軽めに凄んだ無籐に対し、きゃー、と様崎がわざとらしく怖がる様子を見せる。相変わらず、愉快的少女だった。

軽く息をついて、無籐が振り返る。その視線の先には、肩を強張らせている太田の姿がある。

「太田ア、よく見とけ。俺たちの勇姿をなあ」

それだけ言っただけで、彼も去っていく。太田は俯いて無籐と視線を合わせなかったが、耳をそば立ててその言葉はしっかりと聞いていた。

「私たちは諦めないよ、待ってるからね、太田くん！」

様崎もたったった、と弾んだ様子でピッチに入ってしまった。

太田は、自分たちが負けそうな試合など見たくはない。

勝ちたいと思うから負けるのが嫌になる。彼はそう考えている。負けるところをわざわざ好き好んで見るわけがない。

だが、今日だけは。

太田優は、目の前の試合から視線を外せなかった。

「……あの選手は大丈夫だったか？」

「うん、心配ありがとね」

ピッチに戻った後、キャプテンの長宗我部が律儀に謝罪に来た。梵場も気にしていた様子はないので、様崎が手を振って軽い調子で返す。

そうか、と短く言って、彼はこちらを見る。じつと顔を見られている様崎は、流石にバツが悪くなったように頬を掻いた。

「何ー？ そんな見られると照れるよ」

「いや……」

ふと、長宗我部が憲戸のメンバーを見やる。誰も彼もが、集中した表情でポジションに付いている。

感慨深げに、長宗我部が呟いた。

「いい仲間が集まったみたいだな」

「ふふ、やっぱり私の人徳ってやつだよ」

おどけた返しに、長宗我部の鉄面皮が少し緩んだ。だが、次の瞬間には目の錯覚だったかのように、いつもの機械のような無表情に戻る。

そういうことで、と背中を向けて手を振る様崎が、ふと足を止め、あちらを見ずに話す。

「——手加減なんかしないでね」

それだけ言って、返答を待たずに去っていった。

長宗我部は、その要求に少しだけ目を見開いたが、すぐに気を取り直し、コーナーキックのポジションにつく。

「……当たり前だろう」

その口元は、確かに笑みを浮かべていた。

青森のコーナーキックからの再開。憲戸はゴール前をシュートブロックができる人員で固め、カウンター一発を狙う。

だが、青森の配置に明らかな異常を認識する。

「キッカーが鎌野じゃない……?」

青森随一のプレスキッカーであろう鎌野が、ペナルティエリア内すら離れて、カウンター警戒のような立ち位置を取っている。代わりにキッカーは奇崎だ。

伊槌は訝しんだが、レフェリーが笛を吹いたことでその思考を捨て去った。

「ふう……僕のショーをお見せしたいが……」

奇崎がゆらり、と動き出す。

「仕方ない、決めてくれよ!」

そして、鎌野のクロスに勝るとも劣らない高弾道のボールが蹴り出された。

「警戒しろ!」

無藤の声が飛ぶ。全員が集中を切らさず、近場の人間にを捕まえてゴールを守るべく役割を全うする。

どこに合わせても奪える——そう思っていたDF陣の予想に反し、クロスは大きく逸れた。

「油断するな!」

靴木の鋭い声が空気を裂く。だが、青森の選手が平凡なミスをするとは思えない。必ず、何かある——そして、その予感は的中した。

ポジション争いに加わらず、完全なフリーだった鎌野樹。その足元に、ドンピシャでクロスが上げられていたのだ。

「油断はないっすか、いいっすね」

彼は笑う。笑って、完璧にクロスをトラップし、刹那の内に頭上にボールを打ち上げる。

太陽に照らされる空が黒に染まった。満月のように空に浮かぶボールを、鎌野がオーバーヘッドで蹴り抜く。残された光の筋は、天空に三日月を描いていた。

「デスサイズオブムーン！」

この試合で初めて、鎌野が声を荒らげてシュートを打ち抜いた。

伊槌は、待っている。仲間が止めて、自分にパスが出ると信じて。

「行かせん……！　クツキーウオールツ！」

「旋風陣！」

ゴール前に固まっていた靴木と三刀屋がシュートブロックを入れる。蛇行し、デイフェンスを惑わすために威力があまり高くないハイドロバイパーとは違い、真っ直ぐ打ち出され、貫通力の高いデスサイズオブムーンは鮮やかに光を帯びてクツキーウオールと正面衝突し、ヒビを入れた。

「ぬうツ……!?!」

予想以上の力に、靴木がたたらを踏む。だが、何としても止めると言う思いと、先輩としての意地がその足を地面に縫いつけた。

「へえ……やるっすね」

三刀屋の旋風陣も、クツキーウオールと拮抗するシュートの威力を削いでいく。これならいける——そう思った直後、シュートがよりスピードを上げた。

「——でも、俺を舐めんじゃねえっすよ」

ヒビが大きくなる。ビシリビシリと音を立てて、そのヒビをデスサイズオブムーンが抉り、ついに貫かれてしまった。

威力を止めていた壁がなくなっただけで、旋風陣も破られてしまい、2人とも背後に吹き飛ばされる。

「ぐあっ！」

「キャア！」

未だに強いパワーを持って、ゴールに襲いかかるシュートに対し、2人の少女が足を出す。宵闇とホープだ。両サイドからキックを放

ち、ボールを受け止めようと死力を尽くす。

「う……なんですかこのシュート……！」

「流石に……キツいわね……！」

あまりに強い威力に、逆に2人が後退を余儀なくされる。だが、意地と執念でなんとか食らいつき、少しでも力を削ろうと足に力を込める。

「うおおお……！」

奮闘する少女たちに、鎌野が面白そうに笑みを見せた。

その顔は、自信に満ち溢れていて——俺を舐めるなど雄弁に語っていた。

「ブチ抜け……！」

その言葉に押されたかのように、シュートがホープたちの足を弾いてゴールへと向かっていってしまっただけ。

「無理だった……杏菜……！」

ホープが、鋭く久良島の名前を呼ぶ。

彼女は、目を瞑って、あの黒いオーラのことを思い出していた。

ふう、と息をつく。必ず止める、そう思うたびに、心の底から何か力が湧いてくる。

あの力をイメージする。腕に全ての血を集中させるイメージを持つ。高い集中力を保って、拳を握って目を見開いた。

瞬間、久良島の右腕を、月のない夜より暗いオーラが渦巻く。彼女の意味に応えたように、彼女の中の何かが目覚めた。

「あれは……！」

鎌野が一目見て確信した。彼女は試合中少しずつ見せていた必殺技の片鱗を、ここに来て覚醒させた。あまりにもできたこの展開に、鎌野が口角を上げる。

「はあああああッ！」

か細い声を張り上げ、気合いと共に、大きく振りかぶった右ストレートで迎え撃つ。

バチバチと衝撃波を放ちながら拮抗し、長く硬直が生まれている。久良島の表情は苦しげで、明らかに余裕がなかった。

でも、と久良島が溢す。踏みしめた足に力を込めて、叫んだ。

「このシュートは……絶対……！」

——止める！

その言葉と同時に、久良島が鎌野のシュートを殴り飛ばした。

「えっ……!?!」

童部留が信じられないと言った表情で目を見開く。最高傑作と称されるほどの、あの少年の一撃を弾き返すことは、それだけ大きな衝撃を生むことだった。

「カウンター来るぞー！」

長宗我部の言葉に、全員が我に返る。

前方に殴り飛ばしたボールは、当然まだ生きている。そして、そのボールは、憲戸も交代選手、橘花桜華の元に届いていた。

「出せえー！」

走り出した伊槌が、血を吐くほどの勢いでそう言う。橘花も初めから伊槌にパスを出す気だったのか、戸惑った様子もなく素早く前方のスペースにロングパスを送った。

「伊槌先輩、お願いしますー！」

「行かせないよー！」

薄利のマンマークは解けていない。彼女が先ほどと同じように、ピツタリとついてきて伊槌の自由を奪いに来る。

薄利は伊槌のドリブルを警戒している。少し距離をとって、トラップした瞬間を引っ掛けようとしているのだと伊槌は直感した。

認めざるを得ない。この少女は非常に優れたプレイヤーで、自分一人では勝つことができないだろう。

だからこそ、一人で戦わないことにする。

「無籐ー！」

「え!?!」

背後からのボールを、伊槌がダイレクトで横のスペースに出す。そこには、無籐朱軌が全速力で走り込んできていた。通ることを確認した伊槌は、スピードを上げてゴール前に突っ込んでいく。

「行かせないしっ、絶対！」

「ハッ、何がなんでも通ってやるよオ！」

背後から童部留が追い縋ってくる。それを確認した無籐は、凶悪に笑みを浮かべてボールを右足で踏み潰し、地面に埋め込んだ。

無籐の妙な行動に童部留が様子を見てみると、突如、空からクレールン車が降ってきた。

「はあ?！」

「オラ、食らえ！」

童部留も流石に足を止めてクレーンを見上げてしまう。

重厚な機械音を出しながらクレーンが童部留の足元に突き刺さり、地面をひっくり返すと、巨大なボールが掘り返され周囲に大きな衝撃が巻き起こる。

「吹き飛べエー！ トレジャークレーン！」

「うわあ!？」

余波に巻き込まれ、彼女の体が投げ出される。童部留を無力化した無籐だが、彼自身もすでに体力が限界に近づいていた。

(チツ……やっぱラスト30秒か……)

このままではゴール前まで運ぶことができない。そう判断した彼は、逆サイドに走り込んでいる少女に最後の力でサイドチェンジを繰り出した。

「明風イ！」

「はいっ！」

無籐からの強いパスを、しっかりとコントロールし、素早くドリブルを開始する。トラップと早いドリブルから技術の高さが垣間見える。

だが、彼女の進路に、左目に引つ搔かれたような傷を持つもう一人のセンターバック、毛利龍星もうりりゅうせいが立ち塞がる。

「どいてくださいー！」

「どくわけないだろおがアー！」

大気が震えるほどの声で叫び、毛利が宙を舞う。

彼の背後には、いつの間にか東洋の龍のような生物が鎮座しており、怪しく輝く一対の目が明風を睨めつけていた。

明風も負けず、闇夜の幻影を作り出し、三日月を背になぞるように回転して突風を吹き荒ばせる。

龍の背に足をかけた毛利が、負けじと明風を指差し、鋭い声で龍に指示を出した。

「ドラゴンテールウー！」

「三日月の舞！」

瞬間、空気を切り裂く勢いで振られる龍の尾と、三日月の夜空に浮かぶ明風の突風が激突し、衝撃を巻き起こした。

風と風がぶつかり合い、火花を散らす。だが、お互いにパワーを殺し切ることができず、2人とも突風に煽られて吹き飛ばされてしまった。

「きやあー！」

「ぐわあー！」

明風も毛利も、背後に弾き飛ばされたものの、ボールは余波に巻き込まれず、その場に留まり続け、やがて落ちる。

ボールはまだ生きている。その影に迷いなく突っ込んできたのは、黒髪の少年、木崎爆音だった。

前方にもうDFはいない。絶好のチャンスだ。

「行くぞオオオー！」

「ちっ……！」

ゴールまでは遠い。ボールを回収した木崎が、シュートレンジまで詰めようとドリブルを開始した瞬間——その男が現れた。

白髪をツীবロックに揃え、青い瞳を鋭く輝かせる最後の砦、長宗我部誠志郎ちようそかべせいしろうが、背後から颯爽と現れ、木崎と対峙する。

「へっ、お前が青森のキャプテンだな？ 悪いがこのボールはやらねえぞー！」

「……奪い取るまでだ！」

その言葉が終わるや否や、長宗我部がオーラを放ち出す。そのオーラはみるみるうちに増幅していき、長宗我部自身を、壁のように、大きく見せていく。

放つ威圧感が、纏う闘気が、彼と対峙する全ての人間を萎縮させる。

不思議と、周囲の大气もピリピリと痺れているかのようだ。

「う、うお……」

瞬きの後に長宗我部を見れば、ただでさえ大きかった身長は見上げるほどになり、果てしない威圧感を放つ『壁』となって木崎の足をすくませる。

裂帛の雄叫びと共にオーラが霧散し、その力が木崎の体を叩きつけた。

「ゴールを……割らせはせん！ ラストスタンドオ！」

「うわあ!？」

激しい力の奔流に、木崎が尻餅をつかされる。力無く転がったボールは、長宗我部の足元にコロコロと転がっていった。

しっかりと足を乗せ、コントロール下に置く。いつも通りの厳しい表情で、彼は汗を拭う。

「もらったぞ」

長宗我部がやっと息をついて、心を落ち着かせる。

素晴らしい攻撃だった。パスワークと個人の力で青森附属の守備をたしかに追い詰めてみせた。

それでも、青森は絶対王者としてのプライドがある。どんな試合でも、失点を許す気はない。

「これで終わり——」

長宗我部が大きくクリアしようとした瞬間、背筋にゾクリと悪寒が走った。

寸前のところでボールを引き、キープの体勢で構える。

その瞬間、先ほどまでボールがあつたところを、様崎咲夜の足が鎌のように刈り取っていた。

足元を吹き抜けた風が、長宗我部に恐怖を染みつける。だが、次の瞬間にはそんな感情を取り払った鋭い目で、突然の乱入者を強く睨めつける。

「……」

「おっと、かわされちゃったけど……」

長い髪を風で靡かせ、白い瞳がこちらを射抜く。その瞳は、強い力

を内包していた。口元がニヤリと歪む。

その迫力に、長宗我部が改めて意識を集中する。彼の口元は、少し上がっていた。

「——後輩にあんな啖呵切っちゃったからね、もらうよー！」

「……本当に、いい仲間巡り合ったようだな！」

長宗我部がかわしにかかる。右へのステップを、様崎が得意のクイツクネスで楽勝についていき、逆にボールを奪いに足を伸ばした。

それを長宗我部が寸前かわし、体勢を整えようとする。

だが、それによって生まれた一瞬の隙。様崎が必殺技を発動するには、十分すぎる猶予だった。

祈るように手を合わせる。すると、足元から黒い球体が3つ湧き出て、長宗我部の周りを、伺うように浮遊し始めた。彼は突然の事態にも、どうにかボールをプロテクトする。

だが、隙をついた球体がボールに触れると、ボールがその中に吸い込まれる。吸い込んだ球体は他の球体を取り込み、巨大化し、長宗我部の頭上に固定された。

その様子を見た様崎が頬を緩める。そして、勿体ぶるように指を鳴らした。

「サテライトドロー！」

「ぐっ……!?!」

様崎が空気を揺らしたと共に、頭上の球体が破裂し、長宗我部の視界の全てを奪い去る。吸い込まれていたボールは破裂と共に排出され、様崎の足元に渡った。

様崎はドリブルで持ち上がる。ノンプレッシャーで上がる彼女に合わせて、伊槌も少し先を並走し、パスを待つ。足取りには一切の淀みがない。

「絶対打たせないよー！」

薄利がマークを緩めない。彼女を剥がさなければ、パスが渡ってくることはない、伊槌は理解していた。

（——みんなが俺のためにボールを繋いでくれた）

細かいステップで惑わそうとするが、彼女はこちらの動きが分かっ

ているかのように先回りしてくる。

ならば、と、いつも通りの動きとは変えて、効率を度外視した変則的な足捌きを抜きにかかる。

「行かせないっ……！」

それでも、薄利はギリギリのところまでついてきていた。

伊槌が思考を回す。必ず、突破口はあるはずだ。

(だから、この瞬間だけは、俺の力で！)

サイドをえぐる様崎にもディフェンス陣が追いついてきた。時間がない、焦りが突拍子もない考えを囁いてくる。

——だが、その突拍子もない考えこそが正解だと、伊槌は何故かそう直感できた。

そうと決まれば話は早い。伊槌は薄利を剥がすのを諦め、背負った体勢で手を挙げる。こつちを見てくれと、万感の思いを込めて、喉が張り裂けんばかりに叫ぶ。

「出してくれー！」

「……！」

気づいた様崎が一瞬逡巡する。流石に、体勢が悪すぎる気がしたからだ。

だが、伊槌の目は、無我夢中であれど諦めてなどいない——それなら、先輩のすることなど1つだ。

「いけえ、鳴哉くん！」

ふわっとした軌道のクロスが、伊槌目掛けて上げられる。最高のパスだ。口元が緩んだ。

「このくらい、私が貰っちゃおうよ！」

薄利がプレスの圧力を強めて、お前には渡さんと威圧してくる。だが、伊槌にはそんな雑音は届かない。頭の中には、すでにシュートまでの道筋しか存在しなかった。

高い軌道のクロスに対し、足元に落ちてくる前、空中で飛びつく。アクロバティックな動きで、ボールの下を叩き、回転させた。

「えっ!?」

「ぬう……!?」

マークしていた薄利も、どんなシュートにも対応できるよう用意周到の構えていた獅子豪も、空中にある内から打つのは予想外だったようだ。目を剥いて固まる2人を尻目に、伊槌に笑みが浮かぶ。

「決める……！」

着地し、再び飛び上がる。通常とは異なる、オーバーヘッドの体勢で回転するボールに足を叩きつけ、電撃を纏わせた。バチバチと、伊槌の歓喜よりも激しく電激が爆裂する。

ゴールを奪いたいのは、もちろん自分のためでもある。FW伊槌鳴哉として、復活したいというエゴがあることは否定できない。

でも、今はそれ以上に――

「このチームのために……！　唸れ！」

脳裏によぎるマドリードでのブーイングも。

絶望へと叩き落とされたシュートミスも。

今は全部どうだっていい。過去を悲観するのは、今じゃない。

今はただ、何も考えず――

「――電閃ッ！」

――打ち抜け！

放たれたシュートは、この試合で1番の一撃。

それどころか、キング・マドリードの時代を含めてなお、胸を張って伊槌鳴哉史上最強のシュートだと豪語できる。それほどの一撃が、空を裂き、紫電を散らし、ゴールへとまっしぐらに襲いかかった。

「ハハハハハッ！　面白い！　小生も昂ってきたぞ！」

獅子豪は全く怯まない。腕を高々と掲げ、右腕にパワーを集約させる。恐れなど全く感じさせない仕草だ。

そして、ピッチが抉れるほどに強く踏み込んで、真っ向から盾を叩きつけた。

「王家の、盾エエエ!!！」

紫電を撒き散らし、盾と雷がぶつかり合う。恐ろしいほどのパワーを内包した衝撃波が、ゴールネットを揺らす。バサバサと人工芝が揺れる。

――ビシリ、と盾にヒビが入る。

「ぬう……!!?」

「行け……!」

早すぎる。獅子豪は焦りを覚えながらも、どこか楽しそうに死力で右腕に力を込めた。

「根性を見せよオ！ 小生イイ！」

ビシリ、ビシリと、無慈悲にヒビは広がっていく。獅子豪が徐々に後退を余儀なくされる。踏みしめた芝はめくれあがり、激しいぶつかり合いを修飾していた。

電閃のパワーは、もはや増しているようにさえ見える。激しい光を発し、雷撃を散らして回転をやめない。どころか、回転を激しくしているのだ。

——そして、ついに均衡は破れた。

「ぬ、おおおおお!!?」

——獅子豪の右腕を弾き飛ばし、電撃の弾丸がゴールへ、深々と突き刺さる。

激しく響き渡るネットの摩擦音が心地いい。笛と共に、レフェリーがゴールを示すのはもつとだ。

オーバーヘッドした伊槌は、不恰な形で地面に叩きつけられる。青々とした日差しと、暖かい芝を、強い光が照らしていた。とても、晴れ晴れとした気分だ。

ゆつくりと起き上がった伊槌へ、アシストした様崎が駆け寄ってくる。飛びつくような勢いで来たので受け止めきれず、押し倒されるような形になってしまった。

でも——

「やったね、鳴哉くん！」

こうも無邪気に笑う先輩を、無碍にすることも出来なかった。

故に、伊槌は寝転がったまま、破顔して、親指を立てる。この記念すべきゴールを祝福するために。

「ああ……ナイスアシスト！」

伊槌が見せた笑みは、日本に帰ってきてから1番のものだった。

GOAL!!?

40分 伊槌鳴哉

アシスト：様崎咲夜

憲戸 1―15 青森附属

フットボールフロンティア青森県予選 編

9話：パルティード・ア・パルティード

「いい試合させてもらったつす。ナイスシュート」

「ああ、こつちこそ」

伊槌の得点と共に試合が終了し、お互いにピッチを後にしていく。そんな中、鎌野がゆったりとした足取りでこちらへとやってきて、伊槌へ握手を求めてきた。拒む理由など無い伊槌は、差し出された手ががしりと握る。2人の表情は明るい。

結果は1―15。大敗という言葉だけでは表現できないほどの力の差を見せられた。だが、憲戸の面々の表情には、不思議と活力が漲っている。

その理由は、やはり伊槌鳴哉にあるのだろう。

「……だいたい一ヶ月くらいっすかね」

「……？ 何のことだ？」

風に吹かれながら、唇に手を当てて思案する鎌野の言葉に反応する。チラリとこちらを見てきた少年の目は、当たり前前のことを聞く、と言いたげに細められる。

「FF予選。再戦の機会っすよ」

その言葉が、伊槌の体を電撃のように突き抜ける。

FF、中学サッカー界最強を決める仁義なき戦い。その道のりの中で、この男を、あのチームを打倒しなくてはならない。目の前のエースは、楽しげに笑っている。

大敗を受けて、身が絶望に縮み上がってもおかしくない。今まで天上の存在だった彼らの強さが、質量を伴って脳内にこびりついたのだ。むしろ、恐れる方が自然だろう。

だが、伊槌は挑戦的に口角を上げる。照りつける太陽が彼を強く照らす。

「……そうだな……楽しみにしてる。王様の称号、ひっぺがしてやるよ」

「ははは……それは、俺らに宣戦布告ってことすか？」

不思議な威圧感が2人の間に生まれる。お互いににこやかなのに、妙に息が詰まる感覚が充満し、優しく吹いていた風も動きを止めていた。

顔を合わせて、凶暴に笑みをたたえる。彼らの間には、超然とした、誰にも邪魔できない空気が広がっていた――

「おーーーーーい!!」

――はずなのだが、大声を張り上げ駆け寄る少女が、伊槌の腹に飛びついたことで、そんな空気は消えてなくなった。

「がはっ!? な、なんだ!」

「おいオマエ! オマエ名前なんてーの!」

飛びついてきた少女は、赤の混じったボサボサの黒髪を振り乱してはっ倒した伊槌を揺らす。構図としては少女に押し倒された男子であるわけだが、傍観者の鎌野はロマンチックを一端も感じ取ることができなかった。むしろ、大型犬が飼い主に戯れているような雰囲気だ。とにかく、鎌野はそれを見て爆笑していた。

「ゆ、揺らすな……! 死ぬ……!」

「はははははっ! リュー、とりあえずどいてやれっす……よつと」

「おー!」

鎌野が笑いながら少女の肩の下に手を入れ、ぐっと持ち上げる。バタバタと喜ぶ少女も含めて、柴犬を抱き上げるときのそれとよく似ていた。

息を荒らげながら、伊槌が素早く起き上がる。ただでさえ汗をかいていたのに、さらに汗でぐっしよりとしていた。

「あ、あんたはなんだ……」

「リューはリューだぞ! 早くオマエの名前も教えろ!」

息も絶え絶えに伊槌が問いかければ、鎌野にゆっくりと降ろされた少女が答えになつていない答えを返す。

流石に見かねたのか、未だに少し笑いながら鎌野が助け舟を出した。

「ははっ……こいつは鉢鐘粒閃、通称リューで、1年のFWっす。まあ

急に飛びついたのはあれっすけど、悪い奴じゃ無いんであんま怒らな
いであげてくれっす」

苦笑しながら鎌野が鉢鐘の頭に手を乗せる。んおー、と気の抜けた
声を出しながら、不思議そうに、大きな赤い瞳で鎌野を見上げる彼女は
犬にしか見えなかった。

彼の言葉を咀嚼した伊槌が、頭を掻きながら立ち上がる。試合とは
関係のない汗を拭ってから、鉢鐘に向き直った。

「ああ……リユー、でいいんだな？ 俺は伊槌鳴哉だ、よろしく」

「おおー！ 鳴哉だな、覚えたぞ！」

そう言っつて鉢鐘が差し出した手を握ってぶんぶんと上下に振り乱
してくる。正直肩が痛いのが、尻尾を激しく振っていると幻視するほど
目を輝かせる彼女に毒気を抜かれ、伊槌が微笑ましげに破顔した。そ
れはそれとして肩が外れそうだった。

暴走する鉢鐘の頭が、ペシつ、と、背後から控えめに叩かれた。驚
いた表情でそちらへ向き直った彼女だが、その人物を認識した途端、
予備動作も無しに飛びついた。

「キャプテン！ リユーに何か用事か!？」

「他校の方に迷惑をかけるな！」

飛び上がった鉢鐘を、長宗我部が空中で器用に捕まえて米俵のよう
に横に抱える。捕まえられた彼女は何故か楽しそうにはしゃいでい
た。

目の前の光景に伊槌は全くついていけない。口を開こうとして閉
じ、言葉を吐き出せない。

頭を掻いて困惑する伊槌に、長宗我部が向き直って、その力強い目
を疲れたように吊り下げながら深く頭を下げた。

「うちの部員が迷惑をかけたようだ。すまない」

「いや……俺は大丈夫だ」

なんとというか、苦勞しているらしい。生真面目そうに整えられてい
たはずの彼の髪は乱れていた。

そのまま彼らは背を向ける。鎌野が緩い調子でこちらを見ずに手
を振り、鉢鐘は未だに抱えられたまま、笑顔でぶんぶんと手を振って

きた。

「じゃ」

「鳴哉、またなー!」

伊槌も頬を緩めて振り返す。試合以上の疲れが、どっと襲ってくる感覚が全身に広がって、深く息を吐き出した。

気を緩めた伊槌に、長宗我部の低い声が耳朶を打つ。彼はこちらを見ないまま喋った。

「そちらのキャプテンに伝えておいてくれ。『いい試合だった、次も楽しみにしている』と」

その声は、いつものような無機質な低音。だが、その中に、どこか少年らしい楽しげな感情が込められているような気がした。

返答する前に、彼らは青森のベンチへと下がっていつてしまった。伊槌も、仲間の元へ歩を進める。

(あの伝言……俺たちがFF予選でもう一回当たる前提かよ)

ずいぶん買ってくれている、と伊槌は苦笑を漏らす。だが、そう思われるのは悪い気はしなかった。

穏やかな陽気が、祝福するように風に乗って、軽い足取りで歩む彼の頬を撫でた。

——青森附属との練習試合から、1週間後。照りつける日はさらに眩しくなってきた頃。

FF青森予選がとうとう目と鼻の先になり、対戦校の抽選会が今日行われる。

キャプテンの様崎と顧問の月並が代表として会場に赴き、部員たちは練習を重ねながら待つ。太田は用があると言うことで部活を欠席していた。

青森のそれと比べれば、あまりにも粗悪な土のグラウンドを、彼ら

は必死に駆けていた。

「橘花ア、走れ！」

「ハア、ハア……はい！」

靴木とマツチアツプする無籐が、息も絶え絶えに汗を垂らす橘花へ指示を送る。死にそうな声で返答しながら、彼はふらつく足取りでピッチを駆けた。

その動きに合わせ、無籐が靴木の足を掻い潜り橘花にパスを合わせる。肩を弾ませながらトラップした彼に対し、宵闇がすぐさまプレスをかけた。

「そんな疲れてるならボール渡してくださいよ……」

「いやっ、です……」

小さい体を目一杯使ってボールを奪おうとする宵闇を、橘花も体を使って抑える。彼女の小柄な体格が示すように、パワー自体は弱く橘花の技量でもキープすることができた。

だが、ここからどうすれば——迷う橘花の耳にピッチを削るように走る鋭い足音が突き刺さった。

「走ってるぞー！」

「……伊槌、先輩っ」

彼らの背後から、伊槌が一目散にゴール前は走る。呼び声に反応してきた橘花だが、宵闇を背負い、ゴールに背を向けた体勢のためパスが出せない。

だが、その瞬間橘花の脳裏にインスピレーションが巻き起こる。その直感を信じて、彼は背負った体勢のまま、ヒールで後ろの伊槌目掛けて決死のパスを送った。

「えっ、なんですかそれ……」

「……！ ナイスだ！」

マークしていた宵闇の想像を超えたパスは問題なく伊槌の足元へ転がっていく。

だが、伊槌のそのまた背後から流星のような速さで少女が空気を切り裂き伊槌に体を寄せてきた。

「そう簡単にいかないわよ！」

「ホープか……!」

とんでもないスピードで突っ込んできたホープが、伊槌の前方へ立ち塞がる。このままボールを保持しても他のディフェンスが間に合い、無理に打つてもブロックされるいいカバーだ。しかし、伊槌は動揺した様子を見せず、むしろ口角を少し上げ、軸足を突き刺し、右の足を振り上げた。

「ダイレクトで打つ気!? そう簡単にいかせないわよ!」
「止めます……!」

ホープが驚愕しながらも、予想の範囲内と言った様子でシュートコースに足を入れて切ってきた。猶予のないゴール前で即座に判断し、的確にそれを実行できる。練習試合の時も感じたが、やはり彼女もなかなかの実力を持っているらしい。

振り上げられた伊槌の足は、鋭く空を切り——ホープの足をすり抜け、真横を並走していた木崎への鋭いパスとしてゴール前を横断した。

「えっ!?!」

「よおし、来たあ!」

事前に、伊槌にボールが入ったらゴール前へ突っ込めとの指示を受けていた彼は愚直にその命令を遂行し、完璧なタイミングでフリーになることに成功した。ディフェンス陣は伊槌がパスを出すことを予測できておらず、虚を突かれたように硬直している。

「オラア!」

太陽のような笑みを浮かべ、素早くシュート体勢を取った木崎の足から、弾丸のような一撃がゴールを襲う。

空を切りゴール右側へまっしぐら飛んでいくボールを、ただ一人を除いて見送ることしかできない。

「あつ……」

そのただ一人、辛くも反応した久良島が横っ飛びでセービングを試みる。が、咄嗟のことに必殺技を使うことができず、明らかにパワーで負けてしまっている。

精一杯に伸ばされた彼女の指先を弾き、ダイレクトシュートがガ

シャン、と派手にネットを揺らした。ネットに跳ね返されたボールが木崎の足元に帰ってくる。それほど強烈なパワーを秘めていた。

「よっしゃあ!! ナイスパス伊槌!」

「ああ、ナイシユー」

元氣よく近寄ってきた木崎と軽くハイタッチをして労い合う。

燦々と輝く太陽より熱く雄叫びを上げて喜びを露わにする木崎に、伊槌が苦笑する。

「ナイスゴールです! やっぱすごいパワーですね!」

「だろ! 憲戸のエースストライカーの座は渡さねーぞ!」

攻撃側だったがボールを触る機会のなかった明風が目を輝かせて寄ってくる。木崎が調子良く威勢のいい言葉を吐き伊槌に笑いかけてくるが、伊槌は鷹揚な態度で楽しげに笑みを浮かべていた。

その視界の端で、飛びついた体勢のまま倒れ込んでいた久良島が不満げな様子でむくりと起き上がった。

「……………」

そのまま少しの間、視線を落として感触を確かめるように手を握ったり開いたりを繰り返す。そして、意を決したように伊槌たちに声をかけてきた。

「…………あ、あの。先輩方から見て、今の私のプレーで悪かったところとか教えてくれませんか…………?」

その言葉に、伊槌が目を見開く。

彼女の言葉をしっかりと頭の中で咀嚼し、飲み込んだのち、楽しげに口角を上げる。

彼は実に嬉しそうに、深々と首肯した。

「もちろん。まずはポジションニングが良くなかったと思う。俺に引つ張られすぎてた」

伊槌の指摘を、久良島は頷きながら聞いている。一言も聞き逃さないと意図ささえ感じるほど、身を乗り出して言葉を吸収していた。

伊槌がふっと、横の木崎へ視線をよこす。先輩たちって言ってたんだからお前も何か喋れ、と言外に伝えたかったのだが、彼は不思議そうにこちらを見て首を傾げていた。頭の上にハテナマークが浮いて

いたとしても不思議ではないくらい惚けた顔だ。

すつ転びそうになった伊槌だが、仕方がないので、言葉にして伝える。

「お前から見て、久良島のプレーで気になったことだよ。あるか？」

「お、俺か？ 俺バカだからあんまそういうのわかんねーぞ？」

先ほどまでの楽しいな雰囲気から一転し、そう言って狼狽える木崎だが、久良島の前髪に隠れた熱い視線に気付いたのか、ばつが悪そうに顔を歪め、唸りながらも話し出す。

「うーん……瞬発力か？ シュートに反応出来てたけど届いてなかったしよ」

「なるほど……ありがとうございます」

彼女が礼儀正しくお辞儀をして感謝を伝えてくる。伊槌は軽く片手を上げ、木崎も笑って見せて礼を受け取った。

久良島の背後から、突然細い少女の腕が肩に回される。驚いて肩を跳ねさせた久良島が振り向くと、その少女は笑顔を浮かべたホープだった。

悪戯そうに笑う彼女が、久良島の頬を突きながら言う。

「ま、あんま落ち込みすぎるといけないわよ！ ホープちゃんに任せるときなさい！」

そう言って彼女が頼もしげにその薄い胸を叩く。驚いた様子の久良島も我に帰って、ホープの言葉に苦笑している。

「あなたが止めてくれれば私たちも楽なので頑張ってくださいね……」

宵闇が皮肉めいた口調で、目を泳がせながら語る。

言葉は少し悪いが、彼女なりの激励であることはなんとなく分かった。久良島もそれを承知しているのか、少し口角を上げてその言葉を噛み締めていた。

「おい、いつまでも話し込んでんじゃねエ、もう一本行くぞ！」

「はいー」

無籐の命令に、伊槌たちが素早くポジションに散っていく。

体力に不安のある橘花が梵場と変わり、ホープと無籐が攻守を変更

して、再びミニゲームの幕が切られた。

伊槌のバックパスを、梵場が受け取りドリブルを開始した。いつものものとは少し違うサングラスを光らせながら、軽快に持ち上がっていく。

「フツ、僕のステージで踊ってくれる方はいないのかい？」

「ならば付き合ってやろう」

挑発的に微笑んだ梵場の言葉に呼応するように、靴木が壁のように進路を塞いでくる。

梵場が少し顔を歪めたが、すぐさまいつものニヒルな笑みに変わる。周囲の味方に視線をやるまでもなく、単独でのドリブル突破を試みた。

「生憎と男はお呼びじゃないですよ！ スピニングドライブ！」

地面を抉るほどの勢いで梵場が猛烈な回転を始め、コマのように靴木へと突進していく。

対する靴木は、突貫してくる梵場を見てもあくまで冷静に振る舞い、黄色いオーラを全身に迸らせた。

「クツキーウォール！」

「……………」

靴木の背後に壁が迫り出される。その余波で地面が揺れ、梵場が足を揺れに取られた。回転を止めることを余儀なくされる。尚も地震は意思を持つように、梵場の体勢を崩さんと波打つ。

「ぐっ……………」

このままでは確実に奪われる——梵場の脳裏に克明と浮かぶその事実を打ち消すように、その男がするりと斜め前方に現れた。

それは伊槌だった。彼は梵場が性格上ドリブルに拘るのは分かっていたが、いざと言う時にサポート出来るよう意識したポジションニングを取っていたのだ。

梵場は笑いながらもどこか忌々しげに伊槌を見やり、仕方ないとはかりにパスを送った。

「また僕よりも目立つだなんて…………覚えていろ伊槌！」

「知るか！」

梵場からパスと怨嗟の声を受け取った伊槌は、無籐がプレスに来る前に素早く右斜め前にスルーパスを入れる。デイフェンスに取られないよう精度を意識したためスピードはあまりなかったが、問題なく通すことができ軽く拳を握る。

そのパスを、金髪の少女が疾風のように駆け上がって足元に収めた。いい形でホープに右サイドでパスを受けられた状況となった守備側に緊張が走る。

「宵闇、プレスかけろ！」

「は、はいい……」

無籐の檄が飛び、少し慄きながらも宵闇がすぐさまホープへ足を伸ばす。だが、ホープはプレスを意に介した様子もなく、笑みを見せてむしろドリブルのスピードを上げてみせた。

「遅いわよー！」

彼女の体を、光が包んでいく。速すぎるスピードが周囲に鋭い突風を巻き起こし、立ち塞がった宵闇に光と風が襲いかかる。彼女はそのパワーに気圧されながらも、正面からホープと相対した。

そして、刹那の間に――

「ライトニングアクセルッ！」

「……え」

――光の帯が見えたかと思えば、いつのまにかホープが宵闇を抜き去っていた。

抜かれた瞬間を認識できなかった宵闇は惚けたようにその場に立ちすくんでしまう。が、ゴール前から飛んできた鋭い呼び声に意識を引き戻される。

「俺が空いてる！」

「チツ、やらせるかア！」

それは伊槌の声だ。パスを出した後も足を止めず、ゴール前に滑り込んできている。見逃さずついていった無籐がなんとか抑えようとするが、サボらず動き回って的確を絞らせない。

「俺もいるぞお！」

さらにその背後を、木崎が1人走り込んでいる。無籐が2人を見な

ければいけない状況に陥り、忌々しそうに舌打ちをする。

ホープの視線がペナルティエリア内へ向けられる。軸足を固定し、体を大きく開いてクロスの体勢を取るとともに、3人の動きが激しくなった。

そして、ファーサイドに流れると見せかけ無籐を釣り出した伊槌が急激に進路を変え、ニアサイドでフリーになる。

「チツ、ヤベエか……!」

「ホープ!」

決定的なチャンスを作り出した伊槌が鋭く呼びかける。その呼び声を認めたホープは、伊槌に視線を向けて、センターリングを放つ。

「輝夜!」

——さらにファーサイドに寄っていた明風に対して。

「私ですか!」

そのクロスに、無籐だけでなく伊槌も、明風も予想を裏切られる。遠いサイドに高く上げられたボールは少し精度を欠いているように不安定な軌道で飛んでいた。

無理をしてまで何故明風に、だが伊槌が理由を考えつく間もなく、何とか反応した明風が、足に闇色のオーラを纏い、回転しながら飛び上がる。

「はああああ!!」

「……来る……!」

それはかの日本代表、イナズマジパンのエースストライカーの代名詞とよく似ている。回転とともに増幅した暗い炎を、高く打ち上げるボールに叩きつける。刹那、闇色の弾丸が妖しく燃え上がりながら空を切ってゴールを突き貫かんと放たれた。

「ダークトルネードオオオ!」

激しく闇を撒き散らしながら進むシュートに、怖気付く様子を全く見せず久良島が立ち塞がる。先ほどの伊槌のアドバイスを肝に銘じ、FWのポジションに釣られすぎないことを意識していたため、予想外のシュートにも難なく反応することができたのだ。

「力強さを意識して……思いつき振り抜く……!」

彼女の右腕を、ダークトルネードの闇色とは違う、深淵のような真黒が渦を巻く。全身に力が過不足なく伝わるように、右腕を引いて深く腰を落とした。

これが、青森附属との激戦で、逆境の中覚醒させ身につけた、彼女だけの必殺技。

強く目を開き、闇を引いて流星のように落ちてくるダークトルネードに対し、真正面から力強く打ちつけた。

「行きます、真っ黒パンチ！」

彼女の裂帛とともに、闇と漆黒がぶつかり合う。叩きつけあった衝撃で風が巻き起こし、背後のゴールネットが激しく揺れた。

スピードに比例したパワーで突き進もうとする闇を、漆黒の拳が食らっていく。やがて漆黒が闇を包み込み、突き出される拳に先導されたように渦巻いたオーラが弾け、ダークトルネードを激しく弾き飛ばした。

「やった……！」

「うー、やっぱり一人じゃパワー不足ですねー……」

久良島が髪で隠れていても分かるほどに目を輝かせ、反対に明風は頭を押さえて落胆を隠せない様子だ。

「いやー、惜しかったわね！」

「……………」

だが、それ以上に伊槌はホープのクロスが気になった。彼がフリーになった時、ホープは確実にこちらに視線を合わせていたし、彼女も伊槌を囮に明風にクロスを送ることは簡単な選択ではなかったはずだ。

近場にいた久良島にナイスセーブ、と声をかけ、ホープの元へ歩みを進めようとした時、間の悪いことに橘花が声を上げた。

「あ、キャプテンー！」

「ん、ただいまー。いい子にしてた？」

様崎が少し疲れた様子で手を振ってこちらに歩いてきていた。出迎えるように近寄ってきた橘花に笑顔を見せ、その頭をわしやわしや撫でる。流石に橘花も顔を赤らめながらさっと離れ、様崎はそんな彼

に悪戯っぽく笑顔を見せていた。

そして、様崎の横には、何故か三刀屋も佇んでいる。確か彼女は水を取りに行つてくると言い残していたはずだ。どこか芝居がかった仕草で梵場が首を傾げた。

「おや、マドレーヌ先輩は何故?」

「水を汲みに行つたらサクヤとバツタリ会つちやつてネ! 一緒に帰つて来たヨ!」

楽しげな顔でそう言い放ち、スクイズボトルを部員たちに配り始めた。伊榎もそれをありがたく受け取り、ひとまず様崎に視線を向ける。ホープにプレーについて聞きたい気持ちはあつたが、タイミングが悪い。

水をあおりながら、様崎が疲労を声を滲ませて話し出す。

「いやー、やっぱ抽選会みたいなピリピリしたところは嫌いだね。無籐くんが代わりに行ってきてよー」

「キャプテンはあんただろうが……」

呆れた様子で彼は首を振る。ため息もついて、仕方ない奴だ時、全身が雄弁に語っていた。

その横で、木崎が待ちきれないと言つた様子で様崎に質問をぶつける。

「で、抽選会の結果はどうだつたんだ!」

その言葉に、様崎がふっふっふ、と勿体ぶるように笑い声を上げる。伊榎は早く言えとしか思わなかったが、木崎やホープ、三刀屋などはわくわくと様崎に熱い視線を向けていた。ノリのいい奴らだった。

そのままはしたなくズボンのポケットに手をつ突っ込んで、ごそごそと何かを探していたかと思えば、一枚の紙を広げてこちらに見せてきた。

「じゃーん! 1回戦は『泰山中』と当たりまーす!」

「……ふむ、泰山か」

彼女が広げた容姿には確かに、『1回戦・憲戸中vs泰山中』と書かれていた。伊榎には全く聞き覚えのない学校だったが、思案顔で頷く靴木の反応を見るに、何人かは知っている様子だ。

「泰山……去年私たちが負けたところですね」

「……リベンジって訳か」

ホープの呟きに、伊槌も合点がいく。

詳しく聞けば、泰山中は2年ほど前にできた新設校だそうだ。去年、1回戦で泰山と対戦し、3―0の敗戦を記録したらしい。

その後、泰山も2回戦で敗退したが、年々堅実に力をつけており、今年は更なる飛躍を夢見ている、との話だ。

「まあ、本当に上手い奴は青森附属に行くからあんまタレントは揃ってねエがな」

無籐が遠い目でそう付け加える。青森附属は、伊槌が考える以上にここ青森では強大なチームのようだ。

なんであれ、泰山との因縁を知った1年たちの目に闘志が宿る。無論、伊槌にもだ。

「今年は勝ちましょう……私も全力を尽くします……!」

「まあ、やるからには足は引つ張りませんよ」

「はい、僕も頑張ります!」

久良島が、宵闇が、橘花がそれぞれ決意を表明する。ネガティブにも聞こえる宵闇でさえ、頼もしい顔をしていた。

様崎も彼女らの言葉に満足そうに頷く。そして、そのまま伊槌に視線を合わせ、にこりと笑いかけてきた。

「君にも期待してるよ、鳴哉くん?」

「……ああ、俺はいつでも本気だよ」

ニヤリと口角を上げ、拳を握りしめる。

太田のメンタルや、ホープのプレー。そして純然たる実力差など、越えなければならぬ問題は数多くある。

だが、まずは目の前の試合、打ち勝つべき相手にしっかりと打ち勝つ準備をしていかなければならない。

バルティード・ア・バルティード

1試合1試合。かつてスペインで教えられたその言葉を思い出し、伊槌は軽く息をついて心を落ち着かせる。

「……必ず勝つ」

自分を受け入れてくれたこのチームで勝つ。自分に期待してくれ

る仲間たちと戦う。周囲の仲間たち見渡しながら、伊槌が再び決意を固める。

傾き始めた夕陽に照らされ、様崎を混せて憲戸中サッカー部は練習を再開した。

1回戦まで、あと少し。

10話：FF青森県予選第1回戦 VS泰山中学

青い空から顔を出し、大地に照りつける太陽。穏やかに芝を揺らす風。初夏の晴天が、今日という日を祝福していた。

——だが、今この場には、試合前特有の人々の熱気も、狂乱とすら言い換えれるあの喧騒も、全くない。

伊槌が試合会場である、とある運動公園を歩き回りながら考えていたのは、そんなことだった。

軽く見渡すと、整備されてはいるが、お世辞にも状態がいいとは言えない芝のグラウンドが目映る。その視界を塞ぐ観客など、ちらつきすらしない。

(……本当に、俺が今までいたところは、違う)

右手に視線を落として、改めて思い至る。袖を通したピンクと黒のユニフォームが目に入った。憲戸中のユニフォームだ。

キング・マドリードと比べれば、当然レベルは数段落ちているだろう。だが、後悔は微塵もない。

「お、来た。こっちだよー」

試合前だと言うのにどこか気の抜けた、少女の声が伊槌にかけられた。

少女、様崎は伊槌に向けて手を振って存在を強調しており、近くには同じユニフォームをまとったチームメイトが思い思いに体を動かしてウォーミングアップをしている。

少し遅れたか、と思った伊槌が、軽く手をあげて、少し歩みを早めて彼女たちの元へ近づいていく。

「おはよう、早いな」

「おはよ、まー気まぐれだよ」

はにかみながら様崎がそう溢す。そういうもんか、と伊槌が軽い調子で受け応え、スパイクへ履き替え始める。

しゃがむ伊槌の頭上に、影がかかった。訝しんで顔を上げた彼の視界は、太陽と自身の間に無籐が立っていることを認識する。

「今日は重要な試合だよ、分かってるだろ?」

「……ああ、憲戸の記念すべき、初の1回戦突破を見せてやる」
「頼もしいな」

伊槌の宣言を聞き、無籐は満足そうに凶悪な人相を歪める。そばで聞いていた靴木も頷いていた。

無籐が何かに気づいたようにこちらへ歩み寄ってくる。訝しむ伊槌を尻目に、そのまま彼の肩に手を置き、その後ろへ視線を向けた。伊槌も導かれるようにその先を見やれば、少し汗の滲んだホープがこちらへやってくる。試合前にルーティーンのランニングを終えたようだ。

彼女は少し息を弾ませながら伊槌に気づくと、妙に素早い動作で水をあおりながらスタスタとこちらに近寄ってきた。

「ふふ、遅いわね伊槌！ 早起きはなんとかの得って知らないの!？」
「……はは、三文だろ」

身長の関係上、見上げる形でビシツと指差してきたホープの言葉を、伊槌が苦笑しながら訂正する。

その背後からは、むくれた様子の彼女を、無籐の険しい眼光が射抜いていた。

「ホープウ……勉強してんのかア……?？」
「げ、無籐先輩!？」

慌てた様子で走り去ろうとしたホープを、様崎が抱き止めて捕まえる。暴れる彼女を抱えあげることとで輪の中に戻して、より一層目の鋭くなった無籐の前に貼り付けた。

「ははは！ 普段から勉強してねえからだぞ！」

「木崎、君は人のことを言えないだろう？」

「たしかに、勉強してなさそうな見た目ですしね」

「なにい!？」

木崎の軽口を、梵場と宵闇の2人が攻め立てる。威嚇するような声に、雷を聞いた子供のように肩をびくつかせた宵闇が小刻みに頭を下げながら久良島の手を掴む。ぼつの悪そうな表情になった木崎を、久良島は曖昧な笑みで見るとはなかった。

ぎやあぎやあとじゃれあう仲間たちの姿に、伊槌の頬が綻ぶ。マド

リードにはなかつたものだ。

この関係がサッカー選手にとって良いものなのか、悪いものなのかは伊槌に判断することは、まだできない。

そんな中でも、1つだけ確かなことは――

(このチームで勝ちたい……)

自分を拾ってくれた様崎に、出来るだけのものを返したい。そして彼女が愛しているチームにも、同じように恩を返したい。

サッカーを生業とする者にとって、サッカーで報いたいと考えることは当然のことだった。

考え込むように下を向いていた伊槌の肩が叩かれる。少し驚いて振り向くと、にこやかな表情の三刀屋がこちらを覗き込んでいた。

「イツチ、悩みゴト?」

「ああ、いや。大丈夫だ」

首を傾げながらそう問う三刀屋に、伊槌が慌てて否定する。それならよかった、と彼女が軽く髪をくしゃくしゃと撫でてくる。目を細める伊槌に対し、何故か梵場の視線がこちらを刺している気がするが、彼は努めてその感覚を無視した。

彼らの間に、乾いた音が響く。監督の月並が手を叩いた音だった。

「よし、みんな集まったな! そろそろ試合が始まるぞ!」

「もうそんな時間ですか……」

橘花が虚を突かれたように言う。緊張しているのか、彼は先ほどから少し落ち着きがなかった。

月並の言葉を受けて、伊槌も弾かれたように公園の時計に目をやる。すれば、たしかにもう試合開始の時刻に迫っていた。長針が刻々と始まりへと向かっていく。

それを認めた彼らの間にはえも言えぬ緊張感が漂いはじめる。明風が拳を握り、ピツチに視線を投げかけた体勢で口を開く。

「やつぱり……ちよつと緊張しますね……」

言葉はないが、空気が彼女の言を肯定する。生唾を飲むことも憚られる張り詰めた空気の中で、様崎が突然肩を組んできた。

「円陣しよ! みんなでさ!」

「おお、良いっすね！」

驚いた伊槌を置いてきぼりに、いの1番に乗った木崎が、伊槌の空いている方の肩に腕を回す。為すがままの伊槌の顔には、微笑みが浮かんでいた。

彼の動きに背中を押されたのか、他の仲間たちもどんと輪になって肩を組み始める。伊槌の中に、頼もしい何か芽生え始めている。

周囲の仲間たちの顔を見渡す。伊槌のように、勝利への自信を滾らせる表情も有れば、萎縮して自信なさげに目尻が垂れている人間もある。

「……みんな、勝つつもりなんだね」

自信なさげな表情の筆頭格である太田のそんな呟きを、伊槌の耳は抜け目なく拾った。

反論したい気持ちも山々だったが、今はそんな場合ではない。その思考はプレーで覆す。

やはり、チーム全員が同じ方向を向いているわけではない。だが、伊槌の心は当に決まっている。

（俺は必ず——）

ぎり、と奥歯を噛みしめる。決意を確認するかのように、爛々と目をギラつかせながら、強く。

きよろきよろとあたりを覗き込むように見ていた様崎が、合点が行ったかのように、つま先を地面に叩きつけた。

そして、鈴を転がすような声が響く。

「楽しんで行こう！」

『おおー！』

その雄叫びは、抜けるような青い空に吸い込まれ、天の彼方に木霊した。

伊槌が、ピッチのすぐそばで深呼吸を繰り返す。久しぶりの公式戦は、嫌が応にも彼の心臓を高鳴らせていた。緊張の動悸も、興奮の拍動も心地がいい。初夏の暖かい風より熱い体を落ち着かせようと、深い息を意識する。

そこに、芝を踏む音が耳朶を打った。集中して落ち着こうとしていたからこそ気づいた微かな音。その音源へと、目だけが向かっている。

「フフ……」

そこに現れたのは、意味深げに笑う少女だった。

肩にかかった銀髪に、右が黒、左が金の特徴的な目をしている。体格は良くなく、細身の少女ではあるがその立ち姿はしっかりと存在感を放っていた。

だが、伊槌が強く興味をそそられたのは、彼女の容姿ではなく、その服装にあった。

「泰山中のユニフォーム……」

目に焼き付いたのは、赤を基調として、袖など部分的に白があしらわれている彼女のユニフォームだ。初夏だと言うのに何故か長袖と手袋をつけている暑そうな格好なのは置いておく。

裾に9の番号が記されたズボン、そして右腕に巻かれた腕章を見るに、彼女が泰山のキャプテンなのだろう。

伊槌が彼女の正体に当たりをつけると、少女は口元を隠しながらクク、と笑い出す。その仕草は妙に芝居がかっていて、違和感を覚えた。

「貴様が伊槌鳴哉だな？」

「ああ、そうだが」

少女の瞳が、女子らしく少し高い、だが強い声とともにこちらに向く。伊槌は怖気付くことなく短く頷き首肯した。

肯定を受けた少女が、花開くように笑顔を浮かべる。先ほどまでの取り繕ったような感覚は鳴りを潜め、純粹に嬉しげな様子だ。その笑みを見た伊槌の脳裏に、ふと、スタジアムでファンと対面した時の笑

顔が思い起こされた。

「はは……」

微笑ましげな伊槌を見た少女が、ハツとした様子を見せ不敵に笑って口元に手を当てる。その頬には少し朱色が差していた。

気を取り直すように、咳払いをしてから再び口を開く。

「わ、我は泰山中キャプテンの棗なつめりゅうか龍華りゅうかと言う者だ！ 同じFWとして、貴様との対戦は楽しみにしていた！ せいぜい我を楽しませてみよう！」

ビシツ、と擬音がつくほどのキレでポーズを取る。左手で顔を半分覆い、右手が左腕の肘を支えるかのように胸の前に置かれている。とても、かっこいいポーズだ。

愉快的少女の宣戦布告に、伊槌が口角を上げる。決して面白がっているわけではない。

「ああ、いい試合にしようぜ」

そう言つて、右手を彼女に差し出す。握手の誘いだ。

きよんとした表情でその手を見ていた棗だが、数秒して意図に気づいたのか、頬を緩ませながら、律儀に手袋を外してその手を握る。

「フフ……こちらこそ、楽しい試合を期待している」

棗は不敵な笑みを絶やさず、伊槌の手をしっかりと握る。

数秒の後、どちらがというわけでもなく離れた2人は、闘志に滾つた視線をぶつけ合いながらチームの元に戻って行く。吹き抜けた風が伊槌の熱い頬を撫でた。

互いに相手に背中を向け、試合へと思考を進める中、ふと伊槌の耳が、めざとく音を拾った。

「えへへ……握手してもらった……」

伊槌の胸が、少し暖かくなった。

憲戸中スターティングメンバー（4―4―2）

――木崎――伊槌――

――明風――――梵場――

――無籐――靴木――

三刀屋――山本
――様崎――太田――
――久良島――
泰山中スターティングメンバー（4―4―2）
――鈴木――棗――
――和泉――荒木――
――中村――気村――
内田――廣瀬
――甘塚――関川――
――足利――

「……泰山は去年とだいぶメンバーが変わってる。何してくるか予測
ができねえ」

「だから、前半は特別なことしないで、サイドを軸に行くよ！」

ポジションに散らばる前に、無籐と様崎がそんなことを言う。最近
の練習でも特殊な特訓は積んでこなかったため、予想できていたこと
だ。

明風がうんうんと頷いて様崎の言葉を咀嚼する。

「サイドってことは、基本は私と梵場先輩のドリブル突破ですか？」

「それで、最後に俺が決める！ 分かりやすい戦術だな！」

明風の言葉に無籐が手をあげて肯定の意を返す。木崎の軽口に梵
場が笑みを見せていた。

「俺たちが守っている。お前たちは気にせず攻撃に専念しろ。そうだ
ろう、太田？」

「えい！ あ、うん……そうだね」

太田は、やはりというべきか、いまだに萎縮しているようだ。難儀
な問題だな、と伊槌はため息をついた。

時間が来た。無駄口を止め、木崎と伊槌の2人が、ボールがセット
されたセンターサークルに収まる。前半は憲戸ボールからだ。

伊槌の、日本での初めての公式戦。歓声も、観客もない試合だった
が、今までのどんな試合よりも胸が高鳴る。その中でも、努めて頭は
冷静な状態を維持していた。

ふと、棗と目があつた。彼女も気づいたのか、先ほどのように不敵な笑みで挑発してくる。

(まずは様子見……お手並み拝見と行くか……!)

そして、主審の笛が高らかに吹かれ、青空に吸い込まれて行く。試合開始だ。

木崎が伊槌に軽くボールを叩き、すぐさま反転して真後ろの無籐へパスを送る。少し状態の悪い芝のせいか、パススピードが予想よりも遅かった。留意しておかなければならないことが増えた煩雑さに、伊槌が舌打ちをしそうになつた瞬間――

――泰山の選手たちが、疾風のように憲戸陣内へ侵入してきた。

「!」

パスを出した瞬間、FWの棗、鈴木をはじめとし、サイドのMFたちも一気呵成に敵陣に切り込んでいく、積極果敢な猛プレスに、伊槌も、無籐も驚きを隠せない。

特攻のように全員でボールを奪いかかるこの戦術は、間違いない。

「ハイプレスだ!」

「フツ、気づいたところでどうにもできぬ!」

「チツ、キャプテン!」

棗の突進のプレッシャーに押された無籐が、すぐさま反転してCBの様崎へボールを戻す。パスを受けた様崎にも、間を置かず泰山の選手たちが果敢にチェイスしていく。

奇襲にも等しい泰山のハイプレスに、憲戸のフォーメーションは崩されろくなパスコースがない。

(いや、キャプテンなら……!)

孤立した様崎に対し、FW鈴木が狙い通りというような、迷いのないプレッティングを行う。その顔には獰猛な笑みが浮かんでいた。

「もらった!」

「そんな簡単にはあげられないかな!」

瞬間、様崎を縛る重力が消え失せる。ボールも、彼女自身も中空に浮き上がり、空を泳ぐように様崎が鈴木の上を飛び越えた。

「リブバインド!」

「っ！」

様崎が鈴木を完全に置き去りにする。DFでありながらチーム随一のボールコントロールを持つ彼女にとって、この程度は造作もないだろう。伊槌は賞賛を込めて笑みを浮かべた。

抜き切った彼女の視界は開け、無数のパスコースが彼女を出迎えている。

——普通ならば。

「掻い潜ったと思ったか！」

「うえ!？」

「何!？」

無籐についていたはずの棗が、いつの間にか様崎の着地地点へと走り込んでいた。その背後からは無籐も追ってきてパスコースを作ろうとしているが、棗が体を入れて切ってしまっている。

真剣な表情で、されど子供のように無邪気な笑顔を弾けさせながら、棗がボールにアタックを仕掛ける。

「やばっ……!」

「今度こそ貰ったぞ!」

着地で体勢を崩していた様崎が、簡単に棗にボール奪取を許してしまふ。伊槌も急いで戻ろうとするが、流石に距離がありすぎる。

もう1人のCBである太田もどうかコースに体を入れようとするが、その足は重く、到底追いつかない。ペナルティエリア外とはいえ、棗がゴール前で完全なフリーだ。

「フッ、受けるが良い、我が必殺技!」

「……止めます……!」

ボールを奪った棗がすぐさまシュートの体勢に入る。

左足を強く踏み込み、右足を大きく振りかぶると、その背後に青い鱗を持つ赤い目の竜が踊るように出現した。棗と同じように、好戦的な笑みを浮かべている。

「あれは……」

振りかぶった足を、渾身の力で叩きつける。青いエネルギーがボールに集中し、そして、竜を背に空気を切り裂く。凜猛な雄叫びのよう

に、そのシュートは放たれた。

「ドラゴンツ、クラッシュシュート！」

強烈なシュートがゴールへ突き進んでいく。だが、対峙する久良島は慌てない。息を吐いて、右腕に神経を集中させる。

刹那、夜の闇より深い黒が、渦巻くオーラとなつて彼女の右腕に絡みつく。棗のシュートにも劣らぬパワーが内包されていることは、遠目で見ている伊榎にすら分かった。

「はああああ……！」

「貴様も必殺技を……！ しかもかつこいい……！」

棗が久良島の必殺技を目の当たりにして目を剥く。彼女を尻目に、久良島が歯を食いしばりながら、渾身のストレートでドラゴンクラッシュュを真正面から迎え撃った。

「真つ黒パンチ……！」

竜の顔面を、漆黒の拳が殴りつける。目に見えない力が弾け合い、周囲に強い衝撃が走った。

ドラゴン は回転を止めずその拳を喰らいにかかったが、パワーに凶抜けている久良島は意に介した様子もない。数秒の拮抗の末、漆黒が弾け、拳の勢いととも にシュートを遠く弾き飛ばした。

「ナイスキープァー、アンナー！」

「くっ、遠すぎたか……！」

奇襲にも等しいファーストシュートを止められた棗は唇を噛み、悔しさを露わにしている。三刀屋の言うように、この場面での失点を防いだのは大きい。

久良島にパンチングされたボールは、芝を撫でながら低空でピッチを縦断している。必殺技とはいえここまで殴り飛ばせるのは彼女の果てしない能力を暗示しているだろう。

そして、そのボールは、センターサークルでポジションを取っていた伊榎の足元に収まる。

「よし、カウンター……!?!」

泰山のハイプレス、あれは諸刃の剣だ。

前に人数をかける都合、こうして一気に前線にパスが通ってしまえ

ば一転してピンチが訪れる。

伊槌もそのセオリーに従い、陣形が整わないうちに攻め切ろうと、ボールを受ける寸前素早くターンして前を向いた。

そこには——今にもボールを刈り取らんとしてくる、MFのきむらゆうと気村裕斗の姿があった。

「あぶねっ……い！」

「うおっ、かわされたか」

冷や汗をかきながらも、冷静にボールを引いて足をかわす。危機は脱したが、まだ抜けたわけではない。伊槌は舌打ちしたい気分だった。

目の前でしたり顔を披露する黒髪の男も、伊槌と同じようにセオリーで動いていた。

攻撃時にも、カウンター警戒の為に自陣にDF以外の選手も残す。当たり前のことだが、これをしているのとしていないのでは守備が格段に変わる。DFだけでは守りきれないスペース、DFが動くことで出来てしまうスペースも、もう一人がいれば埋めることができるからだ。

「ちっ……だけど一人くらいなら！」

「来るっほいじゃん……い！」

客観的に見て、この場で一番実力を持つのは伊槌だ。ならば、この局面で勝負を仕掛けないわけがない。

ボールを右に持ち出す。その動きに釣られて、右斜め後ろにバックステップを踏んだ気村だが、そのせいで足を必要以上に開いてしまう。

「そこだー！」

伊槌はそれを狙っていた。持ち出したボールを素早くアウトサイドで引つ掛け、彼の股下を通して抜き去る。

突然の仕掛けに、気村は見送ることしかできない。

「股抜き……い！ やるなあ」

でも、という気村の声が、伊槌の耳を叩いた。

その言葉に引つかかりを覚えながらも、伊槌は気村を抜き去る。

だが、気村の体で隠れていたその背後からは、CBのはずの甘塚音夢あまつかねむがオーバーラップを仕掛けて、伊槌の眼前に迫っていた。

「なっ……!?!」

「やっぱ来たっ……」

いつのまに、なんて言う暇もない。

相手を抜き去り、少しだけ気が緩んでいた伊槌はその動きに反応できない。黄緑色のサイドテールを揺らしながら、甘ったるい声が彼の耳朶を打つ。

「眠たくなっちゃええ……ナイトスリープ……」

彼女の声が入ってきた瞬間、伊槌の意識が混濁し始める。周囲が暗くなり、足元がおぼつかない。目の前もかすみ出す。自分が極大の眠気に襲われていることを、遅れて理解した。

「くっ……」

堪えきれず、つい膝をついてしまう。出来てしまった大きすぎる隙を逃すはずもなく、甘塚にボールを奪い去られてしまった。

うずくまりながら、恨めしそうな目でその背中を追うことしかできない。彼女が離れるにつれ鮮明になる意識に焦燥を覚えつつ、声を張り上げる。

「悪い……! 守備固めろ……!」

「ふわぁーあ……パス行くよ……」

伊槌の小さな叫びは虚空に吸い込まれ、甘塚が緩いロングパスを前線に送る。鈴木と太田の辺りにアウトに送られ、体格に劣る棗はこぼれ球を回収できるように虎視眈々とポジションを取っている。

「太田ア、奪え!」

「う、うん……!」

センターサークルから上げられた優しいロブパスが、空中で憲戸のペナルティエリア内に侵入する。太田の身長なら、冷静に対応すれば簡単にカットできるボールだ。彼もそれを理解しているのか、しっかりと頷く。だが、その顔はどこか不安げだった。

ボールが落ちてくる。タイミングを合わせて太田の巨体が地面から離れ、ヘディングでボールを跳ね返す——はずだったが。

ボールは、太田の頭を掠め、ペナルティエリア内に落下した。

「あつ……！」

「まずい……！」

靴木がそう漏らす。ペナルティエリア内での痛恨のミスを、泰山は逃さなかった。太田と競り合っていた鈴木が、素早くシユート体勢に入る。ゴールまでの距離は、近すぎるくらいに近い。

「よっしゃ、行くぞー！」

「させません……！」

だが、ここで久良島が好判断を見せた。ペナルティエリアでボールがこぼれた瞬間、すぐさまゴールを飛び出し、鈴木が打とうとしているその足元に素早く滑り込んでボールをキャッチしたのだ。

鈴木は突然のことで振り上げた足を引けず、久良島ごとボールを蹴ってしまい、ファールの笛が吹かれた。どうにかプレーを切り、憲戸の面々は緊張の糸が切れたように息をつく。

「杏奈！ 大丈夫!？」

「はい……私はなんともないです」

故意ではないとはいえ蹴られた久良島を心配して、ホープがすぐさま駆け寄る。本当になんともない様子の久良島は、むしろ過剰に心配してくるホープを落ち着かせようと四苦八苦していた。

ざく、ざく、と芝を踏んで無籐がゴール前へ詰め寄る。その視線の

先では、太田が青い顔をしていた。

「つまんねえミスだぜ、太田ア。集中しろオ」

「ご、ごめん……」

「まあまあ、点は取られなかったんだしあんま責めないであげてよ」

その低い声を不機嫌そうにさらに低くして、太田に顔を近づける。すっかり縮こまってしまった太田を見かねて様崎が助け舟を出したところで、無籐も鼻を鳴らしながら距離をとった。

やっとゴール前に到着した伊槌も、会話に加わる。

「まだ試合開始から5分も経ってない。落ち着いていこう」

「そうですよ！ これからは私たちのターンです！」

伊槌の言葉に、明凧も被せて自分の胸を叩く。攻撃は任せろ、とで

も言いたいのだろう。可愛い後輩の言葉に、様崎が笑みを浮かべる。無籐も凶悪な人相を少し歪めて笑みを作り、ポジションに戻っている。伊槌たちもそれに倣ってさっさと前線に上がっていった。

憲戸の面々が散らばっていくのを確認した主審が、笛を吹く。試合再開の合図だ。

「試合再開だよ、気張ってこう！」

「おおっ！」

様崎の檄に、数人が気合の入った声を返す。その言葉とともに、久良島のゴールキックが高く打ち上げられた。

同時に、最前線の伊槌に甘塚が、木崎に関川がピッタリとマークする。少し動いても、ポジションを気にせずしっかりとついて来た。

「マンマークか……」

「面倒くせえな！」

木崎が悪態をつく。だが、伊槌たちにつく分には構わない。ボールを運ぶのは自分たちではないのだから。

久良島のパスは靴木に渡る。すぐさま泰山の前線が先ほどと同じくハイプレスを繰り返すが、靴木は1度受けた戦術に狼狽するほどヤワな精神をしていない。

「行け、梵場！」

「了解！」

すぐさまサイドにパスを散らし、アフロヘアを揺らしながら梵場がボールを受け取る。サングラスに反射した陽光が頼もしい。

だが、泰山も黙ってはいない。ボールホルダーの梵場に、サイドハーフの和泉がすぐさまチエックする。

「行かせないよ！」

「フツ、生憎男に興味はなくてね……DFの子猫ちゃんとの対面を所望するよ」

梵場の世迷言を無視して、背後から和泉が体を当てる。よろけた梵場の隙を見逃さず、ボールに足を出す。崩れた体勢の中でも華麗にボールを操りロストを許さない。

そして、体が離れた一瞬。梵場がこの時を待っていたとばかりに二

ヒルに笑みを浮かべた。

「スピニングドライブさー！」

「なにっ……！」

梵場が激しいブレイクダンスを披露する。そのままコマのように縦横無尽に回転しながら、和泉を置き去りにする。

「くっ……だけどー！」

泰山のプレスはこれだけでは終わらない。いつの間にか詰めていたボランチの中村が梵場に素早くプレッシングをかけてきていた。体勢が整い切っていない梵場が抜くのは、非常に難しいだろう。

「ドリブル突破は愚策だよー！」

「フツ……果たしてそうかな、子猫ちゃん！」

女子の中村にプレスをかけられたことで明らかに声のトーンが変わった梵場が、彼女の手を取り、紳士のように踊り出す。

「シャルウィダンス……私と踊りましょう」

「な、何……!?!」

顔が引き攣っている彼女を巻き込み、そのまま流麗に、美しく、白鳥のように彼女と素晴らしい踊りを披露する。さながらそれは美女と野獣というべき出来だった。

つかの間のダンスのフィニッシュとして、中村をその場でフィギュアスケートのように回転させ、彼女を抜き去った。

「ふう……楽しい時間は一瞬だね」

名残惜しそうに背後に意識を向ける梵場に、サイドバックの内田が急いでプレスをかける。流石にこれ以上の突破は体力的にも厳しいものがあつた。

「全く、元気だね」

「これ以上はやらせない！」

疲れたようにため息を漏らした梵場に、勢いよくDFが突っ込んでくる。だが、その瞬間、彼らの横を、疾風のようにひとつの影が通り過ぎた。

「フツ、いいところに！ 君のスピードで全てを切り裂くんだ！」

「よーし、行くわよー！」

その影は、オーバーラップで上がってきたホープの姿だった。マークを置き去りにするほどのスピードで最終ラインから飛び出してきた彼女にボールが渡る。SBが飛び出したおかげで右サイドはガラ空きになっており、絶好の場面だった。

ホープの動き出しに連動し、伊槌たちも激しくポジショニングを取り出す。

「こっちだ……！」

「行かせないよ……！」

「しつげえなこいつら！」

「点はやれねえよ！」

ゴール前で混戦が始まる。木崎の言うように、DFのマンマークが予想以上にキツイ。団子状態でポジションを取っていても罅があかないだろう。だが、伊槌にはゴールまでの道筋がすでに見えていた。「まだまだ……」

ホープがサイドを抉ってクロスの体勢に入る。その瞬間、前に入り込んでいる甘塚の横をすり抜け、ニアサイドに一気に詰める。

これこそが伊槌のストロングポイントたるオフ・ザ・ボールの動き。ボールを持っていない時にこそ、伊槌は真価を発揮する。

突然の動き出しに反応できず、伊槌は完全にフリーの状態を作り上げた。

「出せ！」

「やべえ、誰かつけ！」

GKの足利あしかが一鉄も焦った様子でDFに指示を出す。だが、今はこの2人以外にゴール前に人はいない。

打てる、そう確信した伊槌が、声帯が潰れんばかりに声を張り上げてホープを呼ぶ。その声に反応したホープは、伊槌を見やり、そして

「行けえ！」

——ドフリーの伊槌を無視して、混戦から抜けたファーサイドにポジションを取っていた明風にパスが送られた。

「クソ……！」

「また私ですか!？」

これにはDF陣だけでなく、伊槌と明風すらも驚きを隠せない。びっくりした明風だが、すぐさま思考を切り替え、闇色の炎を足に纏って、回転とともに空へと昇る。そして、増幅した闇のエネルギーを、高く上げられたボールにダイレクトで叩きつけた。

「ダークトルネードオ！」

「へっ、来たな……い！」

足利が笑みを見せながら闇のシュートと対峙する。彼はその場でぴよんぴよんと軽くジャンプをしながら、機を伺う。

そして、シュートが狙い澄ました右の隅にコースを捉えた瞬間、待ってましたとばかりに、足から飛びついた。

「シールドボレー！」

「はあ?！」

木崎がその技に驚きの声をあげる。それもそうだろう。

何故なら、彼はGKであるにもかかわらず、腕ではなくボレーの形でセービングを試みたのだから。それも、咄嗟の判断ではなく、整った状況の中でだ。

「へっ、GKが足を使っちゃダメなんてルール……どこにもねえだろうが！」

その雄叫びとともに、足利のボレーが明風のシュートを弾いた。勢い余ってサイドラインを割り、憲戸のスローインとなってしまったものの、たしかに足でセービングしてみせた。

「うそ、ほんとに蹴り返された！」

明風も驚きの声をあげる。信じられないと表情が雄弁に語っていた。手を使わない異形のGK、足利。泰山には個性的な選手が多いようだ。

そんな中、伊槌は感情の読めない表情でホープに歩み寄っていく。能面のような、怒っているようにも見える表情の伊槌に、ホープが少し腰の引けた体勢で伊槌を見上げる。

「ご、ごめん。ちよつとミスっちゃったわ！」

「……おう、お前のスピードは必要だ。次は頼むぞ」

「え、ええー！」

それだけ言つて、伊槌はホープから視線を外した。

ホープが絶好のポジションを取る伊槌を無視して他の選手にパスを出したことは、前もあつたはずだ。伊槌にはその意図が読めない。

だが、なんとなく、その『意図』を解決しなければ、この試合には勝てないような、そんな気がした。

「……違うな、今は集中しろ」

伊槌が頭を振つて思考を振り切る。まだ試合は始まつたばかりだ。

前半10分

憲戸 0―0 泰山

11話：拮抗勝負

「木崎、こぼれ球！」

「分かってるぜ、オラァ！」

憲戸陣内から鋭く放り込まれたロングボールが、運良く泰山ゴール前にこぼれる。伊槌は甘塚にピツタリとマークされてしまっているためにそのボールに反応できなかったが、無秩序な動きでマークを剥がしていたもう1人のFW、木崎が抜け目なくボールを収める。

そして、そのまま髪入れずに右足を振り抜く。まだ多少距離はあったが、DFが寄せてきていたこと、そして何より、FWとしてシュートしないという選択肢は、木崎の中に存在しなかった。

「キーパー……お願い！」

甘塚が、相変わらず眠そうで甘ったるい声をあげてGKの足利へ檄を飛ばす。それを受けた足利は、へつと笑みを浮かべて鋭く空を切るシュートに、正面から相対した。

「へつ、キックvsキック！ 俺の真骨頂ってやつを見せてやるぜ！」

改めて気合を入れるように口にし、腰をしっかりと捻り、シュートを蹴り返すような、猛烈な勢いで右足をボールに叩きつける。

「うおおお、ブチ抜けえ！」

「すげえパワーだけど……こんくらいなら！」

木崎のパワーは伊槌と比べても遜色ないものであるが、整っていない体勢、そしてゴールから離れた場所で打ち出されたシュートに押し負けるほど、彼は柔なGKではない。一瞬の拮抗を生みつつも、しっかりとシュートを弾き飛ばし、SBの内田へのパスへと繋げる。

「ああつ、止められちゃった！」

「チツ、守備切り替えろ！」

こぼれ球を詰めようとしていた明風の横をパスがすり抜け、一転して泰山の攻撃に変わる。忌々しげに舌打ちをする無籐の言葉に従って、前線の面々も素早く近くの選手へチェックを怠らない。

そんな中、伊槌は守備に奔走しているために多少汗を垂らしながら、苛立ちを隠せないでいた。

(前半20分か……お互いにシュートまで持っていけないせいでパツと見拮抗した展開だが……俺たちの不利だな)

あくまで冷静に、伊槌は試合の流れをそう読む。

今の木崎のシュートが、両チーム合わせて4本目のシュート。互いに決定的な場面を作れていない状況ではあるが、伊槌は常に危機感を抱いていた。

自分がボールに触れていないのもそうだが、それ以上に、憲戸は攻守ともに噛み合っていない。彼はそう睨んでいる。

「オラァー！」

「危なっ、ひとりワンツート！」

内田からパスを受けた気村に、無籐が素早いプレスを見舞うが、慣れた動作で放たれたドリブル技に突破を許してしまう。妙にへらへらと釣り上がった気村の口角に、一抹の苛立ちを覚えた。

しかし、今まさに抜き去られた無籐に特段慌てた様子はない。不審に思った気村が少し身構えると、突如その眼前に壁が聳える。

「通さん」

「ナイスカバーだ靴木イ！」

DMFの位置で動き回る靴木が、彼の目の前へどっしりと構える。守備に不安がある明風と梵場を擁している中盤も、あの3年生コンビのお陰で堅固なフィールドとなっているが——問題はそこではない。

予測していた気村は、靴木にアタックされる前に背中を向けてボールをプロテクトする体勢に入る。

「無理はしない、ってね」

靴木からボールを守りながら、右サイドにボールを散らす。パスを受けたサイドハーフの荒木もボールをワンタッチで背後のSBに叩いてボールを安全な場所へと戻した。

その選択が意味することに、伊槌は歯噛みして声を荒らげる。

「ロングボール警戒しろ！」

マークされている甘塚へのパスコースを消しながら、腕を振るってDF達に警鐘を鳴らす。

泰山はロングボールを放り込む時、この試合中一貫して狙っている

一点がある。あの男の頭上だ。

「来るよ、太田くん！」

「う、うん……！」

S Bから最前線へ迷うことなく送られるボールは——太田の守備するエリアへと一直線に向かつていく。

「どけっ！」

「う……どかない……！」

太田と競り合うFWの鈴木が、激しく体をぶつけて吹き飛ばそうとするが、太田の恵まれた体格を弾き飛ばすことは難しい。だが、それでも一瞬太田の動きが止まってしまう。

その隙は逃さないとばかりに、鈴木が太田の前に入ってボールを収め、背後の味方に上がれと指示を送る。

「あっ……！」

「っしや、来いお前ら！」

「チツ、またか！」

この試合、例のミスをしてから太田の守備は、すこぶる精彩を欠いていた。それを抜きにしても、鈴木はロングボールがよく収まる。面倒だ、と感じながらも、さっさと伊槌も自陣へと踵を返し足を回転させていた。

鈴木が背後から上がってきた気村へボールを渡す。優しいボールを難なくトラップし、次のプレーに移ろうとした彼だが、その目の前には、いつの間にか、憲戸の10番がすぐそこまで迫っていた。

「キャプテン！」

「うぐっ、相変わらずプレスが早い……！」

飛ぶような速度で目の前に降り立った様崎が、気村と正対する。彼は相変わらずのニヤけた表情をさらに深くして、冷や汗を垂らした。

「もらうよっ！」

様崎も笑みを浮かべながら、祈るように手を合わせる。円を描くように腕を振るえば、彼女の足元から3つの球体が出現し、気村を威嚇するように周囲を漂い始める。

明らかな異常に、半身を下げて身構えた気村に対し、球体が一気呵

成に彼へと襲いかかった。

「サテライトドロロー！」

「うわあ!？」

球体がボールを搔つ攫い、頭上で爆発を起こして気村からボールを奪い取った。流石の守備に、伊槌も胸を撫で下ろす。

だが、それもいつまで続くかわからない。太田のカバーに入っているということは、彼女のポジションはガラ空きになってしまっているということでもある。いつまでもそこを見逃してくれるほど、泰山も甘くはないだろう。

「先制点を奪う……!？」

拮抗した試合では、何より先取点が重要な意味を持つ。お互いに決め手が見つからない試合では、1点のリードは心理的に大きく作用してくれるものだ。伊槌は軽く息をついて、横目で敵陣に突撃する木崎を視認し、バランスをとりながら前線に上がっていく。

「無籐くん！」

「すぐに奪うぞ！」

様崎が無籐に縦パスをつける。が、出した瞬間に棗の指示を受けた泰山の選手たちが群がるように猛烈なプレッシングを開始し、あつという間に無籐を囲んでしまう。

「……ハッ、俺も舐められたもんだなア！」

だが、無籐は慌てない。むしろ、獯猛に笑って戦意をたぎらせる。

泰山のMFが2人がかりで、無籐のボールを奪いにかかると飛びかかる。しかし無籐は体を使ってボールをプロテクトし、2人を抑え込んだ状態でキープ。なんとか足を伸ばして奪おうとするも、無籐のパワーに体幹を揺らされて狙いが定まらない。

「ぐっ、パワーあるな……!？」

「ハッ、お前らがヒョロいだけだろ！」

無籐の煽りに、泰山MFの2人が青筋を浮かべてより強引に奪いにかかる。それでも手をこまねいている状況に痺れを切らし、靴木のマークを捨てて気村も突っ込んできた。

「流石に3人がかりはキツイんじゃない?？」

「ああ、そうだなア。無理だろ」

にべもなく、無籐が答える。その答えに、氣村が癖になっているニヤけ面を不審げ顰めたが、すぐさま思い至ったのか、たたらを踏んで迷いを見せる。

「まずいか——」

「もう遅エ！ 靴木イ！」

無籐のしてやったりと言った感情が滲み出た声と共に、氣村のマークを外れ、フリーの状態で待ち構えていた靴木へ強烈なパスが通る。そのパスを待っていた彼は、難なくそのボールを収め、左サイドへ視線を向けた。

「へイ、開いてるヨー！」

「ああ、行け三刀屋！」

その視線の先で、良いポジションをとっていた三刀屋へすぐさまパスを送る。無籐に引きつけられていた分だけ、憲戸陣内でのマークが緩んだ瞬間を的確につけていた。無籐のゲームコントロールに、伊槌が舌を巻いて賞賛の意を表する。

「くそっ、これ以上は行かせない！」

三刀屋にマークを外されていた荒木が、焦った様子で彼女へ猛烈にタツクルを仕掛ける。

「ワワツ、危ないネー！」

流星にパワーで負けている三刀屋が大きくよろめくが、焦りに任せたタツクルであったためになんとかボールを失わずに済んだ。

とはいえ危ない状況に陥り、冷や汗をかく三刀屋が荒木と相対する。その空気を切り裂くような、場違いなほど爛漫な声が彼女の名前を呼ぶ。

「三刀屋先輩！ 私開いてますよー！」

「ン……フフ、良い子だねテルヨー！」

フリーで降りてきた明風が三刀屋からのパスを受ける。その動きに呼応し、中央に陣取っていた伊槌が前線に腕を振るった。

「上がるぞ木崎！」

「言われなくても行くぜえ！」

指示を受けて、明風と共に前線の選手が一気にゴール前へ殺到していく。前半終了間際に現れた大きなチャンス、活かさない手はない。

「やらせないよ……」

相変わらず甘塚から伊槌へのマークは厳しい。近くのSBもいつでもサポートできる距離感を保っており、伊槌への警戒の深さが読み取れる。

だが、一瞬だけならフリーになれる。伊槌にはその自信があった。

中央での攻防を尻目に、左サイドを軽快に駆け上がる明風の前方に、SBの広瀬が立ち塞がる。ここを抜けられればピンチは免れない。その目は強い責任感を宿していた。

だが、それは明風も同じ。力強く笑みを携えて、2人はマッチアツプする。

「やらせるかよ！」

「通してもらいます！」

お互いに鋭く声をあげ、ぶつかり合う。

先手を取ってボールへアタックした広瀬だが、明風が細かいタッチで難なく回避し、そのままボールを蹴り出して抜き去る動作を見せる。が、広瀬が肩をぶつけながらバックステップを踏み、彼女の前進を阻みつつ再び目の前を塞いだ。

「やりますね、それなら！」

「来い、止めてやる！」

彼が再び大きくバックステップを踏む。着地した瞬間、その反動を利用して今度は大きく明風に突っ込み、青いオーラに包まれた右足を振り抜いた。

「スピニングカットッ！」

刀が振り下ろされたかのような風切り音と共に、右足から放たれた衝撃波の壁が明風の眼前を塗りつぶす。強い突風に煽られながらも踏ん張った彼女は、青空の下へ大きく飛び上がる。その背後には、夜闇と共に彼女を待っていたかのような三日月が煌めいていた。

「三日月の舞！」

局所的な闇を背に、踊るように三日月をなぞって回転する明風か

ら、暴風とすら形容できる力の塊が広瀬を叩きつける。

「ぐっ……!?!」

スピニングカットの壁はろうそくの炎のように容易くかき消され、その背後にいた彼もピッチに線を残しながら弾き飛ばされてしまった。

明風の本職はFWでありながら、類い稀なドリブル能力を持っている。1vs1なら憲戸中の中でも上位に位置する突破力が遺憾無く発揮されていた。

「よし、クロス——」

「あげさせるかあ!」

それでも、広瀬は諦めない。

弾き飛ばされたはしたが、衝撃波の壁がガードになったことで体勢は崩れていなかった。すぐさま復帰してキックモーションに入った明風へ、衝突するほどの勢いを持ってプレスをかける。

「嘘!?!」

流石に明風も顔を驚愕の色に染め、動揺から足元がふらついてしまう。そのことに歯噛みしながら、どうにか無理矢理にでもキープの体勢に持って行こうとした瞬間、銀髪の男がこちらに走り寄っているのが見えた。

それを認識した途端、一気に思考を切り替える。突っ込んでくる広瀬を気にせず、思いつきりその影へとパスを振り抜いた。

「伊槌先輩!」

明風の安堵したかのような声と共に、柔らかいパスが伊槌の足元に収まる。集中した表情で甘塚の前に入りボールを受けた彼は、横目でチラリ、とゴールの方へ視線を向ける。

その瞬間、泰山のDF陣に今日1番の危機感が湧き上がる。

打たせてはいけない。打たれば決まる。根拠はないが、リアリティのある緊張感に、足利が叫ぶように声をあげた。

「そいつには絶対撃たせんよ! 他はマーク緩めても良い!」

「同感……君は絶対止めるよ……」

甘塚がより強く体を寄せてくる。こうなってしまうては伊槌でも

シュートまで持っていくことは容易ではない。

そう、シュートまで持っていくことは――

「無籐の時もそうだ……」

「……？」

ポツリ、と伊槌が呟く。

獯猛に微笑みながら、ゴールから視線を外して、逆サイドを見つめる。その先では、流星のようにかかる少女の姿が見える。その姿に、より笑みを深めた。

「1人にかまけてたら、痛い目見るぞ！」

力強く声を発し、伊槌がサイドチェンジのパスを放ち、一瞬固まるDFを置き去りにして走り出す。鋭く逆サイドへ向かうそのボールは、スペースへ走り込んでいた少女の足元にピッタリと収まった。

「ナイスパスよ！」

伊槌のパスが気持ちいいほどにピンポイントで通ったことに可愛らしく笑みを浮かべ、サイドの深い位置で完全にフリーとなったホープがペナルティエリアへ視線を向ける。

「来いホープ！ 放り込めー！」

エリアを斜めに突っ切りながらニアサイドへ走り込むほぼフリーの伊槌、ファーサイドでオフサイドギリギリの位置でボールを要求してくる木崎、最も遠い場所で、DFの死角を取りながらこぼれ球を狙う明凧の3人。

取るべきプレーを決めたホープが、深呼吸をしてクロスの体勢に入る。

「くそ、取り敢えずゴール前固めろ！」

「絶対決める……！」

その言葉を口にした瞬間――

「――伊槌ッ！」

ホープの足から、柔らかく優しい弾道のクロスが放たれた。

中弾道で入ってくるそのボールに、伊槌はゴールに猛進しながらそのクロスに合わせようとする。が――

「……くっ、後ろ……！」

「……っ」

——やはり、合わない。

これが、伊槌が憲戸を不利と評した理由の1つ。

「ファイナルサードで連携が合わない……！」

どんなに上手くゴール前まで運べても、どんなに美しくディフェンスを欺いても。

シュートがゴールに入らなければ得点はできない。彼らは、そんな当たり前のことに苦しめられていた。

ホープのクロスは、先ほどまで伊槌のいた地点を狙ってあげられていた。が、伊槌はよりゴールに近づいたためにその場を離れてしまっている。細かい連携のミスが、決定機創出を阻害している。

とてもシュートまで持っていけないだろうその状況に、戻ってきていた気村が安堵のため息をつく。

「クロスは抜ける……9番の方警戒しとけ！」

それでも危機感は失わず、あくまで冷静に指示を出す。甘塚は付かず離れずの距離感を保つが、もう1人のDFは木崎へのマークを固める。このままではまた奪われる。

「させるか、クソ……！」

ここで得点できれば、後半はもつと余裕を持って戦える。自分たちもチャンスを作れていないが、相手も効果的な攻撃ができていない。

だから、この振って沸いたチャンスは、絶対に——

「——掴むッ！」

刹那、ゴールに向かっていた伊槌が体を反転させ、ゴールに背を向ける体勢を取る。足利が警戒したように身構えるが、関係ない。

そのまま右足を軸に、左足を振り上げる。必ず、届かせると強く誓い、今にも落ちてくるボールに意識を集中する。

「取る……！」

だが、ボールは無常にも、伊槌の股下を抜けていく。シュートは、できない。

「よくし、抜けた……！」

安堵が、失望が入り混じるため息が、おびただしいほどにピッチ上

に漏れる。張り詰めた緊張の糸が緩む錯覚を誰もが見た。

その中で、伊槌は。

この男だけは、『計画通り』と笑んだ。

「食らえッー」

——次の瞬間、左足の踵を通り抜けかけたボールを、バックヒールで打ち出した。

威力はない。だが、誰もが予想もしなかったシュートに、今度は息を飲む音がピッチに木霊する。

「は……」

「あの体勢で打ちやがった……」

無籐も流石に驚愕を隠せない。だが、その口元には笑みが浮かんでいた。

力無いシュートは、ゴールラインを割る。バランスを崩している伊槌も、泰山のDF陣も、誰もがその瞬間を覚悟した。

——だが。

「うらあー」

「何っ!？」

伊槌が背を向けた瞬間から、抜け目なく注意を巡らせていたGK、足利一鉄のキックが、ラインにかかっていたそのシュートをすんで弾き返す。チームを救うスーパーセーブに、今度は伊槌が驚かされる番だった。

「……へっ、俺を舐めんじゃねえぞー」

少年のように笑いながら、足利がその言葉を放つ。伊槌は顔を歪めて悔しさを噛み締めることしかできない。

無理な体勢でバックヒールシュートをしたことでバランスを崩した伊槌が倒れ込む。したたかに地面に叩きつけられながらも、伊槌が叫んだ。

「こぼれ球ッー」

足利のセーブは、咄嗟の判断による左足の上に体勢が整っており、ペナルティエリア内にボールが溢れている。足利も倒れており、詰めれば入る。祈るように伊槌はそれを口にした。

そこに走り込むピンクの影。立派なアフロヘアを蓄えたその男は、ヒーローのように駆け込んだ。

「フツ、分かっている。主役は遅れてくるものだよ！」

「おおし、行け梵場！」

「やべえ……！」

不敵に微笑みながら、梵場がこぼれ球を打ち出す。ファーサイドで声を上げる木崎が得点の気配に喜色をみなぎらせるが、そうは問屋が卸さない。

伊槌が倒れたことでマークから解放された少女が、素早くそのシュートを止めようと動き出す。

「ん……ダメだよお……！」

気の抜けるような声をあげながらも、しっかりと前を見据えて甘塚が立ち塞がる。

彼女が気怠げに腕を掲げると、ファンシーで巨大な棒付きキャンディーがその手の内に召喚される。そのキャンディーを野球のバットののように大きく振りかぶると、飛んでくるボールに狙いを定めた。その視線の先で、気村の姿を捉え、視線が交錯する。

何をする気なのか、あたりのついた梵場が、芝居がかった動作でやれやれと首をすくめた。

「おいおい、かわいい子猫ちゃんかと思いきや……なかなかアグレッシブじゃないか……！」

「それはどくも……それじゃあ……吹っ飛ばえ、キャンディーストライク……！」

振りかぶったキャンディーを、ボールに力強く、甘塚らしからぬフルスイングで叩きつける。ノーマルシュートである梵場のそれが耐えられるわけもなく、拮抗も無しにハーフラインほどまで吹き飛ばされてしまった。

「くっ、まずい……！」

靴木が歯を食いしばって走る。彼が焦る理由、それは、ハーフライン上に、少し前に甘塚とアイコンタクトを取っていた気村が、いつのまにか陣取っていたからだ。

「よし、カウンター！」

「ゆくぞ、前半で確実に点をいただく！」

緩やかに落ちてきたボールを収め、すぐさまドリブルを開始する。憲戸の選手は前半終了間際のプレーということもあってほとんどどの選手が前線に出ており、自陣には様崎、太田の2人しか残っておらず、急いで戻ってきている三刀屋と靴木を入れても4人しかディフェンスがいない。

対する泰山はFWの鈴木と棗、今し方上がってきた気村ともう1人のMFが残っている。実質的に2vs4の数的不利を強いられている。

「私が出るよ！ 太田くんは構えてて！」

「う、うん！」

このままズルズルと下がっていても失点は免れない。残り時間から見て、奪えば前半を終わらせられると踏んだ様崎が飛び出す。

気村は慌てず前方の棗にパスを出し、ワンツースで様崎の横をすり抜けボールを確実に前進させることを選んだ。しかし、この少女はその程度では抜き去れない。

「行かせないよ！」

「早いな……！」

追走してくる様崎に驚愕の声をあげつつ、しっかりとボールを守って背後のMF中村に落とす。だが様崎が作った一瞬の時間の内に靴木のプレスバックが間に合い、中村との距離を一気に縮めて奪いにかか

「もらうぞ……！」

「うぐつ……！」

体格に勝る靴木のタックルに中村がたたらを踏む。このままでは奪われる——そう思った彼女は、一か八かでもボールを進めることを選んだ。

「鈴木、拾って！」

「くつ、太田！」

ハーラインから走り続ける鈴木へ、決死のミドルパスが放たれ

た。その場で止まって太田を剥がした彼がそのパスを受けようとする。が、靴木の声を受けた太田も、必死に体を当てて少しでも体勢を崩すためにアタックを仕掛けに行く。

「クソ、邪魔だ！」

「ご、ごめん！」

鈴木に毒づかれ、反射的に謝ってしまうものの競り合いはやめない。巨漢2人の迫力ある押し合いは、しかし太田が押されている。どこか、力が入りきっていないようにも見えた。

それでも、鈴木も万全とは言えない。ボールを持った後、反転してシュートまで持っていく余裕がない。FWとして自分が点を取りたい、そんな思いに塗られている思考を切り裂くように、少し高い、きれど力強い少女の声が耳朵を打つ。

「我だ！ 来い！」

「くっ……決めろ棗！」

唇を噛みながらも、空中での太田とのぶつかり合いを制した鈴木が、棗目掛けてヘディングパスを放つ。体勢が悪く少し弱くなったが、充分通る勢いだ。

だが、いつだって試合はそう上手く行かない。芝を削る疾走の音に、棗が弾かれたように後ろを向き、その少女の姿を視認した。

「絶対、点は渡さないヨ！」

「なっ、もう戻ってきたのか!？」

棗の驚きをよそに、オレンジの残光を引きながら、周囲を見渡し読んでいた致命的なスペースに走りこんでいた三刀屋が、パスをカットするために精一杯足を伸ばす。ちよん、とつま先に何かに触れた気がした。

「皆が頑張ってるのに、ワタシが何もしないなんてできないヨ！ いけエー！」

触れた足先の感覚を信じて、彼女は身を投げ出し、右足を振り上げる。

「バカな……！ こころまでやってダメなのか……！」

棗が大きな黒と金の目を見開いて、絶望すら感じる言葉を紡ぐ。

その視線の先には、三刀屋によって弾かれたパスが彼女の頭上をすり抜けていく様子が明々と映っていた。

終わった——そんな思考が鎌首をもたげる。

だが、棗は力強く歯を食いしばると、前方へと矢のように走り出す。小さく細い体からは想像できないほど強い速さに、ゴールマウスの前に立つ久良島が威圧感を覚える。

「どうせ終わってしまうのなら……我は良い未来を信じるぞ！」

「早い……！」

銀の髪を揺らしながら、棗は背後からのパスを信じ疾走する。きつと、彼らならやってくれると、雄弁に背中で語りながら疾る。

そして、その判断は功を奏した。

「こんな本気でやるのは柄じゃないんだけど……！」

三刀屋のカットは、足利のセーブと同じように咄嗟に出た反射行動であり、力が乗っていない、故にクリアは不完全となり、また諦めずに走っていた気村の足元に、不運にも導かれるように溢れてしまった。

追いきれなかった靴木が眉根を寄せ歯噛みする。前線に残っていた伊槌も、今更ながら強い得点の気配を感じて目を見開いた。

「嘘だろ、クソ……！」

「行け棗！ 絶対決めてくれよ！」

伊槌の不安を現実にするように、気村からのパスが棗に通る。デイフェンスはもう一枚も残っていない。完全な1vs1に持っていかれてしまった。

必死に戻る無籐が、願うように声を張り上げる。

「久良島ア！ 止めるオオ！」

「はい……！ 絶対……！」

久良島が強い目で、ペナルティエリアに侵入してきた棗を睨みつける。腰を落とし、どんな強力なシュートも受け止めてみせると言葉なく語る。相対する彼女の黄金の瞳も、気丈に笑みを浮かべながらシュートモーションに入った。

「貴様も、我も、仲間より想いを託されている……！」

「ええ、だから絶対止めます……!」

ボールに青いオーラが集中し、背後には竜のビジョン。ファーストシユートと同じ必殺技、だが最初のそれとは込められているパワーが段違いに感じられる。肌が泡立つのを感じながらも、久良島の右腕は暗闇を染まっていた。

半身に構えて振りかぶる久良島を認め、棗は右足を振り上げる。

「どちらの想いが強く、どちらに神が微笑むか……勝負だ!」

裂帛のあと、女子らしからぬ雄叫びとともに、全身全霊の一撃が放たれた。

「ドラゴンツ、クラアアアツシユ!!」

「真っ黒パンチ……!」

竜の咆哮のような棗の声を押され、青いドラゴンが芝を抉りながらゴールへと突き進む。そんなことは許さないと、久良島の渾身のストレートが竜の鼻面へと打ち付けられた。

バンツ、と衝撃が弾ける。芝がサワサワと揺れ、一瞬久良島がゴールに押し込まれた。

「ぐっ、強い……!?!」

「食いちぎれ、我が分身よ!」

腕を叩きつけられてなお、ドラゴンクラツシユの威力は全く落ちない。むしろ久良島の腕を噛みちぎらんとばかりにパワーが増していく。とさえ錯覚する。ザリザリと、久良島の体が後退させられていく。彼女も全身の筋肉に力を入れて、歯を食いしばって全力で迎え撃っている。だが、ドラゴンクラツシユのパワーはそれを超えていた。

「打ち抜けエエエ!」

「う、ぐ……!… きゃあ?!」

時間にすれば数秒の拮抗。棗の気迫とともに雄叫びを挙げたドラゴンのビジョンは、久良島の漆黒の腕を弾き飛ばし、彼女の体を横へと逸らさせた。

ドシユツウ、と。

彼女の背後から、鋭い摩擦音が木霊する。

「……く、くくくくく」

一瞬訪れた静寂のなか、棗の不敵な笑いがいやに響いた。その声を呼応したように、主審が笛を吹き、憲戸のゴールを指さした。

先制点は、泰山だ。

「ふはははは！ 見たか我の力を！」

「ああ、ナイスゴール棗！」

喜びに沸き、棗が仲間たちにもみくちやにされる。彼女の顔には、汚れなき笑顔が浮かんでいた。

久良島が芝を叩く。伊槌も、敵陣で腰を手を当てて天を仰ぐしかなかった。

「クソ……」

曇った空が伊槌の目線を出迎える。その後、長い長いホイッスルがもう一度鳴らされた。

前半終了の合図だ。

「くっそ……最後の最後にかよ」

木崎も忌々しそうに拳を握る。

最悪の時間帯に奪われた先制点。精神的な負担はかなり大きい。それでも、まだ試合は終わっちゃいない。伊槌は口元を拭ってベンチへと引き上げていく。

「必ず奪い返す……！」

その瞳を、狩人のように爛々と輝かせながら。

GOAL!!?

30+2分 棗龍華

アシスト：気村裕斗

憲戸 0—1泰山

12話：反撃の狼煙

「ホープ、こっちー！」

金髪の少女がピッチを駆ける。誰よりも早く、流星のようにサイドラインギリギリを走り抜けるその影に、彼女と同じ明るい色のユニフォームを纏った少年がパスを要求して手をあげていた。

だが、そのポジションニングに眉を顰める。位置が悪い。通せるかは五分五分だと彼女は判断した。

それを理解した上で、少女は大きく体を開いてセンターリングのモーションに入る。

「行くわよ、パスー！」

「よし、カットしろー！」

だが、やはりうまくいかない。優しくあげられようとしていたクロスは、相手チームに読み切られており空中でカットされてしまう。

飛び上がってボールを奪った少年が子悪党のように笑みを浮かべた。悔ったような声音で口を開く。

「へっ、分かりやすすぎー——」

「返してもらおうわよー！」

少年が言い切る前に少女の足が素早く伸びてくる。ギョツとした様子の彼だが、空中でボールを守ることができはるはずもなく、あえなくボールを奪い返されてしまった。

先ほどまで余裕の笑みが浮かんでいた表情が、困惑の色と焦燥に染められる。背後にDFは1枚も残っていない。まずい——

「はああああー！」

その裂帛とともに、少女は風になった。

比喩ではあるが、本当にそうとしか思えないほどのスピードでピッチの芝を揺らしていく。誰も追いつけない、目で追うことすらできない少女は、気づいた頃にはペナルティア内に侵入していた。

呆気に取られていた相手チームの面々も、やっと我に返ってひどく焦った様子で声を荒らげる。

「そ、そいつを止めろー！ シュートコース塞げー！」

「くそ、速すぎる……！」

DFが指示通り詰めようとするが、このまま行っても絶対に千切られる。確信にも似た予感を胸中に持ちながらも、急かされるように足を回して彼女を追っていた。

金髪の少女が、ふと周りを見渡す。

同じユニフォームの選手は、誰も彼女に追いつけていない。汗を流しながら、必死に追い縋ってくる。彼女に手を伸ばすように、肩を掴むように、こちらを見ていた。

——彼女の速度が緩む。

「……!?!」

詰めていた少年は驚きながらも、チャンスを逃さず一気に距離を縮める。少女は顔を歪めながらも、すんでのところでタツクルをいなし、前線でうまくタメを作ることに成功した。小さい体からは想像もできない強さに、少年が唇を噛む。

GKが焦りを押し殺しながら、DF達へ警鐘を鳴らす。

「気を取られすぎるな、パスもある！ ゴール前固めろ！」

その声に応え、飛び込んでくるFWを警戒するように他のDF陣も中央へポジションを変えていく。

少女が視界の端に、味方のFWの姿を捉えた。DFにマークされており、並大抵のパスは通せないだろう。

それでも、彼女は咄嗟に反転していつでもパスを出せる体勢を作った。

「いけえ！」

「カットしろ！」

そのまま間髪入れずに少女が鋭くクロスを入れる。FWが取りやすいように速度を調節し、回転もかけすぎない、優しく最適なボールだった。技術の粋が詰まったボールに、GKが警戒を強める。

だが、そのボールは優しすぎた。

「オラッ！」

体力が尽きかけている少年が受け取れるように足元に放たれたパスは、すなわちDFがカットしやすいと言うことでもある。味方のこ

とを考えてのプレーだったのだろうか、慮りすぎたな、とDFが口元を歪める。

笑みを浮かべながらもチェイスをやめなかったDFの足に当たり、ボールは高く上がってゴールから遠ざかっていく。危機は脱した。

「よし………」

「ホープ！」

GKが安堵のため息とともに拳を握る中、MFの1人が、クロスを出した金髪の少女に声をかけたことに、DF陣が目を見開く。

「流石に無理だろ……」

彼女はボールをゴール前まで運び、キープしてタメを作り、決定機を演出した。その上まだ働かせるのかと、彼らの間に嘲笑にも似た声が溢れる。

「——任せなさい！」

だが、彼女のことを、まだ見くびっていたと後悔することになる。

風が天を舞う。その風に乗るように、軽快に、金色の乱反射した光が目飛び込んでくる。眩しそうに見上げれば、それは少女が、こぼれ球に反応して飛びあがる姿だった。

「なっ!?!」

その場の全員が、流れ星を見たかのように、彼女のスーパープレーに釘付けにされる。

「ふふっ、行くわよー！」

類い稀な脚力で空中に飛び上がった少女が、右足をボールに触れさせる。その動作を見て、GKが茫然自失の瞬間から無理矢理に解放され、今までの比にならないほどの怒号を響かせた。

「打たれるッ！ ブロックに入れッ！」

中空を漂う少女は完全なフリーだ。このプレイヤーはまずい、打たれるとまずい。彼らの本能がひしひしと感じていることだった。故に、驕りも、嫌味も全てを捨て去り、真正面から彼女のプレーを見定める。

コースを狙うか、それとも正面か——どちらだとしても、必ず止めると気迫で語る。

そして、少女の足が振り抜かれた。そのボールは、誰も予想通りシュート——ではない。

「決めてー！」

「何っ!？」

パスだった。流星が降り注ぐようなパスが、優しくMFの足元に収まる。相手のことをよく見た、メッセージのこもったパスだった。

予想を完全に外された彼らは、完全に硬直してしまう。打てば入る、そう確信した瞳で、彼は勢いよく足を振り抜いた。

だが。

「あっ！」

「……は、外れた……！ 助かった……！」

MFのダイレクトボレーは、惜しくもポストを掠めてゴールを外れてしまった。膝から崩れ落ちる姿を見て、張り詰めた緊張の糸から解放されたようにDF達も座り込む。

そして、あの少女へと視線を向けた。

全て彼女の行動が起点となった。ボール奪取も、ゴール前の攻防も、全てこの金髪の少女が齎したものだ。恐ろしいものを見る様な視線が『H O P E』のユニフォームに集まる。

「惜しかったわね、次は行けるわよ！」

彼女は笑って手を叩いていた。本当に楽しそうに、仲間達と笑い合っていた。

主役になれるだけの技量を持ちながら、爪を隠し、どこまで行っても脇役として振る舞うその歪さに、彼らは恐怖とも言い換えれる違和感を覚える。それは、本当にサッカーなのかと。

「わりい、ホープもいいパスだった！」

「うん、いい連携だったわよね！ この調子で行くわよ！」

だが、彼女にとってそれは間違っていないのだろう。例えば自分が打った方が入る確率の高い場面でも、彼女にとっては味方を生かす方が大切で、自分の活躍や勝敗などどうでもいいのだろう。

仲間のために。それこそが、彼女の——やまもとほーぷ山本希望の楽しいサッカーなのだ——

「ホープちゃん？　おーい！」

「……えう!?　わあ!?!」

ハーftimeに入って、ホープはベンチに座り、ふと思い浮かんだ過去を振り返っていた。そしていつの間にか、その顔を様崎が覗き込んでいる。

息がかかるほどの距離から放たれたその言葉に、彼女の意識がやつと覚醒する。そして彼女の長い睫毛すら見えるほどのあまりの近さに驚き、大きくのけぞって後方に倒れてしまった。がしやがしやと荷物を巻き込んでホープがもんどり打つ。

「いつ、たあ……!」

「あはは、驚かせちゃった？　ごめんねー」

うう、と呻きながら起き上がる彼女を、無籐や伊槌など真面目に話し合っていた面々は呆れた様に口元を緩めており、様崎は悪びれた様子もなく軽く手を合わせて謝罪の意を示している。

「……それで、話聞いてたか？　ホープ」

恨めしげな視線で様崎を睨むホープに、伊槌が声をかける。追憶に耽っていた彼女は、少しバツが悪そうに首を横に振った。

伊槌は軽いため息をつきながらも、無籐と目を合わせる。そして頷いて、2人が示し合わせた様に話し出した。

「守備はそんな問題ねエだろ。9番は素気がかりだが、シユートまで持って行かせなきゃやりようはある」

「攻撃も通用してないわけじゃない。明風と梵場のドリブル、無籐のパス、そして――」

彼の白銀の目がホープを射抜く。その瞳には、この一戦にかける熱い感情が見え隠れしている。

「――ホープ、お前の力が必要だ」

「私の？」

首を傾げる彼女に、伊槌が重々しく首肯する。そのままホープの目の前まで歩を進め、近くのベンチに腰掛けた。目線を合わせて、朗々と語りだす。

「泰山のハイプレスをかわすにはどうしても個人の力がある。そして、お前のスピードならそれが可能だ」

ふんふん、とホープが興味ありげに言葉を咀嚼する。一旦先ほどまでの思考を吹き飛ばし、彼の話を集中して聞いていた彼女は、伊槌がわかったか、と問いかけたと共に立ち上がり、薄い胸を張って笑みを浮かべた。

「要は早く走ればいいのね、任せなさい！」

「……まあ、間違っではないいな」

気の抜けるようなホープの言葉に、靴木が渋々といった様子で首を縦に振る。

その様子を楽しげに見つめていた様崎が、時計に目線を移した後、外していたキャプテンマークを右腕に巻き直しながら手を叩いて全員員の注目を集めた。

「まあ、難しいことは無籐くんたちに任せて楽しんでやろっか！」

「おい」

無籐の低い声を見無視し、チームメイトを引き連れて様崎がピッチへ逃げていく。彼はため息をつきながらその背中に付いていくも、その口元は愉快そうに歪んでいた。

「頑張ってくださいーい！」

「まあ、なるようになったらいいんじゃないですか」

ベンチの橘花と宵闇が彼女らを見送る。様崎は笑みをたたえながら手を振って応えた。

ホープはその塊から離れたところで、足を伸ばしてストレッチをしている。何時ぞやか言っていた彼女の『ルーティーン』の一種だろうと、伊槌は当たりをつけ、彼女に声をかけた。

「なあ、ホープ」

「ん……何？ 今はルーティーンの中なの、邪魔しないでよ」

呼びかけられたことで、少し機嫌を損ねた様子の彼女と目が合う。悪い、と軽く前置きしつつ、伊榎は言葉が続ける。

「大したことじゃないんだが……クロスはもつと前のスペースに出してくれ。ちよつと無理めなボールでも俺なら取れる」

「もつと？　でも、皆あのくらいのボールの方が合わせやすそうだけど……」

足をほどよく伸ばしながら、ホープが釈然としない様子で目を細める。伊榎はそれでも毅然とした態度を崩さない。

「合わせやすいボールっていうのは、相手もカットしやすいボールってことだ。もう通用しない、勝つためには少し強引なプレーが必要だ」

強く言い切って伊榎が少し息をつく。少し説教くさくなったか、と少し居心地の悪い感覚に囚われていたところに、不意に溢れたようなホープの声が耳朶を打った。

「勝つってそんなに大切なこと……？」

「え？」

信じられない彼女の主張に、伊榎が言葉を失う。ホープは少し落着かない様子だが、それでもいつもと違った落ち着いた、ともすれば暗い雰囲気で言葉が続ける。

「あたしが馬鹿だからかな、あんたが無理してまで勝ちたい理由が分からないの」

本当に疑問に感じているかのような、訝しげな声音が伊榎の耳を叩いた。そのまま座って足を伸ばしていた体勢から、すつと立ち上がり、ピッチへと歩を進めていく。

「あたしは楽しくサッカーが出来ればそれでいいから……ごめんね」

そう言い残して、彼女の背中が遠ざかっていく。伊榎は何も言えないまま、立ち尽くしていた。

その背中に、少し遠慮がちに男性の声がかけられる。

「なあ、伊榎……。ホープも何もお前を困らせたくてあんな事を言ったんじゃないと思うんだ、あいつにも色々あってな……」

声の主へ視線を向けると、その正体は月並だった。先ほどまでの

ミーティングで、仕事を様崎と無籐に取られて所在なさげだった彼が、去っていったホープの方へチラチラと視線をやりながら伊槌へと弁明する。

彼は全く悪くないのに、何故か萎縮したように肩をすくめていて、伊槌が思わず口元を緩める。

「分かっています、あいつにも色々あるってことは」

「そ、そうか……あんまり悪く思わないでやってくれ」

その言葉に、伊槌が了解の意を込めて首肯する。それに安心したのか、月並も頬を緩めてベンチに腰を下ろした。

サッカーの知識は全くないが、月並は良き顧問のようだ。伊槌は安堵にも似た感覚を覚える。だが、今はその感覚に身を委ねている場合ではない。もう遠くにあるホープの背中を見据えながら、芝の戦場へと足を伸ばす。

「……勝ちたい理由、か」

考えたこともなかった。藪から棒なあの問いは、答えのないもののようにも思えたし、とつくに答えを知っているもののようにも思えた。

なんであれ、全く違う価値観でサッカーを見る彼女について来てもらうには、それを明確にする必要があるだろうと伊槌は思考を回す。そしてそれは、試合の中でしか見つけれないだろう。

重々しくピッチに足を沈めながら、泰山の選手たちを視線で射抜く。

「一筋縄じゃ行かないな……」

それでも、行くしかない。

大きく息を吐いて、伊槌は歩き続ける。仲間達の元へと。

「待ってるホープ……お前にも新しいサッカーの楽しさを教えてやる」

そう、口走りながら。

後半は泰山のキックオフからだ。サークルの中には棗と鈴木が既に入っており、伊槌と木崎はいつでもプレスをかけられるよう軽く前傾姿勢で待機していた。

「ぜってえ奪うぞー！」

「ああ、早いところ一点返すか……！」

闘志を燃やして棗たちを睨みつけ、彼女らも不敵に笑って火花を散らす。一触即発の空気を、甲高い笛の音が切り裂いた。後半開始の合図だ。

「おらあああー！」

「むっ、早い……！」

鈴木が棗にパスを渡した瞬間、木崎が鬼の形相で突っ込んでいく。流石に驚いた彼女は背後の気村へとパスを返し、気村も甘塚へバックパスを選択する。

「どこまで逃げてでも無駄だぜえー！」

「しつこ……！」

だが、木崎は振り切られない。絶大なシュートパワーを生む足の馬力にものを言わせたダツシユで、一直線に甘塚へ肉薄する。ステツプとポジシヨニングで合理的にDFを無力化していく伊槌とは対極の野生的なスタイルに、伊槌のマークに奔走していた彼女は戸惑いを隠せない。

それでも努めて冷静に、CBコンビを組む関川にパスを送ろうとした時、ふと伊槌のことが目に入る。

「あれ……？」

木崎から少し距離を取り、関川の前に入って待ち構える彼の姿を見た途端、パスコースが無くなったことを認識する。

伊槌は、突貫する木崎のサポートに回るように、周囲のパスコースを消す動きに徹していた。全ては勝利のためのプレーだ。

（見ろホープ……俺の本気を！）

背後の少女に視線を飛ばす。彼女は超スピードでマークを振り切

り、こちらへと一直線に上がってきていた。これが本気で味方になってくれれば、そんなに心強いことはない。伊槌は改めてプレーに集中する。

「う〜……どうしよう」

「もたもたしてたらもうつちまうぞー!」

パスコースが消え、手をこまねいている彼女に、木崎が無遠慮に突っ込んでいく。ここで失えば失点の確率はかなり高い、それを承知している彼女は、意を決したように木崎に突っ込んでいった。

「おっ!?!」

「仕方ないな〜……得意じゃないけど……」

次の瞬間、甘塚の姿が3人に増えた。比喩ではなく、本当に3人に分身した彼女らが、トライアングルを作りながら木崎を惑わすようにポジジョンを激しく入れ替え突撃してくる。

「ばいば〜い……分身フェイント〜……」

「何い……!?!」

戸惑いながらも木崎がボールに足を伸ばすが、ほかの甘塚にボールを回され難なく突破されてしまう。木崎を抜き去った彼女の視界は、一気に開けた。

「よ〜し……いくよ〜……」

「チツ、DF集中しろ!」

無籐の激しい叱咤の後、緩い、されど狙い済まされたロングパスが鈴木の上頭上に上げられる。今回も太田の前にポジジョンを取っていた彼は、大きく飛び上がってボールを収めた。

「クソっ、邪魔だ……!」

「ううっ、ごめん!」

その背中に慌てて、謝りながらも強く太田がプレスをかけ、パワーで下回りながらも彼に自由を与えない。一気にヘルプディフェンスに駆けてくる無籐と靴木の姿を認識した鈴木は、焦ったように首を振って周囲の味方を探し出し、その耳に声がかけられる。

「来い!」

「チツ……またお前か!」

毒づきながらも、鈴木がまたフリーになっていた棗はパスを送る。失点シーンの再現のような光景に、久良島が緊張とともに構えるが、その眼前をピンク色の光が靡いた。

キャプテンの様崎咲夜が、素早く棗龍華の前に立ち塞がる。キャプテン同士のマツチアップ、その戦いの火蓋が切り落とされた。

「そう簡単には行かせないよー！」

「フツ、望むところだ！」

一瞬、2人の視線が交錯する。そして次の瞬間、棗が様崎にドリブル突破を仕掛けた。ピンと背筋を伸ばした隙のない体勢で、目線で、足で、体の向きでフェイントを織り交せて様崎の体勢を壊しにかかる。

そして伊槌は気づく。あのドリブルは――

「俺のドリブル……！」

自分が見間違うはずがない。日本で築き、スペインで生き残るために磨き上げた、死力を尽くして『剥がす』ドリブル。

シュートフェイント、パスフェイク、味方のランニングを囮に、あらゆる全てを使って虎視眈々とゴールを狙う。

棗龍華もまた、伊槌と同じく、キング・マドリッドへ旅立った『理想の伊槌鳴哉』の背中を追う者だった。

だがそのドリブルの様崎はついていく。DFとしての経験がならず勘とその瞬発力を持って棗を封じる。その視線は忙しなく動いており、一瞬、棗から外れて左サイドを見た。

そして、その瞬間は訪れる。

「ふっ！」

「おおっとー！」

左に抜き去ると見せかけて様崎を誘い、シザースを挟んで右に持ち込み剥がしてシュートモーションに入る。既にペナルティエリアに侵入しており、棗のシュートレンジに入っているそれを見逃せるはずもなく、その超人的クイックネスを遺憾無く発揮し、棗の前方へステップを踏んだ。

「ごめんね、通せないよー！」

左足だけで着地し、抜け目なく右足でボールに襲いかかる。十分奪えるだろうアクション、だが伊槌の悪寒は消えなかった。

(もし、棗が本当に俺のドリブルを会得してるのだとしたら——)

伊槌は思考する。この場面、自分が棗龍華ならどう動く、と。

目の前には次のアクションを取れないであろうDF1枚、味方はいないが敵のヘルプは後ろから来ている。剥がせばゴール確実の場面。パス、違う。味方はいない。

決死のシュート、違う。確率が低すぎる。

キープ、違う。背後から来たDFに挟まれて終わりだ。

(俺なら、ああする……!)

あの日、様崎との1on1でも披露した、伊槌鳴哉の必殺技とも言えるあのドリブル。

そう——

「かかったな!」

シュートを瞬間的にキャンセルし、軸足の後ろを通してタックルを回避、そして軸足を入れ替え、ボールを蹴りやすい位置に止める。

キレのあるクライフターン。やはり棗のドリブルは、伊槌のドリブルそのものだ。練度の高いその動作に、伊槌が愕然とするが、今は衝撃を受けている場合ではないと、彼は声を張り上げた。

「まずい!」

「もう遅いぞ!」

「うっ……止めます……!」

伊槌が声を上げるが、無籐たちは間に合わない。腰を落とした久良島と相対した棗が右足を大きく振り上げると、竜のビジョンが背後に迫力を持って登場する。本日3度目の、彼女の必殺技。

「食らえ——」

「させないヨ!」

ドラゴンクラッシュを放つ一瞬のため。その合間を縫うように、狙っていた三刀屋がスライディングでボールをかき出した。

「何!?!」

要のボールを失ったドラゴンは棗の気迫と共に雲散霧消し、その頭

上をクリアボールが通っていく。立ち尽くす棗の横を、いたずらつ子の様に可愛らしく笑みを浮かべた様崎が横切った。

「ふふ、鳴哉くんのドリブルだって分かってたからね！」

「サクヤとは目だけで話ができるからね、ワタシたちにかかればチョイチョイのチョイだよ！」

一瞬棗から外した目線。あれは三刀屋とのアイコンタクトだった。様崎は初めからこの未来を予測し、確実に潰すためにあえてクライフターンに引つかかったのだ。

悔しげに歯を食いしばる棗の頭上を抜けたボールを、様崎が拾う。そして前を向いた瞬間、腕を振るって前線に声を響かせた。

「いくよカウンター！ 皆上がって！」

その声に、木崎、伊槌、明風、梵場、無籐の全員がゴール前へ走り出す。靴木は中盤でバランスを取り、DF陣も不動を貫いている。

だが、そんな様崎の背後から、決死の形相で赤白のユニフォームを纏った男が突っ込んでくる。

「させるかよ、逆にカウンターにしてやる！」

「ふふっ、私とドリブル勝負？」

もう1人のFW鈴木が、苛立ちのままに様崎に突撃する。体格では勝っているため、このままぶつかられば、いくら彼女でもひとたまりもないだろう。

ならば、ぶつかなければいい。

「リブバインドー！」

「……っ！ 畜生！」

木崎のように猪突猛進に動く鈴木の前上を、嘲笑うように様崎が抜ける。完全なフリーとなった彼女の右足から、鋭いロングパスが前線へ放たれた。

その落下地点、ドンピシャのところにその男が現れる。

「流石咲夜先輩、素晴らしいパスです」

チーム1の技巧派、梵場がピンポイントパスの勢いを完全に殺した素晴らしいトラップを披露する。類稀なボールコントロールを目の当たりにした気村が、舌を巻きながら立ち塞がる。

「つたく、今日の試合は忙しいな！ マグネットドロ―！」

悪態をつきながらも、愚直に走り梵場と接敵した彼は、高く空中に飛び上がり、両足を磁石のS極とN極のように変化させた。磁石に引き寄せられるかの如く、ボールが浮き上がる。

「すまないが、愛する先輩からのプレゼントはそう易々と渡せないね！」

だが、梵場は浮き上がったボールを逆立ちして足に挟み込んで死守し、そのままアクロバティックでスピーディーなブレイクダンスを演じ始めた。

「スピニングドライブ！」

「そんなのアリかよ……！」

マグネットはボールを引き寄せきれず、駒のように回転しながらハイスピードで梵場が気村を抜き去り、ドリブルで持ち運ぶ。それをカバーするように、サイドハーフの荒木がすかさず距離を詰めてきた。

だが、彼らの横を、流星のような速度で駆け抜けていく1人の少女。切った風が梵場の豊かな髪を揺らすとともに、靴木の声に背中を押される。

「ホープを使え！」

「……フツ、仕方ない。行け、子猫ちゃん！」

梵場が荒木の裏へと走り抜けて行ったホープの前方に、浮いたスループスを供給する。それはしつかりとホープのもとに渡り、ドリ―で右サイド奥深くまで侵入することに成功した。

呼応して、伊槌たちもポジショニングを取り直す。

「あげていいぞホープ！」

「ホープ先輩、やっちゃえ！」

伊槌がペナルティエリア内を走り回ってスペースを掻き乱しながら叫ぶ。もちろんホープもクロスを上げるつもりだ。

だが、脳内で何度も、何度も同じ言葉が反芻している。

——勝つってそんなに大事なこと……？

「……っ！」

伊槌が勝ちたいと思っっているのは、とうの昔に分かっていた。青森

附属との試合、最後のゴールは伊槌が諦めなかったからこそ、本気で勝利を目指したからこそ生まれたゴールだ。

この試合でも、常にゴールを決めるために動き続けている。ホープにも話しかけ、プレーを擦り合わせようとしていた。本気で勝ちを狙っているのだ。

「皆……楽しい……？」

無籐もそうだ。

彼はずっと戦ってきた。勝利など遠く遠くにあるこのチームで、腐らず常に練習してきた。

靴木も、久良島も。

そして楽しいプレーを掲げていた様崎でさえ、本気で戦っているように見える。勝利など二の次だと考えているあのキャプテンもだ。

「あたしは……皆を楽しませることが、できてるかな……」

泣きそうな顔で、ホープがそう溢した。

クロスが上がる。

だが、そのボールはゴールから大きく逸れている。ペナルティエリアから遠ざかるように、全く得点の匂いがしない場所に落ちようとしている。

「危ねえ、ミスキックか……」

足利も安堵した様子で、ふうと息をついた。突っ込んでいた木崎も、遠いサイドにいた明風にも届かない。ありえないミスに、ホープが俯きかけた、その瞬間。

「気を抜いてんじゃないぞ！」

「えっ……」

甘塚が意表をつかれたように、気の抜けた声を漏らした。

伊槌だった。伊槌だけが、その落下地点に全速力で走り込んでいた。

そして、ボールが落ちてくるタイミングを見計らい、ゴールを背に大きく飛び上がる。遠くで無籐が、拍手でもしたそうに大きく目を見開いた。

「おいおい、まさかそっから……！」

「——食らいやがれ！」

左足を踏み切って大きく跳躍した伊槌の右足から、ボールの芯を捉え切ったオーバーヘッドがゴールへ一直線に放たれる。レーザービームの様な軌道で右隅へ突き刺さるそのシュートに、足利が慌てて飛びついた。

「うおお!! シールドボレー!!」

左足で鋭く飛び上がり、右足を目一杯伸ばしてシュートに叩きつける。その瞬間、右足が折れるかと思うほどの衝撃が全身に走った。

「ぐおお……!?!」

伊槌のシュートは必殺技の無いノーマルシュート、しかも悪い体勢のミドルシュートであるにも関わらず、足利を突き破ろうとしていた。

しかし、そんなことはGKのプライドが許さない。足の筋肉に死力を込めて、血管が千切れるほどに右足を振るう。

「うおおおお!!」

「ブチ抜けッ！」

気迫と気迫。両者はぶつかり、弾け合い、足利をゴールネットに叩きつけて、シュートはゴール前にこぼれた。ノーゴールだ。

「危なかった……」

甘塚が安堵のため息を漏らす。失点は免れた——しかしそれは、ピッチ上の思考にしてはあまりにも楽観的だ。ボールはまだ生きている、気を抜くにはまだ早すぎた。

木崎が走り込む。押し込むだけでゴールが奪えるその位置に、獣の様な嗅覚で突っ込んでいた。

「もらったあああー！」

「やらせねえー！」

だが、そのシュートは背後からブロックのために身体を投げ飛ばしたCB関川の命をかけた様なスーパークリアに弾かれる。彼の足に当たったボールは天高く飛ばされ、首の皮一枚で難を逃れる。

「くっそお！ 誰か打て！」

「分かっていますよ！」

木崎の叫びに応えるのは、闇の炎を足に纏った明風だ。彼女はハーフアップに纏めた髪を靡かせ、ボールに追い続けるように回転しながら飛び上がり、その淡い色の瞳が見据える先、狙い澄ましたショットをゴール左隅に打ち出した。

「ダークトルネードォー！」

黒い弾丸が彼女の足から強く打ち出される。DFは残っていない、闇色の炎弾は何の障害もなくネットを揺らす。

そう思われたが、伊槌のシュートでネットに叩きつけられたGK足利が、自暴自棄にでもなったかのようにダークトルネードに胸から突っ込んでいった。

「え!？」

「させねえ！ タフネスブロックウ！」

ヤケかと思われたその行動も必殺技への布石。シュートに立ち塞がり、深く腰を落として胸でシュートを受ける。焼けるような痛みを耐えながら、足利が気丈に、獰猛に笑う。

「へっ……足だけだと思った、かアー！」

一瞬体をすくめて力を溜めた後、気迫とともに大きく力を解放し、ボールを前方に弾き飛ばした。その先には、何度も出し抜かれた甘塚がしつかりと詰めている。

「ナイス……一旦クリア……」

「——させるかよ」

だが、その背後。

稲妻のように甘塚を追い越して、銀の瞳を爛々と輝かせた主役がストライカーボールを奪い取り、ゴールという壇上に運ぶ。

泰山DF陣の時間が止まる。もうDFは1枚も残っていない。足利と伊槌の1vs1に持ち込まれてしまった。

「いくぞ……!」

リフティングと共に、目にも止まらぬスピードで右足を引き戻してボールの下を蹴り抜く。そして、引いた勢いで中空で回転を続けるボールに、引き戻した右足で、改めて強烈なボレーを叩き込む。足と回転の摩擦によって発電が起こり、眩い光がボールを覆う。

棗は、憲戸のゴール前から、遠い場所でも、ピッチ上という特等席で、そのシュートを見届ける。雷が鳴る前のように、眩い光が網膜を焼いた。

そして、雷鳴は現れる。

「電閃ッ！」

空気を切り裂き、芝を薙ぎ払い、ゴール右隅へと高速のシュートが襲いかかる。

足利は一步も動けない。認識できたのは、顔の横を何かか抜けたと思った次の瞬間に、背後で雷を纏ったボールがゴールネットを突き破るほどの威力で突き刺さっていた光景だけだった。

「……………な、は？」

惚けたように足利が声を漏らす。そして、今気づいたように審判も高々と笛を鳴らした。

同点、『元』日本の至宝、伊槌鳴哉がその実力を見せつけた。

「よし……………！ 見たか、俺のシュートを！」

「うおおすげええ！ 何だ今の!?!」

「練習でもあんなシュート打たなかつたじゃ無いですか！ すごい！」

波状攻撃を放ったFW3人衆がハイタッチしながら喜びを分かち合う。その顔には喜色が溢れており、逆転への希望に満ち溢れた顔をしていた。

明風がボールを回収してハーフラインまで走っていく。早くリスタートして追い抜くぞ、とその背中が語っていた。

「二瞬目を離しただけであんな……………すごいなく……………」

久しぶりに高鳴る胸の鼓動を感じながら、伊槌が木崎と並び立って自陣へと戻っていく。

だが、次の瞬間に何かを思い出したかのようにサイドへと視線を向けた。

「あ？ どうした？」

「……………いや、先行っててくれ」

訝しげな木崎の視線を手で制し、サイドラインへと駆け寄ってい

く。その先には、何処か浮かない顔をしているホープの姿があった。
「ホープ！」

「……え、あ、伊槌？」

鈍い反応で、ホープが目を合わせてくる。伊槌は努めて優しく笑みを浮かべ、ホープの肩を叩いた。

「ナイスボール、勝つために戦うのも悪く無いだろ？」

「……そうね」

その言葉を聞いた伊槌は、再び笑い、ホープから離れて自陣へと戻っていく。その際、背後へ軽く手を上げて手招きをする。その指示に従って、ホープは駆ける。燃え尽きそうな流れ星のように。

無籐も、三刀屋も、梵場も、伊槌のゴールに沸いている。自分はボールにほとんど触っていないのに、ホープとプレーしていた時より楽しそうだ。

太田ですら、不安そうに縮こまっていた背筋を伸ばし、驚愕と少しの歓喜を見せている。

歓喜の渦は、止まることを知らずに憲戸の間に駆け巡っていく。願いを乗せた流星のように、希望を与えながら皆の中に舞う。

「……楽しいって、何だっけ」

ただ1人、ホープだけを置き去りにして。

GOAL!!?

38分 伊槌 鳴哉

憲戸 1-1 泰山

13話：山本希望

「チツ、お前らしつかり固めろオ！　ここ守り抜くぞオ！」

伊槌の同点弾から数分後、彼らは防戦一方の戦況に立たされていた。

気村のドリブルに正対した無籐が、低い声で檄を飛ばす。彼自身も身体中が汗に濡れており、余裕がある様子には見えなかったが、それでもしつかりと周囲を確認して指示を出す様は流石と言えるだろう。

だが、その言葉を受けた憲戸の面々が動き出す前に、気村が仕掛ける。

「よつと」

ボールを右サイドに蹴り出し、自身は左サイドから抜けていく。別々の動きに一瞬惑わされる無籐の背後へ抜けた気村の足下に、強い回転のかかったボールがワンツーパスのように返ってきた。

「ひとりワンツー！」

「チツ……！」

注意が逸れていた隙に気村の十八番のドリブル技に剥がされてしまふ。何とかその背中を追おうとするが、足が鉛のように重く、心臓は痛く跳ねている。限界の足音が脳内に響き出している無籐は、唇を噛んで気村を見送ることしかできない。

「くっ……やらせん！」

それを確認したアンカーの靴木は、下り目に取っていたポジションから飛び出してプレスをかけてくる。猛烈な突進だが、彼は別の何かを気にしているのか、妙に余裕がない様子だった。

靴木の視線はチラチラと右サイドを向く。気村は不敵ににやけながら、目を離れた瞬間に軽くフェイントを入れて剥がし、前方を指さしなから棗たちへ視線を向ける。

「棗、サイドからだ！」

「心得た！」

一瞬パスコースを空けた隙に、気村から右サイドに張っていた棗へ、一気に縦パスが放たれる。かなり離れた距離からのパスは、右S

Bのホープが簡単に処理できるであろうスループス。だが、靴木は焦った様子で背後へ振り向き、声を張る。

「ホープッ！」

「……あつ」

スループスが、どこか、ここに在らずと言った様子で戻っていたホープの足先を掠め、棗に通った。まだゴールから距離はあるが、このまま進ませれば危ないという感覚が身体中を巡る。急激に訪れたピンチに、DF陣が慌ただしく動き出した。

「私が行く！」

CBの様崎が、鈍い動きでゴール前に鎮座している太田を追い越して棗へと突っ込む。そのクイックネスを遺憾なく発揮し、月面を走るような軽やかなダッシュで彼女との距離を一気呵成に詰めていった。が、棗は慌てない。

「フツ、ゴール前がガラ空きだぞ！」

「っ、太田くん！」

様崎を十分に引きつけてから、棗が精度の高いセンターリングを放つ。様崎の声に反応して、右サイドに寄ってきていた太田の頭上を超える軌道のクロスボールが、滑らかにペナルティエリアへ侵入してきた。

「あつ、しまった……」

「やつと俺の番だなア！」

空気を切り裂くボールを見送ることしか出来ない太田の背後に、ツートップの一角である鈴木が颯爽と走り込んでいる。威勢よくボールの落下地点で、左足を軸に右足を振り上げる彼の爛々と輝いた目が、ゴールマウスに立つ久良島を捉えた。

「っ……い！」

だがその眼光にも怯えを見せず、久良島は真正面から相對する。すでに大きく息を吸い、全身の筋肉に力を入れて油断なく構える彼女に、鈴木が獰猛な笑みを見せ、踏み込む。

「ハハハッ、いい度胸だな！ 食らいやがれッ！」

「止めます……い！」

鋭い声と共に、右足のボレーシュートがボールに蹴り込まれる。その視線はゴール右隅へ向いており、狙いを定めているのだロア。パワーストライカーの風貌をしている彼がコースを狙ったシュートを選んだのは予想外だったが、彼女は足の筋肉にグツと力を入れ、いつでも飛び上がれる体勢を作りながら、蹴り抜かれる寸前のボールからも目を離さない。

「うらあ!!」

右足のボレーが鋭く打ち出される。

落ちて着いて軌道を読み、腕を目一杯伸ばして飛び上がるは右隅。

「はあっ!」

読み通り、伸び上がったシュートは右隅へと直行してくる。身体能力に任せて、グンツ、と突き出した右腕のパンチングが、辛くもボールを弾き返した。ペナルティエリア内にボールがこぼれる。

「チツ、止めるかよ!」

「……反射神経には、自信があります……!」

鈴木 of 毒づきにも冷静に返した久良島は、弾いたボールをキャッチしようと倒れた体を起こして前を見る。

そこには、こぼれ球へ抜け目なく詰めていた棗が、右足を振り上げる姿があった。

「早い……!?!」

「もらったぞ!」

動揺を押し込み、棗が素早く放ったシュートに必死に飛びかかろうとする久良島だが、無情にも、ボールは指先を掠めて背後へと抜けてしまう。

しまった——信じられないと言った表情で、彼女は振り向く。その先では、多少指が触れたことで、勢いのなくなったボールが緩やかにゴールラインを——

「ちえいさ——!」

——割らない。

こぼれ球へ向かう棗へ、追いつけないと判断してマークを外し、先回りしてゴールカバーへと向かった様崎のスーパークリアに惜しく

も阻まれる。

「キャプテン……!」

「くっ、ボールは生きてるぞ!」

その言葉通り、難しい体勢でクリアされたボールは未だ空中を漂っている。やがて重力に導かれペナルティエリアにぼてりと落ちたそのボールは、そこにポジションを取っていた太田へと渡った。

「ぼ、僕に来た……!?!」

突然降ってきたボールに、驚いたように肩を跳ねさせた彼だが、難しい表情のままボールを保持する。

だが、ボールが落ち着けば当然、泰山のハイプレスは牙を剥く。泰山のFWコンビが、大地を揺らし、獣のようにプレッシングをかけてきた。

「よこせ!」

「うわあ!?! む、無籐くん!」

2人がかりの波状プレスに驚いた太田は、急いで無籐へとパスを送る。荒く回転のかかったボールに苦い表情を浮かべながらも、確実にトラップを成功させる。

「おおっし……!」

泰山の選手たちは攻守の切り替えが追いついていない。ここぞとばかりに、無籐が前を向いて最前線の伊槌たちへとボールを送ろうとした瞬間――

「ホープに渡せ!」

「……! おう!」

声を荒らげ、伊槌が右サイドを指差す。

突然のその指示にも、すぐさま心得たと無籐がパスフェイクを入れて、広大なスペースへと地を這うスルーパスを差し込んだ。そのスペースには、憲戸のスピードスター、ホープが走り込む。

「行けエ、ホープ!」

「……っ!」

血を吐くような声で無籐が叫ぶ。伊槌が、木崎が、デイフェンスと体をぶつけ合いながら前線へと押しあがっていく。その表情は苦し

そうだ。ゴールを決めた先ほどの表情とは似ても似つかない。

このボールを受けることが、本当に彼らを楽しませることにつながるのか——ホープの脳裏に、そんなことがあった。

そんなことを考えていたからだろうか。彼女は自分のスピードが緩んでいることに気づかなかった。

「……あっ」

ホープの走力に合わせて繰り出されたパスは、しかし彼女の足先を掠めてサイドラインを割った。

それと同時に、審判が笛を吹く。ホープには、それが給水の指示だと気づくまでに、少し時間がかかった。それと同時に、無籐の低い声が耳朶を打つ。

「オイ、早く集まれ！」

「ホープちゃんもおいでー」

バツの悪さを胸にしまい、様崎の手招きに応じてベンチ際のスクイズボトルの周辺に集まっているチームメイトの下へと歩みを進めていく。

橘花から受け取ったボトルに目を落としながら、目を合わせないように俯いた。

「ホープ……ダイジョウブ？」

「あ、はい……」

三刀屋の問いかけに、普段の明るさの面影もない、か細い声でホープが答える。心配そうに彼女を見る三刀屋の後ろで、伊槌が歯痒そうに口元を拭った。

誰もが口を閉ざすことしかできない。彼らの中に漂う重苦しい空気を切り裂くように、不意に木崎の声が響く。

「おいおい、何暗くなってるんだよ！ 追い上げてんのは俺らなんだからもつと勢いに乗ってこうぜ！」

「そうですよ！ 私もガンガン突破して点取っちゃいますから！」

明凧も同調して、暗い空気を払拭するように明るく気楽に言葉を紡いだ。

それでもホープは顔を下に向けたまま動かない。息を吐き、水を流

し込みながら、無籐が頷いて口を開いた。

「お前の本気はあんなもんじゃねエだろ山本オ。自分のプレーを抑えて楽しいかア？俺たちはお前にそんなこと求めてねエよ」

山本、と慣れない名で呼ばれても、彼女は無反応に頷かない。何か思い詰めたように、下を向き続けている。

様崎が無籐を落ち着かせ、ホープの尋常でない様子に困った雰囲気です苦笑しつつも、優しく寄り添って顔を覗き込む。淡いピンク色の髪がふわりと揺れた。

「ほらホープちゃん、いつもみたいに楽しく頑張ろ？」

子供に言い聞かせるような、柔らかい口調で問いかけながら、軽く頭を撫でる。

少しみじろぎした彼女は、何かを抱え込んだ瞳はそのままに、意を決したように様崎へと視線を合わせる。首を傾げて目を合わせ返す彼女に対し、ホープはか細く声をかけた。

「……キャプテンは、この試合。楽しんでますか？」

「ん？もちろん！」

屈託のない笑みを浮かべ、様崎は即答する。

ホープが再び口を開こうとしたその時、審判の下から高々と笛の音が響く。試合再開の合図だと悟った彼らは、素早くピッチへと踵を返していった。伊槌や無籐などは彼女らへと一瞬振り返ったが、足を止めずにポジションに戻った。

晴れない顔色で、様崎と並んでホープも芝を踏みしめる。すると突然、ホープの頬が横から引っ張り上げられた。

「いへっ!？」

「顔暗いよホープちゃん！笑顔、笑顔！」

驚きを隠せないホープが横へ視線を向けると、先ほどまでの優しい笑顔を、いたずらに成功した子供のような笑みに変えた様崎がいた。小憎らしい彼女の手を、犬のように体を振って逃れる。

「は、離して下さいー！」

その手から逃れ、むっとした表情で様崎を睨むホープ。だが、彼女の無邪気な笑顔を見ていると、毒気が抜かれていってしまう。

それどころか、頬が緩む。緊迫した試合中だというのに、こんな馬鹿馬鹿しいやり取りで心が暖かくなっていく。

——キャプテンはズルい人だ、とホープは感じる。いつも無邪気で、楽しそうで、爛漫で。

口角を上げるホープを認めた様崎は、その笑みの種類を変える。子供らしいものから、先達として、抱擁するようなものに。

「ふふっ、そっちの方が可愛いよ。皆が楽しいのもいいけど、その前にホープちゃんも楽しくなきゃね」

肩を軽く叩いて、彼女は去っていく。

——こうやって、本当に支えて欲しい時は大人っぽくなる。本当にズルい人だ。

「……私も楽しく」

ホープの瞳に光が戻る。

迷いを断ち切れたわけではない。それでも、ピッチに戻る活力は湧き出ている。

楽しいプレー、楽しませるプレー。それら全ては、試合の中でしか見つけることはできないだろう。彼女は深呼吸をして精神を落ち着かせる。

「……よしー」

そして、サイドラインを跨ぎ、ピッチへと足を踏み入れた。

『楽しいサッカー』を見つけるために。

ハーフラインにほど近いその場所から、泰山のスローインでゲームはリスタートされる。

S Bが投げたボールはサイドハーフの和泉に渡り、そのままセーフティにボールを回してDFラインまでボールを返す。

再びロングボールを狙ってくる。そう判断して伊槌は後ろに手招

きしながら、ボールを貰おうとしている甘塚へとプレスをかける。

「木崎！　ここで奪うぞー！」

「おうー！」

2人がかりで、DFラインに猛烈にプレッシングをかけるが、彼女らは慌てない。落ち着いてGKの足利までボールを戻す。

「あげるねく……」

緩やかなパスが、甘塚から放たれる。それをピタリと止めた足利は、伊槌を見てにひりと笑った。

GKなら、プレスは緩めでいいか——伊槌のその考えを見透かしたかのように、足利は、さらに自信満々に笑みを深める。挑戦的な瞳で、前線を見据えた。

「へっ……プレスに來ないなんてよお、俺も舐められたモンだなッ！」
「……！　こいつ……！」

プレッシャーが緩んだことを感じ取った足利が、滑らかにキックモーションに入る。何かがまずいと直感して、伊槌が急いで襲いかかるが時すでに遅し。彼の足元から、鋭いボールが蹴り出された。

「行けお前らあ！」

顔の横を抜けた疾風に、伊槌が目を剥いて背後へ振り返る。鋭い口ノグパスが、高精度で中盤へと降り注ぐのを見届けることしかできなかった。

そして伊槌は思い出す。今パスを送ったのは、足を武器とする異形のGKだと言うことに。

「こいつ、パスも出せるのか……！」

「今更気づいたかよ！　これが俺のスタイルだ！」

足利の自信に溢れた言葉を受け止めている暇はない。自分たちがポジションを上げたこと、で中盤にぽっかりと空いたスペースが出来てしまっている。急いで踵を返して戻るが、ボールはすでに氣村が押さえていた。

すでにプレスバックしていた木崎の背中を追いながら、バックラインへ腕を振るう。

「守備、気を引き締めろ！」

「言われなくとも！」

靴木がその言葉通り、トラップして一瞬減速した気村の前に立ち塞がる。スタミナが底を突きかけている無籐を補うように、無尽蔵の体力を持つ彼が中盤全域へと目を光らせていたからこそそのカバーだ。

集中を切らさず、すぐさま壁のように現れた巨体に、気村は苦笑を溢す。

「へへへ、ヘルプが早いな……」

にやけ面をそのままに、左右に首を振って周囲を見る素振りをした彼に、靴木が警戒を強める。再三見せているドリブル技か、それともワンツーか——逡巡は一瞬、気村が仕掛ける。

「荒木！」

「ワンツーだろう！」

右サイドへのパスとともに気村が走る。だが予測の範囲内とばかりに靴木は難なくマークを外さず、すぐさまパスを返そうとしていた荒木を牽制した。荒木にも、三刀屋がアタックを仕掛けている。守り切った、靴木は確信した。

「……？　こいつ……」

流石の守備に気村がにやけ面を深めたが、再び荒木とアイコンタクトを取り、前を向いて走り続ける。三刀屋のカバーがまだとは言え、抜かれるわけにもいかない靴木はついていくことしかできない。

そして生まれる、サイドを横断するスペース。荒木はこれを持っていたと言うように、足を大きく振り上げた。

「っ！　出させないヨ！」

「出す！　鈴木！」

三刀屋がスピードを上げてスライディングを試みたが、一瞬早くサイドチェンジのパスが実現してしまう。

ホープがカバーする右サイドへ、高弾道のボールが打ち出される。そこには、太田と肉弾戦で渡り合うFW鈴木が抜け出していた。

「あつ、僕がマークに……」

「行かないで！　ホープちゃんに任せるよ！」

太田の動きを様崎が手で制する。太田はひどく戸惑うように彼女

の方を見返す。

様崎は、強い目で、見守るようにボールの落下地点へ視線を送っている。ホープを慮るようなその目に当てられ、太田の足も、その意思を置き去りにして止まった。

——そして、彼の背後を疾風が吹き抜ける。

「もらったわ!」

「何?!」

ボールが鈴木 of 足元に落ちる瞬間、流星のように現れたホープが、それを搔つ攫った。

一連のプレーに、様崎が屈託のない笑顔を浮かべた。そして、手をあげてホープにパスを要求する。

「ナイス、こつち!」

「はい!」

要求通り、ホープが様崎へとパスを返す。攻撃のスイッチが入ると確信した伊槌が走り出す。

だが、一心不乱に走る伊槌の耳には、一向に背後からカウンターのパスが渡ってこない。まさかと思ひ振り返ると、泰山のハイプレスの網を破れず、DFラインで四苦八苦する彼らの姿があった。

「簡単には通さぬ……! 勝つのは我らだ!」

「チツ……! しつけえなア……!」

無籐も下がって、人数をかけてプレスを掻い潜ろうとしている。が、猛烈に、ワニのように食らいつく必死のディフェンスに攻めあぐねてしまっていた。時間的に次の1点が勝負を決める中で、奪われるのはまずいも判断した伊槌が、右サイドへと視線を送る。

そこでは、ホープが必死になってパス回しに参加していた。先ほどとは見違えた、息を吹き返した彼女が仲間とともに戦う。

「違う……!」

それなのに、伊槌は拳を握る。

「お前がするべきプレーは……山本希望がするべきプレーはそんな平凡なプレーじゃない……!」

そうつぶやいて、ゴール前へと走り出す。失点だけは避けなくては

ならない。必ずボールを生かすために、自分もできることを尽くすために。

だが、伊槌の願いに反して、その時は訪れてしまう。

プレスをかけられて焦った太田のパスから、靴木のトラップが乱れる。その瞬間を棗は見逃さなかった。

「頂くぞー！」

「くっ……い！」

体勢を崩した靴木が、棗の背中を見送る。だが、その目は死んでいない。

ただ必死に手を伸ばす。どうにかして、この少女を止めるために、倒れ込みそうになりながら、ただがむしやらに伸ばした。

「行かせてたまるかっ……い！」

「っ!？」

そしてその手が、ガツチリと棗の肩に食い込む。左半身がグンツ、と靴木の手引き寄せられ、推進力が完全に殺された。

ここで倒れればファウルを貰えるだろう。だが、あのディフェンス陣からフリーキックを決められるイメージが湧かない。逆に止められ、カウンターから失点する映像がありありと、棗の脳裏に浮かぶ。

「嫌だ……い！」

後ろに倒れ込む左足を振り上げ、誰かが取ってくれろと信じて、前方にパスを出す。

「誰か、打って……い！」

仮面が剥がして、棗が請い願う。祈るように目を見開く。倒れるその瞬間まで、ボールも、ゴールの視界に入れて、その瞬間を見届けるために。

——そして執念は、実を結ぶ。背後から飛び出してきた気村がそのパスを受け取った。同時に、棗を巻き込んで靴木が倒れる。

「クソっ……い！」

「こんな本気でやるのは、柄じゃないんだけど！」

ドリブルで上がる気村が、一瞬棗を視界に入れる。必死に見開かれた目、限界を超えていることを示す汗だくのユニフォーム、何もかも

が彼女の本気を語っている。

気村がシュートの体勢に入る。前方には何も無い。少し遠いが、きつと入る。

「このキャプテンに応えないのは嘘でしょ……!」

ボールに激しく横回転をかけ、遠心力で浮き上がるそれを地面に叩きつける。

大きくバウンドしながら、生物のようにうねる強烈なシュートが久良島へと襲いかかった。

「頼むぞ、スピニングバウンド!」

気村の裂帛とともに、スピードが上がったような錯覚を覚える。変則的な弾道で突き進むシュートだが、バウンドの先の軌道なら読めるはずだと、様崎がそのクイックネスにものを言わせて、決死のスライディングブロックを試みる。

だが――

「えっ、軌道が急につ!」

様崎が読んだコースを避けるかのように、空中で軌道を変えたシュートが彼女を打ち破った。そのまま自由に跳ね回り、変幻自在の軌道を描き続ける。

その異常なバウンドに、久良島は改めて警戒を強め、右腕に漆黒のオーラを集めた。パワーは負けていないと確信できる。だから、後はうまくぶつけるだけ、自分に言い聞かせて、息を整えた。

「右、左、右、左、左、右……」

集中を切らずそのコースへと意識を向ける。

――右に来る。直感を信じて、彼女は飛び上がった。

だが、無常にも、ゴール前で跳ねたボールは、鋭く左側へとコースを変えてしまう。

「……つ!」

「入った!」

絶望の呼気音と、歓喜の叫び。勝負は決したと、空気は語る。

その中でも、久良島は諦めない。

彼女は、咄嗟に強く飛び上がった体を捻って回転させ――サイドの

ゴールポストを蹴り出し、ボールに追いついた。

「真つ黒パンチ……！」

「嘘だろ!？」

今度は泰山の面々が驚かさされる番だ。強烈なパンチングは、シュートに拮抗すら許さず弾き飛ばす。

真正面から力で吹き飛ばされたために、未だ回転の残っていたボールは、奇跡のように詰めていた鈴木 of 足元に渡る。

「っ!？」

「しゃあ！ 食らえ——」

「やらせつかよお！」

だが、野生の勘で飛び込んできた木崎が、鈴木がダイレクトで放とうとしていたボールを間一髪クリアする。

不完全なクリアはペナルティエリアの少し前に落下している。そこに、泰山の選手が抜け目なく走り込む。

「チツ……行かせねエよ！」

それを確認した無籐が、壊れそうな体に鞭打ってクリアボールへ詰め寄る。鬼のような形相と殺すような気迫に一瞬気圧された泰山MFだが、すぐに立て直す。

そして、ダイレクトボレーが鋭くその足から放たれた。

「行け！」

「だから、行かせねエってんだろオ！」

走ることすらおぼつかない無籐が、目を剥きながらの決死のヘディングでそのシュートを逸らした。

打ち上げられたボールはゴールを超えてラインを割る。なんとか凌いだものの、コーナーキックで泰山の攻撃は続く。

そしてやつと、伊槌がゴール前に到着した。コーナーが蹴られる前に、彼は急いでホープの下に直行する。

「ホープ！」

「あ、伊槌！ 守り切るわよ！」

あの数分間で、見違えるほど頼もしくなったホープに度肝を抜かれるが、今はそんな場合では無い。

少し話を聞いて欲しい、と前置きをして、伊槌は語り始める。

「ホープ、お前はやっぱり仲間を意識してプレーしすぎだ」

やはり彼女のサッカーの根幹は、誰かに合わせるプレーなのだろう。

そのために力をセーブして、仲間にパスを散らして、自分を押し殺す。伊槌にとって、そのサッカーはすごく悲しい。

人に合わせることは悪いことでは無い。サッカーはチームスポーツだ。その連携は重要だと伊槌は痛いほどわかる。

だが、手加減は違う。ホープにはそれだけは分かってほしかった。そしてできるならば、その先も——伊槌が思考を巡らせていると、ホープが不意に口を開く。

「……そう、ね。……ねえ、私はどうプレーすればいいのかな」

それは、伊槌にとっては予想外の問い。

彼女は変わろうとしている。仲間依存して、その中でしかプレー出来なくなった自分を自覚して、そして変化を求めている。

様崎との話を知らない彼に、そのきっかけは分からない。だが、きっかけなどどうでも良かった。

「簡単なことだ」

伊槌は少年らしい笑みを浮かべる。暗さの無い、爽やかな笑顔だ。

「仲間のために、チームのために……自分にできる全力のプレーをするんだ」

「全力の……」

伊槌は大きく頷く。ホープの大きな瞳を正面から見据えて、一言一句を彼女の心に刻み込むように語る。

「お前の本気を見せてくれ、ホープ！」

審判が笛に手をかける。コーナーキックが直に蹴られることを確認した彼は、足早にマークマンを捕まえるために去っていった。熱い感情と願っただけを残して。

ホープが視線を落とす。少女らしい細い腕から伸びる、熱くなった手のひらに目をやる。そこに、伊槌の、様崎の想いが託されている気がした。

「……………」

拳を握る。

流星に、願いは託された。

右サイドのキッカーが手を挙げる。クロスの合図だろうと、複数の泰山の選手たちがゴール前へ殺到し、それに伴って憲戸の面々も入り乱れる。

ゴール前はまさしくカオス。その混沌にほくそ笑み——キッカーはショートコーナーを選択した。

「うおっ、ヤベェー！」

いち早く反応した木崎が、いつの間にはコーナーに近寄っていた中村にプレスをかけるが、それよりも早く、彼女は強くパスを送る。

ペナルティエリアの前、カオスに釣られて押し下がったディフェンスの前で、ドフリーで構える赤と白の少女。

棗の足元へ、寸分違わぬパスが通される。

「絶対に決めるぞ……………」

エリア内に入っている泰山の選手たちが、憲戸のディフェンス陣を体を張ってブロックし、細いシュートコースを作り出す。

それを確認した棗は、感謝するように深く目を閉じる。そして息を吐き、背後に竜のビジョンを出現させながら、深く踏み込んだ。

「っ！ アンナー！」

「……………はい、2回も、ゴールは割りません……………」

ボールに青いエネルギーが集中する。気迫だけで後退りしてしまいうような、激しい熱気が棗から放たれているように感じる。それほどまでの、圧と執念。

久良島はその煮えたぎる感情に当てられながらも、深く腰を落とし、真正面から見据える。その額を汗が伝った。

「我らが必ず勝つ……………！ このシュートは、その決意の結晶だッ！」

棗の裂帛が空気を震わす。その想いがボールにそのまま入ったかのように、激しく気が燃え上がる。

大きく振り上げた右足がボールを蹴り出す。そして、久良島を穿たんと、食いちぎらんと、紺碧の竜は、少女と共に吼える。

「ドラゴン！ クラアアアッシュー！」

爆発のような音と共に打ち出されたシュートが、ゴールへ向けて、矢のように一直線に向かってくる。芝を切り裂いて進むシュートから目を離さず、ここで失点すれば確実に負ける、と、久良島は自分に言い聞かせる。

「負けられない……！」

右足を踏み込む。足首が潰れるほどに強く踏み込んで、右腕を振りかぶる。

そしてその拳を、竜の鼻っ柱に叩きつけた。

「真っ黒。パンチッ！」

黒の気と青の気が真正面から火花を散らす。やはり、単純なパワーではドラゴンクラッシュに分がある。踏み込んだ足が押されて、ビッチに線を描くのを認めながら、久良島は歯を食いしばる。

負けられない。このゴールは1人では守れなかった。

様崎、木崎、無籐——チームメイトたちの顔が脳裏に浮かぶ。彼らのためにも、このゴールだけは渡すことはできない。

「はああああ……！」

軋む腕を認めながら、久良島は迎え撃つ。

——だが、この世に奇跡は存在しない。想いや、感情は実力をつけてくれるわけでは無い。

残酷にも、冷酷にも。久良島の腕が、弾かれた。

「……っ!？」

「やった……！」

心臓が止まったような感覚がした。足元が崩れ落ちる恐怖が迫ってきた。

——それでも、久良島は足掻く。無事な左腕で、押さえ込もうと手を伸ばす。

だが、当然無理だ。回転に手をつけられない。このシュートの前では、オーラに覆われていない左腕など、紙切れよりも使い物にならない

い。

力に押され、上向いた頭が黒いオーラに包まれた右腕を見つけた。
「ごめんなさい……!?!」

その瞬間、久良島の脳裏にたった一つの奇策が浮かぶ。
成功するかは分からない。それでも、彼女の脳裏に試さないという
手はなかった。

——この世界に奇跡はない。感情は合理の先の結果を変えること
はできない。

久良島の左腕が弾かれる。

「はああああッ!」

——だが、自らの力を信じ、諦めず、行動し続けたものに、微笑む
ものはある。

大きくのけぞったその力を逆に利用し、打ち上げられた右腕を、鉄
拳のようにシュートに叩きつける。

突如上方向から力を加えられたシュートは、その力に沿って、弾か
れるままにピッチに叩きつけられ、大きく跳ねる。

「なんだ……!?!」

「止まって……!?!」

——感情は結果を変えない。だが、行動を変える。

そして、変わった行動の先にある、奇跡のような必然の結果。
人はそれを、運と呼ぶ——。

跳ね返ったシュートは、運良く、クロスバーに弾かれた。

「なっ……!?!」

「ごぼれ球……!?!」

勢いよく跳ね返されたボールは、ペナルティエリア内に着地する。
その場にいち早く駆けつけたのは、気村と、太田の2人だけ。

「もらっしょー!」

「……!」

太田の足は動かない。ここで動いてしまったら、自分は自分で居ら
れなくなる。

気村の足がボールに触れる。きつと、今シュートを打たれれば、先ほどの奇跡のようなセーブは起こらず、何の抵抗もなくネットを揺らす。

それでいい。太田にとってはそれでいい。勝たなくたっていい――

気村がボールを収めて、シュートモーションに入ろうかという時、ふと、久良島のスーパーセーブが脳裏に浮かんだ。

最後まで諦めなかったからこそ思った奇跡。本当にかっこいいと太田は度肝を抜かれた。

自分も、ああんりたい――子供のようにそう思った瞬間、太田の体が、導かれるように動く。

「なっ……!?!」

先ほどまで静止していた太田が突然起動し、気村が困惑の声をあげた。

彼の体が覚えている。あの熱さを。

そして願ったからこそ、動き出す。勝利のために。

「はあっ!」

「ぐあっ!」

パワーチャージ。黄色いオーラを纏い、強烈なタックルで相手を吹き飛ばすシンプルな必殺技。

何回と共に過ごしてきた必殺技が、太田の意思を置き去りにして発動した。そのことに、彼は我に返って困惑する。

「オオター！ ホープに!」

だが、三刀屋のその声に押されるように、急いでホープにパスを通した。

そして、蹴り出したボールがホープに届いてから、改めて実感する。

「僕が……ボールを奪った……」

うわ言のように、夢でも見ているかのように、そう呟いた。

ホープにボールが渡る。彼女はずっと考えていた。この試合中、そして様崎と話して、伊槌と話して、色々なことを考えた。

皆が楽しくサッカーをするためには何が必要なのかを、常に考え

た。それでも、まだ答えは出ない。迷ったような表情で、ドリブルで持ち上がっていく。

「行かせるか……!」

「……っ、ディフェンス……!」

だがその眼前に、自陣に残っていたS Bの内田が立ち塞がる。

反射的にパスを出そうとして、周囲へ視線を走らせようとした、その瞬間――

「山本オ! ビビってんじやねエエ!」

無籐の重機の起動音のような、爆発的な声が響く。驚きと共に、視線が固定され、否応にもディフェンスの内田へと意識が集中する。

「ためエの本気を見せてみろ! ブチ抜けッ!」

隙だらけのディフェンスだ。前傾姿勢になりすぎて、相手のアクションに対しすぐに対応できない。これなら抜ける――確信する。

ホープの中で何かが蘇る。幼い頃の記憶だ。

はじめは、アシストをして笑う自分。ゴールを決めて笑う自分。仲間と共に笑う自分。

そして、一番奥の記憶――ボールをただ追いかけて、弾けるほどに笑う自分。

「……あはは、何だ。本当に簡単なことだったわ」

自分に対して失笑が溢れる。こんなことさえ忘れていたのかと、笑うことしかできない。

サッカーを楽しむなんて簡単なことだった。パスを繋ぐこと、仲間に合わせて、それも確かに楽しかった。

「行くわよ……」

でも、自分が1番初めに手に入れた楽しさは違う。

ただボールを追いかけて、このピッチを誰よりも早く走ること。

全てを置き去りにする、流星のドリブルこそが、山本希望の原点。ならばもう迷うことはない。ホープが体を倒す。陸上選手のように深く前傾姿勢になり、スピードを出す準備を整える。

内田が警戒して距離を空けるが、意味はない。そこはもう、射程圏内だ。

——そして、少女は光になる。風を超えて、疾った。

「ライトニングアクセル！」

「……!? はや——」

周囲の音すら置き去りにする。景色が次々に変わっていく。流れる風が心地いい。

ああ、楽しい——春の空のように、ホープの心に光が差す。

迷うことなく全力を出し、本気で相手とぶつかり合う。それが、こんなにも楽しいとは知らなかった。もつと味わいたい。だから、勝ちたい。

「はああああああ！」

さらに疾る。もつと体を倒し、空気抵抗を極限まで減らす。そうすれば、瞬く間にサイドラインに沿って、ペナルティエリアまでボールを持ち運んでこれた。

流星にここからカットインするのは難しい——ホープが唇を噛んだ瞬間、その男が背後から現れる。

「出せ！」

「……！ ええ！」

必死の形相で、甘塚などのディフェンスを引き連れながらも、伊槌鳴哉はホープについてきた。本気のプレーが仲間と共鳴することに、彼女は今までに感じたことのない高鳴りを覚える。

ホープと伊槌の視線が交錯し、大きくクロスが上がる。伊槌のランコースの延長線上、ペナルティエリア内にあげられた、届くかギリギリの試すようなクロス。

だが、伊槌は笑ってスピードをあげる。舐めるなどでも言いたげに口元が歪む。

「そらよっ！」

そして右足でトラップ。その場でぴたりと止めるスキルフルなトラップの後、右足を振り上げる。ダイレクトにシュート体勢に入ったことを確認した甘塚が、体を投げ出してブロックする。

「やらせない……！」

「……ハッ、助演男優賞は貰うぞ！」

シュートブロックを認めた伊槌が、ボレーの体勢を解除して、右足にボールを乗せる。曲芸のようなフェイントに、甘塚は目を剥くしかない。

そしてそのボールは、リフティングの要領で軽くガラ空きのサイドに送られる。

——そこには、たつた今クロスを上げた流星が鋭く走り込んで来ている。怪物のような俊足を遺憾なく発揮し、勝利のためにプレーしている。

「いくわよー！」

ホープが、伊槌からのパスを高く打ち上げる。遙か天空に打ち上がったボールに対し、星のようなエネルギーが集っている右足をボレーで叩きつけ、流星のようなシュートを打ち出した。

「すいせいッ、シュート！」

願いを伴った一撃が、泰山ゴールへと降り注ぐ。だが、強い瞳で見返す足利が、獰猛な笑みを浮かべそのシュートと相對する。

そして、威勢の良いジャンプと共に、鋭い右足ボレーで迎え撃つ。勝利への執念が滲んだ一撃を、渾身のシュートに見舞った。

「シールドボレー！」

何度もシュートを受け止めて軋んだ足に、強烈な衝撃がかかる。思わず吹き飛ばされそうになるが、気合だけで持ち堪える。

雄叫びを上げながら、足利が右足を振おうと懸命に戦う。筋肉が千切れそうな感覚も無視して、ただこの瞬間にかける。

「止まれえ……！」

「いつけえええ！」

ボールの回転が強まった。流星の重さがさらに強くなる。

それでも彼は最後まで足掻き、右足に全てを込めてぶつける。だが、願いをのせた星は負けない。全てを貫く勢いで、その右足を吹き飛ばした。

「のわあっ!？」

足利が吹き飛ばす。シュートは、彼を弾いて、ゴールネットに深々と突き刺さっていた。

GOAL!!?

60+3分 山本希望

アシスト：伊槌鳴哉

憲戸 2-1 泰山

ネットから響く摩擦音が終わると同時に、審判が高々と笛を吹く。試合終了の合図だった。

ホープは、信じられないと言った表情で、でも喜色を隠しきれない表情でネットに突き刺さったボールを見る。そして、スコアボードへと視線を移す。

——2-1。紛れもない、自分たちの勝利だ。

「……やったああ！ やったわよ伊槌！」

「ああ、勝ったんだ、俺たち！」

そのことを改めて飲み込めたホープが、伊槌とハイタッチを交わす。きつと、ホープが変わらなければこの勝利はなかった。彼女がこうして勝利に心から湧くこともなかった。

そう考えると、伊槌の顔にも笑みが浮かぶ。今はただ、この素晴らしい感情を噛み締めていたかった。

「だあーっ、クソ！ キック力あげて出直してくるぜ……」

「……負けたあゝ……サイアク……」

足利と甘塚が、地面に倒れ伏しながらそう溢す。

勝負は残酷だ。必ず敗者を作り、勝者は敗者の屍を踏み越え続ける。生半可な気持ちでは向き合えない。

だからこそ、伊槌は2人に歩み寄る。そして、倒れていた2人の手を取った。

「……ありがとう、良い試合ができた。いつかまた、戦おう」

「……へっ、おうよ！ 今度こそお前のシュート、止めてやるぜ！」

「んゝ……音夢はいいや……って言いたいけど……楽しかったしまた

ね〜……」

そう言つて、2人はベンチに下がっていく。その背中を見届けていた伊槌が気配を感じて振り向くと、ホープを抱き寄せた様崎と三刀屋がこちらへ来ていた。

「やったね、鳴哉くん！」

「イツチもいいカツヤクだったね、偉い！」

「はは……ああ、やったな」

拳を合わせて、互いにねぎらい合う。

様崎に抱きすくめられながら、完全に無視して進められていたホープがバタバタと暴れてその存在を主張する。ちよつと高い様崎と平均ちよい下なホープの身長差は丁度抱きしめやすそうだなあ、と伊槌はどうでも良いことを考えていた。

「キャ、キャプテン……！ 苦しいですつてば……！」

「あはは、ごめんごめん」

相変わらず悪びれた様子のない彼女を、ホープが睨みつけていたが、仕方ないと思つたのか、肩をすくめてため息をついた。

苦笑する伊槌の下に、大仰な足音を立てて棗がやってくる。様崎たちに囲まれる伊槌を一瞬萎縮した様子を見せたが、すぐに不敵な笑みを作つて口を開く。

「フツ……流石にやるな、『白い稲妻』よ……今回は、敗北を認めよう」

「白い稲妻……？」

棗のその言葉がつい気になって口に出してしまう。本当に知らない異名で呼ばれたことがいつまでも引つかかっていたが、彼女は無視して続ける。

息を大きく吸つて、拳を突き出す。そのまま髪入れずに彼女は語り出した。

「我らに打ち勝つたのだ……負けるでないぞ！ あの憲戸中を2―1まで追い詰めたのだと、胸を張って言えるように勝ち進め！ 良いな！」

「……ああ、もちろん！ お前の想いも背負っていく！」

棗の言葉を震えていた。悔しさに打ち震えているのだろう。それ

は伊槌にはどうすることもできない感情だが、棗なら乗り越えられると、一種の確信があった。

だから、ただ突き出された拳に、伊槌も拳を握って合わせる。不敵に笑う彼女に、獰猛な笑みを浮かべ返した。

「そして……次は必ず——」

そこから、棗の言葉が出てこない。震える目尻と声が、彼女の限界を示していることに、伊槌は察しがついていた。

「……我慢しなくていい。泣くことで敗北が受け入れられるのなら、泣いていいんだ」

「涙、など……」

棗はあくまで強がろうとしたが、伊槌の言葉に押されてしまったのか、右目からつう、と雫が溢れる。

彼女の輝く金の瞳が潤んでいく。ついにそれは止めどない雨となって少女の頬を濡らしていく。棗は、継るように伊槌の胸に顔を寄せてきた。

驚きながらも、伊槌はそれを受け入れる。

「悔しい……！ あと、少しだったのに……！」

「……ああ。この涙と一緒に、その感情を忘れるな」

割れ物を扱うように、彼女の銀髪に手を滑らせる。慣れない手つきだが、棗は暖かなその感触が心地よかった。

「敗北を受け入れられた人間は強くなる。次に会う時を、楽しみにしてる」

「……ッ！ ああ、首を洗って待っている！ もう憧れるだけではない、貴様を超えて見せる！」

涙を強引に拭い、ビシツと大仰な動きでこちらを指差してくる棗に、伊槌は笑みだけを返す。棗も、獰猛に笑みを浮かべた。

その背後では、様崎がこそそと三刀屋に何か耳打ちしていた。いや、耳打ちではあったが、明らかに伊槌たちが聞き取れるように音量を調節している。2人の声が滑らかに耳朵を打った。

「みとちゃん、ああ言う鳴哉くんみたいなのをね、『女たらし』って言うんだよ」

「へー、イツチはオンナタラシなの？」

ギョツとして振り向く。そこにはニヤニヤした様崎が伊槌を指差しながら、純真な表情の三刀屋にいらぬことを吹き込んでいた。伊槌は努めて冷静に三刀屋を説得しようとする。

「違うんだ、別にそう言うつもりじゃ……」

「そ、そそそ、そうだぞ！ わ、我もそんなつもり全然なくて！」

棗がありえないくらい動揺している。三刀屋は首を傾げていたが、また様崎がその耳に唇を近づけていらぬことを吹き込む。頼むから妙なことを言わないでくれ、と言う伊槌の願いは全く届かない。

「でも、サクヤはハグは仲良しな人としかしないうって言ってるヨ？」

「何でさつきハグしてたノ？」

「あれは成り行きで……？」

「……わ、わわわ我は失礼するるので」

ロボットのような不自然な動作で棗がさっさと逃げ去っていく。

その声は震えていた。先ほどまでと理由は全く違うだろう。

伊槌の胃は潰れそうだった。様崎は爆笑しながら三刀屋に揶揄ったことを謝っている。ホープはずっと赤い顔で我関せずを貫いていた。

「……」

先ほどまでのやりとりを記憶から抹消し、彼女と合わせた拳に視線を落とす。

負けられない理由がまた増えた。プレッシャーは好きではないはずなのに、この重みは、妙に心地いい。

「キャプテン」

「ん？」

三刀屋たちと戯れていた様崎がこちらを向く。真剣な雰囲気を感じ取ったのか、茶化さずにしつかりとこちらを見据えている。その瞳は純粹に輝いており、この試合を心から楽しんでいたのだろう。

そんな人だからこそ、伊槌もサッカーに復帰することができた。感謝してもしきれない。そして、自分にその感謝を伝えられるものは1つしかないのだ。

伊槌が不敵に笑む。

「この先も、勝とう！」

誓うように、伊槌はその言葉を強く放った。

今はただ、愛しいチームメイトを見つめながら――。

FULL TIME!!?

憲戸 2―1 泰山

0 1st 1

2 2nd 0

得点者

30+2, 棗 龍華 0―1

38, 伊槌 鳴哉 1―1

60+3, 山本 希望 2―1

14話：特訓の日々

「伊槌い、君は本当にいいご身分だなあ？」
「……………」

泰山中との戦いから一夜明けた放課後。伊槌は勝利を未だ噛み締めながらグラウンドへと歩を進めていた。

意地と意地をぶつけ合った素晴らしい試合を制し勝ち上がったことは、きつと彼らの大きな自信になる。懸念材料だったホープのメンタルもいい方向に転がり、これからの試合にも期待が持てる。

「確かに君の実力は相当なものだ。だけど忘れるなよ、子猫ちゃんたちの視線は僕のものだ……………」
「……………」

伊槌の下からガンを飛ばす梵場が、そのアフロヘアを揺らしながら暗い目つきで宣言する。他意はないが、伊槌は歩く速度を早めた。激しい試合の後だが、休んでいる暇はない。この先を勝ち進んでいくためにはさらに力をつけていく必要がある、という無籐の鶴の一声のもと、憲戸中サッカー部は今日も練習が予定されている。伊槌にとって願ってもいない申し上げだ。

「それに、それにお前は……………！ 子猫ちゃんの視線を引くだけでなく、あの少女とハグまで——」
「掘り返すな……………」

努めて梵場の発言をスルーしていた伊槌が、流石に苦虫を噛み潰したような表情で彼の肩に手を置く。そして、諭すようにゆつくりと口を開いた。

「あれは……………言わば事故だ。そんなつもりはなかったが、泣いてる子を放つてはおけないだろ」
「……………そうか」

目をしっかりと合わせて、サングラスに反射する自分の顔を穴が開くほどに見つめる伊槌が、真摯な表情で弁明する。

梵場は重々しく頷いてその言葉を受け取った。そして、少し表情を緩めながら大仰に手を広げ彼を見返す。

「まあ、その紳士的な心に免じてあの件は終わりにしてやろう。だが忘れるなよ伊槌、子猫ちゃんの注目の的は僕であることを……！」

「ああ……ええ、分かっていますよ」

崩れていた口調を取り繕いつつ、伊槌が疲れたように言葉を吐き出した。

「ところで1つ聞きたいんだが……」

「……何です？」

藪から棒なその質問に、何故か背中に冷や汗がつうつと流れた。嫌な予感を押し殺す伊槌が、気の進まなそうな表情を梵場に向ける。

梵場は実に真剣な表情で、ふざけた様子など一切ない、真摯な顔をしていた。その雰囲気引つ張られ、無意識に背筋を伸ばす伊槌に対し、彼は重々しく口を開いた。

「女性とハグするってどんな感じなんだい？」

伊槌の右腕が、目にも止まらぬ速さでアフロヘアを切り裂いた。

梵場とのいざこざを乗り越えた伊槌は、土のグラウンドを駆けて練習に励んでいた。私的な都合ということで大田を欠いていることは不安だが、それでも練習を止める理由にはならない。

攻撃側と守備側に分かれた実戦形式の練習。その中で彼は、チームメイトたちの確実なレベルアップを肌で感じ取っていた。

「はあっ！」

「チツ、すばしっこいな……！」

明風が巧みなボールコントロールを持って、フェイクを織り交ぜつつ変幻自在のドリブルで無籐を突破する。フリーになった彼女の視界に入り込むように、伊槌がペナルティエリアへと切り込む。

「開いてるぞー！」

「はい、伊槌先輩！」

明風の右足から鋭いボールが放たれる。動き出しに呼応した完璧なクロスボールに凶悪な笑みが溢れるのを自覚しながら一気にシュート体勢に入ろうとした伊槌の前に、鮮やかな色が颯爽と立ち塞がった。

「やらせないよ！」

「っ、ナイスカバーだな」

シュートポイントに素早く現れたのは様崎。ポジションは離れていたはずだが、流石の俊敏性だと伊槌は舌を巻く。

上に飛び上がりかけたアクションを気合いで解除し、踏み込んだ足で正面に飛ぶ。様崎を背後に背負い、ボールをキープする算段だ。

「そんな簡単に持たせないよ！」

だが、体格に差がない彼女と競り合うのは分が悪い。強いタツクルに一瞬体勢を崩された伊槌は心の中で舌打ちをして、周囲へと視線を広げる。

そして、走り込む梵場の姿を認めた伊槌が、今度こそ飛び上がったボールを胸トラップでコントロール。そのまま、体を無理矢理突き出してチェストパスを梵場に送った。

「やれー！」

「君に輝かされるのは不本意だがね！」

悪態をつきながら梵場がフリーでエリアへと侵入していく。シュートコースの多さにゴールマウスを守る久良島が逡巡するかのように顔を歪めた。

だが、梵場の斜め前から向かっていく影が一つ。先ほどまで伊槌と競っていた様崎がすぐさまカバーに入った。

「杏菜ちゃん！」

「……はい！」

素早く寄せられた梵場が苦しげに、されどどこか嬉しそうな複雑な表情を浮かべ、様崎に寄せ切られる前に右足を振り抜く。

その瞬間、久良島は迷いなく右に跳んだ。

「なっ、読まれた!?!」

梵場の驚嘆の声に、様崎がウインクを返す。彼女の的確なカバーリ

ングがシュートコースを消し、彼のシュートを経験が浅い久良島でも完璧に読めるよう、誘導したことに気づいた伊槌は驚きを隠せない。「こぼれ球！」

久良島のパンチングに弾かれたボールはまだ生きている。体勢を整えた伊槌が声をあげながら一目散に走り込むが、守備者である三刀屋はそれよりも早く反応し、クリアの体勢に入っていた。

「終わりだヨー！」

「ッ！ させるかア！」

空気を裂いて振り抜かれた右足にクリアされたボール目掛け、伊槌が決死のスライディングキックを仕掛ける。

ボールは爪先を擦り、大きく上に弾かれながらも中途半端な位置に落とすことに成功した。そこにいち早く走り込んだのは、汗を流しながら、その端正な顔立ちに似合わない目つきでゴールを睨む攻撃側選手の橘花だ。

「よし……！」

「好きにはさせませんよ」

だが、みすみすその動きを見逃すはずもなく、宵闇が彼に正対する。気怠げな言動とは異なった剣呑なほどの雰囲気、一瞬怯まされる橘花だが、唇を噛んで宵闇とのマッチアップを開始した。

「行きますよー！」

大きく右に持ち出す素振りをフェイントに、繊細なボールタッチで足元からボールを離さず左へドリブル突破を図る。フェイントには釣られた宵闇だったが、一旦離された距離を最短で詰め、マークを外さない。

むしろ積極的にボールを奪おうと試みて、体をぶつけないように細かく足を出してボールを掠め取ろうとしていた。が、橘花もこれをその精密なコントロールで紙一重で回避する。

「やりますね……！」

「そっちこそ、お疲れのくせに……！」

まさしく一進一退の攻防を見せている2人の間に、ピリピリとした心地いい闘争の空気が流れる。前までの憲戸中サッカー部ではあり

得なかった、本気でぶつかり合う練習に、伊槌はゲーム中であることも忘れその戦いを見届ける。

きつと、泰山戦での勝利が彼らに闘争心を取り戻させてくれたのだろうと推察する。特にあの2人は前回出場機会を掴めなかったこともあり、より気を張っているように見えた。

「ふっ！」

「はっ！」

細やかなドリブルで抜き去ろうとする橘花に間一髪で宵闇が食らいつく。徐々にであるが、橘花の動きは荒くなってきた。息を弾ませる彼を見るに、体力的な問題だろう。

自分の限界を自覚した橘花は、拳を握って何かを決意したかのように正面を見据える。そして、フェイントを全くかけずに大きく右へ持ち出した。

それを勝負の合図と受け取った宵闇が、蹴り出されたボールに回り込むため、一気に前進する。

「——かかった！」

「えっ」

だが、その動きを読んでいたかのように、強いバックスピんがかけられたボールは急停止し、宵闇の前で止まって橘花の足元へと吸い付く。そのまま橘花が間髪入れずに足を振り上げ、前線へと指示を飛ばす。

「伊槌先輩！」

「ああ、来い！」

伊槌がマークについていた様子を押し込み、その反動を利用し、ペナルティエリアは出ないように、されどゴールから遠ざかるような計算されたオフ・ザ・ボールで一瞬フリーの状況を作り出した。

「やばっ、やらせるわけにはいかないじゃないですか……！」

このままパスを出されれば1発失点であることを認識した宵闇が、崩れた体勢から、無理矢理飛びかかるようにスライディングをボール目掛けて見舞う。

そのタツクルは、寸分変わらずボールを弾く——はずだった。

「読んでました!」

「……ッ!」

その言葉通り、橘花が鮮やかに、桜の花弁を散らすような流麗なキックフェイントを見せて宵闇のスライディングを回避する。彼女の行動を読んでいなければ成立しないプレーに、嵌められたことを理解しながらも宵闇は唇を噛んで見送るしかない。

そして、完璧にフリーになった橘花が、意気揚々と右足を振り抜く。「いけえ!」

鋭く、優しく放たれたキラーパスは伊槌目掛けて一直線に突き進む。その進路上に割り込んだホープが、飛びついてスライディングでカットを試みた。が――

「届かない……! キャプテン、すいません!」

「オツケー、鳴哉くんには打たせないよ!」

無情にも足をすり抜けたボールが伊槌の懐へ入ろうかと言う瞬間、様崎が抜け目なくプレスをかけてシュートコースを殺した。このままでは反転してもシュートが打てない。つい舌打ちしそうになった伊槌だが、受けようとして視線を落とした際、未だ突き進むパスを見て、そこに込められたメッセージを読解する。

一瞬、橘花と目を合わせる。「そうだ」、と頷いた気がして、彼は無理矢理反転して足を振り上げた。

「わっ、無理にでも来る気!? でもそんな甘くないよ!」

パンツ、と柏手を打った様崎の周りに、衛星のような3つの球体が漂い始める。シュートブロック技であるサテライトドローを見ても、伊槌の目は変わらない。

大きく振り上げた足を、鋭く、強く射抜いた。

「感じてるだろ、ストライカー!」

空気の切り裂かれる音とともに、ボールが伊槌の前を通過する。シュートフェイクからのスルー、そう理解するのに様崎でも一瞬時間を要した。それほどまでにリアリティのあるフェイントに、守備側の時間が1秒停止する。

だが、ピッチではそれすらも致命傷。伊槌の背後から、大きく足音

を立てて走り込む少年——木崎が、喜色満面の笑みでボールに飛びついていた。

「決めてやるぜ、グレネードショットオ！」

ダイレクトで放たれた青いオーラを纏う破壊的なシュートは、呆気に取られていた久良島に反応すら許さず、ネットに深く突き刺さってゴールを奪い取った。

「よっしゃあ！ 橘花あ、お前パスヤバすぎるぜ！」

「…………止められなかった…………」

ゴールで全ての緊張の糸が解かれ、伊槌がその場に座り込んで休む。木崎は橘花へと飛びつくように駆け寄ってお互いのプレーを褒め合い、失点に歯を食いしばる久良島の背中を、様崎が軽く叩いて慰めとしていた。

練習を眺めていた月並が時計に目を落とし、大きく笛を吹く。

「今日の練習は終わりだ！ 各々疲れは取っておけよ！」

月並の音頭に、各自協力して片付けを行い、自由に行動を開始する。しつかりクールダウンを行う者、帰る準備を進める者、自主練に励む者と、なんとなく集まって行動を起こす。ホープと一緒にストレッチをしていた伊槌が、何とは無しにホープに問いかけた。

「ホープは自主練とかしないのか？」

「あたしはあたしでメニュー組んでるの。全体練習はともかく、それ以外でメニューを崩したくない」

「そうか」

足を開いて体を前に倒す前屈の体勢を崩さないままホープが答える。ルーティーンの遵守や、仲間に合わせたがつていたメンタルなど、彼女を知られば知るほど繊細な人間性をしていることが分かって来る。彼女への理解の深まりは、きつとこれからのプレーにも役立っていくだろうと、伊槌は足の筋肉を伸ばしながらぼんやりと考えた。

その視界の端で、遊ぶように、自由にボールを操ってリフティングをしている様崎が目映る。流れのままにその背中に質問をぶつける。

「キャプテンは自主練？」

「ん？ まーそういうことになるかなー。なんか物足りなかったからさ」

「えっ、キャプテン自主練するんですか!？」

ガバツと起き上がったホープが驚愕を露わにして口をパクパクとさせていた。地味に失礼なことを言われた様崎は肩をすくめて微笑をこぼす。

「ま、確かに今までやってこなかったけどさ……なんか火がついちちゃって」

「サクヤがやるならワタシも助太刀するヨ！」

「……俺も、練習中に大したことができなかったからな」

苦笑する様崎の背後から、三刀屋が、靴木が顔を出す。しばらく呆然と口を開いては閉じていたホープだが、突如立ち上がって彼女たちの方へ寄って行った。

「あ、あたしもやります！」

「……メニユー崩したくないんじゃないのか？」

「細かいことはいいの！ たまにはキャプテンと練習したいし！」

声を張ってホープがそう宣言する。その言葉に様崎が満足そうな顔でうんうんと頷きを繰り返す。

「可愛い後輩を持ったねえ、私たち」

「センパイとして期待に答えなきゃネ！」

拳を握って軽く盛り上がる様崎たちに、伊槌がぼうつと視線を合わせる。

確かに様崎との練習では得るものは多いだろう。その卓越したDF力もいい経験になるし、ボールタッチの巧みさや体の使い方など攻撃面でも参考になることが多い。

それに何より、伊槌は彼女と共にいると妙に安心感を覚えた。あまりよく分からない感覚だが——悪い感情でないのは確かだ。

「……ん？ そんなじつと見て、どうしたの鳴哉くん、照れちゃうよ」

「え？ ああいや……特にないけど、ごめん」

伊槌の視線に耐えかねた様崎が、頬に朱色が差した様子でわざとらしく身を振らせながら、茶化すようにそう言葉を紡ぐ。

しどろもどろになる伊槌に、ホープが不審げな視線を送る。そして次の瞬間、天啓でも得たかのようにニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべ始めた。

「伊槌も一緒にやりたいの〜？ キャプテンと2人きりで〜？」

「ホープちゃん？」

揶揄うようなホープの声音を認めた様崎が、彼女を強めに抱きしめて無理矢理口を塞ぐ。バタバタと暴れる彼女の頭を優しく撫でながら、困ったような表情を伊槌に向けた。

「えつと、まあ2人きりかどうかはともかくさ、一緒にやる？」

首を少し傾げながらそう問いかける彼女に、反射的に肯定を返したくなった伊槌だが、困ったような表情を返し、手を合わせて軽く頭を下げた。

「俺もやりたいけど……悪い、先約があつて……」

「あ、そうなんだ、残念」

抱きすくめていたホープを解放した彼女が肩をすくめる。罪悪感を覚えながらも、伊槌は背後から足音を立ててやってくる影に目を向けた。

「遅エぞ、何やってんだ」

「悪い、今行く」

その影は無籐だ。その姿を認めた靴木が意外そうに口を開く。

「珍しいな、お前が自主練に人を付き合わせるとは」

「……まあ、色々あんだよ。秘密の特訓ってやつだ」

その答えに、ほう、とだけ呟いた靴木がボールタッチの練習に戻る。もう気になることはない、ということだろう。

無籐がふとこぼした秘密の特訓という単語に、明風などの1年たちが多少食いついていたが、声はかけてこなかった。伊槌は拾わなかった。あの様子なら、おそらく何も言わずとも勝手についてくるだろう。

「じゃあ、そういう訳でまた明日」

「ん、ばいばーい」

後ろ髪を引かれる思いを覚えながら、伊槌は様崎に背を向けて歩き

出す。

陽は夕焼けに傾き始め、その鮮やかな色は彼女の桃色の髪を照らして、その相貌に美しく影を形作っていた。

無籐と伊槌の男2人組は、並んだ状態で河川敷沿いの道路を歩いていた。靴がアスファルトを叩く音だけが木霊していた2人の間に、突如として無籐が口を開く。

「お前、キャプテンのことはどう思ってたんだ？」

「……？ どうって、どういうことだ？」

いまいち要領を得ない質問だと感じた伊槌が問い返す。言葉を選んでいられるかのように悩む素振りを見せた無籐は、面倒臭くなったのか大きくため息を吐いてから口を開いた。

「……まあ、人間としてでもサッカー選手としてでもいい。印象を聞かせてくれや」

「ああ……明るい人だと思う。それ以上にプレーは印象的だよ、俺すら凌駕するクイックネスに野生の勘があると思えないDF力、他にも——」

オブラートに包んだ無籐の問いに、馬鹿正直に様崎のサッカープレイヤーとしての素晴らしさを滔々と語り出した彼に、思わず微笑ましい笑いが溢れる。

「自覚なしかよ……」

「え？」

「なんでもねえよ。着くぞ」

話しているうちに階段を降り、かつかつと石を蹴つ飛ばしながら進んだ先には、頼りないライトだけが照らす、薄暗い橋の下だった。

地域によって清掃はされているのか、ゴミなどは落ちておらず意外と綺麗だったが、壁面はそうでもない。スプレー缶の落書きとは違う

黒い跡が転々としてあり、何か叩きつけられたような、軽い陥没も確認できた。

「ここが、あの日記の……」

「ああ……もういいだろ」

無籐が右腕につけた、古びたミサンガを揺らしながら軽く髪をかきあげる。そして、背後に鋭い視線を向けた。

「そこ、居んだろ？ 出てこい」

「……バ、バレてたんですか……」

「来そうだなって思ってたしな」

橋の影から、明風、宵闇、久良島の1年女子組がバツの悪そうな表情で顔を出してくる。同じ1年の橘花は不在だったが、彼は日課にしている早朝のランニングと先ほどの練習を合わせて体力が尽きてしまったのだろうと伊槌は当たりをつけた。現に、学校を出る際死にそうな彼がグラウンドに横たわっていた。

「わざわざ尾けてきたのか？」

「まあ、気になったんでつい……」

目を逸らしながら宵闇が答える。視線を右往左往させており、見つけたことに結構動揺していることが見て取れる。

一歩引いた位置に立っていた久良島が、意を決したように踏み出して、藪から棒に問いをぶつけてくる。

「えつと……お二人はここで何を……？」

「言っただろ？ 俺の秘密の特訓にこいつを付き合わせるんだよ」

そう言っただけは伊槌を指差した。今度は明風が質問を重ねてくる。

「どうしてそんな急に？」

「……無籐がシュート技の開発に難航してるから、FWの俺を呼んだ、ってのと……」

その先を言い淀んで、伊槌がチラリと横に視線を向ける。視線を受けた無籐は対して逡巡する様子もなく、顎をしゃくって続きを促していた。1年たちも話を聞く姿勢に入っており、引くに引けないかと、伊槌は口を開いた。

☆☆☆☆

泰山中との試合終了後、少々のいざこざを抜けた伊槌は汗を拭こうと、ベンチに引き上げていた。その時、彼の視界にベンチに横たわる男子の姿が映る。それは無籐の姿だった。

『……ああ、お前か……。悪い、氷嚢取ってくれねエか、俺が持ち込んだクーラーボックスに入ってる……。ベンチの裏手にある……。』

未だに汗を垂らした無籐が、疲労困憊の様子でそう言ってくる。特に面倒なことでもなかったので、伊槌は対して考えることもなく安請け合いした。

彼の言葉通りベンチの裏手に回ると、そこには確かにクーラーボックス、そして古びた日記帳が落ちていた。

日記帳をそのままにするわけにもいかないと思った伊槌だが、表紙にも裏にも名前が書かれておらず、困った彼は苦肉の策として中身を目を通す。

罪悪感を覚えながらもパラパラとページをめくっていくと、それは無籐のものだとすぐに分かった。

綴られていたのは、橋の下での特訓の日々と、彼のサッカーにかける思いの丈の全て。

裕福ではない家庭、自分のサッカーがそれに負担をかけていることも、完全に自覚した上で彼は進んでいた。その裏には工事現場で毎朝毎晩懸命に働く父、夜家計簿とにらめっこしながらやりくりして道具を揃えてくれた母、自分の活躍を信じて疑わない双子の妹達。自分を信じ、根気よく練習に付き合ってくれたサッカー部の仲間たちへの、万巻の思いの数々。そして、チームメイト1人1人のプレーの特徴がまとめられたページ。

『FW伊槌鳴哉。体勢を問わずフルパワーで打てるシュートセンスと動き出し、シュートパワーは一級品。ドリブルも本人が言っているよりは上手く、線が細い割に当たりも強いが、パスセンスや空中戦は平均的。フィニッシャーに専念させるべきか?』など、最近加入した伊槌に関してもしっかりとまとめられていた。

その思いの数々を、しっかりと汲み取ろうとして読んでいたからこそ気づかなかった。

背後からゆっくり近づく、無籐の姿に――

☆☆☆☆

「……まあ、そんなわけで、罪滅ぼしも兼ねて練習に付き合うことになっただんだ」

「伊槌先輩が100悪いじゃないですか」

明風の鋭い指摘に、返す言葉もないとでも言うように伊槌が視線を下に向ける。久良島たちも微妙な表情で見ていた。

「まあ、過ぎたことだし、見られて困るようなモンでもねエが、精々活用しようと思っただよ」

「悪どい……」

凶悪な笑みを浮かべる無籐に、戦々恐々と言った様子で宵闇がぼそつと呟く。

場の雰囲気を見守り直すような咳払いの後、久良島がすつと手を挙げる。

「……その、特訓、私たちも入れてもらえませんか？」

おずおずとした様子で手を挙げる彼女に、無籐が好機の視線を向ける。伊槌としても練習相手が増えるのはいいことだと思考をまとめ、成り行きを見守ることにする。

「やっぱり私は、GKとして経験が浅いですから……伊槌先輩たちのシュートを沢山受けていきたいんです」

「……ハッ、ははは！ 脳筋な練習するなア、面白エ、付き合っただよ」

久良島の提案した練習に、一瞬呆気に取られた無籐だったが、直ぐに大きく笑い声を上げてその言葉を肯定する。伊槌も拒否する謂れは無いため、ボールを足で弄びながら頷く。

そして、その横の明風たちに視線をやった。

「もちろん、私も参加しますよ！ 伊槌先輩のシュート技術、全部盗ん

で、最高のストライカーになつちやいます！」

「……まあ、私も。とりあえず必殺技を練習したいです。……試合に出られないのは、嫌なんで」

気合十分と言った様子の2人に、伊槌も笑みをこぼす。そのまま、かつかつと石の床を靴が削る音を響かせ、大層な宣戦布告を叩きつけた明風近づいていく。

「俺みたいなFWになれるか？」

「はい、なってみせます！」

そう、いつも通り元気に宣言した次の瞬間、彼女の顔に影が落ちるような、仄暗い感情が現れる。

「FWは……私の夢ですから」

いつもの底抜けに明るい彼女とは別人のような、儂げで暗い笑顔を浮かべる。

間近で見た伊槌は、あまりの雰囲気の変化に思わず少し息を呑むが、すぐに表情を取り繕う。そして彼女の肩に手を乗せ、その深い色の瞳に視線を合わせた。

「……なら、特訓は欠かすなよ。お前だけのFW像を見つけるんだ」

「……はい、分かっています！」

今度は、いつも通りの明るい笑顔。突然の雰囲気の上下動に、伊槌が少し混乱を隠せないでいるが、無籐たちは既に練習の準備に入っている。

置いてかれるわけにはいかない。明風とアイコンタクトをして、彼らの輪の中に走り込んでいく。

このチームには、まだまだ乗り越えなければならぬ壁があるのかもしれない。それでも、伊槌の中に諦めるという選択肢はなかった。

ホープのことを乗り越え、勝利を手にしたこのチームなら絶対にいける——確信に近い予感が、彼を突き動かす。

次に運命が動く日まで、あと3日。

15話：FF青森県予選第2回戦 VS 亜蘭中学

右を向けば、打ち捨てられたゴミの数々。視線を逸らすように左を見れば、言い争う学生達。

喧騒と無秩序が支配する空間。亜蘭中の学区を、息を殺しながら歩く伊槌は、気持ち悪い汗を滲ませながらこの空気をそう表した。

「少し急ぐか……」

集合時間まではまだまだ余裕があるが、周囲の異様さが彼の足を早めさせる。試合前に問題を起こすわけにはいかない、と思考を巡らせた伊槌が、出来るだけ目立たないように歩を進めた。

絡まれないことを願う伊槌だったが、その意志を踏み躪るかのような足音とともに、彼の背後に影が差す。伊槌が不審さを覚えて振り返った刹那、伊槌より一回り大きく、目から光を失った、謎の法被はっぴに身を包んだ男が、大きく拳を振りかぶり、血走った目でこちらを睨みつけていた。

「ッ!?!」

「オラア!」

咄嗟の判断で大きくのけぞり、顔面を引く。先ほどまで頭があつた位置を通り過ぎたフックが、空気を切り裂き、鋭い風が伊槌の顔面を叩いたのを感じた伊槌から血の気が引いていく。

「なんだ、コイツ……!」

即座に体勢を取り直した伊槌が大きく後ろに飛び退きらどつと湧いてくる冷や汗を拭う。その間にも、視線は目の前の男から外さない。穴が開くほどに、その光なき目を睨みつける。

その暗い瞳に違わぬ、感情の読めない低い声が伊槌の鼓膜を叩いた。

「貴様が伊槌鳴哉だな?」

「……だったらどうした」

緊張を悟らせないように、震えを押し殺したような硬い声が喉から湧いてくる。コイツは普通じゃないと、伊槌の第六感が警鐘を鳴らしていた。

男が一步踏み出す。その動きに伊槌が本能的に後ずさった。ジリジリと距離を詰めてくるその暗い瞳に脂汗が隠せず、風が妙に冷たく感じる。

「貴様にはここで眠っていてもらう」

「……意味が分からないな」

壁際まで追い詰められた伊槌が、拳を構える男を睨みつける。常人とは思えない、光の差さないその眼光は、何か狂氣的なものを感じさせた。

「憲戸中のエースFWの貴様が消えれば、『あの方』の勝利は磐石……！」

伊槌の言葉など聞こえていないかのように、うわ言のように男が呟く。それと同時に、拳がギリつと音を立てて強く握り込まれたのを認識し、伊槌が思わず舌を打つ。

「ぐっ……盤外戦術にしてもイカれてるだろ……！」

後ずさった彼の背中を、アスファルトの無機質な冷たさが迎える。逃げ場はもうなかった。

獲物を前にした獣のように、暗く目を輝かせ男が一気に距離を詰めてくる。気づけば、振りかぶられた拳が眼前へと迫っていた。

「まずっ……ッ!? 躲せねえ——」

せめてもの抵抗として目を強く瞑り、顔の前で腕をクロスさせて衝撃に備える。筋骨隆々とは言えないまでも、制服の上からでも分かるほどに体格に恵まれた男のパンチをもらってはただでは済まないな、と伊槌の脳は諦観にも似た分析を弾き出していた。

「……？」

だが、いつまで経っても拳がこちらに届かない。それどころか、目の前の男が動いている気配すら感じず、訝しんだ伊槌が目を開け、目の前を男を睨みつけた。

そして気づく。男の顔を青ざめ、その肩には、この暴力的な場に似つかわしくない、細く伸びた、白魚のような腕が乗せられている。

男はその少女の腕に怯えているのだと推察する伊槌の思考が、さらに混乱する様子を尻目に、可憐ながらもどこか無機質な声が耳朶を打つ

た。

「ねえ。お客様に何してるのかな？」

「み……」ミラちゃん……これは、あなた方のために……」

背後を振り返ることもできず、餌を求める魚のように大口を開けて、空気を噛みながらなんとか言葉を紡ぐ。

うんうん、と可憐な声が相槌を打った次の瞬間、男の体が伊槌の真横の壁に、強かに叩きつけられた。肉が打ち付けられる鈍い音に、伊槌の体が思わず跳ねる。

「君はいつからそんなに偉くなったのかな？」

「も、申し訳……」

大柄な男が退いたことで、その愛らしい声の主人が姿を現した。

少し癖がついた短めの銀髪に、人形のようにぱっちり開いた黒い目。にこやかな表情と小柄で作り物のようにほっそりとした美しい手足は妖しい雰囲気醸しており、外見に似合わない、蠱惑的な印象を受ける綺麗な少女だ。

その少女に一瞬目を奪われる伊槌だが、すぐさま横の男に視線を移す。これをやったのが目の前の彼女だとは信じられなかったが、つかつかと歩み寄ってくる少女が、追いつきをかけるように男の体を持ち上げる。

「独断で人を襲うなんて品性が欠けた行為だよね♪ そんな悪い子はこうだよ☆」

「へいっ!？」

妙に楽しそうな様子で、少女が足を下にして男をアスファルトの切れ目、土が剥き出しになった地面に勢いよく振り下ろす。すると、男の足が勢いよく埋まり、墓標のようにその恵体が直立した。

「は……?」

現実離れしすぎた目の前の光景に、口を閉じるのも忘れた伊槌が思わず息を漏らす。何秒経っても理解が追いつかず、頭痛を覚えながら硬い壁に背を預けてゆっくりと腰を下ろした。

今度は疲労から軽く息を吐くと、太陽にきらめく白い腕が伊槌に差し出される。少し驚いて視線を上げると、先ほどの少女がこちらを覗

き込んできていた。

「ごめんねおにーさん、ウチの子がオイタしちやつて☆」

「……ウチの子……？ 理解が追いつかないぞ……」

疲れたように瞼を細めながら、少女の手を取って立ち上がる。見た目によらない異様な力でぐいっと引き上げられ、少し体勢を崩した伊槌だったが、気合いで持ち直した。

軽く礼を言いながらも、胡乱げな視線を彼女に向ける。人畜無害そうな、愛想のいい表情を浮かべる少女だが、背後の何故か恍惚とした表情で地面に突き刺さる男が彼女の異常性を代弁していた。伊槌の目つきに気づいたのか、少女は無邪気そうに笑顔を浮かべ、口を開く。「自己紹介が遅れたね♪ 初めましてー、はづきみら叛月実蘭でーす☆ 親しみを込めてー、ミラちゃんって呼んでね♪」

「……ああ、俺も名乗ってなかったな……えつと——」

叛月の自己紹介を受けた伊槌が、思い出したかのようにそう口にする。先ほどの応酬で、疲れから半分閉じた目を開き、名前を口にしようとした瞬間、彼女が妖艶に、自分の唇に人差し指を当てたのを見た伊槌が、ジエスチャーに従って閉口する。

素直な様子に満足したのか、可愛らしく微笑んで続く言葉を紡ぎ出した。

「伊槌鳴哉さん、でしょ☆」

「……知ってるのか」

「うん、おにーさん有名な選手なんでしょ？ 会えて光栄ー♪」

無邪気な喜びを表す彼女の言葉に、伊槌が微妙な表情を返す。

伊槌が有名だったのは1年ほど前の話だ。今の自分では彼女の興味足りえないだろうことを考えると、流石に心が沈む。だが、努めてそんな様子を態度に出さず、服の埃を払って再び会場に向かつて歩みを進め出した。

「ちよつと待ってよおにーさん、どうせだから一緒に行こう？ ミラ

ちゃんと一緒じゃないとまた絡まれるかも☆」

「……そういうことなら、同伴お願いするよ」

何回も絡まれる可能性があるとかここの治安どうなってるんだよ、と

心の中で愚痴りながら、叛月と隣だつて歩く。足が埋まったあの男も、嬉しそうな表情で叛月に手を振つて送り出していた。

「ああ……そういうえば、あいつは何なんだ？」

「あれはねー、ミラちゃんのプロ衛隊みたいなものかな？ 最近色々あつて、ちよつと『お話』したらファンの子が増えちやつてね♪」

手を振りかえしながら浮かべる笑顔に、妙な凄みが感じられる。興味はあるが、自分を引つ張り上げられる腕つぶしの少女を刺激したくなかつた伊槌は、それ以上の追求をやめた。

ニコニコと笑みをたたえる叛月が機嫌の良さそうな声音で、隣を歩く伊槌に声をかける。

「ねえねえ、普通のサッカー部って試合後に相手と乱闘したりしないって本当？」

「何言つてんだ？」

脈絡のない質問に、伊槌が思わず疑問系で返す。

答えにはなつてなかつたが、伊槌の困惑を手取るように理解した叛月が、コロコロと声をあげて笑い、眉を顰める伊槌に視線を合わせた。

「亜蘭中のみんなはねー、試合終わりの3回に1回くらい乱闘騒ぎを起こすんだ☆ だから他もそうなのかなあ、つて思つてたけど違ふみたいだね♪」

本当に感激した口調で知識欲が満たされた彼女がうんうんと満足げに頷く。

その裏で、伊槌は亜蘭中の異常性を再認識していた。

ほとんど毎回起こす乱闘騒ぎ、異様に治安の悪い学区周辺、妙な凄みを持つ叛月という少女。今まででも様々な異常性を感じ取つてきた。

「ヤバい奴らだな……」

率直な感想が口から溢れる。まずい、と叛月の方へ視線を戻したが、彼女が気分を害した様子はない。

聞こえていなかつたようだ。伊槌が大きく息を吐いて胸を撫で下ろした。

「おにーさん、もう1個聞きたいんだけどいいかな？」

「ん……ああ、答えられることなら、いいよ」

身長差の関係から、愛らしく伊槌の顔を覗き込む叛月がその二つ返事に笑顔を見せる。

そして、鈴を転がすような声音の、鋭い棘のような言葉が伊槌の脳に突き刺さった。

「おにーさんって何で日本に帰ってきたの？」

「……は？」

言動の意図が掴めず、伊槌が動揺の声を漏らす。本当に質問されているのか、煽られているのかすらも判断がつかなかった。

気心の知れた中ですら踏み込んでほしくなかった領域。そこへ土足で踏み入られた伊槌が引き攣った顔で叛月を睨むが、全く無視して彼女が質問を補足する。

「スペインでサッカーしてたんでしょ？　なのに帰ってくるなんて、怪我とかしたのかなーって♪　海外のサッカーは詳しくないから気になったんだよね☆」

「……………」

伊槌が強く拳を握りしめる。否応にも、海の外で積んだあの頃の記憶が、カケラのように脳裏を過り出す。

基礎能力の何もかもが違うチームメイトたち、今までとは比べ物にならないゲームスピード、メンタルも、試合の熱も、そのその生活様式と言った基本的な文化さえ何もかもが違った。食らいつくだけで精一杯だった。

そして掴んだ、唯一の栄光。デビュー戦でのゴール。時間が遅く感じたあの心地いい感覚。全てのプレーが自分の思い通りになった最高の瞬間。

それを追い求め続けて、届かなくて、空回って、自信を失くしていつて。そして最後には、ピッチに居場所すら無くなった、苦渋の1年。

断片を回想し、伊槌は息をつく。自分がここに戻ってきた理由など、痛いくらい分かっている。

「実力不足さ……スペインでサッカーを続けるには、俺は下手だった

だけだ」

「ふうん、普通の答えだね☆」

吐き捨てるような伊槌の答えに、つまらなそうに叛月がごちる。それに一抹の苛立ちを覚えた伊槌だが、どうするでもなく口を閉じた。

そのまま歩き続け、ついに会場の目の前まで到着する。荒れた様子の学区内と同じく、一目見ただけでわかる古い校舎に、割れた窓ガラスが散見される県内随一の不良校、亜蘭中学が目に見え込んできた。土のグラウンドが控えめに太陽を反射している。

「ここまでだね、おにーさん☆」

「ああ」

そのまま伊槌と叛月は、どちらが提案するでもなくお互いの集合場所へと足を向ける。背を向け合う形になって、伊槌がおもむろに声を上げた。

「さつき、実力不足で日本に帰ってきたって言ったけどさ」

首だけを後ろに向けて、その細い背中を睨みつける。彼女の向こうには、亜蘭イレブンと例のファンであろう男たちも見えた。

「今は……サッカーすることが楽しいんだ。あっちでしてた時よりも」

叛月はこちらに振り返らないが、黙って立ち止まっている。それを認めた伊槌が言葉を続けた。

「——だから、今の俺はきつとあの頃より強いぜ。楽しみにしてるよ」

「……ふふっ☆ 宣戦布告ってこと？」

彼女がついに、ゆっくりとこちらへ視線を向ける。瞳孔の開いた凶悪さを感じる強い瞳が伊槌を射抜いた。その威圧を伊槌は笑って受け止め、むしろ、目を開いた凶暴な笑みを返す。

「いいよ、おにーさん……いっぱい愛こわしてしてあげる……☆」

眩くような声量だったが、その言葉はするりと伊槌鼓膜を叩いていった。そして今度こそ彼女は、迎えるファンに手を振りながら去っていく。

伊槌もそれに倣って、さつきと歩を進めた。視線の先ではすでに伊槌以外の全員が集まっている。

「……絶対勝つ」

小走りで彼らの元に足を回しながら、自分自身に言い聞かせる。

「俺が点を取ってチームを勝たせる」

それは、いつか自分自身に誓った言葉。FWとして生きていく決意表明を、自分自身に行う。

雷撃のように揺らめく戦意が迸るのを感じる。この思いが消えないように、伊槌は深く拳を握りしめた。

「——とりあえず、スタメンは変えない！フォーメーションはちよつといじったけど、まずは君たちの全力をぶつけてくれ！」

ホワイトボード片手に月並がそう声を張り上げる。手早くマグネットを動かす彼は、監督としての風格が少し出てき始めていた。

憲戸の面々も、士気は高い。初の1回戦突破が彼らの熱意を後押ししていた。

「よおし、この調子で2回戦も勝ち上がるぞ！」

「ええ！ 私のスピードに任せなさい！」

木崎とホープの2人が準備万端とばかりに声を上げる。未だに怖がっているかのような様子の太田も、少しは緊張が解れたのかそのやり取りに微笑を見せていた。

「オイ、あんま調子に乗り過ぎんなよ。足元掬われんぞオ」

「ああ。油断大敵だ」

無籐と靴木が冷静にその場を収めながら、スパイクの紐を結ぶ。その動作からは緊張を感じられない。三刀屋と様崎も尻込んでいる様子はないので、流石3年生といったところだろう。

「とりあえず、ここまで来たからには勝とう。俺たちならやれるはずだ」

伊槌がそう言えば、ほとんどの部員たちは頼もしい笑みを返してく

る。伊槌も闘志をたぎらせ、口の端を持ち上げて笑みを返した。

「そうだね、私たちなら行ける！ 楽しんでこう、みんな！」

「おおー！」

様崎の号令と共に気合の雄叫びがベンチに響く。全員の意味を勝利に向けた上で、皆がベンチを離れてポジションに散らばっていた。その背中に、ベンチに座る橘花の応援と、宵闇の控えめな声がかげられた。

ピッチの最前線まで移動した伊槌の前に、亜蘭中の血のように真っ赤な、金髪を後ろに流したガラの悪い男が近づいてくる。伊槌はそれに気づきながらも、一切怖気付くことなく視線を外さない。

「てめえが伊槌か？」

「ああ」

右腕にキャプテンマークを巻く男の問いに、短く返す。筋肉が良くついた素晴らしい肉体をユニフォームの上からでも誇示するように胸を張るその男が、くつくつ、と趣味の悪い笑い声を浮かべた。

「うちのガキが失礼したな。俺は落合星だ、よろしく、スペインの負け犬さん？」

「……安い挑発だな」

落合が煽りの意図を込めた、異常に癩に触る声と共に手を差し出してくる。伊槌がその手を乱暴に引つ掴みながら、奥歯を噛んでその男を真正面から睨みつけた。

「おお怖え怖え、だがそんな生意気な顔ができるのも今のうちだ」

地の底から響くような、耳障りな笑い声が伊槌の耳朵を打つ。心底馬鹿にしたような態度で、落合が息がかかるほどの距離まで顔を近づけて威圧してきた。

「ここをてめえのサッカー人生の墓場にしてやるよ」

落合が囁くようにその脅しを吐き捨て、乱暴に手を離すと、伊槌を無視してずかずかと去っていった。

何から何まで勘に触る男だったが、その肉体は本物だと伊槌は認識し、侮らない。熱くなった頭を、深呼吸して落ち着かせる。

「言つてろ……」

そして今度こそ、ポジションへと足を運んでいった。

憲戸中スターティングメンバー（4―4―2）

――木崎――伊槌――

――梵場――無籐――明風――

――靴木――

三刀屋――山本

――様崎――太田――

――久良島――

亜蘭中スターティングメンバー（3―4―3）

――叛月――黒鉄――中田――

青野――矢部

――落合――鍵屋――

――内海――鰐原――谷岡――

――鬼裂――

「伊槌、大丈夫か？　なんか絡まれてたけど」

「おう、心配するな」

キックオフは憲戸から。センターサークルに入ったところで、木崎から心配の声をかけられた。が、伊槌が笑って彼を安心させる。この借りは試合で返すと決めている伊槌にとって、あの程度心を乱される要因にはならない。

「行くぞ」

「おう、やっちゃまうか！」

2人の気合いの高まりに応じるように、審判が高々と笛を吹いた。木崎からの軽いパスを伊槌が受け、木崎は一気に前線へと突っ走る。

だが、完全に木崎を無視した眼帯が特徴の亜蘭の10番黒鉄城くろがねしろが、銀髪をはためかせながら果敢に伊槌に襲いかかってきた。

「ボールを寄越しな、小僧！」

「断るね、無籐！」

麗人と言って差し支えない黒鉄が口汚くタックルを仕掛けてくるが、冷静に受け流して背後の無籐へパスを落とす。チラリと横に視線

を向けると、明風がステップでマークを翻弄していた。

「おし、攻め上がれお前らァ！」

推進力のあるドリブルで持ち上がる無籐をサポートする様に、伊槌が距離感を保ったまま前線へ走る。最前線では木崎がディフェンスラインと勝負しており、裏に抜けようと四苦八苦していた。

F Wの一角を担う中田が、無籐にプレスをかけてくる。

「奪うぜー！」

「ハッ、やらねエよ。明風！」

マークを外した明風にパスを送り、無籐がそのまま前線へ足を止めない。今回はO M Fの位置に配置されているため、彼も積極的に攻め上がれているのだ。

青野のプレスを振り切った明風を見て、伊槌は笑みを浮かべる。こつちの攻撃の基本形は機能すると確信したからだ。

「伊槌先輩！」

「これ以上好き勝手やらせないし」

明風のパスにいち早く反応し、金髪のM F鍵屋流美かぎやるみが眼前に立ち塞がる。伊槌は鬱陶しそうに目を細めるが、パスを受けた後すぐさま背後へヒールパスを送った。

「無籐、ワンツー！」

「おらよー！」

背後の無籐に落としたボールが、鍵屋の横をすり抜けた伊槌へドンピシャでダイレクトパスが返ってくる。無駄のない連動に、鍵屋は見送ることしかできない。

「チツ……うざい」

「明風！」

「はいー！」

無籐、伊槌、明風が軽快なパス回しで中盤を突破する。完璧な連携に、彼らの間に間違いのない手応えが生まれていた。

この3人で作り出す三角形トライアングルの関係こそが今回の憲戸の攻撃の肝だ。チームの中で技術に優れる前線3人で押し上げ、木崎や梵場と言った面々を生かすのが基本戦術。

そのため木崎はデیفエンスラインでの勝負に終始し、梵場も逆サイドでの1vs1を虎視眈々と狙っていた。

「通行止めだ、止まれガキが!」

「口が悪いですね!」

すかさずDFの内海が当たってくるが、これも想定内の明風は軽口を叩く余裕すらあった。無理に抜かず、前線でタメを作る。

そして、来た。背後から猛然と駆け上がってくる、憲戸中が誇る飛び道具――

「いけえ、ホープ先輩!」

「まっかせなさい!」

ライン際を流星のように突き進むホープへボールが渡る。内海がオーバーラップに驚きながらもホープの進路を塞ごうとした。だが、もう遅かった。ホープが脚に力を込め、爽やかに笑顔を見せる。

「はああああッ!」

「早っ!」

スライドした内海の足先を掠めることすらなく突破し、ホープが右サイドを挟む。風と一体になる心地いい感覚に胸を躍らせながらも、冷静にペナルティエリア内を視界に収めたホープの目に、大手を振ってその存在を主張する木崎が映った。

「お前ら、氣い抜くんじやないよ!」

「へい!」

左の頬につけた絆創膏が特徴的な長身GK鬼裂明日奈きざきあすなの叱咤でデیفエンスラインに緊張が走る。その緊張感の中、ホープが腰を捻って右足を振りかぶった。

「木崎!」

「じゃあ! 決めてやるぜええ!」

ホープの足から鋭く蹴り出されたクロスは低弾道で木崎の足元目掛けて落ちていく。打てる――その確信と共に足を振り上げた木崎だったが、その期待を裏切るかのように、眼前に肥満のような巨漢が突如立ち塞がる。

「鰐原わにばら、クリアしな!」

「グウウ……」

緩慢な動きながら、圧倒的な存在感を放つ鰐原重蔵わにばらしげぞうが、野生動物のような鋭い歯をのぞかせる。

そしてボールの落下地点に飛び込む木崎と、空中で体をぶつけ合った。その瞬間、木崎の表情が苦悶に染まる。

「強つ……！ なんだこいつ……！」

「グツフツフ、オラのパワーに勝てるわけないんだな〜」

自信満々に笑い声を上げる彼が、体を振るって木崎を難なく吹き飛ばす。地面に強かに打ち付けられた木崎を尻目に、鰐原がクロスを余裕を持ってクリアした。

「木崎！」

「無駄にはしないぞー！」

スピードが勢い余って転んでいたホープが、上体を起こして、地面に叩きつけられた木崎に心配の言葉を投げる。伊槌も少し動揺はあるが、中途半端だった鰐原のクリアを押さえたため、無理やり思考を動かす。

D Fの谷岡がプレスをかけて来ている。背後からも気配を感じるため、判断できるのは一瞬。視線を右往左往させ、最善の形を頭の中に描く。

「ふっ！」

「っ！ 打ってくるよ、ブロック体勢！」

「へい姐さん！」

ゴール前で足を振り上げた伊槌の姿に、反射的にシュートを打つてくると判断した鬼裂が櫛を飛ばす。威勢のいい掛け声と共に、谷岡が足を投げ出してシュートブロックを試みた。

「かかった……！」

「なにつ！」

だが、それも伊槌の読み通り。

ボールを蹴り出す瞬間、ピタッと動作を止め、ボールを横に持ち出す。単純なキックフェイントだが、効果はてき面だった。

広くなったシュートコースを見定め、改めて左足を振り上げる。だ

がその瞬間、横から猛烈な存在感を発する者が、ぐんぐん迫ってくるのを肌で感じた。

「グウウ……やらせないんだな〜」

「意外と素早い……!」

木崎を薙ぎ倒した鰐原が向かってくることを認識した伊槌が思わず舌打ちする。それでもゴールから目を離さず、鋭く鬼裂を睨んだ。

そして、稲妻のように素早く足を振り抜く。

「行け!」

「止めるよ……っ!?!」

鬼裂がシュートに飛び付こうとして、すぐさま異変に気づく。ボールがゴール前を横断して、肝心のゴールに向かっていない。これはシュートではない、パスだ!

だが、気づいた時には、FWとしての意地から、ゴール前に詰めていた明風の足元に絶好のボールが届こうとしている瞬間だった。

「ありがとうございます!先輩……!」

「決めてこい!」

明風が一瞬目をあげる。鬼裂の反応は遅れて、体勢が若干悪い。これなら、パワーに劣る明風のシュートでも決まる可能性があるかと確信に近い予感が明風の顔に笑顔を生み出す。

そして、近い^{ニア}サイドに、明風の鋭いカーブシュートが放たれた!

「決まれっ!」

「危ないねえ!」

——だが、体勢を崩していたはずの鬼裂が、素晴らしい横っ飛びを見せて、正面からガツチリとキャッチするのを認めた明風が、悔しげに唇を噛む。

「うっ……もうちよつとキック力があれば……!」

「引きずるな明風! デイフェンス!」

伊槌の叱咤に我に帰った明風が、慌てて自陣に戻っていく。すでに鬼裂は大きく助走をつけ、女子らしくない強肩でボールをスローし、中盤の鍵屋にまでボールを届けていた。

前がかりになっていた憲戸の中盤は薄い。少し顔を歪めながら、ボ

ランチの位置で待っていた靴木が前を向く鍵屋にプレスをかける。

「行かせるか」

「めんど、パス」

鍵屋はすぐさまパスを選択し、靴木の横を走り抜ける落合にボールが渡った。

「おら、攻め潰してやるよ!」

「全く、スマートじゃない男だね!」

鍵屋とのパス交換で靴木を突破した落合が、突進するようなドリブルで一気呵成に攻め上がる。だが、それほど上がっていなかった梵場がいち早くカバーに戻り、軽くシオルダータックルを食らわせた。

だが、パワーに優れない彼では、落合の筋肉の鎧を崩せない。むしろ若干押し返される。

「邪魔だボケが!」

「ぐおっ!」

鬱陶しそうに振った落合の腕に跳ね飛ばされ、梵場が振り切られる。ファウルスレスレの危ないプレーに、憲戸の面々の間に緊張が走った。

落合は彼らの集中が一瞬切れたその瞬間を縫うように、最前線へパスを突き刺す。

「決めやがれ!」

「クハハハッ、私を楽しませろよ、お前ら!」

パシント、と小気味いいトラップの音と共にFWの黒鉄が太田を背負う。長身から放たれるパワーに太田が押されそうになるが、靴木がこちらへカバーに走るのを見てなんとか持ちこたえようとする。

「いいぞ太田、俺が奪う」

太田と靴木の巨漢2人で挟み込む形に持つていくことに成功した。現時点での憲戸の最高パワーと言えるであろうそのディフェンスを前にしても、黒鉄はその悪辣な笑みを絶やさない。

彼女が左足を軸に、風を切ってターンする。その瞬間、どさくさに紛れて太田の体を肘で打った。

「うっ!」

「軟弱だなあ！」

側から見ていた伊槌の目にはファウルにしか映らなかったが、それでも笛は鳴らない。胸を押さえて蹲る太田に心配の声をあげる靴木を無視し、黒鉄がフリーでエリアに侵入してしまう。

様崎が急いでカバーに向かうも間に合わない。相貌を凶暴に歪め、黒鉄がシュート体勢に入った。

「ヒヤハハッ！ 食らえよ！」

「止めます……！」

そう自分を鼓舞するが、久良島の額に汗が伝う。シュートコースが読めない、一か八かで飛ぶしかない——そう考えていた久良島の瞳に、黒鉄へ、体を投げ出してスライディングを仕掛ける様崎が目に入った。

「やあつ！」

「ハハハハハ、無駄なんだよ！」

様崎の足がボールに届く前に、黒鉄の足から重い炸裂音を立てて強烈なシュートが打ち出される！

だが、久良島は慄かない。心の中で様崎に拍手を送り、腕を振りかぶって右に横っ飛びする。

「はああつ！」

そして読み通り、黒鉄のシュートを久良島のパンチが捉えた。様崎の決死のカバーのおかげで、シュートコースが遮られたためにドンピシャで読むことができたのだ。

ドリルのような推進力を持つシュートに対し、横から拳をぶつける。正面からぶつかっていないのに、鋭い痺れが腕を伝ってくる重いシュートに、久良島が顔を歪める。

「く……うおお……！」

だが、渾身の力を振り絞って腕を振るい、見事パンチングでシュートを弾いた。地面に叩きつけられながらも、口元に微笑みを浮かべる。

「ナイスセーブ杏奈ちゃん！」

「はい……でもボールはまだ生きてます……！」

その言葉通り、ルーズボールはサイドの亜蘭中FW中田が収めていた。ガラ空きの右サイドでボールを持ち、余裕の表情を浮かべながらキックモーションに入ろうとした瞬間、突風が彼の背中を叩きつける。

「やらせないわ!」

「なっ、このガキもう戻って来たのか!」

「ガキじゃないわよ!」

攻め上がっていたはずのホープが超スピードで守備に戻り、憤慨しながらもスライディングで中田のボールを弾く。

中田が浮き上がったボールに慌て、なんとか逆サイドに蹴っ飛ばす。その雑なパスを、サイドの叛月がなんとかトラップした。

「(こ)こ(ら)、油断しすぎだよ☆」

「キミもネ!」

なんとかボールをコントロールして一息つく叛月に対し、三刀屋が素早くアタックする。そして彼女が次のアクションを起こす前に、すぐさま逆立ちの体勢から旋風を巻き起こした。

「旋風陣!」

巻き起こる風がボールを絡めとり、三刀屋の元へ届けられる。 তারাを踏む叛月を突破し、完璧にボールを奪うことに成功した。

「うわっど……ふふ、おねーさんすごい☆」

「フフツ、ありがとネ!」

妖しげに口角をあげる叛月がすぐさまボールを奪い返しにくるのを感じた三刀屋が、軽口を叩きつつ様崎にパスを送る。

その瞬間、中盤まで戻って来ていた伊槌がすぐさま反転し、一気に前線へと走り込んでいく。

(実力は互角……前の試合の勢いに乗ってる分、こっちが有利だ……!)

様崎なら自分の動き出しに対応できると信じて全速力でゴール前に突っ込む伊槌。

その姿に呼応した様崎が黒鉄をかわし、軽く微笑んですぐさまパスモーションに入った。

「来い、キャプテン！」

「いつくよー！ 決めちゃえストライカー！」

威勢のいい掛け声と共に、鮮やかなロングパスがハーフラインを超えて敵陣に一気に侵入する。そのボールはぼっかり空いたバイタルエリアに走り込む伊槌の足元へ、磁石のようにピタリと合わさる最高のパスだった。

完璧にシンクロしたカウンターに伊槌の胸が躍る。このままゴールを奪うため、前方の鰐原にドリブルで勝負を仕掛けた。

「ムフツ、ぶっ飛ばして……」

「鰐原！ まだ行くんじゃないよ！」

伊槌の挑発的な動きに、アタックを仕掛けようとして来た鰐原を鬼裂が静止する。一瞬驚いたように目を開くが、彼は文句も言わず伊槌と一定の距離を保ってズルズルと下がり始めた。

「そんな消極的な守備じゃ、俺のゴールは邪魔できないぞ……！」

「まだ……まだだよ……」

勢いづく伊槌に反して、鬼裂が何かのタイミングを図るように視線を鋭くする。それは伊槌に向けられていない。その奥の誰かに注視している。

ペナルティエリアまで簡単に侵入した伊槌が、ボールを軽く浮かせる。電閃のモーションに入り始めても、鰐原は動かない。

「行くぞ……！」

「……………」

伊槌の背後で、落合が動く。擦り上げられたボールが電気を纏う。その瞬間、鬼裂が目の色を変えた。

「GO！」

「電——」

「——グオオオオッ！ クロコダイルスケイルウウ!!」

今にも伊槌の必殺技が火を吹かんとしたその瞬間、鰐原の体に水性生物のような鋭い鱗が生え揃う。その鋭利な鱗を逆立てて、力任せのタックルを喰らわせて来た！

「ガッ……!?!」

「グッフフフウ、オラのご飯になれ〜！」

激しすぎるシヨルダータツクルに、飛び上がっていた伊槌の体が天を舞い、鈍い音を立てて地面に叩きつけられる。明らかな反則——だが、ファウルの笛は吹かれなかった。

中途半端に発動した電閃は纏った電気を霧散させ、不気味に笑う鰐原に抑えられた。

痛む体に鞭を打って、鰐原を睨む。彼も、その背後の鬼裂も、見下すように嗤っていた。

「伊槌！ ファウルじゃないのか!?」

「グッフ、キャプテン〜！」

こちらを慮って駆け寄ろうとしてくる梵場を手で制すが、鱗が刺さったのか動くだけでも体が痛み、伊槌が顔を歪める。

倒れた伊槌を置いて、ゲームは進行を止めない。鰐原のロングフィードが、審判の近くに陣取っていた落合に通った。

「もう遠慮はいらねえ。存分に暴れろてめえら〜！」

勝鬨のように、落合が高らかにそう叫ぶ。その瞬間、亜蘭の面々の目の色が変わったような錯覚を覚える。

無籐がプレスをかけて来たのを見て、冷静に彼の横を通し鍵屋へ渡す。だが彼女にも靴木が抜け目なく着いて、マッチアップの形になった。

「靴木、抜かれんなよ〜！」

「いや抜くし、マジどけし〜！」

靴木の巨体にも怯まず、鍵屋がドリブルで右に持ち出す。当然ついていく靴木だが、突如その右足が鍵屋の左足に踏みつけられ、バランスを失い尻餅をついた。

「ぐっ!? お前……！」

「ウケる。バイバイ」

恨みがましい視線を受け流し、上がって来た落合にワンツートを返す。そのままサイドに流し、再び叛月がボールを持った。

だがデイフェンスラインはしっかりブロックを形成している。パスが通る瞬間、三刀屋が抜け目なく彼女とマッチアップした。

「今度も抜かせないヨ！」

「ふふ、ドリブルだけが選択肢じゃないよ？ おねーさん♪」

だが、ドリブルを警戒して距離を取っていたことが災いし、叛月のアーリークロスがいい形でペナルティエリアに放たれた。太田を引きずり、様崎を振り切りながら、黒鉄がクロスに飛び込む。

「ヒヤハハア！ 吹き飛ばしてやるよ！」

「と、止められない……………！ 杏奈さん！」

「はい……………」

太田の指示をもらった久良島が、勇敢にクロスに飛び込む。なんと黒鉄より先にボールをキャッチし、がっちりとセーブした。

「ククツ……………」

安堵するデイフェンスラインだが、黒鉄の動きが止まらない。足を緩めた太田を振り切って、久良島がセーブしたボールを、なんと久良島ごと蹴り飛ばした！

「死になあー！」

「あぐつ!？」

「なっ!？」

勢いよく右腕を蹴り付けられた久良島が苦悶の声を上げ、それを聞いた黒鉄が耳障りな高笑いを弾けさせる。遠くから見ていた落合が、計画通りとでも言うかのように、凶暴に笑みを深めた。

「杏奈ちゃん！」

「ククク……………強く蹴りすぎたかあ？」

予想だにしなかった蛮行に絶句する太田と様崎の間に、今度こそ審判のホイッスルが割り込んできた。

その手には黄色い紙が掲げられている。黒鉄の前に立って、彼女に向かつてしっかりと提示された。

「亜蘭10番、過度に危険なプレーでイエローカード！」

高々と宣言した主審が、黒鉄に警告する。言い逃れのできない暴力行為だが、彼女は不機嫌そうに顔を顰めた。

「オイオイ、今のプレーの何が危険なんだあ？ あのガキが貧弱なだけだろお」

「故意に蹴ったプレーが反則なんだよ」

「故意い？ 言いがかりだなあ、オイ!？」

緊張する周囲とは裏腹に、黒鉄が何故か楽しそうに声を荒らげる。厳しい目を向けてくる審判に対し、嬉々として握った拳を振り上げた瞬間、突如強い力によって彼女が地面に組み伏せられた。

驚きに後ずさった彼らの視線の先では、キャプテンの落合が、暴力を働こうとした黒鉄を取り押さえ、冷たい目で見下す姿が映る。

「馬鹿が、いらねえ暴力はすんじゃねえ。退場して全部棒に振る気か？」

「……ヒツ、ハハハ……! いてえ、いてえなあ……いいぜえ、今は堪えてやるよ……!」

頬を紅潮させた黒鉄が、マウントを取る落合を振り払い、審判を無視して謝罪もなく去っていく。落合も、久良島と彼女の肩を抱く様崎を見下して嗤い、さっさと背中を向けた。

主審すら呆気に取られていたが、慌てて彼らを追っていく。口頭での警告をするためだろう。

未だ緊張が張り詰める中、青い顔をした太田が震える手のひらを握りしめて息を吐く。ラフプレーをなんとも思っていないような様子の彼らに、恐怖を抱いていた。

「あいつら……キーパーを潰しに来やがった……!」

「手段選ばねエってか、虫唾が走るぜ」

立ち上がって中盤まで戻って来た伊槌と無籐が苛立ちをこぼし合う。直前にラフプレーを受けた伊槌は特に業腹だった。顔を歪めて、審判と話す落合たちを睨みつけていた。

「久良島……大丈夫か？」

「俺たちより、キャプテンの方が適任だろうな……任せるしかねえ。お前も気をつけるよ」

苛立ちが治らないのか、頭を乱暴に掻きながらも久良島の心配をする伊槌を、無籐が諫める。

痛みも引き、無籐と話して少し落ち着いていた伊槌が、深く息を吐いてポジションに戻っていく。今度こそ決めると言う、闘志を胸に秘め

て。

「……ああ、無籐もな」

黒鉄たちが去った後、様崎がいの一番に久良島に駆け寄る。ゆっくり体を起こす彼女を諫めて、その肩に手を添える。

「杏奈ちゃん大丈夫？ 痛みとかない？」

「……は、はい。大丈夫です、まだやれます……」

太田の背後で跪く久良島を様崎が介抱を始める。痛みに脂汗をかき彼女の肩を抱き、蹴られた腕を検める。

「ッ！ つう……！」

「あつ、ごめんね！ 右の手首が腫れちゃってる……」

右腕を触って痛みがないか確認していた様崎が、久良島の真っ赤に腫れた右手首をいたわしそうに見つめる。そのまま慰めるように彼女を撫でて、まっすぐ視線を合わせた。

「杏奈ちゃん、無理しない方がいいよ。交代——」

「や、やらせてください……！」

立ち上がってベンチの方に視線を向けた様崎に、ユニフォームの裾を引っ張った久良島が、懇願するようにその前髪に隠れた瞳を合わせってきた。

少し驚いた様崎が、再び膝を折って同じ目線に立つ。それを話を聞く姿勢だと判断した久良島が、迪々しく口を開いた。

「私……先輩たちと色々練習して、やっとサッカーの楽しさがわかって来た気がするんです……だから……だから、このくらいの怪我で終わりにしたくないです……！」

「杏奈ちゃん……でも、腕が」

彼女の真摯な言葉を受けた様崎の顔が曇る。尊重してこのままやらせてあげたいと言う気持ちと、現実的に下げた方がいいと言う気持ちとが同居している。キャプテンとして何が最善の判断なのかと、未熟な彼女を葛藤させていた。

「——やらせてやろう、様崎」

「靴木くん……？」

思い悩む彼女の背中に、靴木の低い声がかかる。振り返った彼女の震える瞳を見て、安心させるように彼が口を開く。

「俺もこのままやられっぱなしは気に障る。久良島の気持ちはよく分かる」

「でも……」

「ワタシからもお願いするヨ、サクヤ！」

横から、別の明るい声が降りかかる。それは、三刀屋も靴木に加勢したことを意味していた。

「みとちゃん……」

「アンナ、やれるんだよね？ 信じるヨ？」

「……はい、動かせます。まだ、行けます」

トドメを刺すように、右手を開いて閉じてを繰り返す久良島が力強く頷く。それでもうめく様崎だったが、腹を括ったように胸を叩いた。

「……よし、分かったよ！ でも絶対無理しちやダメだからね！ 無理したら怒るよ！」

「フフツ、怒ったサクヤは怖いからネ、アンナ！」

「……！ はい、ありがとうございます……！」

決心した様崎が、肩を貸して久良島を立ち上がらせる。彼女の顔は、腫れた右腕など気にしていないかのように明るかった。

三刀屋、靴木、そして様崎が頷き合う。先輩として、久良島を全力でサポートしようと今一度気合を入れ直した。

そしてポジションに散らばっていく。審判の注意も終わったように、笛に手をかけていた。再開する前に、様崎が未だ顔の青い太田の肩を叩く。

「ほら、太田くん！ 再開するよ！」

「……うわあつ?! ……さ、咲夜さんか……う、うん、分かってるよ」

心ここにあらずといった彼の姿に、様崎が一抹の不安を覚えるも、鳴らされたホイッスルに思考を切り替える。憲戸のフリーキックから試合再開だ。

気持ちは新たに、久良島が中盤にロングパスを蹴り込む。

「いぞ久良島……！」

「どけ！」

その落下地点で、無籐と落合の2人が競り合う。その筋肉に見合ったフィジカルで無籐を押しつけようとする落合だが、無籐が腕をうまく使い彼のタツクルをいなしていた。

舌打ちした落合がチラリと周りを見る。その意図を汲んで、鍵屋が審判の視線の先に走り込んだ。

「オー！」

「あア!？」

その瞬間、無籐のユニフォームを引っ張って体勢を崩させる。空中で下に引っ張られた無籐を尻目に、落合がボールを回収する。

審判を見る無籐だが笛を吹く気配はない。笛を吹くファウルと吹かないファウルの基準の違いが分からず、その不確かさに怒りを覚えながら前を走る落合にシヨルダーチャージをかました。

「行かせるかよ、イカサマ野郎が！」

「イカサマあ？ 技術だボケが！」

そのタツクルにもフィジカルで踏ん張った落合が、無籐と位置を入れ替える。そして眼前に立った彼を嗤い、全身から赤黒いオーラを噴き出した。

「!？」

驚き、身構える無籐を無視し、オーラの一部をボールに注入する。

血のような禍々しい気迫を纏うボールが浮き上がり、落合の目と鼻の先へと持ってくる。次の瞬間、そのボールを渾身の力で無籐の土手っ腹に蹴り付けた。

「ツ!? ガハッ……！」

「死に腐れ！ アサルトボウ！」

無防備な腹を突かれ、一瞬動きの止まった無籐を激しいタツクルで吹き飛ばして突破する。筋金入りの危険なプレーに、伊槌が歯噛みしてプレスバックする。

「無籐！ くっ！」

「中田ア！」

カバーに入る靴木をパスでかわして再度の中田へボールを送る。先ほどと同じようにホープがプレスに入るが、1度その迫力を目視している中田は怯まない。

「どけガキ！」

「ぐう……！」

真正面から肩をぶつけ、彼女のスピードを殺す。肩を押さええて動きを止めたホープを抜き去ろうとした瞬間、落合が口だけを動かして中田に指示を飛ばした。

「……！ 叛月！」

「はいはい☆」

その指示に従い、サイドからゴール前までポジションを変えて来た叛月にパスをつける。流動的なポジションの変化に、デیفエンス陣はついていけない。

様崎たちの顔が引き締まる。絶対にシュートは打たせないと、気迫が物語っていた——太田以外は。

「来いッ！」

「行かせない！」

黒鉄が一気に裏に抜け出す動きを見せるが、様崎が難なくついていく。これで、叛月と太田の1vs 1だ。

叛月が妖しく、可愛らしく笑顔を見せる。だが、太田の目には、狩りを始める肉食動物のような、凶悪で攻撃的な表情にしか見えない。

「ひっ……！」

「憲戸中のデیفエンスの『穴』は……おにーさんみたいだね☆」

思わず後ずさる太田に対し、叛月が妖しい笑みを深める。

そして、ボールを足で挟み、その場で回転させ始めた。砂埃を巻き起こし、ボールを覆い隠して視覚情報の一切合切を殺す。

動揺する太田の目の前で、彼女が拳銃のように手を型作り、銃口に見立てた部分を太田の心臓に向けた。

「ハートブレイク・ショット☆ ばぁーん♪」

「うっ……!?!」

銃を撃つような動作をした瞬間、砂埃が砂塵となって周囲に巻き起

こり、ピンク色のハートのエフェクトが太田に打ち出される。それらに心臓を撃ち抜かれた彼が、ゴール方向へと吹き飛ばされた。

当然、太田の巨体と、巻き起こった砂塵が久良島の視界を覆い隠す。焦る彼女だが、その姿を嘲笑うように、叛月の可憐な声が耳朵を打った。

「——フフツ☆ ミラちゃんに、墮ちちゃえ♪」

久良島の死角で、叛月がボールを足に挟んだまま逆立ちし、両足で回転させながら上空に跳ね飛ばす。

すぐさま逆立ちを解除して、膝を曲げて大きく跳躍。軽やかな動作で縦に1回転すると、その足に桃色と黒色の混じった、ビビツトなオーラに覆われる。

「うぐっ……」

そして、太田の体が地に落ち、久良島が彼女のシユートモーションを認識する。それに答えるかのように叛月がウインクして、横回転とともに右足をボールに叩きつけた！

「フォー、ライン、ラブ☆」

「ッ！」

甘ったるい声と共に、右足のオーラが爆発する。黒とピンクの混じったハートを引き連れ、天空から高速のシユートが打ち下ろされた。

久良島は反応が遅れ、オーラを溜める時間がない。ギリギリで反応した様崎が、時間を稼ごうとボールに足を伸ばすが——

「ッ！ 届かない……！」

つま先を掠め、ゴールに直進する。久良島が無事な左手で飛びつくも、その程度のブロックなど歯牙にも掛けず、フォーリンラブがゴールネットに突き刺さった。

「いえーい♪ ミラちゃん大活躍ー☆」

「……くっ……」

叛月があざとくポーズを決めると、亜蘭ベンチの近くに居座る集団が黄色い歓声をあげる。

靴木の悲痛なうめきに反比例して盛り上がる観客たちを後押しす

るように、ゴールを知らせる審判の笛が高らかに響いた。

GOAL!!?

12分 叛月実蘭

憲戸 0—1 亜蘭

16話：執念

叛月のゴールで、早くも試合が動かされた。実力が拮抗していながら先制された焦りと、このゴールがラフプレーの積み重ねで生み出されたものであることに、伊槌が苛立ちながらもセンターサークルにボールを押し付ける。

熱くなつた頭を冷やすように息を整えながら、隣に並び立つ木崎へ視線を向けた。彼も汗を垂らしながら、落ち着かない様子で亜蘭のゴールを睨んでいる。

「まだ前半10分だ……落ち着いて返すぞ、木崎」

「……おう！俺に任せとけ！」

口元を拭いながら放つた言葉に、彼が笑顔を見せて戦意が萎んでいないことを主張する。軽く笑みを返し、言外に頼もしいと伝えボールに足を乗せ改めて意識を研ぎ澄ます。

そして再び高々と鳴らされた笛の音に押されるように、横の木崎にボールを流し、彼も背後の無籐へバックパスして前線に上がっていく。その背中を見送りながら、伊槌は無籐をサポートできるポジションングを徹底していた。

「無籐！攻め方は変えなくていい！」

「承知してるぜエ、明風！」

「任せて下さい！」

再びトライアングルを形成しながら、無籐が明風にパスを送る。プレスをかけられながらも落ち着いてコントロールした彼女が、プレッシャーをかけてくる叛月を簡単にかわしドリブルで持ち上がったいく。

その動きに連動して、伊槌もポジションを上げた。数瞬の後、彼女がサイドの矢部とマッチアップしたのを見て、パスを引き出そうと手をあげて明風に寄っていく。

「空いてる！」

「はい、伊槌先輩！」

マークを振り切つてボールを受けた伊槌が、ドリブルで持ち上がる

うと反転を試みる。

だが振り向くその瞬間、意識の外から突如、脇腹に刃物が突き刺されたような異様な衝撃に、肺の空気を吐き出して膝を折らされ、離れたボールを何者かに奪い取られた。

「ぐっ——!?!」

登るような痛みに苛まれながら急いで周囲を確認すると、肘を立てた落合がしてやったりとでも言いたげな嘲笑を滲ませ、伊槌の横を通り過ぎる姿を認める。

「無防備なバカで助かるぜ」

「この野郎……!」

焦りと怒りの中立ち上がろうとするが、深く入ったのか動いたびに痛みが全身に伝播し、立ち上がることにすら難しくその背中を忌々しく見届けることしかできない。

代わりに、声を上げてバックラインに注意を促す。

「気をつけろ……! こいつらまだやる気だ!」

「ハッ、今更氣づいても遅えよ。行け!」

緊張が張り詰める憲戸を鼻で笑い、ボールを強奪した落合が鍵屋にパスを預け一気に前線へ走り込む。

パスを受ける一瞬の隙に、苦い顔の靴木がチェックに間に合うが、足を踏まれた先ほどのプレーが脳裏をよぎり、いまいちプレッシャーをかけることができない。

「ディフェンスしてるつもり? 笑える」

「くっ」

圧力が足りず、悠々とサイドの矢部にパスを通される。短くうめいてすぐさまプレスに向かうも、彼はすでにキックモーションに入っていた。

「潰せ黒鉄!」

「ククク……来た来た」

サイドの深い位置から最前線の黒鉄へ、一気にロングパスが放たれる。ゴールへ走り込み、飛び上がってパスを受けようとする彼女が妖しく笑い声を上げ、その凶悪な瞳でGKの久良島を射抜く。

「……っ、い、行かないと……!」

だが、その黒い相貌の視線を切るのは大きな肉の壁。

失点シーンでもいいようにやられていた太田が、及び腰ながらもこのままでは終われないと、飛ぶ黒鉄に体を当てる。体格で勝る太田のタツクルに、さしもの黒鉄も体幹がぐらつく。

「ハハッ、いいタツクルだが……邪魔だ!」

「うぐっ!」

軽薄な賞賛を送りながらも、苛立ったように目を細めた黒鉄が、報復の意を込め、体勢を崩しながら右肘を振り上げて太田の鳩尾を打つ。

悶絶の声をあげる太田の巨体と、ボールに触れられなかった黒鉄の、白く刀のように研ぎ澄まされた肢体が重なるように地に墮ち、まともやファウルの笛が吹かれた。

「君、さつきから危ないプレーが多いよ!　すでに警告を受けてるんだから気をつけてプレーするように!」

「はいはい、分かってるよ」

急いで走り寄ってきた審判が再び声を張り上げるも、黒鉄はその注意など歯牙にもかけない態度を貫く。実際、耳を貸してすらいないだろう。

その背後で黒鉄と交錯し、未だ倒れ伏す太田の元にも様崎が駆け寄っていく。太田は咳き込みながらも、彼女の手を借りてゆっくり上体を起こした。

「大丈夫?　立てそう?」

「げほっ……う、うん、大丈夫。ありがとう、咲夜さん……」

座り込んだ体勢で、様崎に背中を撫でられながら息を整える太田がふと視線をあげる。

その目には、主審から厳粛に警告を受ける黒鉄の姿。前半の早い時間ということもあり、退場処分にはしないらしく、口頭での注意に留めていた。

見られていることに気づいたのか、黒鉄がつまらなそうな視線を太田に投げる。

「……クク」

「ッ!？」

——そして、凶暴に唇の端を持ち上げた。

肉食獣が、狩られる直前の獲物へ向けるような残忍な笑み。蛇に睨まれた蛙の如く、本能的な恐怖が太田の胸に去来した。

顔色が青褪めるどころか、土気色にまで悪くなった彼の姿を流石に不審に思った様崎が、その肩を強く揺さぶる。

「太田くん！ しっかりして！」

「……あ、ああ……うん……」

心ここにあらずといった返答を返し、様崎が止める間もなく、逃げのようにポジションに戻っていく。悩ましげにその背中を見つめながらも、転がっているボールを拾って審判が示した位置に置く。すでに視線は前を向いていた。

震える手を握りしめる太田が、弱々しく拳を握って下を向く。闘志の炎が消えた瞳で、ぼそりと呟いた。

「やっぱり……勝ちたいなんて考えるべきじゃなかったんだ……」

その声は、リスタートの笛にかき消され、誰の耳にも届かず、太田の中にだけ響いて虚空に消える。

「長く蹴ったら多分ラフプレー起きるし……ホープちゃん！ 行くよ！」

「はー！」

いち早くボールをセットした様崎が、素早くサイドのホープへパスを送り、攻勢をかけるため自身も攻め上がっていく。

素早いリスタートに一瞬虚をつかれた亜蘭陣営だが、すぐさま気を取り直し、悪辣な笑みをたたえてプレスを発動する。ボールホルダーのホープにも、サイドに張っていた叛月がアタックを仕掛ける。

「こんにちはおねーさん♪ ボール頂くね☆」

「嫌よ！」

叛月のボールだけを刈り取るクリーンなタックルを、ボールを少し浮かせることでかわし、そこから一気にギアを上げてスピードでぶち抜く。

吹き抜ける風に驚いた叛月が背後を向く頃には、すでにホープは10m以上先で矢のように駆けていた。

「あはっ、すごい脚……☆壊してあげたいね♪」

身の毛のよだつような叛月の眩きが耳に入るはずもなく、新たにプレスをかけてくるDFを察知したホープが梵場にパスを出す。

難なく受け取った彼だが、ホープにプレッシャーをかけようとしていた青野はそのパスを読んでおり、抜け目なく梵場の眼前に立ち塞がった。

「チョロチョロうぜえガキに飽き飽きしてたところだ。八つ当たらせてもらうぜクソアフロオ！」

暴言を吐き散らしながら、青野が肘を立てて梵場を潰すためのタツクルを仕掛ける。

その状況でも、梵場は焦らずボールに足を置き、肩をすくめながらアクションを起こす。

「全く、何が悲しくて男から抱擁を受けなくちゃならないんだ……っ」と

軽くボールをリフティング。それだけで少し身体を倒していた青野の頭上をボールが抜ける。

軽くステップ。それだけで青野のタツクルは空を切って、何にもぶつかれなかった彼がたたらを踏んだ。

「なっ、嘘だろ!？」

「生憎、かわいい子ちゃんの扱いは本分でね。真実の愛なのさ」

当然のように剥がし、いつもの調子でぼやく梵場が、中盤でパスを待っている無籐を見つける。このまま自分で行っても良かったが、乱暴なプレーを受けるのが嫌だった彼は仕方なくパスを送り、ゴール前へと直進していく。

「ゴール前で待ってますよー!」

「ハッ、俺を雑用かよ」

毒づきながらもボールを受けた無籐が、一気に前線へ持ち上がったていく。パワーに裏打ちされた推進力のあるに、ディフェンスに緊張が走った。

だが、そのゴールまでの舗装路を砕く影が1つ。プレスバックしてきた落合が、激しくシヨルダーチャージを食らわせる。

「ここで止まってるカスが!」

嗜虐的な薄い笑みを浮かべ、もう1度強烈なタックルをかます。そして気づいた。無籐の身体の軸は、ほとんどぶれていない。

「そんな程度のタックルで、俺が止まるわけねエだろがア!」

「ぐあ!?!」

落合を前方に押し返し、生まれた隙についてボールごと地面を踏み抜く。その動きに連動して、天から巨大なクレーン車が無籐の背後へ屹立する。

間髪入れず落合の足元にフックが刺さる。そしてカジキマグロの一本釣りよろしく、巨大なボールが振動を持って地盤から引き抜かれた。

「トレジャークレーン!」

「なっ、んだこいつはあ!?!」

落合を含む複数の亜蘭選手を振動に巻き込み転倒させ、その間を悠々と走る無籐の足元に釣り上げられたボールが元の大きさに戻って収まる。

「FW共、行くぞ!」

ガラ空きになった中盤を1人で突破し、ゴール前に視線を投げる。言葉通りエリア外でボールを待つ梵場とオフサイドギリギリの木崎が目に入るが、どちらもマークが外れていない。

「……! 無籐!」

「おおし……!」

気づいた伊槌が少し降りてボールを引き出そうとしてくる。だがその背後、伊槌に引つ張られて警戒の薄い逆サイドに無籐は光を見出した。

「魅せる明風イ!」

「任せちゃって下さい!」

FW陣の影に隠れて機を見ていた明風に、刺激的なミドルパスが通る。すぐコントロールしたが、MFの矢部のヘルプがギリギリ間に

合った。

だが、1人なら明風の敵ではない。自信の滲み出た笑みを浮かべて、カットインを仕掛ける。

「来やがるか!」

「ディフェンス甘いですよ!」

ボールに食らいつく足をかわし、右を突破しようとするが、腕を伸ばして何とか止められる。だがその動きで敵の体勢が崩れていると判断した明風がバックステップで思惑通り間合いを生み、闇色に染まった空へと飛び上がった。

「三日月の舞!」

「うっ!?!」

三日月をなぞるように回転して風を生み、矢部を地面に転がす。完全にフリーになった明風がペナルティエリアに侵入したことで、ゴール前の混戦がさらに活発化し始める。

(シュート……は、GK構えてるし多分止められる。となるとパスだけど……)

明風が思考を回す。本命の伊槌は鰐原と鍵屋の2人がかりのマークにあつてとてもシュートが打てそうにないし、無籐と梵場は少し遠い。

だが伊槌の奥。幾許が警戒が薄れているその位置に、ダークホースが走り込む。それを感知した明風が、右足を振り上げた。

「木崎先輩!」

「しゃあ! やってやる!」

鋭く低いクロスが、ディフェンスの裏をかいて小気味いい音と共に木崎の足元に収まった。受ける人間がプレーしやすいよう、配慮の込められたパスだ。

自信を滲ませてゴールを睨む木崎が、嬉々と来て左足を踏み込む。鬼裂はそれが必殺技の前兆だと直感した。

「チツ、内海!」

「了解です姐さん!」

故に、絶妙なポジショニングをしていた無籐に気を取られて木崎に

マークを外された内海を呼び戻す。だが、2人を視界に収める伊槌からは、この距離で間に合うとは到底思えなかった。

「おおお！ グレネード——」
「おらー！」

だが、その予想に反し、内海のスライディングは赤いエネルギーボールに充填する木崎に手が届いた。それは踏み込む左足に。転ばない程度の強度で。

「マジかよ……！」

「——ッ!? ぐっ、ショットオー！」

グレーゾーンのスライディングにふらつく木崎が、意地でグレネードショットを打ち出す。しかし、そのシュートはパワーに優れる木崎のものとは思えないほど弱々しく、脅威とならないものだった。

鬼裂が涼しい顔でシュートと相対する。拳を強く握り、闘気を滲ませ、目にも止まらぬ踏み込みでグレネードショットに殴りかかった。

「百烈パンチー！」

腕が分身して見えるほど速く、ボールに打ち込まれる乱打。その1つ1つがボールの威力を的確に殺し、弱めたところに決め技のアツパーが炸裂して、大した拮抗もなくグレネードショットは敗れ、鬼裂の手に収まった。

「フン、温いねえ」

「クソっ、邪魔さえなけりゃあ……！」

余裕綽々な態度の鬼裂に悔しさを見せる木崎の背後で、マークを緩められながら伊槌が冷や汗をかく。

（ラフプレーの使い方が無駄に上手い……！ 単純なフィジカル任せならいくらでもやりようはあるってのに……！）

鬼裂の指示から放たれた内海の体勢を崩すファウルスライディング。あの程度のファウルでは審判は笛を吹いてくれないだろうが、シュートに与える影響は大きい。FWとして歯噛みする。

鬼裂は単純な身体能力だけを武器にする黒鉄や落合、鰐原とはまた違うタイプ。頭を悩ませながらも、伊槌は頭を振って思考を切り替える。

(いや、一連の攻撃で確信したが、基礎能力はやっぱり同程度……ラフプレーを攻略出来ればあるいは……！)

そこまで来て、思考に没入していた伊槌が現実に戻る。鬼裂が動いた。

思考を目の前のプレーに切り替える。パントキックか、ショートパスか——伊槌のそんな予測は、軽々しく裏切られることになる。

「全く面倒だね……簡単に崩されかけて」

肩をすくめ、ボールを足元に落としながらぼやく。

「本当にストレスが溜まってきたよ。だから——」

ボールを足から離さず、歩き出す。

「——発散させてもらおうよ！」

そして、まるでフィールドプレイヤーのようにペナルティエリアを脱出し、矢のような勢いでドリブルを開始した。

「なっ!?!」

「うおっ、何考えてんだ!?!」

全くの予想外。GKの突然の攻め上がりには、伊槌と木崎は反応できず突破を許す。反対に亜蘭のMF陣は雪崩れ込むように敵陣に攻め入っていた。DFを追い越し、鬼裂はまだまだ勢いを持って上がっていく。

「ゴール前に張り付くだけなんてつまらないだろう!」

「だから攻めるってか? イカれてんのかよ」

パスを出す素振りすらなく、中盤まで快適にドリブルを続ける鬼裂の前に無籐が立ち塞がる。それでも彼女はスピードを緩めず、むしろ嬉々として無籐に突っ込んでいった。

「チツ、来るのかよ!」

「どきな!」

そしてGKらしからぬフィジカルで、驚く無籐にタックルをかまし、少し後退させて出来た隙間を突破する。

無籐が驚愕で動揺していたとはいえ、落合を弾いたその身体を押し込むなど並大抵の力ではない。伊槌も急いで戻るがもう遅かった。

「さあて、やろうか!」

ハーフラインまで持ち運んだ鬼裂がやっと動きを止める。そして、ボールをゴール目掛けてまっすぐ伸ばした右足に乗せ、寧猛に笑う。後ろから見たその姿に、伊槌は確信を持って叫んだ。

「打ってくるぞー！」

「デスソードー！」

伊槌の言葉に被せるように、彼女が右足を引き抜いてボールを浮かせ、滞空するボールに鋭いトウキックを入れる。

闇色のエネルギーが集まり、鬼裂が右足を踏み込むのと同時に、剣のような鋭さを持ったシュートが遠くから襲いかかった。

予想だにしない一撃だったが、憲戸の面々は落ち着いて対処にあたる。様崎、三刀屋はゴール前に張り付き、ディフェンスを固める。

「流石に決めさせないよー！」

「ああ、俺が止める！」

そして、伊槌の声かけもあり難なく反応していた靴木がボールに向かっていき、全身にオーラをたぎらせシュートを睨みつけた。

次の瞬間、地面を食い破った菓子の壁が彼の背後に屹立する。

「クツキーウォール！」

靴木の必殺技が発動し、デスソードを正面から受け止める。本職ではない上、距離もありすぎるそのシュートは難なく勢いを削がれ、靴木の足元に力無く転がった。

「よし！」

苦い顔でゴールへ戻っていく鬼裂の姿を尻目に、靴木がボールを抑えようとした。

——その瞬間、前方から勢いよくシオルダーチャージを受け、地面に転がされる。

「ぐっ……!?!」

「氣い抜いてんじゃねえぞ！」

ボールを奪い取った落合が、嘲るような捨て台詞を置いて靴木を突破しゴールに迫る。

プレスバックしてきた梵場に鬱陶しそうな視線を向け、振り払いながら鍵屋へパス。彼女も間を開けずサイドの叛月へ繋いだ。

「させないヨ！」

「久しぶりおねーさん、また会えて嬉しい☆」

だが、エリアの中に絞っていた三刀屋が、飛ぶように叛月とマッチアップする。にこやかに挨拶をする叛月に微笑みを返しながらも、その目は厳しい。

三刀屋が動き出す前に、先んじて叛月が仕掛ける。右に持ち出してデイフェンスを釣り、ステップを踏んだところでさらにダブルタッチを入れて抜き去りに行く。

「っ！ 負けないヨ！」

置き去りにされかけた三刀屋が腕を使って押し留める執念のデイフェンスを見せる。小柄な叛月はパワー勝負では不得手だった。すぐさま後ろに退き、体勢を整える。

止められた叛月だが、未だ余裕そうに笑みをたたえている。楽しんでいるようだった。

「うふふつ、すげーいい♪ でも、あんまり邪魔しないでね☆」

ふてぶてしく称賛の声を投げながら、ボールを両足で挟み回転させる。その遠心力が砂埃を生み出し、ボールを三刀屋の視界から覆い隠した。叛月の必殺技の合図だと、彼女は気を引き締めて構える。

「来るネ……！」

「ふふつ☆ うん、行くよ……♪」

叛月が腕を水平に構えた。手はピストルを型取り、銃口は三刀屋へ向く。その瞬間、ボールは回転を強め砂埃は砂塵へと変わり、視界の全てを殺す。

太田は吹き飛ばされていた。故に三刀屋は、腕を盾にして目を守りながら腰を落とし、衝撃に備える。瞬きの後、甘ったるい声を隠れ蓑にした銃声が、叛月の口から放たれた！

「ええーい☆ ハートブレイク・ショット♪」

「くうう……！」

ピンク色のオーラが指先から放たれ、三刀屋の心臓に突き刺さって身体を吹き飛ばさんと唸りをあげる。ジリジリと後退はしているが、確かに耐えていた。

菌を食いしばって耐える彼女が、自分の胸に当たる物体に視線を落とす。砂塵とオーラに覆い隠されて良くは見えないが、この感触は間違えようがない。

「ボールを蹴り込んでたんだネ……！」

「あれ、バレちゃった☆ でも反則じゃないでしょ？」

危険なプレーに悪びれもせず、むしろ小首を傾げて開き直る叛月。確かに反則が取られるかは審判によるだろう。このグレーゾーンの見極めこそが彼女が亜蘭たる所以かと三刀屋は感じる。

タネが割れば、破ることは容易い。彼女は笑みを浮かべて足を振り上げる。

「ハアッー！」

「きやつ」

旋風を巻き起こす健脚で空を切り、砂塵を吹き飛ばした。その余波で、砂埃を被った叛月の動きも一瞬止まる。

だが、同時に踏み込めない体勢を取ってしまった三刀屋をハートブレイクショットが撃ち抜かんと勢いを強めた。

「く……弾くヨ……！」

それでも、根性で大地を踏みしめ、胸を突き出してボールを押し。そして弾けるように後ろに跳ね飛ばされると同時に、ボールが勢いを失って宙を舞った。何とか止めることには成功した。達成感の中、冷たい土に叩きつけられる。

「ナイスプレーですマドレーヌ先輩。あとは僕達にお任せを」

ルーズボールには、三刀屋の粘りによって帰陣が間に合った梵場が詰める。しかしその背後から、矢部が猛烈な勢いで突っ込んできた。

「オラ退けー！」

「ぐっ、暴力的だなー！」

梵場の身体を押し除け、ルーズボールを略奪した矢部が、背後の梵場を背中で押さえつけながらキープする。そして、背後から上がったきた落合を見て、優しく横にパスを流す。

勢いを持って走り込み、愉悦に歪んだ視線をゴールに向ける落合が、ダイレクトで右足を振り抜いた。

「食らええ！」

「させない！」

空を裂いて伸びるロングシュートに、近場にポジションを取っていた様崎がブロックを試みる。

走る彼女を視界に収める落合が、下卑た笑みを浮かべた。

コースに割り込んだ様崎と、スピードを持って進むシュートが激突する。——彼女の顔面に。

「いつ……た……！」

「サクヤー！」

予想以上に回転のかかったシュートが彼女の顔を抉り、顔を抑える。その致命的な隙を逃さず、鍵屋がブロックされたボールを回収し、様崎を抜いてエリアに侵入した。

急いで帰陣する伊槌の目に、様崎を嘲笑うように口元を歪める落合が映る。そして頭が沸騰するような怒りが、心臓を跳ねさせた。

「わざと当てやがった……！」

「ハッ、気付いたところで遅エよ、ヘボストライカー！」

はらわたが煮えたぎるのを感じる伊槌だが、歯を食いしばって落合を無視する。ディフェンスに戻らなければならない。落合はなおも馬鹿にした目でこちらを見ていた。

「潰してやるよスペイン帰り……止めを刺せ、てめえら！」

落合の響く声を受け迷惑そうに眉を顰めた鍵屋の前へ、太田が立ち塞がる。だが、その姿に、巨体に見合う威圧感も覇気も無い。反射的な動作で、緩慢にマッチアップに入っていた。

鍵屋は眉間の皺を深めて、右に切り返す。

「邪魔なんだけど」

「……」

太田は蒼白の顔で何も答えず、されど鍵屋の前を塞ぐ。だが彼女の加速についていけず、脇を抜き去られる。その時、何か太田の足を掬い上げ彼の肉体に地面に叩きつけた。

「ぐえっ!?!」

「影打ち」

倒れる瞬間、鍵屋の影が足を持ったように伸び、太田の足を締め上げる姿と、バカにしたような薄笑いを見せる鍵屋が、久良島と対峙する様を見た。

右腕を庇って構える久良島の前で、フリーの鍵屋が悠々と右足を掲げる。

「ぐっ……止めます……!」

「はっ、舐めんなし!」

そして、狙い澄ましたコントロールシュートが左隅に放たれた。

「ッ! こつち……!」

右腕を伸ばせない彼女が、懸命に左腕でパンチングを試みるが、届かない。

得点を確信した鍵屋が勝ち誇るように目を細め唇を三日月に裂いた瞬間、背後から突風が彼女のポニーテールを揺らした。

「忘れてんじゃ無いわよ!」

「ホープ先輩……!」

それはカバーにきたホープの姿。流星のような速度でボールに足を伸ばし、コースを重視したシュートが彼女のブロックに阻まれる。

鍵屋が驚愕を隠しきれず、舌打ちをしてボールの行方を目で追う。

ペナルティエリアに落ちるボールには、黒鉄が走り込んでいた。

「クハハア! 引導を渡してやるよ!」

「させるかよ!」

彼女がボールに触れる瞬間、さらにその背後から、体を投げ出した伊槌の足が伸びる。黒鉄とぶつかりあってポジションを争い、コンマ数秒の差で彼の足が先に触れ、黒鉄のキックは手応えを失った。

そのこぼれ球は、体勢を立て直した久良島が飛びつくようにキヤッチする。倒れ込みながら守備成功に胸を撫で下ろした伊槌の横で、無事に着地した黒鉄が地面に伏す伊槌を見下して興味ありげな笑みを浮かべた。

「意外とやるねえ。『元』天才のくせしてさあ」

「……言ってる!」

もはやこの程度の煽りに乗るわけにはいかない。腹の奥に煮え立

つような感情を抱えつつも、彼女を無視して前線に上がっていく。つまらなそうに鼻を鳴らした黒鉄がその背中についていくと同時に、久良島のスローがペナルティエリア前に立っていた様崎に渡った。

「さて……そろそろ反撃開始だよ、みとちゃん！」

「OK！」

シュートを当てられて赤くなった鼻をさすりながらも、サイドの三刀屋に視線を送って共に前線へ駆け上がる。

DF2人の蛮行に一瞬驚いた亜蘭陣営だが、すぐにチャンスだと思考を切り替え、サイドの中田が突っ込む。

「暴走か!? もらってく——」

「みとちゃん！」

「サクヤ、ワンツーだネー！」

だが、彼がタツクルするその瞬間、彼女たちは息の合ったワンツーパスで身体にも触れさせず突破する。

「なっ……！ おいヤバいぞ、人数かけて止めるー！」

再びパス&ゴールの単純ながら完成された連携で矢部を抜き去った。さすがに声を荒らげる中田に顔を顰めた落合が、意気揚々と攻め上がる様崎へ鍵屋を伴って襲いかかる。コンビプレーを封じるため、鍵屋は三刀屋へ厳しくマークについてディフェンスを凶った。

「アマガ、まだそんな手札隠してやがったか……」

「イイ女の子はミステリアスなものだよ？」

あくまで減らず口を叩く様崎だが、その姿に隙はない。前方で相対する落合は、彼女の足元に吸い付くようなボールタッチに、いつアタックを仕掛ければいいのか分からなかった。

（チツ、この女……）

「慎重だね、らしくないよー！」

そのままズルズルと撤退守備を強いられるが、このままではジリ貧だと目を細める。豪を煮やしてヘルプに来ようとする鍵屋を手で制しながら、様崎の斜め後ろに視線をやって何かを確認する。

そのムーブに、前線の伊槌だけが気づいた。

「何を見てる……っ？」

それに伊槌が気づく寸前、確認を終えた落合が殺人的な勢いを持って、激しいプレーを喰らわさんと口を開ける！

「だったらお望み通りぶっ飛ばしてやるよお！」

荒々しい裂帛を伴い空気を裂いて迫る筋肉の弾丸。様崎の華奢な身体にぶつかればタダでは済まないだろうその恐怖を前にして、むしろ彼女は笑ってみせた。

様崎の体が浮き上がる。彼女の『楽しい』という感情を代弁するように、何にも縛られず、自由な大空と彼女が1つになる。

「リブバインドー！」

「あ、あ、!?!」

勢いよく突進する頭上を通り抜け、様崎の視界が開ける。その視線の先で、銀髪のストライカーが手を挙げてこちらを呼んだ。

すぐさま踏み込み、ハーフラインからロングパスの体勢を整え、放つ。狙いはただ1つ、前線で待つ伊槌鳴哉。

「行ってらっしゃい、鳴哉くん！」

「任せとけ……！」

低弾道の鋭いパスが、ピタリと前線の伊槌の足元に収まる。すぐさま反転しドリブルを開始する彼に対し、負けじと最終ラインの鰐原が進路を塞いだ。

「グオオオオ！ ごはん、ごはん〜！」

「俺がエサってか……！」

物騒な言葉とともに、太田に比肩するほどの巨体に見合う、圧倒的なパワーを内包したタックルが伊槌に迫る。

それでも、慌てず鰐原を観察した。技術のない力任せのチャージ。恐れる必要はないと自身を奮い立たせ、右足を踏み込んで鰐原の下に体を潜り込ませた。

「ふっ！」

「グオツ!?!」

当たった鰐原は、水に突っ込んだかのような錯覚を覚える。体格は勝っているのに、全く手応えを覚えられず、困惑の声を上げるしかなかった。

「舐めんな、俺はキング・マドリードの男だぞ！」

有り余るパワーを、伊槌の巧みな身体操作で受け流され、むしろ利用された鰐原の体勢がぐらりと揺れる。動きの止まったその肉体を支点に、伊槌が前に踏み込もうと身体を倒した、その瞬間。

伊槌の全身に、突如として重力が倍化したような絶大な圧力が掛かり、右足が芝を踏み抜く。

「ぐあつ……!?!」

「何としても行かせないんだ〜！」

何事かと視線を回すと、背中に回された鰐原が、全体重をかけた、殺人的なのしかかりを伊槌に向けていた。

抱きつくような体勢で一見すると可愛らしいが、伊槌の身体からは骨が軋むような音が聞こえる。流石に耐えられず、下敷きになって倒れ込んだ。

「おぐあつ……!?!」

カエルが潰れるような声をあげて押しつぶされた伊槌を見ても、落合と並び立つ主審はファウルの笛を吹かない。ありえないだろと心の中で毒づく。声に出す余裕などなかった。

「グフフ、そこで寝てるんだな〜」

立ち上がった鰐原が溢れたボールを拾い、悠々と伊槌から遠ざかっていくのを、痛む体を起こして認識する。せつかく繋いでくれたボールを、失ってしまう。

そう思考した瞬間、伊槌の身体が反射的に動いた。

「い……かせるかあ！」

油断する鰐原の背後で右腕を立てて身体を起こし、腕を支点に身体を振り回し、鞭のように脚をしながらボールだけを的確に刈り取る。鰐原が驚きの声をあげるが、構っている暇などない。

休む間もなく、痛む体に檄を飛ばして無理矢理立ち上がった。低い呻きが無意識に口から漏れた。

「ホープ……!?!」

「ナイスガッツよ伊槌！ あとは任せなさい！」

流石に自分で持ち運ぶのは無茶だと判断した伊槌が、右サイドを駆

け上がるホープを使う。上下動を繰り返した彼女は息を弾ませていたが、その目は流星のように輝いていた。

「行かせるかクソ！」

MFの青野が悪態をつきながらホープに突進する。だが――

「――ノロマね！」

風そのものになって疾る彼女について行けるものなど、いない。トップスピードは間違いなく伊槌以上、どころか青森附属のメンツと比較しても遜色ないだろう。無とハグしてたたらを踏む青野の舌打ちすら千切つてホープが爆走する。

だが、その前方にDFの内海が立つ。いくら足が速くとも、先にポジションを取ればマツチアップを作ることは容易だ。

それでもホープの余裕は揺るがない。彼女のスピードの顔を颯める内海を気にせず、ぐんぐんとさらにスピードに乗っていく。風を超えて光となって、瞬きとともに目の前から消えた。

「ライトニングアクセル！」

「……!? 嘘だろ！」

内海が気づいた時には、すでに彼女はサイドのさらに奥深くを挟んでいた。驚愕すら置き去りにして、ホープの視線がエリアへと向く。

そして、デイフェンスが整う隙など与えず、間髪入れずに高いクロスを放った。

「輝夜！」

「チツ、デイフェンスしっかりしなよ！」

右足から放たれたボールは遠いサイド、その遙か上空に狙ったボール。ミスキックのようにも見えるセンチリングだが、下から闇色の炎を纏って回転とともに上昇する少女が、そのボールの狙いを言外に語る。

「ナイスパスです……！」

彼女の必殺技へ、タイムロスなく繋ぐための布石――その意図通り、明風の脚で暴れる暗黒の火炎が、天空でボールに叩き込まれた。

「ダークトルネードッ！」

「仕方ないねえ……！」

増幅した黒炎を纏うシュートが、天上から打ち下ろされた。闇を吹き上げて爆裂しながらゴールへ向かうダークトルネードに、鬼裂が眉を顰めて構える。腕を引いて彼女も必殺技の構えに入った。

「おいおい、楽しそうだなあ？」

「えっ」

だが、その緊迫した睨み合いへ割って入る、無粋な人影が1つ。

「私もお邪魔するぜエ！」

その正体は、亜蘭のセンターフォワードであるはずの、黒鉄だった。代名詞とも言える凶悪な笑顔を携えて、ゴール前に立ち塞がる。

「あいっ……いっ……いつ戻ってきやがった、ていうか何しに……！」

伊槌の疑問に応えるかの如く、最前線から戻ってきた彼女が、バックステップを踏みながらシュートに歓喜の視線を向ける。その背中を視界に収めた鬼裂は、愉快そうに口角を歪めながら構えを解いた。

「やれやれ……アタシの仕事はないかねえ？」

凶悪な相貌を張り付けた黒鉄が、地面に沈むこむほど深くしゃがみ込む。

そして、彼方天空から降り注ぐダークトルネードに、渾身のドロップキックをお見舞いした。

「カラミニティ・ボンドオ！」

「嘘っ、シュートブロック!？」

着地した明風が喫驚の声を上げる。FWがディフェンスに参加するならまだしも、シュートブロック技を持つのは珍しいことだ。つくづくこのチームには常識が通用しない。

カラミニティ・ボンドを受けた明風のシュートが、徐々に威力を無くしていく。炎が霧散し、焦げ付く匂いがあたりに充満するに従って、黒鉄は不機嫌そうに、その柳眉を顰める。

「かつるいシュートだなあ……」

「くっ……」

煽るような口調に明風も目尻を鋭くするが、何も言い返せない。現に、ダークトルネードは彼女の必殺技に威力のほとんどを殺されてしまった。

黒鉄がブロックしたボールを真上に蹴り上げる。そのまま自然な動作で宙に浮いたボールを両足に挟み、逆立ちからブレイクダンスのような回転を始める。

「いいかあ？ シュートってのはなあ……」

「……！ おい、デیفエンス——」

彼女の動きを不審そうに見ていた伊槌が、バツと振り向いて注意を促そうとした。だが、一瞬遅い。

回転を止めず、挟んだボールの上に弾く。スピンのかかったボールは空気を切り裂きその場で静止した。

呼応して逆立ちから素早く立ち上がった彼女が飛び上がり、再びボールを挟む。回転エネルギーを内包したボールは、今にも暴れ出しそうだった。

「——こう打つんだよ！ デーモン・ノヴァー！」

そして、両足を擦り合わせ、弾丸を発射する様にシュートを放つ。鋭いスピンのかかったボールは、激しく空気を食い破って伊槌の顔面の横を抉った。

「なっ、シュート……!? くっ、止める！」

焦りを隠しきれない靴木がシュートコースに立ち塞がる。冷や汗をかきながらも必殺技を発動しようと黄色いオーラを全身から発し、強く踏み込んだ。

「クツキーウォール！」

背後の地面がせり上がる。文字通り、クツキー菓子の壁が姿を現しデーモン・ノヴァーと正面衝突を繰り返す。

ドリルのように壁を削るシュートに、靴木が苦悶の表情を浮かべる。ザリザリと後退りを余儀なくされ、それでも踏ん張った。が——
「ぐっ……！ すまない！」

「おっけー、止めるよ！」

ついに均衡は破れ、城壁を貫く。その背後では桃色の髪を靡かせる次なる兵士が、聖女のように手を合わせていた。

様崎の祈るような動作の後、足元からは黒い球体が3つ吐き出される。そのうち1つを自在に操り、シュートに叩きつけた。

「サテライトドロ―！」

球体がボールを飲み込む。その動作が起こった瞬間、他の球体もボールに取り付き、風船のように大きくなりながら動きを鈍らせ威力を殺す。

そして彼女が弾くように腕を振るった瞬間、球体は爆発してボールの勢いを完全に殺した。

「ナイスキャプテン！」

「よし、もっかい攻撃――」

遠く伊槌の歓声に微笑みながら、落ちてくるボールをコントロールした彼女に、ふっと影が落ちる。そして、遠慮のないラフなタックルがその細い肢体を吹き飛ばした。

「どきなあー！」

「きやあ!？」

それは、再び黒鉄。その小さな後ろ姿に、伊槌が目を見開く。

自陣からシュートを打った彼女はシュートブロックされている間にピッチを縦断し様崎の場所までたどり着いた。言葉にすれば簡単だが、尋常ではない走行距離だ。

「そんな場合じゃねえ、守備の人数がいない……!？」

ホープは攻めに参加しており、三刀屋も戻りきっていない。残るは依然顔色の悪い太田と、負傷した久良島のみ。間に合う見込みはないが、伊槌は急いで自陣に足を伸ばした。

その間にも黒鉄はドリブルで広大なスペースを突き進む。その前方に、本能的な動作で太田が現れた。

「ああん？ 私の邪魔する気か？」

「ひっ……」

鋭い視線と言葉での脅迫に、太田の腰が引ける。だが、彼女の前から退くことはなかった。

「太田、止めろオー！」

「止まるわけないだろー！」

無藤の怒号を嘲笑い、動かない太田にも様崎の時と同じく容赦のないシヨルダータックルをお見舞いする。太田は受け身も取れず、それ

をモロに食らった。

「ぐえっ!？」

「オオター！」

「チツ、久良島、頼むー！」

女子とは思えない筋力とパワーに、太田の巨体が宙に持ち上がって呻き声とともに地面に倒れ伏す。そしてついに、歯を食いしばる久良島が黒鉄と1vs1で対峙した。

嫌らしく右腕に視線を合わせ、黒鉄がボールを踏みつけ、回転をかけながら浮かせる。そして再び逆立ちになり、コマのような回転とともに蹴りを打ち込む。

「右腕はまだ痛むかあ？ お嬢ちゃん？」

「……」

「無視かよ、傷つくなあー！」

癩に触る声で、余裕の軽口を叩く彼女が、ボールに充分にエネルギーを込めたと判断して立ち上がる。そして、鼓膜を蹴破るような鋭い風切り音とともに、渾身のサマーソルトが打ち込まれた。

「じゃあ、体に聞くしかねえか！ ナチュラル・デイズターアー！」

赤黒い力を纏ったシュートが、容赦なく久良島へと向かってくる。右手を握りしめるが、手首の焼けるような痛みで顔を顰めて力を入れられない。

「……………くっ、どうにか……………！」

それでめ久良島が左半身を引いて、左腕に黒のオーラを集中させる。闇夜の水面より深い色のエネルギーに包まれた左腕を、弓のように思い切り引き絞り、シュートを睨みつけた。

「左腕だけ……………真っ黒。パンチ……………！」

そして、矢のようなスピードで腰の入ったストレートをぶつける。

だが、威力が違いすぎる。片や利き足から十分な時間のもと放たれた必殺技、片や利き腕ではない方で放たれた急あつらえの必殺技。結果は、火を見るよりも明らかだった。

「吹き飛びなアアー！」

「ぐ……………いやあ!？」

使用者の気迫に後押しされたように、シユートが唸りを上げて久良島の腕を吹き飛ばし、腹に当たって彼女ごとゴールに突き刺さった。

一瞬、ボールの威力でネットに張り付けられ、解放されると同時にぐったりとした久良島の身体が、土の地面にドサリと落ちる。

力を失ったボールが弱い風にあおられるのにも目をくれず、その悲惨な光景に、自陣に戻る伊槌たちが急いで駆け寄った。

「久良島！ 大丈夫か!？」

「……………伊槌先輩……………」

乱れた前髪を撫でつける彼女が、伊槌の銀の瞳を見据えた。黒い髪の毛の奥で煌めく翠色の目を細め、コロコロと転がるボールを両手で持ち上げ、悔いるようにボールと額を合わせた。

「止められなかった……………」

「久良島……………」

懺悔するように、久良島が言葉をこぼす。

「キャプテンに無理を言ってピッチに立たせて貰ったのに、私は……………」
「杏奈ちゃんの責任じゃないよ。簡単に打たせた私も悪い」

なんと言葉をかけるべきか分からず、ただ彼女を見つめていた伊槌の背後から、体の調子を確認めながらしゃがみ込む様崎が現れた。優しい口調で、久良島を庇う。

久良島がまた何かを言う前に、彼女はその鈴を鳴らすような、透き通った喉を震わせた。

「次こそは止めよう！ 先輩だからね、私たちも手伝うよ！」

「うん、ワタシも今度こそ気張るヨ！」

様崎の言葉に、寄ってきた三刀屋も肯定の意を返す。汗を垂らすところを見るに彼女たちも余裕は無さそうだが、その後輩思いな面は翳りがないようだった。

頼もしく微笑む彼女たちの言葉に、久良島も少し惚けた後頬を緩ませる。そして左腕を突き出し、深く頷く。

「はい……………」

その姿に、もう力みはない。相変わらずのキャプテンシーだと伊槌は素直に称賛する。

「おら太田、手え貸すぞ」

「あ……ありがとう……」

特に言葉をかける意味も無くなったので、ボールを拾ってセンターサークルまで持っていこうとした時、無籐に手を貸されて起き上がった太田の呟きが耳に入った。

「やつぱり……無謀だったんだ……夢見てたんだ……勝とうなんて……無理なんだ……」

どこまでも弱気で、果てしなく後ろ向きなその言葉に、伊槌は反射的に反論しそうになる。

だが、なんとか押し黙った。彼がここまでネガティブな思考に支配されているのも、点差が開いてしまったからだだろう。ならば、言葉で示すことなど不要だろう。

「行動で示す……」

ストライカーとしてゴールを。チームを勝たせるために。自分のプライドのために。

脇に抱えるボールをぐっと強く抱きながら、伊槌は改めて亜蘭のゴールを睨みつけた。

GOAL!!?

26分 黒鉄城

憲戸 0—2 亜蘭

「前半のうちに、必ず1点返す……」

センターサークルでボールに足を乗せる伊槌が、改めて決意を口にした。

太田以外の面々も、大なり小なり2点差の重みで沈痛な面持ちになってしまっている。これを晴らせるのはゴールだけ。しかも、あと4分以内のゴールだ。

できるのか、と不安感が胸の奥底から泥のように湧いてくる。マド

リードのピッチに囚われた弱い自分が、傷だらけの身体で喚く。

「……うるせえ」

そう言っただけ息を深く吐く。できるか、ではない。やるのだ。今、他の誰でもない自分の手で。

拳を強く握りしめた瞬間、リスタートの笛が高々と鳴る。背後の木崎にパスを送り、彼もすぐ無籐にパスを出そうとした。だが――

「木崎！ リターン！」

「え？ ……お、おう！」

パスを出した伊槌が、移動もせずに関髪入れずにリターンを要求する。無籐すらも目を細めて意図を汲み取れない様子だ。

木崎からの戸惑いの色が見れる弱いリターンパスを受けた伊槌が、反転して一気にドリブルで敵陣に突っ込む。

「……！ 来る」

少し目を瞬かせて鍵屋が構える。応えるように、伊槌も仕掛けた。勢いを持った攻撃的なドリブルだが、細かいボールタッチで、迂闊に足を出すことができない。不愉快げに顔を歪めて機を待つ彼女を、伊槌は冷静に観察する。

「チツ、意外と上手いじゃん。ムカつく」

「年季が違うんだよ」

舌打ちとともに、鍵屋の足がボールに伸びた。伊槌は慌てずダブルタッチでかわし、体勢を崩した彼女を抜き去る。

苦く顔を歪める鍵屋が、背後から肩を掴んでくる。すでに前半終了が近いためいつも以上にファウルを恐れないプレーだ。落合もカバーに来ていた。

「テメエ如きのドリブルで攻撃になるかよ！」

煽りを無視し、伊槌が素早く首を振って視野を確保する。右サイドで、梵場がフリーで手を挙げている。

「梵場！ ホープも上がれ！」

「おっと、来たね」

「分かったわ！」

鍵屋に後ろから引き倒されながらも、鋭いパスを梵場の足元に放

つ。勢いのあるボールだったが、持ち前の技術で完璧にトラップして見せ、トラップを狩るためにヘルプに来たディフェンスを戸惑わせた。

さらにそのサイドをホープが走る。ディフェンスは考えなしに突っ込むことができない。

「クソ、うめえ……！」

「褒められるのは嫌いじゃない。例え男だとしてもね」

キザにアフロヘアーをかき上げながら、梵場が楽しげに笑みを見せる。そして逆立ちして激しく回転しながら、彼の周りを跳ね回り出した。

「それはそれとして退いてくれ。スピニングドライブ！」

「チツ……！」

変幻自在の動きでディフェンスを突破する。抜き去られた彼が背後からスライディングを仕掛けるが、華麗に飛んで完全にかわした。

再びディフェンスの内海が立ち塞がるが、あらかじめ走っていたホープとの2vs1の局面に、梵場への対応は緩い。不敵に笑った梵場が仕掛けようとした瞬間、左から鋭い指示が飛んだ。

「ホープに出せ！」

「！ 伊樋……全く、しょうがないな。行ってらっしゃい、子猫ちゃん！」

「その呼び方やめなさい！」

不承不承な様子ながらも、伊樋の指示通り背後のスペースにホープを走らせ、内海の頭上を通してパスを出す。長いスルーパスを供給したが、彼女の足なら問題なく届いた。

「はあ……はあ……流石にキツイわね……！」

快適にサイドを駆け上がるホープだが、その顔色には辛さが滲み始めていた。度重なる上下動で体力が尽きかけている。それでも、身体に鞭を打ち、エリア内を見た。

「ホープ！ 俺に！」

「先輩、ファー空いてます！」

木崎と明風がディフェンス達と攻防を繰り返している。なんとか

フリーになろうと動き回っているが、必死に食らいつくDFを振り切れていない。

だが、その背後、警戒の薄くなるエリアの少し外。的確な指示でボールを運び、最後の局面でも全員の視線が外れたその位置で、その男が手を挙げていた。

「ホープ！」

「いい位置ね……伊槌、やっちゃいなさい！」

要求通り、ホープのセンターリングが伊槌目掛けて放たれる。彼は落下地点でボレーシュートを構える、ダイレクトで打つ素振りを見せた。

「打たせるんじゃないよ！ 鰐原！」

「了解なんだなく！」

焦った様子で指示を飛ばす鬼裂の言葉を受けて、鰐原が伊槌に突進する。それを一瞥した彼は、構わず右足をしならせて強烈なボレーシュートを放つ——フェイクをした。

「じゃあな」

シュートに見せかけ、ボールを軽く蹴り上げて鰐原の頭上を通して突破する。鬼裂の姿が、何にも邪魔されず伊槌の視界に入った。

「チツ……」

「確実に決める、行くぞ……」

唇を噛む鬼裂を睨みつけ、軽くボールをリフティング。そして浮き上がったボールの下を足を引くことで擦り上げ、電撃を発生させる。太陽のように光を放つボールが、伊槌の網膜を焼いた。

「食らえ！」

そして、最後の仕上げとして、右足を振るってボールに叩きつけようとする。

その強烈なシュートモーションを見届ける鬼裂の顔には、焦りが浮かぶ。唇を噛んで、感情を押さえつけている。

そして、シュートが放たれる瞬間——

——その唇が三日月に歪んだ。

「オラー！」

「電——!?!」

真横から伊槌に強烈なタツクルが見舞われる。いきなりの事態に、受け身も取れず地面に叩きつけられた。

軋む身体を無理に動かして、衝撃を受けた方向に首を回す。落合が、こちらを見下ろしていた。

「隙だらけだったぜ、ヘボストライカー！」

ファウルの笛は鳴らない。焦りを堪えていたのではなく、笑いを噛み殺していた鬼裂の視線の先には、審判がいた。叛月に正面に立たれた審判が。

「視線を……切つてたのか……」

無籐が苦しげに呟く。これが亜蘭のファウルが見逃されていた力ラクリ。単純だが、故に絶大。タネが分かった今でさえ、対策の打ちようは、ない。

小馬鹿にした薄笑いを絶やさず、落合がボールに足を乗せる。クリアすれば前半終了だ。

「まあいい攻撃だったぜ。後半も頑張れよお！」

神経を逆撫でる、鼻につく声とともにボールを蹴り出そうとして――振るつた脚が空を切る。

立ち上がった伊槌が、落合からボールを奪った。

「なっ！」

発電した電撃を未だ纏う彼の眼光が、ゴールを貫く。ひどく流麗な動作で、再びボールを上げ、下を擦り上げた。

伊槌でも、なぜ身体が動いたのか分からない。もちろんまだ痛むし、何度もラフプレーを受けていれば、太田ほどでなくとも恐怖の感情は拭えないでいた。

それでも、溢れる『勝利への執念』と、『プライド』が無意識に身体を操った。弾ける電撃が伊槌の網膜に焼き付く。焦げつく戦意がボールに込められる。

「俺は……ストライカーだぞ……!」

俺はゴールを決める者。そんな自負が口をついて出る。この程度

の妨害で、この程度の苦難でストライカーが膝を折るわけにはいかない。

せつかく掴んだ勝利への布石。逃していい理由など、1つもなかった。

巻き起こる電撃が、近くにいた落合を後ずさらせる。切れ味のある右足がボールに叩きつけられる。超至近距離で、それは完成した。

「――電閃ッ！」

雷鳴のような瞬きとともに、光の速さでゴールに襲いかかる。鬼裂に反応すら許さず、それはネットを食い破った。

空気を切り裂くような、甲高い笛が木霊する。信じられないような目で、落合はこちらを見ていた。

「この野郎……」

顔を歪ませて、伊槌を睨む。そして、前半終了の笛も続いて吹かれた。

長いホイッスルの音とともに、背後を振り向く。チームメイトの目には、希望が戻っていた。

伊槌の口元にも笑みが浮かぶ。これだ、これがストライカーにのみ許された快感。自分のゴールで、チームの意思を前に進ませる。勝利への責任を負うものへの褒美。

だが、その視線の先。太田の顔色は未だ晴れないでいた。勝利から目を逸らすように下を向く。

「太田……」

下を向く彼にも、まだ戦意はある。断言できた。でなければ、失点の場面で黒鉄へのディフェンスになど行くわけがない。胸の奥に燻っているはずだ。『勝ちたい』という思いが。

必ず、その瞳を前に向かせて見せる――俺のゴールで。人知れず、そう心に誓った。

GOAL!!?

30+2分 伊槌鳴哉

憲戸 1―2 亜蘭

|

17話：胸を焼く

「いやあ、いい試合つすねえ〜」

試合中の亜蘭グラウンドを囲う白いフェンス越し。ゲームを一瞥できるその場所で、こじんまりとしたベンチに腰掛けるジャージ姿の鎌野樹はコーラの缶をグイッと呷っていた。周囲に空き缶の転がるベンチでこうもくつろげる胆力に、横の男がため息を漏らす。

ため息をついた男——長宗我部が、膝の上に乗せているノートにペンを走らせつつ鎌野に視線を向けず口を開く。

「スポーツマンとしてコーラはどうなんだ、鎌野」

「んー？ いつも飲んでるわけじゃないんすから、固いこと言わないでくださいよ。チートデイトてやつつす」

炭酸を完飲した鎌野が息をついて立ち上がる。手の内で缶を揺らしながら、ちゃんとゴミ箱に歩を進める背中を見て、そういうものと長宗我部も納得した。

ゴミ箱へ十分に近づいて空き缶を投げ入れた鎌野が、グラウンドへ視線を戻す。その先には憲戸中のベンチ——もつと言えば、伊槌鳴哉へとフォークスされている。

それだけで彼の言いたいことが伝わったとばかりに長宗我部が頷いた。

「憲戸は成長している。DFもMFも、満遍なく」

長宗我部の目にはそう映った。パス、ドリブル、トラップと言った基礎が盤石になっている。要因にも想像がたった。

「特にあの伊槌¹だ。彼を中心としてチームのレベルが上がっている」

鎌野の意図を汲んだその言葉に、満足げな表情を浮かべて彼の隣に腰掛ける。伊槌というストライカーが、MF、DF、GKとあらゆるポジションに進化を呼んでいるのだと、言外に肯定した。

興奮冷めやらぬ様子で大仰に手を広げながら話し出した。

「身体のキレも戻ってるのか、ドリブルもよくなってる。シュートも、メンタル面もつすよ。俺の知ってる伊槌鳴哉が帰ってきたって感じっす」

「ああ」

そつけなくも同意を返す。

彼の目から見ても、最後の攻撃は素晴らしかった。2点差の動揺に負けず、前線で味方を動かしながら虎視眈々と得点を狙い、理想的なオフ・ザ・ボールでボールを引き出し最後は執念で叩き込んだフラインゴール。

「流石はストライカーだな」

「そつすね、俺ほどじゃないっすけど」

「調子に乗るな」

軽口を叩く鎌野は置いておき、この1点は重い。後半へと意気込むチームの希望になったことは、疑いようもないだろう。

長宗我部に小突かれた鎌野が、苦笑しながら視線を戻す。それはこの遠距離からでも寸分違わず伊槌の背中を射抜いている。異様な雰囲気、鎌野の『眼』が、爛々と輝いていた。

「後半は何を見せてくれるんすか？ 少なくとも退屈なサッカーは願ひ下げっすよ」

不気味に笑みを噛み殺す。その心中は、小学校からのチームメイトたる長宗我部にも読めない。

長宗我部がノートに目を落とそうと、憲戸ベンチから視線を外す。そう視線を移動させれば、たまたま亜蘭のベンチが目に飛び込んできた。

その中の1人、後ろに流した金髪の男が否応にも網膜に張り付く。

長宗我部の顔が、わずかに歪んだ。

「あ、あいつらの方も前半終わりっばいっすね。蓮水が3^{ハット}得点ですつて」

「……ん、ああ。そうか……流石だな」

その些細な変化を気にせず、鎌野がコーラを飲んでいた時のような緩い様子でスマホを見せる。サッカーニュースの中では、現在2回戦を戦っている青森附属が前半で6得点、との文字が踊っていた。

「調整がてら出してきてくれて良いんすけどねえ。2軍が主なのに1年の奴らは出てるし」

「俺たちが出るまでもないだろう。現に、休暇を与えられたからこうして偵察できるのだからな」

「偵察う？ 俺暇つぶしに観戦に来ただけなんすけど」

「はあ……お前は少しピッチ外でも覇気を持って」

そのまま鎌野たちの話題は、目の前の試合から遠ざかっていく。長宗我部も、胸の奥を苛んだちよつとした後悔を、すでに飲み下していた。

「……？」

「鳴哉くん、どうしたの？」

「いや……気のせいかな」

視線を感じて振り返った伊槌が、顔を寄せてきた様崎に頭を下げる。長い睫毛に、一瞬目を奪われた。

気を取り直すように口元を拭って、月並に視線を向ける。彼はにこやかな表情で一同を見渡していた。

「いい前半だったんじゃないか？ 1点差あるが、まだ全然勝てるぞ！」

「ああ、勢いに乗って後半も攻め切りたい」

調子のいい言葉に、靴木が首肯する。伊槌の1点は、予想通りチームの士気を高めることに成功していた。

「おう！ 後半こそ俺が決めてやらあ！」

「守備も任せてネ！ ワタシたちでアンナをサポートするよ！」

口々から放たれる、活力のみなぎった言葉がベンチに木霊する。他のチームメイトたちも頼もしい顔つきで、後半が待ちきれない様子だった。

——ただ1人を除いて。

「その……」

遠慮がちに、太田が口火を切る。その先に続く言葉を、伊槌は予想できた。

「……『交代してくれ』、ってどこかア？」

「……うん。僕がいなくても、どうにかなるだろうから……」

無籐が口にしたのは、伊槌の想像通りのことだった。太田は首を下げ、沈痛な面持ちで肯定する。

チラリと月並を見ると、眉をへの字にして困った様子だ。監督としてはパワーのある太田を交代したくはないだろうが、顧問としての彼はその意思を尊重したいのだろうと当たりをつける。

「そうか……じゃあ——」

「いや、待ってくれ」

逡巡がありながらも、彼の意思を汲もうとした月並を、伊槌が手で制した。

周囲の視線が集まるのを感じる。呆氣に取られたような表情の太田を諭すように口を開く。

「俺たちには勢いがあるとはいえ、相手のフィジカルは強い。太田の力が必要だ」

「まあ、そうだね。太田くんが居てくれれば心強いかな」

様崎が同調した。キャプテンの彼女の発言力は高く、太田との信頼関係も築いている。伊槌の言葉よりよっぽど心に沁みるだろう。感謝を込めて視線を向けると、ウイंकを返された。

「で、でも僕のパワーも、あのチームの前じゃ……」

「そうか？ 本気を出せば、お前はあんなもんじゃないだろう」

伊槌の脳裏にあるのは、泰山戦終盤での太田のディフェンス。

力強く、強靱なあのタックルがあれば黒鉄や落合の攻撃もシャットアウトできると確信していた。きつとあれが、太田本来の実力だ。

「勝つために、太田の力が必要なんだ！ 頼む、出てくれ！」

声を張り上げて懇願する。その言葉に、太田の体が大きく震えた。何かに耐えるように、拳をぐっと握り——

「——いい加減にしてくれ！」

空気が揺れる。太田の叫びが、金槌のように強く伊槌の脳を殴りつ

けてきた。

「僕たちは誰にも期待されてない弱小なんだ！ 勝たなくていい！ 勝てるわけがない！ なのに勝てそうだななんて……そんな希望は……要らないんだ！」

魂から直接放たれたその叫びは、深い衝撃となつて腹の奥に突き刺さる。そして、同時に腑に落ちた。何故ここまで太田に肩入れするのか。

最初の青森附属との試合では、太田の失意を仕方ないと投げ出した伊槌が、何故こうも引き止めるのか。それは、勝利への執念だけではない。

「希望を見せられて……それを取りこぼしてしまつたら……僕はきつと、サツカーが嫌いになる……」

「……似てる」

太田の独白が続く。記憶の奥底から蘇るのは、マドリッドから逃げ帰ってきた自分。未練を押し込め、希望を信じられなかった自分。全て、目の前の太田に重なつた。

様崎が手を取ってくれなければ、伊槌はここにいなかった。サツカーに戻つてこれなかっただろう。だから、今度は自分の番なのだ。

伊槌の目に、決意が宿る。

「だから、勝たなくていい。……勝ちたく、ない」

「——希望なら俺が見せてやる」

首を下げた太田の眼前に、伊槌が歩を進める。自分を誇示するように胸を張つて、強い視線で彼を射抜いた。

「勝ちたくないだなんて嘘だ」

「……嘘じゃ、ないよ」

「ならなんでお前は泰山の時逃げなかった？ 勝たなくていいなら、あのパワーチャージは何だったんだ？」

太田が口をつぐむ。

「太田——気づいてないのか？」

「……何が、だい」

「泰山に勝つた後……お前は、信じられないような表情をしたあと――

」

一呼吸置いて、自然に、だがよく響く声が太田の耳朵を打った。

「笑ってたぜ」

「——!?」

弾かれたように顔を上げる。やっと、彼と目が合った。

憔悴したような、濁った目。だがその奥に、確かに感じる。勝利への焦がれを。

「その『勝ちたくない』が本心か……答えはフィールドでしか見つからない」

伊槌が彼の手を取る。逆らわず、太田が手を引かれて立ち上がった。

「もう一回見せてやる、勝利の栄光ってやつを。だから、立ち上がれ」
「……………」

ゆっくりと手が離れる。太田は緩慢に振り返って、背後へと足を進める。

風に撫でられた芝を踏み鳴らして、フィールドの上へと。

「……ハッ、やっとやる気になったってか」

「……太田先輩がいるなら、百人力ですね」

仲間たちの間に漂っていた緊張感も、やっと抜けていった。無籐が全身の疲労を丸ごと吐き出すように息をつくとき、水やタオルを配っていた橘花たちに視線を向ける。

「おい1年組、アップしろ。出番だぜ」

「えっ!? は、はい! 行こう、宵闇さん!」

「えっ、ちよつと引つ張らないで——」

橘花がキラキラした表情で、宵闇の手を引つ張ってアップに入る。突然賑やかになったベンチに伊槌が苦笑を漏らし、無籐を見やる。

視界の隅では、月並が交代の準備をしていた。

「誰代えるんだ?」

「太田を代えるつもりだったが……お前が説き伏せたからなア。いい仕事だったぜ」

無籐が労うように水を渡してきたので、ありがたく頂く。

喉を潤す伊槌に、無籐が言葉を続ける。その視線の先には、息を弾ませるホープと梵場の姿があった。

「ホープ、梵場。お疲れさん」

「はあ……はあ……私まだ行けるのに……」

「まあ、君は運動量も激しかったし、後半は攻め方を多少変えないとね。子猫ちゃんたちに任せるさ」

ホープは不服な様子で汗を拭っている。対照的に、梵場は落ち着いた風にベンチに腰掛けていた。

そして、審判の手から高い笛の音が空を貫いた。ハーフタイム終了の合図だ。

交代を告げられたホープたちがベンチに下がり、1年組が気合十分な様子でピッチに駆けていく。伊槌も息を整え、踏み出した。

その時、背後から髪をぐしやりと撫でられる。驚いて振り向くと、いつもの悪戯っぽい笑顔を浮かべた様崎がそこにいた。

「かつこよかったじゃん、鳴哉くん。そういう熱いところ、好きだよ」
「……ありがとう。後半も気張ってくぞ」

「ふふ、後ろは任せといてね？」
軽く拳を合わせる。そして今度こそ、力強く一步を踏み出した。

後半は亜蘭ボールでのキックオフだ。憲戸はホープの位置に宵闇を、梵場の位置に橘花を交代し、亜蘭は交代なし。

センターサークルにポジジョンを取る落合は、不機嫌そうに眉を顰めて伊槌を睨みつけていた。

「クソが……ぶっ潰してやる……」

「あはっ♪ 星先輩こわーい☆」

イラついた様子でボールに足を乗せる彼の目を、伊槌は真正面から受け止める。それが癩に触ったのか、鼻を鳴らして視線を外した。

そして、戦いの火蓋は再び切られる。

「攻め潰せてめえらー！」

「あいあいさー☆ 城先輩。パス♪」

叛月が素早く背後の黒鉄にパスを送り、前線へと駆ける。変わらず凶悪な表情でドリブルする彼女に、伊槌が鋭くプレスをかけた。

「行かせるか……！」

「どきな天才ー！」

構わず突進してくる彼女を、伊槌が巧みに受け流しボールに足を伸ばす。だが、黒鉄もすっかりプロテクトしながら、面倒そうに周囲へと視線を散らした。

「面倒だね、ゴール前まで持ってきなー！」

「ダル、パス」

「オツケー☆」

「クソ、早い……！」

流れるようなパス回しで伊槌を突破し、サイドに流れた叛月へとボールが渡る。彼女がドリブルを開始するその瞬間、強ばった様子の橘花がディフェンスに間に合った。

硬さの抜けていない彼を見て、叛月がくすくすと笑い声を漏らす。

「ふふっ、おねーさん緊張してるの？ 可愛いね☆」

「僕は男です……！」

驚いたように、叛月が一瞬目を見開く。だが瞬きとともに気を取り直し、勝負を仕掛ける。

「じゃあおにーさん、ミラちゃんがりードしてあげる♪」

ぐんっ、と加速して彼我の距離を一気に詰める叛月。橘花が見極めてボールに足を出すのが、舐め回すようなコントロールにタツクルは空を切る。そのタイムロスで、叛月が半身前に出た。

「くっ、上手い……！」

剥がされて焦った彼が、なんとか手で止めようとする。だが、彼女の身のこなしにその必死の抵抗すらも届かない。

「お触り厳禁♪」

「うっ、すみません、抜かれました……！」

サイドで抜け出した叛月がさらにスピードを上げてドリブルを続ける。その視線はエリア内に向けられ、軽い口調とは裏腹に虎視眈々とゴールを狙っていた。

「止まれ」

流石にこれ以上攻めさせるわけにはいかない、靴木が中央から出張る。待っていたとばかりに、叛月が三日月を描いて笑った。

「真ん中ガラ空きだよ☆ いっけー♪」

「いい仕事だ、クソガキ共」

空いた中央のエリアで、落合がボールを受ける。不味いと直感した伊槌が、声を荒らげた。

「ディフェンスー！」

「オツケー、私が——」

伊槌の言葉に呼応して、セオリー通り様崎が落合にプレスをかけた瞬間、大きく踏み込んだ落合の視線が、ゴールを貫く。

「うらあつー！」

そして、空を切る音とともに、予想だにしないシュートが打ち放たれた。

様崎も反応しきれず、髪を掠ったボールを目で追うことしかできない。太田も同様に見送る。

「杏奈ちゃんー！」

「このくらいなら……ふっ！」

パシン、と音を立てて、久良島がボールを両手で抱きしめるようにセーブした。だがその顔が、一瞬歪む。腕の怪我はまだ尾を引いているのだろう。

遠目からのシュート。これはきつと得点を狙ったものではない。

「くっ……」

「潰してやるぜキーパー……覚悟しとけ」

——キーパー潰し。やはりそうかと伊槌が歯を食いしばる。だがそうと分かったところで、自分にできることなどない。

「久良島……信じてるぞ」

伊槌にできるのはいつだってゴールを奪うことのみ。今はただ、そ

の一瞬に集中を切らすなど自分に檄を入れ再び相手陣へと走り出した。

「キャプテン……!」

「よし、行くよみんな!」

様崎が号令を放ちつつドリブルで持ち上がる。すぐプレスにきた落合をかわし、一気に無籐目掛けてパスを送った。

「ナイスパスだ、同点にするぞオ!」

「させないし」

胸トラップでボールを収める彼の死角から、金のポニーテールが忍び寄る。そのまま、背後から掠めるように足を伸ばした。鍵屋の足が、ボールに触りかける。

「……!? チツ、いつの間に来やがった……!」

だが、間一髪で反応した無籐がしつかりボールを守り、なんとかサイドに流れた伊槌へパスを送った。鍵屋は舌打ちして見送ることしかできない。

伊槌にも素早く矢部がディフェンスに入る。距離感を保って、抜かれないように細心の注意を払っていた。

「臆病だな……奪いに来ないのか?」

「んな安い挑発に乗るかよ」

青筋を立てながらも冷静に伊槌を見極める矢部。意外な沈着さを目を細め、無理矢理ドリブル突破を試みかけたその時、伊槌の背後から芝を駆ける音が近づいてきた。

口元を緩ませて、ヒールパスを落とす。

「いい子だ宵闇! ワンツー!」

「ミ、ミスっても怒らないで下さいよ……!」

情けないことを口走りながらも、矢部の頭上を越えるパスを供給する。荒いボールだったが、ディフェンスから逃れた伊槌なら十分に収めることができた。

「DF! 警戒しなよ!」

「グフウ……了解なんだな」

DF陣が声を上げて伊槌の進路へと立ち塞がる。ゴールを覆い隠

す鰐原の巨体は、見るものに本能的な圧迫感を覚えさせる。

それでも、怖気付くわけには行かない。伊槌が思い切つてボールを爪先で宙にあげた。距離はあるが、電閃の構えだ。

「もう打つ気かい……!?!」

「ストライカーとしての責務を果たす……!」

『希望を見せてやる』。太田に語つたその言葉を現実にするため、伊槌の全身が唸りをあげる。

ボールを擦り上げると、焼けるような電撃が弾けた。ゴールを貫かんばかりに睨みつけ、振りかぶつた右足を雷撃の球に叩きつける。

——そして、爆砕するような放電の後、空気を裂いて放たれた。

「ブチ抜けッ！ 電閃ッ！」

「グオオオ！ クロコダイルスケイル！」

雷電に、鱗の生えそつた猛獣が真正面からショルダータックルを放つ。一瞬拮抗が生まれ、ボールが纏う電撃が少しかき消された。

だが、シユートの威力は死なない。鰐原の身体を削り取らんばかりに、ボールが回転を強める。

「グ、グオオ……!」

「——行けえ！」

熱に押されたように、バチツと電撃が弾けた。

「ギヤア!」

「チツ、百烈——」

鰐原が弾き飛ばされたことに眉を顰め、両腕を握りしめた鬼裂が電閃を睨みつける。冷や汗を垂らしながらも、その拳を振り上げようとした途端、その前方を影が遮つた。

「おいおい、こんな面白いこと私抜きでやるなよ！」

「なっ、黒鉄!」

「来たのかいアンタ！ 時間を稼ぎな、そのうちに大技の準備をするよ！」

最前線にいたはずの黒鉄が、嬉々とした表情でボールに立ち向かう。目を見開く伊槌を歯牙にも掛けず、滑らかなドロップキックで電閃のブロックに入る。

「カラミティ・ボンドオ！」

「……いや、貫く！」

伊槌の眩き通り、電閃の威力はほとんど衰えていない。爆裂する電撃が、彼女の身体を焼いていく。

「クツ、ククク……いいシユートだ天才……！　いい、いい……痛いぞ……！」

黒鉄は恍惚とした表情で、痺れる足に蕩けた視線を向ける。そして程なくして、彼女の体も吹き飛ばしゴールに突き進む。

流星に威力の何割かは削られているが、鬼裂を破れる——だが、伊槌はその甘い認識を改めることになる。

「十分な仕事だったよ2人とも……もうアタシのゴールは割らせないよ！」

「ッ!？」

ゴールの前に立つ鬼裂が咆哮した。その気合いに呼応するように、彼女の背後から、紅蓮色の鬼神が現れる。

「隠し球があつたのか……！」

伊槌が声を漏らす。万全でない電閃がアレを貫けるか——分からない。

鬼神が拳を握って、鬼裂が大きく飛び上がる。ハンマーで打ちつけるように、鬼神の腕が力強くボールに叩きつけられた。

「負けてやるかア！　鬼の鉄槌！」

地面が砕けるほどの威力で、シユートが押し潰される。衝撃で土埃が巻き起こった。

「くっ……行つたかア……!？」

視界が晴れて見えたのは、威力を失って地面にめり込んだボールと、得意げに腕を払う鬼裂の姿。

それは、無籐の眩きとは裏腹に、完璧にセーブされたことを意味していた。

「……ッ！　クソッ！」

「3人がかりだつてのに馬鹿みたいな威力だね……まだ腕が痺れやがるよ……！」

歯を食いしばる伊槌に、笑みの中で鬼裂が化け物を見る視線を向ける。痙攣する右腕に軽い恐怖を覚えながらも、動揺する憲戸陣へパントキックを放った。

「くっ、デイフェンスだ！」

「ちよつと遅いかな☆ 頂いてくね♪」

「なっ……ぐっ、すまない！」

靴木が素早く落下地点に向かうが、飛び上がった叛月にボールを搔つ攫われる。一気にドリブルで進もうとした彼女だが、再び橘花が並び立って身体を当ててきた。

「行かせません！」

「……おにーさんは結構情熱的だね♪ でもしっこすぎるかな☆」

そう微笑んで、ボールを蹴り上げる。叛月がアクションを起こすと同時に、桃色の気が辺りに充満した。

「私と踊りましょう♪」

そのオーラに当てられたのか、橘花の体が意に反して彼女の手を取る。共に回転してワルツを舞い始めた。

可憐な花びらが散るような、一瞬の舞踏。最後は飛び上がる2人の身体がすれ違い、叛月の道が開けた。

「プリマドンナ☆」

「しまった……！」

抜き去られた橘花が膝を折って項垂れる様子を尻目に、叛月が右サイドにパスを放つ。待っていた中田の足元にスパンとトラップされ、ガラ空きのサイドを使われてしまう——と伊槌が歯噛みする。

だが、その背後からフレッシユなプレスがボールに繰り出された。

「ふっ……！」

「なっ……チツ、このチビが！」

SBである宵闇の戻りながら放たれた決死のスライディング。それを間一髪でかわした中田だったが、一瞬のうちに体勢を戻した宵闇とマッチアップを作られてしまった。

「チビって……酷い言い草ですね。無駄にデカいだけのくせに……」

「生意気なこと言ってるじゃねえ！」

体格に勝る中田が強引なドリブルで宵闇を弾き飛ばす。当たり負けて倒れた彼女に対し、意地の悪い笑みを浮かべる。

「いつ……このっ！」

「しつこい、なんだこいつ！」

だが、宵闇はすぐさま立ち上がりボールにアタックを辞めなかった。

声をあげて驚く中田がボールを失いかけるが、フィジカルを活かして宵闇を抑え、ギリギリでキープし続ける。

「どけ！」

「押し通って見てくださいよ……！」

野生動物のように執拗に食らいつく宵闇に、苛立ちの込めて青筋を立てる中田。そのプレーはどんどんと荒くなっていき、無慈悲に宵闇の体力を削っていく。

だが、目の前にかかりきっていた中田には気づけない。背後から忍び寄っていたその少女の姿に。

「ナイス黒江！ はあっ！」

「なっ、いつの間に……！」

背後から明風がボールを的確に弾く。そして浮き上がったボールは、飛び上がる宵闇が奪い取った。

「遅いですよ、全く……！」

ボールを収め着地した宵闇がぼやく。苦笑する明風を視界の端に捉えつつ、すぐ攻撃に移ろうと誰かにパスを送ろうと首を動かした瞬間――

間――

「戦場で気い抜いてるんじゃないやねえよ！」

「えっ、早っ……！」

――爆走する黒鉄が、一心不乱に宵闇に突っ込んでくる。先ほどまでディフェンスに回っていたはずなのに、と宵闇が考える暇もない。そのまま勢いを殺さず、激しいチャージで宵闇を吹き飛ばしボールを強奪した。

「かはっ……！」

「ヒヤハハハ！」

明風が急いで止めようとしてくるが、黒鉄の容赦ないドリブルについていくことができない。ゴールと彼女を結ぶ線に、障害がなくなつた。残忍な視線が久良島に突き刺さる。

「くっ、止めます……！」

「やってみなあ、その右腕でえ！」

嘲笑うように叫びをあげ、ボールを強く踏みつける。その衝撃で回転して浮き上がったボールに向かって、逆立ちの体勢で蹴りを入れ続けた。

ボールに赤黒いオーラがまとわりつく。炸裂しそうなほど爆裂を繰り返す。

立ち上がると同時、流れるように放たれたサマーソルトキックと共に、高らかにその名を歌い上げた。

「ぶっ飛べやあ！ ナチュラル・デイズスターー！ ハッーハハハハッー！」

破壊的なシュートが土を抉りつつ迫る。様崎や三刀屋たちは間に合わない。それでもなお、久良島は真正面から対峙した。

左腕に、暗黒のオーラが巻きつく。黒鉄のそれとは違い、暗いながらもどこか暖かさを秘めた黒。髪に隠れた瞳に決意を宿し、大きく振りかぶって拳を叩きつけた。

「真っ黒。パンチ……！」

強烈なエネルギー同士が、衝撃を炸裂させる。腕が折れそうなほどの圧力に顔を歪める久良島だが、それでも全身の体重を乗せて、パンチングで食らいつく。

「ヒヒヤハハハア！ 往生際が悪いガキだなア、面白え！」

「ぐっ……うう……！」

黒鉄の言葉に押されるように、シュートが回転を強める。もともと利き腕では無い左腕は、すでに悲鳴をあげていた。

ざりざりと、少しずつゴールラインへ押し込まれる。

「……っ、きやあっ！」

そして、ついに決壊した。腕が弾かれ、身体が地面に吸い込まれる。終わった——誰もがそう思った瞬間だった。

「うおおおおおー！」

巨体が宙を舞う。太田だった。

久良島が押されているのを確認した彼が、ゴールライン上のボールに飛びついて、オーバーヘッドでのクリアを試みたのだ。

「太田くん……!?!」

「くっ……うおお……!」

これは、太田本人ですら説明のつかない行動だった。まるで、泰山戦の時のように、身体が勝手に動いていた。

久良島とぶつかり合って威力の削がれていたボールが、太田に弾かれる。彼もパワー負けしてゴールに叩き込まれたが、DFとしての仕事は果たした。

「チツ、だったらもう一度……」

「やらせない!」

黒鉄に渡りかけたルーズボールを、様崎が空中で奪い取る。そして、太田たちに少し笑いかけ、声を張り上げた。

「カウンター!」

「おお!」

「チツ、今の入らないとかあり得ないし……!」

様崎のロングパスはセンターサークルを越え、無籐の足元に渡る。突然の攻守交代に焦りながらも、鍵屋と矢部がプレスをかける。

無籐は慌てない。不敵に笑い、ボールを踏み抜いて地面を抉った。1度見たそのモーションに鍵屋が警戒を深めるが、すでに遅い。

天空からクレーン車が、土埃を上げて舞い降りる。そのフックが、鋭く地面に突き刺さった。

「このボールは無駄にしねえ! トレジャークレーン!」

「くっ、ウザっ!」

「ナイス無籐、来い!」

突き刺さったフックが地面をちやぶ台返しし、巨大なボールが一本釣りされる。その圧力に鍵屋は膝を折り、矢部も動けない。

伊槌の指示に従い、無籐が強いパスを送る。ゴールに背を向けてボールを受けた彼に、鰐原が素早く圧力をかけた。

「グフツ、流石のオマエでも後ろ向きじゃシュートは打てないんだな
〜」

「……」

「天才もゴール前にいなきや形無しだねえ！」

伊槌が反転を試みる。だが、鰐原もそれを読んでいるのか体を入れて振り向かせない。ここで前を向かれば1発で得点につながることを、誰もが直感していた。

2つの足音が近づく。もう2枚のCBである内海と谷岡が、確実に伊槌を潰しに来る足音だった。

「オマエはここで終わり！ カウンター返してゲームを決めてやるんだ〜」

「ハッ、ボールを寄越しなア！」

3本の足がボールに伸びる。

伊槌が、ちよん、とボールに触れた。それは、背後の橘花へのパスだった。

「終わるのはお前らだよ……」

背中越しに、ゴールを睨みつける。

橘花が、素早くパスモーションへと入っていた。

「——ストライカーは俺一人じゃないぜ」

「木崎先輩！」

3人が伊槌に引きつけられ、完全にフリーとなっていた木崎に、ピンポイントで浮き球が通る。キーパーとストライカーの、完全な1対1の局面が完成した。

「ハッ、アンタが相手かい！ あの程度のシュートでアタシが抜けるかよー！」

「へっ、やってみなけりや分からねえ！」

余裕を崩さない鬼裂に怯まず、木崎が強く地面を踏みしめる。

足元のボールにオーラが集まる。通常の青とは違う、焼けるような赤。気を込め、打つだけのシンプルなシュートを、渾身の力で打ち出した。

「俺が、憲戸のエースストライカーだア！ 食らいやがれ、グレネー

ドオオオ！ ショットオオオ！

「フン、捻り潰してやるよ……百烈パンチ！」

空気を激しく裂いて向かうシュートに、正面から殴打を叩き込む。久良島とは違う連撃。その両腕は透明なオーラが絡み付いていた。

D Fのアシストがあつたとはいえ、1度ぶつかりあつた技同士。鬼裂は再び勝てると踏んでいた。

——だが、その目論見は崩れる。力強すぎるシュートに、拳が追いつかなくなってくる。

「ぐっ……ぬ、抜かせるかあア！」

「行けええ！」

「決まれ！」

外間を捨てて、全力でパンチを叩きつける。それでもなお、威力は緩まない。むしろ、増しているときえ錯覚していた。

手に纏うオーラが消えていく。信じられず、目を剥いて拳を緩めない。めしやり、と音がした。

「ガッ——!?!」

腕が弾かれる。刹那、弾丸が腹に突き刺さる。肉体など盾にもならず、赤の一撃が、強かにゴールネットに食らいついた。

甲高い笛が、耳をつんざく。同点ゴールが、生まれた。

「よっしやああああ！ 見たか！ 俺がエースだ！」

「ナイス！ よくやった、橘花も！」

「は、はい！ ナイスシュートです！」

雄叫びをあげる木崎の背中に、伊槌が飛びつく。寄ってきた橘花の頭をぐしゃぐしゃにして、喜びを分かち合う。胸を焼く歓喜が、フィールドに渦巻いた。

それを遥か後ろから見ていたはずの太田にも、何故か熱い想いが胸の内に現れる。

「……！」

全身が抱擁されているような、暖かく、心地よく、激しい感情。今まで味わったことのないような感覚。いや、それは嘘だ。

これは、泰山を破った時のそれに似ている。感情の奔流が、太田の

脳幹に駆け巡った。

「……ふふ、太田くん」

「あ、咲夜さん……」

「楽しそうだね」

柔らかなく笑みを浮かべる様崎にそう言われて、太田が頬に手を当てた。たしかに、口角が上がっている。

「見つけた？ 『勝ちたい理由』 ってやつ」

「……」

口をつぐむ。暴れる情動に、頭が追いつかない。それでも、心地よかった。

そして、太田は何も答えずデイフェンスラインに戻る。無視された形の様崎は、だがその背中に満足そうに頷きを返した。

「ふふ……見れば分かるって顔。楽しみにしてるよ、太田くん」

そうして、彼女も自分のポジションに小走りしていく。もう、負ける気などしなかった。

GOAL!!?

49分 木崎爆音

アシスト：橘花桜華

憲戸 2―2 亜蘭

「……クソツ、クソ！ おい、とつとと始めてめえら！」

落合が苛立ちから声を荒らげる。尋常でないほど怒りで顔を歪ませた彼は、強く伊槌を睨みつけた。

伊槌も負けじと睨み返す。一触即発の空気を切り裂くように、再開の笛が鳴り響いた。

「よーし、次はどうやって――」

「おいクソガキ！ 俺に寄越せ！」

ドリブルで進もうとする叛月の肩を掴み、落合がボールを奪い取

る。味方同士にも関わらず行われた乱暴なプレーに、驚愕した伊槌の動きが一瞬止まった。

「なっ、何してんだあいつ……!」

「クソ、クソ……! こんなどころで……負けられるかアア!」

無防備な伊槌を弾き飛ばし、落合が暴走するようにドリブルで突き進む。その並々ならぬ様子に、伊槌は怒り以外の、何か強い感情が見えた気がした。

突き進む落合に靴木が立ち塞がる。その顔は困惑が染み出しているが、抜け目なく黄色いオーラを纏っていた。

「暴走か……? なんにせよ、ここで止まれ!」

地面を踏みしめ、背後から菓子の壁を呼び出す。天へ屹立するその壁にも、落合は怯まない。

「クツキーウォール——」

影のかかる靴木の土手っ腹にボールを蹴り込む。鈍い声をあげて靴木が怯んだ。呼応するように、壁がビシリとひび割れる。それを確認した落合は、凶悪に相貌を歪めて突進した。

「トベエ! アサルトボウ!」

「ガハッ……!」

腕を振るって、靴木の体を宙に叩き上げた。その瞬間、クツキーウォールは跡形もなく崩れ落ちる。舞い散る菓子の中、得意げに瞳を輝かせる落合が走り抜けようとしたその時、足元を風が駆け抜けた。

「視界不良ご注意、ってね!」

「……女アア!」

靴木の背後に潜んでいた様崎が、フィジカル勝負に持ち込ませずボールを搔つ攫う。そのままドリブルでカウンターしようとする落合の横をすり抜けた。

だが、その身体を赤い触手が縛り上げる。強い締め付けから来る痛みに、鈍い声を上げつつ背後へ向く。そこには、血の池のような禍々しいオーラを纏った落合が、一部を触手の様に伸ばし怒りの表情を浮かべていた。

「がっ、うっ……いったあ……!」

「邪魔すんじやねえよ……ボールを返しやがれ！」

ギリギリと締め上げられ身動きのできない彼女に、手加減知らずのタツクルが飛んでくる。空中に大の字で貼り付けられた様崎の、その無防備な腹に肘が突き刺さった。

「デストロイチャージイ！」

「うわあああ!？」

「キャプテン！」

様崎が中空に吹き飛ばされる。あまりにも暴力的なプレーに伊槌が思わず声を上げるが、ホイッスルは鳴らない。鍵屋が、審判の視界を遮っていた。

ボールを奪い返した落合が、受け身も取れず叩きつけられた様崎に目もくれないでゴールへ突き進む。その眼前に、目を伏せた太田が立ち塞がった。

「邪魔だ木偶の坊がア！俺はお前みたいな腰抜けとはちげえ、足引っ張んじやねえええ！」

シュートと見間違うような鋭くボールを、腹に蹴りつける。アサルトボウの構えだ。

衝撃が胃に突き刺さり、身体がくの字に折れ曲がる。

——太田は、倒れなかった。

「なっ……！」

「……気が、ついたんだ」

目を上げ、落合と視線を合わせる。

その目は、黒鉄と競り合った時、怯え切っていたそれとは全くの別物。伊槌鳴哉の様な、勝利に取り憑かれた人間と同種のものだった。「負けるかもしれない恐怖と向き合って、それでも勝利に進む意味を……！」

落合の顔が引き攣る。足元に戻ってきたボールを、半狂乱になつて再び蹴りつける。

太田は倒れない。

「うおおおお！どけえええ！」

「……この、感情だ……！胸を焼く様な、この熱さを手に入れるため

……みんなと共に、この熱さを手に入れるためだ……！」

彼の筋肉が隆起する。全身が黄色いオーラに包まれる。ラグビー選手のような、深い踏み込みが見えた。

「分かったから……僕はもう逃げない。まだ、少し怖いけど……仲間となら乗り越えられる。後悔は！ 負けてからすることにする！」

そして、その巨体が、落合とぶつかり合った。

「だから、受けてみる。僕の必殺技を！ パワーチャージ！」

「ぐあはあっ!？」

強烈な衝撃が全身を叩く。今までの太田とは比べ物にならないパワーが、落合の全身を駆け巡った。地面に無様に転がる。

太田が力任せにロングパスを送る。様崎のそれと比べればコントロールはないが、ゴール前まで一気に繋がった。収めたのは、無籐。

「頼んだよ、無籐くん！」

「ハッ、任せとけ……！」

「くっ、お前ら！ パスコース塞いどくんだよ！」

ゴール前に動き出そうとする伊槌に。自由にポジションする木崎に。厳しくマークが割かれる。

だが、肝心の無籐にマークが手薄いことに、彼が不敵な笑みを浮かべる。

「おいおい、舐められたもんだなア。そうだろ、伊槌？」

「ははっ……ああ、見せてやれ無籐！ ストライカーは、FWだけじゃないってことを！」

伊槌の言葉に笑みを深めた無籐が、足元のボールに螺旋回転をかけた。そのままボールを上空に蹴り上げる。その背後には、ドリルの様なオーラが巻き起こっていた。

「なっ……！ こいつもシュートを……！」

「いまさらだぜエー！」

無籐の身体が飛び上がる。上空からゴールを睥睨し、獰猛な笑みを浮かべる無籐が渾身のシュートを打ち出した。

「これが、河川敷で編み出した俺の新技ア！ スクレイパーブレイク！」

「ぐっ、反応できないんだな〜！」

ドリルが空気を破壊するけたたましい音を立てて、ゴールへと襲いかかる。突然のシュートに、鰐原は見送ることしかできない。

鬼裂も反応が遅れたが、意地で抑え込む。必殺技すら間に合わず、止められる確率は無きに等しいが、それでも彼女は立ち向かった。

「ぐっ……おおお……！　これ、以上は……！」

——だが、奇跡はそう起こらない。

螺旋回転が腕を弾き、押し込まれる足が無理を悟る。それでも、意地で食らいつく。が——

「ブチ抜けッ！」

「ぐ……！　ぐわあああ——！」

無籐の裂帛に押され、身体をのけぞらせて弾き飛ばされた。そして、難なくゴールネットが伸ばされる。焦げる様な匂いを残し、コロコロとボールがゴールからはみ出した。

間をおかず、審判が高々と笛を鳴らす。それと同時に、亜蘭の客席から怒号が飛びかい、得点板の文字が3に増えた。逆転だ。

「あ……アタシが、3回も破られた……？」

「ハッ、見やがったか、俺のシュート！」

「しゃああ！　流石無籐先輩だぜ！」

憲戸の面々の表情が、緊張から解き放たれる。だがその目に宿る闘志は燃え尽きない。まだやれると、本能が訴えていた。

太田が、腹をさする様崎の手を取って立ち上がる手助けをしている。軽く礼をした様崎が、合格、とでも言う様に親指を立てた。

「ナイスデイフェンス、太田くん！　やっとうる気になってくれた？」

「あはは……うん。咲夜さんが頑張る理由、少しは分かったかも」

様崎が満足そうに満面の笑みを浮かべる。そしてその視線を伊槌へと移し、無籐と盛り上がる彼らを見て、微笑ましそうに相好を崩した。

「くっ……ぐううう……！」

——その背後で、獣の様にうめく男は。

誰よりもこの状況を、認められなかった。

GOAL!!?

53分 無籐朱道

アシスト：太田優

憲戸 3 | 2 亜蘭

18話：鼓動の衝突

「あちやー、逆転されちゃったね☆」

「チツ、マジうぎ。さっさと追いつくし」

不穩に鳴り出した空の下で、2人の少女が言葉を交わす。片や愉快そうに、片や不機嫌そうに。

だが、その瞳には共通して底知れない戦意が秘められていた。不敵に笑う叛月が、センターサークルにボールを押し付ける。

「ククツ、最高の試合だア……このまま終わらせてたまるかよ！」

「グウウ……オラはどうでもいいぞ〜」

雨がまばらに地面を濡らし出した。冷える空気の中でも黒鉄は寧ろ猛な熱さを見せる。鰐原はどうでも良さそうだったが、投げ出すつもりもない様にポジションへついた。憲戸の選手たちも、すでに定位置へ散っている。

「……」

それぞれが終盤に向かって戦意を高めキックオフの準備に入るなか、落合だけが下を向く。怒りを抑える様に、震える右腕を握りしめる。

「クソ……クソツ……！」

暗く輝く眼光を、重く鳴り出す雲が雨を打って覆い隠す。身体が冷えてなお、落合の頭を焼ける様に熱くなっていく。

そして、ついに笛が鳴らされた。叛月が軽くボールを蹴り、黒鉄にパスを送ろうとした――

「アアッ、アッ！」

「ちよっ、星先輩!？」

「また暴走かよ……！」

――そのボールを、背後から上がってきた落合が奪い取る。黒鉄の身体を押し除け、彼女らの間を縫って敵陣に突っ込む。

当然、そのまま見逃すほど甘くはない。

「行かせつかよ！」

「どけええええ！」

まずは伊槌と木崎が急いでデイフェンスに入ろうとするが、落合の強引なドリブルに弾き飛ばされる。伊槌の目に、沈みそうなほど暗い眼光が焼きついた。

2人を抜いた落合だが、すぐさま靴木にマッチアップされる。体格が互角の彼を強引に突破はできず、落合の足が止まった。

「暴走列車め。通行止めだ」

「ぐっ、クソ……！ てめえらなんかにやられるかよ……！ 終わった天才なんかがいるチームによお！」

雨に打たれる落合が慟哭する。そして、技術も何もない、野生的なロングシュートを放った。

「なっ!？」

「いえ、この程度なら……！」

予想外のシュートに反応が遅れた靴木だが、久良島が声をあげてデイフェンスラインを上げさせる。そして、難なく真正面のシュートをキヤッチした。

「いつ！……っう……！」

右腕の軋む様な痛みに顔を歪めるが、大きく息を吐いて痛覚を誤魔化する。そして、パントキックで前線に上がらせた様崎にロングパスをつける。

危なげなくトラップした彼女のその横に、三刀屋がすつと上がってくる。軽く目を合わせて、少し微笑みあった。

「もっかい行くよみとちゃん！」

「オーケーサクヤ！ 追加点だネ！」

ドリブルで駆け上がる彼女の周りを、衛星のように三刀屋が追従する。黒鉄たちがプレスをかけるが、思考を共有したような抜群のパスワークでデイフェンスを歯牙にも掛けない。

混乱する亜蘭の守備を見逃さず、ハーフラインまで持ち上がった三刀屋が縦に強くパスを出す。

「オウカ！ ゴー！」

「ふっ……はいっ！」

中盤を切り裂くボールを橘花が鮮やかに受け止める。

汗を垂らして疲労が色濃く見えるが、運動量を抑えていたためまだ動ける。汗を拭ってゴールに視線を向けた。

「待てし。寄越せし」

「くっ……」

だがすぐさま鍵屋が飛んでくる。柳眉をしかめて苦い表情を見せる橘花がパスコースを探すが、前線のマークが激しい。伊槌も木崎も自由を奪われている。

ならば、とボールに足を乗せ、眼前に立つ彼女を睨んだ。

「恐れんな、仕掛ける橘花ア！」

「僕が行きます……！」

「ハッ、舐めんな」

滑らかなコントロールで右にフェイントを掛け、左に突破を図る。だが飛ぶような鍵屋のステップに追いつかれ、ボールに足が伸びた。それも読んでいたように、橘花がちよんとボールを浮かせてかわす。

舌打ちした鍵屋に身体を入れ半身突破するが、ざくりと音を立てて踏み込んだ彼女が強く身体を当てて、ドリブルの勢いを殺す。よろめきながらも、橘花はボールを離さない。

「ウザいな、早く取られるし！」

「それはっ、出来ません！」

再び正面から向き合った鍵屋に、橘花がドリブルを仕掛ける。

——その瞬間、鍵屋の眼前に桜が舞い散る。雨中に似合わない薫風が頬を撫でた。

「っ!? 何これ……！」

困惑に応える声はなく、周囲を舞う花卉にも気づかない集中力で、橘花が鍵屋を置き去りにする。吹雪のように桜が吹き荒び、鍵屋の追撃を封じた。

「この土壇場で覚醒したか……！」

「ナイス橘花！ 来い！」

鮮やかな突破に呼応して、伊槌がディフェンスの裏に動き出す。しかし、マンマークにつく鰐原も反応して、身体に見合わず軽やかにバックステップを踏んで伊槌を離さない。

「追加点はやれないんだな〜！」

「いいや、もううね！」

鰐原が食いついたのを見て、一気に身体を転換させてゴールから遠ざかった。突然の方向転換に、目を剥いた鰐原が置いていかれる。

「……………」 伊槌、先輩！

「グウウ、面倒なことするんじゃないぞ〜！」

その隙を見逃さず、橘花からの優しいパスが送られた。遅れて鰐原が突っ込んでくる。

その動きを視界の端で捉えた伊槌は、愉快そうに目を細めた。

「ふっ！」

「ムッ!？」

転がるボールを、つま先で背後に上げる。それは驚愕の声を出す鰐原の頭上を通り抜け、再び鋭く反転した伊槌の足元に収まった。一瞬で鰐原と入れ替わった伊槌に、鬼裂が怒号をあげる。

「チッ、ディフェンス！ 打たせるんじゃないよ！」

叩きつけるような鬼裂の声に押され、木崎についていた谷岡が全速力で戻り、内海が圧力を持って当たってくる。だが、問題ない。暗い雨の中、伊槌の銀の瞳が爛々と輝く。

ボールを軽く上げる。このスピードでは、内海は届かない。それを理解した彼は、決死の表情でスライディングを放つが、読んでいた伊槌は悠々と回避する。

「くっ、そー！」

泥濘を飛ばして滑る内海を尻目に、伊槌の足元に雷撃が迸る。彼とゴールを結ぶ線の間には、障害物は何も無い。

「行くぞ……………電——」

刀のようなその足がボールに叩きつけられる瞬間、猛烈な水音と共に、伊槌の背後からそれは現れた。

「うらあああー！」

「——！ ちっ！」

落合だった。その金髪が泥に塗れることも厭わず、力任せに伊槌を薙ぎ倒さんと突っ込む。

直前で気づいていた伊槌は、腕を使って衝撃を和らげ、倒れるのは免れた。そのままよろめきながらも体勢を立て直そうとする。が、その隙を待っていたように、落合が追撃を狙った。

「俺たちはてめえに踏み潰される脇役じゃねえ！ 吹き飛ばえ、伊槌鳴哉アア！」

憎悪とすら形容できるその表情。感情のままに肘を立てて、ミサイルのように一直線。

彼の身体がぶつかるとその瞬間、伊槌の眼光に稲妻が走った。

姿勢を低くして、落合の肘をかわす。間を置かず懐に身体を入れ込ませ、その肉体を背中に乗せた。落合の視界が、回転する。

「なあっ………！」

ぐしやり。鈍い音と共に、泥の海に叩き落とされた。篠突く雨が顔を濡らし、雷撃を纏ったボールの影となって表情を覆い隠される伊槌の姿が視界に映る。不愉快な泥の感触で、自分が手玉に取られたことを遅れて認識した。

「がっ……あつ………」

何事も無かったかのように右足を振るう伊槌に、無意識で手を伸ばす。目の前の景色が崩れたかのように、落合の顔は絶望に染まっていた。

「やめ——」

「電閃ッ！」

空気を切り裂く轟音を伴って、シユートがゴールに襲いかかる。谷岡が身体ごとぶつかってブロックを試みるが、その実力差は明白で風前の紙のように容易く弾き飛ばされた。

「おおおおお！ 鬼の鉄槌イ！」

怒りを滲ませながら、鬼裂が電撃の塊に腕を叩きつける。未だ痺れの引き切らない右腕を恨めしそうに睨みながらも、絹を裂くような猛烈な雄叫びをあげてぶつかり合う。

だが、拮抗も長くは続かない。雷撃が全身に伝播し、彼女の身体を押し込んでいく。

「ぐっ、これ以上……やらせるわけには……！」

その意思に反して、ボールはどんどんと腕を押し返してくる。這いずりながら、落合は祈った。

「ぐううう……ぐあつ——!」

だが、非情にも。祈るだけの者に微笑む女神など、いない。鬼裂の身体が弾き飛ばされた。

光の球がゴールネットを揺らす。試合を決定づける得点が突き刺さった。

GOAL!!?

59分 伊槌鳴哉

憲戸 4—2 亜蘭

「よし……!」

確かな手応えを感じ、着地した伊槌は濡れた口元を拭う。これで試合の趨勢はほとんど決まったと言って過言ではない。

少しは肩の荷が降りたと息を吐き、深く呼吸をしながら立ち上がる。その時、背後から泥濘んだ地面を叩く音がした。

未だ、仰向けに倒れた落合の姿があった。

「……おい、大丈夫か?」

今までのプレーに少し思うところはあがあるが、流石に無視するわけにもいかず伊槌が歩み寄る。

一步落合に踏み出したその瞬間、彼の顔がバツとこちらを睨んだ。

「ぐっ……クソツ……俺をそんな哀れんだ目で見んじゃねえ……!」

「……!?」

酷く悔しそうに歯を食いしばる彼が、絞り出すように声を出す。憤懣やるかたない様子で、ぐちゃぐちゃと地面を殴りつけた。

尋常でない様子に、伊槌も流石に息を呑む。

「どうしていつも追いつけない……! なんでもいつも、お前らは俺の前にいる……!」

「なんだ……？ 何のことだ……？」

「お前みてえな『天才』はア、いるだけで俺みたいな凡人を殺すつてことだよ！」

目玉が溢れ出るほどに見開いて、喉が切れんばかりの慟哭が胸を貫いた。無意識のうちに、一步後ずさる。

「俺たちはいつもお前らのエサだ……血の滲むほど練習しても追いつけない。たやすく踏み潰される……」

落合の首がゆっくり下がる。言葉は止まなかった。

「青森附属の奴らもそうだった……あの、バケモノどもの眼中に、俺たちなんていなかった……同じフィールドで戦っていたはずなのに、いる価値すらない存在だった……！」

「……去年の」

彼のこぼした言葉で、伊槌の脳裏にあるデータが浮かび上がる。

それは、失意の中にいた伊槌が青森に帰る際調べていた、去年のF青森予選の結果。

青森の雄、青森附属中学は、一昨年の成績が比喩物にならないほどの躍進を遂げた亜蘭中学を、20-0で一蹴した。彼の言葉は、きつとこの試合だろうと伊槌は思考する。

「まともに戦ったって勝てやしない……だからグレーゾーンを攻めた、非道に活路を見出した……！ それでも、お前は……！」

雨は容赦なく彼の身体を濡らす。そのぐしゃぐしゃのユニフォームは、そのまま彼の感情を表しているかのようだった。

「超えていく……何をしても、お前には届かない……俺たち羽虫は、天才様に食い殺されるのを待つしかできないんだよ……！」

「……」

何度も何度も地面を叩いていた拳が、どんどんと力を失っていく。うずくまり泥に塗れる落合。その姿は、確かに勝者のものである。勝負というプロセスにおいて必ず発生する敗者そのもの。彼のいう、踏み潰された羽虫だった。

だが――

「……それでいいのかよ」

小さく響くその声に、落合が顔を上げた。

彼のいう天才——伊槌鳴哉。

そのユニフォームは、駆けずり回ったために泥で汚れ、雨でぐしゃぐしゃに濡れている。落合のそれと、ほとんど変わりない。

「何をしても届かない？ 馬鹿言うなよ、前半は、確かに超えられた。それでもお前は、ここで諦めて自分が羽虫だって言うのか？ そのままで満足なのか？」

「……ッ!？」

勝負とは、紙一重の連鎖だ。

チャンスを生み出す過程を整理し、どれだけその機会をものにできるかで結果が出る。

一歩間違えば、2人の位置は逆だった。

「確かにお前たちのプレーは、俺にとって許せるものじゃないさ」

伊槌の手が、スツと伸びる。

「それでも、俺は勝負を投げ出される方が許せない」

サイドラインに、審判が現れる。黒いボードを手に持ち、周囲によく見えるように、頭上に掲げた。

その板には、5の文字が描かれている。

「アディショナルタイム5分。胸につかえるものがあるなら、立てよ」
重々しい雲が、少し雨足を弱める。わずかにできた雲の切れ目から、光が漏れ出した。

「サッカーの借りは、サッカーで返せ」

「……ッ!」

落合の身体が、グツと起き上がる。

差し出された伊槌の手を払い除け、自分の足だけで立ち上がった。

先ほどまで絶望に染まっていた落合の瞳が伊槌に向けられる。だが今は、強い戦意が迸っていた。

「……勘違いすんな。お前の言葉で気づかされたわけじゃねえ……ッ!」

「ああ」

「俺はお前をぶっ潰す……試合前に誓ったことを思い出したただけだ

！」

力強い声が、伊槌の心臓を揺らす。上がる口角を認めながら、落合に真正面から向かった。

「覚悟しろ、伊槌鳴哉ア！」

「受けて立つぞ、落合星！」

小さかった雲の裂け目が、大きく開いて、青い空が顔をのぞかせていた。

「……伊槌の言葉で、息を吹き返したか」

「ハッ、おもしろえ。そんなくらいじゃねえと張り合いねえだろ！」

「ああ……勝つのは俺たちだ！」

亜蘭のキックオフで、三度試合が再開される。ボールに足を乗せた叛月が、背後の落合をチラリと見た。

「今度は暴走しないでね？ 星先輩☆」

「つたりめえだろ……もうあんなへまはしねえ。ラフプレーもなしだ」

力強く、目を見開いて喉を震わせる。

「いいなてめえら、あいつらに一泡吹かせてやるぞ！」

その返答に蠱惑的な笑みを浮かべた叛月が、高々と鳴る笛の音と共にボールを蹴り出した。

ラスト5分。まずボールを握ったのはパスを受けた黒鉄。代名詞とも言える獰猛な笑みを浮かべ、先陣を切ってドリブルで攻め上がる。

「クハハハハッ！ 痺れる試合をもっとやらせろお！」

「もう定時だぜ、終わらせてやるよ！」

その眼前に立ちはだかるのは無籐。素早いプレスでボールを奪いにかかると、黒鉄も身体を上手く使ってキープする。

亜蘭の選手は彼女のポストプレーを活かすように前線に走り込む。先ほどもまでの混沌とは違う連動に、無籐が忌々しげに、されど面白そうに笑みを見せた。

「マジで別物みたいだなチームだなア……！」

「おら、行けー！」

一瞬の隙をついてマークを外した黒鉄が、大きくボールを蹴り出す。ロングパスは鍵屋の足元。

息を切らしながらも、素早く橘花が立ち塞がる。だが、彼女の隙のないボールタッチに飛び込めない。

「くっ……ここで奪いますー！」

焦れた橘花がスツとボールに足を出す。

その瞬間、鍵屋が彼の動いた身体の逆を突くように、右側に強いスピンがかかったパスを打ち出し、左側から抜ける。

「ひとりワンツー」

「えっ……!?!」

ギョルギョルと泥を跳ねさせたボールが、背後に抜け出した鍵屋の元に戻り、橘花を置き去りにした。寄せてくる宵闇と目を見開く橘花を尻目に、鍵屋が大きく踏み込んで強くパスを放つ。

「あたしの仕事終わり。あとはよろ」

「おっけー♪」

右サイドに貼っていた叛月の足へ、スパンと音を立ててトラップされる。一瞬遅れて三刀屋がタックルを食らわせるが、彼女は身軽に受け流し微笑む。

「くうっ、やるネー！」

「ミラちゃんは最後まで輝くのを諦めない☆ だから応援よろしくっ♪」

その言葉に、静まり返っていた法被の集団がボルテージをあげる。突如として曇天を割った声援に応えるように、叛月は加速して三刀屋を抜き去った。

「サイコーの声援ありがとう♪ 皆大好きだよ☆」

「わっ、ゴメン！ デイフェンス警戒！」

三刀屋の謝罪と警告の声で、久良島たちに緊張が走る。太田は叛月のシュートコースを切りながらプレスをかけるが、彼女の目線はすでにペナルティエリア内に向けられていた。

「仕上げは任せた、城先輩☆」

「クハア！ 待ってたぜエー！」

「やらせないよっ！」

叛月の右足から放たれた鋭いクロスボールに、黒鉄と様崎が死力を持って競り合う。

だがまともにつつかれば、純然たるフィジカルの差で様崎は後手を踏む。黒鉄が獰猛に笑った。

「弱エぞ、もらったー！」

「それは、どうかなっ！」

声を張り上げた黒鉄がボールに触れる瞬間、様崎が一步早く足を伸ばす。間一髪でクリアに成功したが、空中でバランスを失い、着地した黒鉄とは対照的に、地面に倒れ込んでしまった。

「咲夜さんー！」

「大丈夫！ クリア拾って！」

泥がつきながらもボールから視線を外さなかった様崎の瞳の先で、明風がボールを収める。

「よし……！」

会心のトラップに、彼女の口角が少し上がった。残りは2分ほど、このままボールをキープすれば——その考えが甘いことを、泥濘みをブルドーザーのように跳ね飛ばすその男に思い知らされる。

「グモオオオ！ しこふみ！」

「えっ、DF……！ きゃっ!？」

それはDFのはずの鰐原。この土壇場でオーバーラップを仕掛け、油断の出た明風からボールを奪い去った。

「終わったらラーメン！ 勝ったらステーキだ！ いっけー！」

締まらないことを宣いつつも、その恵体から強烈なパスがピッチを切り裂く。

そのパスは、亜蘭3人目のFW中田の足元にシュートと見紛うス

ピードで飛んでいく。

「うおおっ!? なんつう威力だ、手加減しろ!」

大きくトラップミスしながらも、何とかコントロールに成功した中田。だがそのタイムロスが命取りとなり、宵闇にカバーの時間を与えてしまった。

「チツ、チビがしゃしゃんな……!」

「うるさいですよ……私まだ大した活躍してないんですから、せめてそのボールください……」

「やるかボケ!」

足跡が突くほど大きく踏み込み、荒く強引なフェイントをかけ、一気にドリブル突破を図る。だが宵闇はそのパワードリブルにもピラニアのように食らい付き、マークを外さない。

彼女の武器である執念深いディフェンスに、中田が流石に怯んで足を止めた。

「今……!」

その瞬間、宵闇がアタックを仕掛ける。先ほどまでの抜かせない守備とは違う、攻撃的なディフェンスだった。

「なっ、チツ!」

足裏を使って、腕を使って。ここで失えない中田も、汗を垂らして死ぬ気でボールキープをする。視線が周囲にぎよろぎよろ向いていることを、宵闇は見逃さない。

このままではパスされる、確実な奪わなければ——執念が、彼女のパフォーマンスを引き上げる。

「絶対、奪う……」

右から足を出す。と見せかけて左から、はたまた後ろから。緩慢な動作の宵闇が、蜃気楼のように中田の目の前に何人も現れる。

「……!? なんだ、これは……!」

戸惑って一步後退した中田の足元から、少しだけボールが離れた。その瞬間、幾多の宵闇の幻影が襲いかかる。

「……っ! はあっ!」

「しまっ……!」

前方からのスライディングが、中田のボールを弾き飛ばす。執念の
デイフェンスに、ベンチのホープが拍手を送った。

「ナイディーー！ 橘花も宵闇もいつの間にも必殺技なんて身につけてた
のよー！」

「元々素質はあつたんだらう。それが試合の中で覚醒した……それだ
けのことだよ、子猫ちゃん」

「その呼び方やめなさいー！」

ベンチは姦しかつたが、フィールドはそれどころではない。弾き飛
ばされたボールを、泥まみれの落合が必死に追いかける。

「くっ、おらあー！」

強引に空中で胸トラップ。そして前を向く――

「行かせるかよ」

「ッ！」

――立ち塞がるのは、伊槌。

ギリツと奥歯を噛み締めながら、胸の奥の恐怖心を押し潰す。ボ
ールを踏み潰さんほどに力強く足を乗せ、伊槌を睨みつけた。

「ハッ、上等だ……てめえを抜かなきゃ、勝ったなんて言えるか！」

踏み込み。そして、加速。

身体を倒して一気に駆ける落合に、伊槌は当然のようについてく
る。スピードだけでは無理と断じた落合が、テクニックで突破を図る
が、大した技術のない彼では、伊槌を剥がすのにも一苦労だった。

「チッ、うらあああー！」

それでも、一縷の望みにかけて、足を止めない。

残り1分。それだけで、まだ戦う意味はあつた。

だが、気持ちだけで乗り越えられない壁もある。

「そこだっ！」

「ッ!?!」

抜き去りかけたその瞬間、伊槌の足が狙い済ましてボールを弾い
た。誰もいない背後へ、ボールが転がっていく。

頭が怒りで沸騰していく。同時に、恐怖で冷えていく。

他の誰でもない、俺のミスで、終わる――脳裏に、その現実が浮か

んだ。

「洒落臭いね!」

——その仮定は、上がってきた鬼裂に全て壊された。

「なっ、GK!?!」

「今更何点取られても同じだよ! どうせなら、あたしが直々にゴールを奪ってやる!」

ハーフラインまで駆け上がる狂気としか思えない飛び出しを見せ、地面と平行にした足に、ボールを乗せる。一度見たシュート体勢だと、伊槌は理解した。

「吹き飛びな! デスソード!」

「っ!」

伊槌の顔面の横を、黒い剣が薙ぎ払う。

風に押されて首を背後に向けると、シュートの軌道上には無籐と靴木が待ち構えるように腕を組んでいた。

「何としてでも防ぐぞ!」

「分かっただらあ!」

軽くアイコンタクトを取った後、2人が両手のひらを力強く地面に突き刺す。

轟音と共に、地割れのように大きなヒビが地面に描かれる。道筋の如くシュートの軌道上にヒビが入ったことを確認すると、勢いよく突き刺した腕を引き抜いた。

「行くぞ! パイプソーダラプチャー!」

プシュ、という音を伴い、ひび割れた地面から間欠線のように炭酸水が噴き出る。それは激しい水流を持って壁のように屹立し、デスソードをブロックする。

「合体技!?!」

「ハッ、こつちも伊達や酔狂で3年やってきたわけじゃねえ!」

鬼裂が驚嘆をあげた。伊槌の心境も同じだ。

当然1人で完結する単体技とは違い、合体技は難易度が高い。パートナーのことを知り尽くし、イメージを固め、理想のプレーを擦り合わせ、幾重にも練習を重ねてやっと完成するのが普通のものだ。その

場のインスピレーションで覚醒させるのは難しい。

それを操れる2人は、無籐の言うように本気でサッカーと向き合ってきたからなのだろう。伊槌の口角が上がる。

「おらアー！」

低い雄叫びに弾かれるように、シュートが吹き飛ばされた。苦々しい表情で、カウンターを警戒し鬼裂が急いで戻る。

ルーズボールに走り込んでいるのは亜蘭の青野。いち早く反応した彼が滑り込むようにボールを収めようする。が――

「攻撃は続けさせないヨー！」

「ぐっ、こいつ……！」

同じく反応していた三刀屋が間一髪で弾く。

クリアは不完全。亜蘭の陣地に押し出され未だ転がるボールを見た審判は、時計に目をやる。目安の5分を、指し示していた。

「ッ！ おおおおお！」

――終わってなるものかと、落合が急いでボールに足を伸ばす。何とか収めた彼だが、憲戸の守備が硬い。

このままパスを放り込んでも、どうにもならない。一瞬の迷いが、彼の到着を間に合わせた。

「また会ったな！」

「ぐっ……伊槌イ！」

音もなく前方を塞いだのは伊槌鳴哉。完全にパスコースが無くなった落合が、奥歯を噛みしめる。

――どうする。パスはできない、シュートも、届かないだろう。今の俺じゃあ――

――脳裏に浮かんだ思考に、落合が苛立ちを覚えた。

「……ああクソ。今の俺じゃ、お前には勝てねえのか……！」

ぐしやり。泥を踏みしめる。目を伏せて、溢れそうな感情を抑える。

好機と見た伊槌が、目を光らせてボールに足を伸ばしてくる。弾かれればタイムアップ。抗う時間すら不意にしてこのゲームは終わる。

「ッ！ アア！」

「ちっ——」

それでも、何とか身体を入れてボールを守る。再び相対し、彼の白銀の眼光を睨んだ。

「来いよ……。お前一人に抜かれるほど、錆びたつもりはない」

「ッ！」

地面を踏みしめて、伊槌に突っ込む。予想通りと言うかのように、ボールが蹴り出されるであろう地点に足を繰り出した。

——だが、その足は空を切る。落合が、伊槌の背後にパスを出したからだ。

「!?」

「……確かに、お前には俺じゃ勝てねえ」

叛月がパスを受ける。伊槌の背後に勢いそのまま抜け出す落合と、視線をぶつけ合った。伊槌がギリギリでついてくることに、苦虫を噛み潰したような表情を見せる。

「やっっちゃえ、星先輩！」

スペースに、優しいベルベットパスが放たれた。伊槌と落合がもつれあいながらそのパスに群がる。

「だったら、今はチームでお前を超える！」

「……はっ、面白い！ 負けるかよ！」

両者滑り込むようにボールに足を伸ばす。身長差も、足の長さも、ほとんど同じ。

——先に触ったのは、落合。

「くっ……！」

「それで、俺が考えてる今の俺ってくだらねー概念も——」

一瞬、伊槌のマークが外れた。

間髪入れず、そのボールを踏み抜く。砕けるように、それは6つの星屑になった。

「——他でもない俺が超えて、進化する！ 一人でも、てめえを潰せるように！」

落合が指揮を取るように腕を動かすと、前方の空間に、星屑が束ねられる。1つに戻っていく星屑は、やがて大きな流星へと進化する。

「食らいやがれ！　これが俺が送る、新しい俺へのファンファーレだア！」

飛びつくようにソバットキック。真っ白なエネルギーが、全身に行き渡った。

「ブレイキングスタアアアア！！」

「ぐうっ!？」

マークを捨ててブロックに入った伊槌の足を、紙屑のように打ち破り、白銀の尾を引いて流星がピッチを切り裂く。ハーラインから放たれた突然の一撃に、デスソードを防いで少し緩んでいた中盤は反応できない。

だが、デیفエンスラインに張り付いていた2人のCB、太田と様崎が両サイドからキックブロックを試みる。

「くっ……!?!　すごいパワーだ……!？」

「やばいかもね……!？」

それでも、ボールの勢いは止まらない。パワーに優れる太田さえ、冷や汗を垂らして歯を食いしばった。

徐々にボールの力強さが上がってくる。2人の足が、限界に近づいていた。

「ぐっ……うわあ!？」

「きやつ、ごめん杏奈ちゃん!？」

「……止めます!？」

そして、遂にブレイキングスターがブロックを打ち破った。最後の砦の久良島が、低く構えて、左腕にシユートと対照的な黒いエネルギーを纏わせる。

大きく息をついて、強く吸う。全身の筋肉に力を入れて、真っ向からぶつかり合った。

「真っ黒。パンチ……!？」

ぶつかり合った強烈なエネルギーが、爆弾のように炸裂する。その余波で久良島の足がもつれそうになるが、意地で足を折らない。

ブロックを受けてなお、シユートは絶大な力を持っていた。久良島の腕から、黒いオーラが霧散していく。

「くっ……うおお……！」

押さええていてなお、身体を前のめりにしてより力をかける。その思いが直接力に変わったのか、腕を纏うエネルギーがより深い黒に染まる。ボールを纏う白が、濁っていく。

「止まるか……!?!」

ベンチから固唾を飲んで見守る梵場が思わず口を溢した。趨勢は変化し、段々と久良島がシユートを押している。

止められる、確信にも似た感覚が久良島に満ちた瞬間――

「舐めんなア！ ブチ抜けエエエ！」

「ッ!? あっ――」

――雄叫びに押されたように、ブレイキングスターが腕を弾いた。力を使い果たして、コロコロと。

だが、確実に、ゴールラインを割った。

GOAL!!?

60+6分 落合屋

アシスト：叛月実蘭

憲戸 4―3 亜蘭

亜蘭の観客席が、割れんばかりの歓声を放つ。その声にも負けない笛の音が、世界に響いた。試合終了の合図だった。

「……あつぶねエ。逃げ切ったか……」

落合がぼつりとそう溢す。それは確かに的を射ていた。

このまま続いていけば、勢いに乗った亜蘭を止められたか分からない。口元を拭い去りながら、伊槌はふうと息をついた。

その横で、落合がどしやりと泥の上に座り込む。汗を垂らし、泥に塗れるその姿は、伊槌の目に輝いて映る。

「……試合は俺たちの勝ちだ。だけど――」

「くだらねえ慰めはよせ」

俺たちの勝負には負けた。その言葉を落合が遮る。

「俺は負けた。それが結果だ、受け入れるさ」

「……そうか、強いな」

ユニフォームに着いた泥の一部をはたき落としながら、落合は空を仰いだ。いつの間にか雲は除かれ、青空が顔を出している。

その時、背後から物音が響いた。驚いて振り返ると、亜蘭の観客席から、不良生徒たちが猛然とフィールドに向かってきている。その目は尋常ではない。

「なっ、なんだ?！」

伊槌が驚きながらも臨戦体勢に入った。暴徒のようなその形相に、流石に恐怖が湧いてくる。他の面々も、同じような様子だ。

「はいダメ♪ 全員ストップだよ☆」

可憐な鶴の一声が、小さく放たれた。

伊槌の背後から、叛月が悠々と暴徒集団に歩みを進める。思わず手を伸ばして静止しようとするが、下らなそうに首を振る落合に止められた。

「でしやばんな。ここはあいつの出番だ」

「は……?」

困惑をよそに、彼女が再び口を開く。

「この人たちは実力で勝ったんだよ、怒るのは違うよね?」

それじゃあ、と続け。

「ミラちゃんたちが相手してあげるよ☆」

「…ツ!？」

その言葉に慄いたように、彼らがゆっくりと後ずさる。

叛月の背後に、黒鉄が、鍵屋が顔を出す。仕方なさそうに、落合も鰐原を引きずって向かった。

「ヒヤハハア! ちょうど身体が温まったとこだア、そんな元気あんなら私と闘りあおうぜえ?」

「下んな。でもやんなら容赦しないけど」

「グフフ、食いもん持ってるやつはいるか?」

その言葉と共に、黒鉄が飛びかかる。そして、不良生徒の集団と殴り合いの火蓋が切って落とされた。

あまりの展開についていけず、放心していた伊槌の服の裾を、叛月

がちよんちよんと引つ張った。

「というわけでおにーさん、今からここは戦場になるから、ご退散は早めにね♪」

「……あ、ああ」

何とか気を取り直した伊槌が相槌を打つ。それと共に、背後から様崎がこちらを呼ぶ声が聞こえた。すでに全員一塊になり、伊槌の荷物を含めて撤収の準備が完了していた。

「鳴哉くーん、行くよー!」

「わ、分かった!」

伊槌が踵を返す。

その背中に、落合が言葉をぶつけた。

「覚えとけ伊槌鳴哉! お前はいずれ俺が潰す!」

「……フツ、私も諦めてないよ☆ また会おうね、おにーさん♪」

一瞬、伊槌が足を止める。すでに背後からは戦闘の雑音しか聞こえない。

それでも、振り返らず言葉を紡いだ。

「ああ、いつでも受けて立つぞ!」

彼らの行く末を照らすように、空には虹がかかっていた。

FULL TIME!!?

憲戸 4—3 亜蘭

1 1st 2

3 2nd 1

得点者

1 2, 叛月 実蘭 0—1

2 6, 黒鉄 城 0—2

3 0+2, 伊槌 鳴哉 1—2

4 9, 木崎 爆音 2—2

5 3, 無籐 朱道 3—2

5 9, 伊槌 鳴哉 4—2

雨上がりのアスファルトの上を、2人の男が歩いていた。

「憲戸が結構やるチームって分かっただけでも、見る価値のある試合だったんじゃないですか？」

「ああ……侮れないな」

男の片割れ——鎌野の言葉に、もう1人の巨漢、長宗我部が首肯を返す。

その脳裏には、先ほどの試合——だが、鎌野の言う憲戸のメンバーではなく、亜蘭のキャプテン、落合の顔が浮かんでいた。

憑き物の落ちたように、全力でサッカーに打ち込む姿。それを見て、長宗我部の肩の荷は、少し降りた。

「……あんま憲戸のこと考えてないっしょ？」

「っ、……なぜ分かった」

「キャプテン、割と顔に出るっすよ」

そう言われて、スマホのカメラを起動して内カメラで顔を見る。その姿を見た鎌野が、身体中の空気を全て吐くほどの大笑いをあげた。

「はははははっ！ 『顔に書いてる』って言われてバカ真面目に顔見るやついんの!? あっはははは！」

少し顔を歪めた長宗我部が、軽めに鎌野を小突く。それでも彼はひーひーと息を吐いていたが、数分経ってようやく落ち着いていた。

少し疲れたように息をついた鎌野が、先ほどまでの喜色満面の様子から打って変わって、真剣な目でこちらを見る。

「まあ、しっかりして下さいよ。今回は俺らの最後のFFなんすから」
「ああ、承知している」

勝ち進んだ憲戸は、恐らく次の準決勝で青森の双壁が片割れ——
『四壁恒星学院』と戦うことになるだろう。

それでも彼らなら超えてくるかもしれないと、長宗我部の胸に予感があつた。

風が彼らの間を吹き抜ける。

「それでも勝者は——」

「——俺たちちつす」

19話：進化への道

——白いユニフォームを纏った、愛らしい金髪を風に靡かせる少女が、黄色いユニフォームのディフェンスを掻い潜る。前方に現れたスペースの中から、パスコースを探すように眼球が動く。

背番号は8番。レギュラーに与えられるその番号を背負っていると言うことが、少女の実力を雄弁に語っていた。

「さーて、誰にしよっかな〜……」

「……！ ニーナ、こっち空いてる！」

アクションを起こしたのは白髪のFW。背番号は19番で、同点の最終盤で交代出場した少年だった。

ディフェンスは彼の動きに遅れる。少年からはそう見えていたが、ボールを持つ少女——ニーナは、違う風に捉えた。

「——いひひっ、ナリヤってば舐められてて可愛いっ」

「……っ、クソ」

彼のことなど、ディフェンスからすれば眼中にすらない。

事実、彼がマークを外したDFは、隣で待つ長身の背番号7番に注視し、ナリヤなどどうぞご自由に、とその表情が言外に伝えてくる。

「さあニーナ、ボクにパスを！」

「……んー」

2人がかりのマークにあいながら、長身の彼は微動だにしない。ユニフォームの下からでも存在を主張する筋肉を遺憾なく発揮して押し返し、むしろ余裕の態度を見せパスを要求する。

道理で考えれば、彼にパスを出すべきだと、ニーナも承知していた。

——だが、それじゃつまらない。にんまりと、人を食ったような笑みを浮かべる少女が、足を振り抜いた。

「優しいわたしがチャンスあげるっ、頑張れナリヤ♡」

「おっと、ボクには？」

「っ！ 来た……！」

ニーナの小柄な体軀からは想像できないハイスピードなパスが、ディフェンスの間を縫ってナリヤの胸にトラップされる。

時間にすれば一瞬。だと言うのに、そのわずかな時間でマークを緩めていたDFが即座に奪いにやってくる。流れるようなタックルが身体を揺らした。

「くっ……！ 前を向ければっ！」

無理やり反転を試みる。だが――

「遅い！」

「あっ、ぶねっ！」

DFの足が前方を薙ぎ払った。ギリギリで回避したが、次はないだろう。

そして最悪なことに、戻ってきたDFも結託して取り囲みにくる。このままでは為す術なく奪われてしまう――確信にも近い予感が警鐘を鳴らす。

「カウンター行くぞ！」

「ぐっ、パトリシアア！」

ダブルプレスを受けたナリヤが、決死の思いでサイドにパスを送る。ぼてぼてでスピードの無い苦し紛れのパスに、名前を呼ばれたSBの少女が舌打ちした。

「チツ、ゴミパスですわね」

ナリヤにパスを出した少女とは対照的に、長身で女性的な身体をした、くすんだ銀髪の少女が走る。

DFを置き去りにして、サイドラインを割りそうだったそのボールを危なげなく回収し、ナリヤを睨んだ。

「わたくしでなければ追いつけませんことよ？」

「ぐっ、悪い……」

弱々しい声をあげるナリヤに対し、興味なさげに鼻を鳴らしたパトリシアが周囲と視線を交わした。

――その瞬間、白いユニフォームのイレブンが繋がったような感覚がフィールドに駆け巡る。描いたゴールへの道筋を、全員が共有したかのように、迷いなく動きが激しくなる。DFたち顔が強張った。

だが、正確にはイレブン全てが繋がったわけではない。

「クソ……！ やっぱ俺だけ、置いてかれてる……！」

ナリヤだけがその絵を描けない。彼らと共に過ごした時間が短いから、クラブの哲学に染まりきっていないから、要因は様々だろう。だが、もつと根本的な部分。ナリヤと彼らを分かť分水嶺は、もつと単純だった。

「はあ……何故スエルテではなくこんな実力不足のクソ野郎が起用されたのでしょうか。全く、面倒ですわ……」

「——ッ!!」

パトリシアのぼやきが胸に突き刺さる。一番突かれたくないところを、無遠慮に剣で串刺しにされた気分だった。

ナリヤも痛感している。普段途中投入されるFWのスエルテと自分では大きな差があった。

自分は失望されていることなど、手にとるようには分かつた

それでも、降つて沸いたチャンス諦めたくない。ナリヤの心臓が早鐘を打つ。

「嫌だ……!」

このまま動かなくても、仲間たちが勝手にゴールを奪い、当然のように勝利するだろう。このチームは、それほど強い。

「俺が決めたい……!」

それでも、ゴールを奪うのは自分でありたい。

それが、ストライカーである彼の、本能の叫びだった。

「俺の価値を、知らしめる……! 俺が——!」

今、価値を示さなければ、もうチャンスはない。本能で理解できた。眼が動く。頭が働く。ペナルティエリア内を舐め回すように見定め。今、自分のすべきことは——

唐突に、パトリシアへ喉が張り裂けんばかりに叫ぶ。

「ルーカスに出せ!」

「……は?」

突然の指示に、彼女が眉を顰める。つい彼が名を呼んだFWに目をやると、確かにペナルティエリア手前の良い位置にポジションニングしていた。

ナリヤの指示に従うような形になった。パトリシアが、ひどく不愉快

そうに目を細める。

「……勘違いしないでくださる？ 貴方のような下郎の指図に乗るわけじゃありませんことよ！」

怒りを滲ませながらも、鋭いパスがDFを置き去りにして、マイナス方向に飛ぶ。スポーツグラスをつけた理知的な雰囲気青年が、ぴたりと完璧にコントロールした。

が、その顔は曇る。

「……最適な位置から3mmのズレ。そして不必要なほどのパススピード、超過8kmほど……」

「ああもうまどろっこしいですわッ！ 通ったんですから同じでしょうガリ勉強キャ野郎がッ！」

「……情報伝達に不必要な声量。30dBオーバー……」

キィキィと声を上げるパトリシアの暴言に、うるさそうに目を細めながらゴールに視線を向ける。

このままクロスを入れてもいいが——そう考えたところに、強い声が飛ぶ。

「ルーカスこつちだ！」

「……情報更新、最適なパスコース」

DFを剥がして降りてきたナリヤがパスを要求する。普段ならナリヤのことなど無視するルーカスだが、良いポジションを取る彼まで無視するほど頑固ではない。ボールが鋭く芝を撫でる。

同時に、試す意味合いもあった。本当に、彼が先のことを考えてポジショニングしているのか——眼鏡の奥で眼光が鋭くなる。

「クソ、ちよこまかと……！」

「ふっ……！」

ナリヤがそのまま反転する——と見せかけ、ヒールで中央へパス。スピードも申し分ない。

「正解。リオ、仕上げを」

「ああ、僕に任せて！」

完全に相手の虚をついたパスを受けるのは、艶やかな金髪を流した貴公子。焦ったDMFがすぐさまスライディングを放つ。が——

「ふっ、イリユージョンボール」

「くっ……！」

リオが必殺技で難なく突破する。すでにディフェンスは崩壊していた。

ナリヤのポジションと、個々の技術が融合した滑らかなパスワーク。ニーナはニコニコと笑みをこぼして走る。

「ひゅう、流石だね、『魔術師』マジシャン リオ・ススミッチー！」

「はは、ありがとう」

並走するニーナが囁し立てるようにそう言う。リオが照れたようにはにかみながら、次のDFに寄せられる前にアウトサイドで予想だにしないクロスを放り込んだ。

「決めてこい！」

「はっはっは、ボクを誰だと思ってるんだい？」

高くあげられたクロスには、DFの誰も届かない。ナリヤは飛び込まない。否、飛び込めない。ミスキックと判断してしまうような、高すぎるボール。

それに、当然のように食らいつく白い筋肉達磨が1人。7番の青年が、白い歯を見せて天空に飛び上がった。

チエックメイト——ニーナは気を抜いて息を吐いた。

「ゴールを捨ててゲームメイク……ナリヤにしてはよく頑張ったねえ。後でいい子いい子してあげよ」

いひひと小馬鹿にしたような笑い声をあげるニーナ。その眼前で、空高く飛び上がった彼が、ヘディングシュートを叩き落とした。

決まる——誰もがそう思った矢先、黄色いユニフォームが、シュートコースな身体を投げ出した。

「おっ、空中じゃボクに負けるから地上でつてわけか」

「そっだよ！ 出し抜いたぞクリストファー！」

観客席から歓声上がる。余裕綽々だったクリストファーの顔がわずかに歪んだ。

それは確かに、彼らの想像を超えたファインプレー。時間ももうない。格下の彼らに耐え抜かれたのだと嘆息する。

新戦力が少し実力を発揮できただけよしとするか、と、彼らは引き分けを受け入れた。

——その直後、さらに、シュートコースに割り込む白が1つ。

「ここだろ……!」

「おおつ、ナリヤ!? キミまで!」

ナリヤだった。クリストファーのシュートをトラップし、ブロックに飛び込んだDFさえも、観客の全てさえも、味方すらも、欺いた。

「俺がやるべきことは、我を殺して部品になることじゃない……!」

ニーナも驚きを隠せない。ナリヤの動きには迷いがなかった。もしかして、と思考が回る。

「はじめからこのゴールを……?」

一瞬視線が交錯する。その目に迷いはなかった。

「不確かでも、俺の価値を証明する賭けだッ!」^{ギャンブル}

彼女の前で、雷鳴が弾ける。

逆さまになった少年が、光の帯を引くほどの眼光を携えて、電撃を纏ったボールにオーバーヘッドを打ち込んだ。

一瞬白くなる世界の中で、彼は口を開いた。

「俺は勝ったぞ……! 見やがれ世界——」

爆裂。そして、轟雷が降り注ぐ。

反応すら許さず、ゴールネットに深々突き刺さった。

瞬間、スタジアムが物理的に揺れるほどの、割れんばかりの大歓声が世界に色を染めた。

雷光で真っ白だった辺りが元に戻り始める。眩しさに目を瞑っていたニーナが目を開く。

「——俺が、伊槌鳴哉だ!」

底知れない光を放つストライカーが、拳を突き上げる。

その姿に、初めてサッカーを見たあの日のように。

ただ、目を奪われていた——。

GOAL!!?

60+5分 ナリヤ・イツチ^{伊槌鳴哉}

アシスト：クリストファー・ロペス
キング・マドリード 2―1 ヴィラレアル・ナイツ

彼らこそが、キング・マドリード。

あらゆる時代、世代、世界で栄華を誇る、白いユニフォームに身を包んだ最高峰のサッカー軍団。

ロス・ガラクティコス
銀河系最強軍団とすら称される究極のチーム。その、1年ほど前の姿だ。

「ん……」

窓から溢れる光に目を刺され、伊槌が重い瞼を開ける。自宅の机に突っ伏して昼寝していたことを、ぼんやりと思い出した。夢を見ていた気がするが、思い出せない。

近くには開きっぱなしでスリープモードに入ったパソコンが佇んでいる。それを見て、自分はある時の映像を見ていたことも思い出す。だんだんと頭が冴えてきた。

「……キング・マドリードか……」

未練がましく、その名を口にする。半年も経っていないのに、もはや遠い昔のように感じてしまった。

結局、スペインでは20試合ほど出てこの1ゴールと1つのアシストしか記録できなかった。アシストのことが頭をよぎった時、少し頭痛がした。

「……何時だ」

思考を切り替えるように少し痛む首を動かして時計を見ると、長針は14を指している。今日は日曜だが、15時から練習が予定されていた。

時間に余裕があると分かった伊槌は、再びパソコンを立ち上げる。

得点シーンを、まじまじと見返した。

自分の動き、視線、コーチング——周りの選手のことにも余すところなく見て、ため息をつく。

「……はあ……やっぱり、分からない」

何度も見返した結論はそれだった。

自分の動きが分からない。何故周囲に迷うことなく指示できたのか、そして、どうしてあんなフィニッシュを選んだのか——自分のことなのに、何一つ理解できない。

ただ、今でも分かるが一つだけあった。

「これ決めた時、マジ気持ちよかったな……」

全てを操り、何もかもを出し抜いたゴール。FWとして、それ以上の喜びはない。あの感覚をもう一度——と感慨に耽っていた頭を、電子音が貫く。

スマホが震える。着信だ。

携帯を引き寄せ画面に目を落とすと、発信者は様崎だった。すぐに繋いで、耳に当てるのが面倒だったのでスピーカーにする。

『あ、おはよー。もしもし、起きてた?』

『もしもし。おはよう、起きてたよ』

少しふにやつとした様崎の声が聞こえた。彼女も寝起きらしい。

『突然掛けてごめんねー。ちよつと連絡することあってさ』

『ああ……メッセージとかでも良かったのに』

『いいモーニングコールになるでしょ? それに、結構重要なことだから言葉で伝えとくべきだと思ってね』

通話の向こうで気の抜けた笑い声が続く。意外と律儀なところもあるんだな、失礼な感想を抱いた。

それでね、と様崎は改めて口を開く。

『次の対戦相手、もう発表されてるでしょ?』

『ああ、四壁しかべこうせい恒星学院中学、だっけ』

『そーそー。変な名前だよねー』

気楽なことを言う彼女を尻目に、伊槌の思考は四壁恒星に傾いていた。

四壁恒星学院。青森附属と共に青森の双壁を成す強豪校。とはいえパワーバランスは予選50連覇という怪物級の青森附属に大きく傾いており、2番手という見方が強い。

とはいえ10年連続で予選決勝まで勝ち進んでおり、その実力は折り紙付きだ。

彼らのスタイルは、タレント軍団の青森附属とは異なり、独自の哲学を発展させている。それは――

「確か、守備のチーム……だよな？」

『そうそう。なんと予選無失点！ どころか、今年度の公式戦は全部クリーンシートらしいよ！』

「マジかよ」

様崎の言葉に目を剥く。同時に、口角が上がるのを感じた。軽く口元を拭って、再び喉を震わす。

「……じゃあ、俺が初めての得点者になるわけか」

『おっ、言うねー。頼りにしてるよ？』

「任せとけ」

好戦的な言葉が漏れる。自分の最高のゴールを思い出したからだろうか、身体が疼いて仕方がなかった。サッカーがしたくてたまらない。

様崎が手を叩いた音が聞こえた。閑話休題、と言うことだろう。

『まあ、詳しい戦術は無籐くんに任せるとして……四壁恒星は5バックで守ってくると思うんだ。だけど、私たちじゃ人数が足りなくて5バック相手にする練習ができない』

「ん……それは確かに致命的だな」

『と、いうわけで！』

食い気味に彼女が言葉を被せてきて、少し驚く。

様崎が焦らすようにじやかじやかと口でドラムロールを演奏する。聞いてて心地の良い声だった。

じゃーん、と気の抜けた声。すぐに言葉は続いた。

『私が特別ゲストを集めました！ 誰が来るかはお楽しみ！』

「いつの間……というか、凄い行動力だな」

『ふふーん』

テレビ通話では無いはずなのに、画面の向こうでふんぞり返っている彼女の姿が手に取るように分かった。伊槌が苦笑を漏らす。

『サッカーはみんなでやったほうが楽しいからね！　じゃ、そういうわけで遅刻しないでね！』

「ああ、分かってる」

『また学校で、ばいばーい！』

「ばいばい」

テイロン、と通話が終わった。彼女の声がなくなると、周囲が意外と静かなのだと改めて気づいた。相変わらず嵐のような人だ。

時計に目を向けると、まだ20分ほどしか経っていない。だが、伊槌はもう発つことにして、そそくさと着替え始めた。身体がサッカーを求めている。

日本に戻ってきた頃からは考えられない自分に、少し笑いそうになる。それもこれも、あの時手を差し伸べてくれた様崎のお陰だろう。彼女がいなければ、伊槌は再びこの熱を感じられないでいた。

今はこの熱に従っていたい。サッカーを出来る喜びを噛み締めたい。

そして、自分を助け出してくれた彼女たちに——勝利を。決意を新たに、部屋の扉を開いた。

「あら、鳴哉……早いわね」

母親がいた。何故か、目が怖い。怒っているのではなく、好奇心に煌めいていた。嫌な予感がする。

「電話してたの、女の子よね？」

「そうだけど……？」

神妙に頷かれる。妙に仰々しかった。

「そう……そうなのね。鳴哉……お母さんは応援してるわよ」
「…………？」

サッカーのことか？　伊槌はそう思ったが、おそらく違う。両親は快くサッカーを続けさせてくれているので、今更面と向かって言わないだろう。それに、文脈もおかしい。

何故通話相手が女の子だと聞いてきた——そこまで思考して、伊槌の顔が赤くなる。

「ち、違う！ 別にそう言う関係の人じゃ……！」

「隠さなくていいのよ、お母さん嬉しいわ！」

「だから違う！」

必死に弁解にする伊槌にむしろ勘違いを加速させた母親を説得するのにも、1時間近くかかった。

「はあ、はあ……つぶね、着いたっ！」

母親を死ぬ気で説得した伊槌は、遅刻の危機に陥っていた。全力を持って走り抜き、何とか間に合った彼の顔は、社会に揉まれ疲れ切っている新卒サラリーマンのそれと酷似していた。

集合時間前ギリギリだったので、伊槌以外の部員は揃っている。息を切らして走り込んできた伊槌に、ギョツとした表情を浮かべながらも出迎えてくれた。

「ワ！ どうしたのイツチ、そんな疲れテ」

「遅いからそうなるのよ！ もっと速く行動するべきね！」

「ああ……そうだな……」

半ば聞き流しながらそう返し、呼吸を整える。

ひどく疲れたと言っても、その原因は気疲れが大半だったのかすぐに切れた息は落ち着いた。それを伺っていたように、様崎が手を振りながらこちらに来る。

「おはよー、私のモーニングコールはあんま効果なかったかな？」

「ああ、いや、起きてはいたんだけど……」

「？」

思考が白のペンキを掛けられたかのように全く纏まらず、つい目を逸らしてしまう。彼女になんら非はないが、今は健全な気持ちで様崎

の顔を直視できなかった。

「ギリギリとはいえ間に合ったなら何でもいいだろうが。それよりあの電話はなんだ？」

腑に落ちない様子の彼女だったが、全員揃ったことを確認した無籐に背後からせつつかれ、仕方ないと言うように手を広げながら話し出す。

「私たちは何と言っても人数が足りない！ 守備側と攻撃側で別れたら大した練習が出来ないでしょ？」

「一理あるな、5バック相手の練習など夢のまた夢だ。人数が増えるのは喜ばしい」

「それで、特別ゲストって言うのは……？」

橘花の控えめな問いに、様崎が笑みを深める。

彼女が目を細めて背後の空間に視線を送る。それに目敏く気付いた伊槌が訝しげな表情を浮かべるとともに、芝居がかった声が降り注いだ。

「クツクツク……久しいな！ 我らを忘れたとは言わせんぞ！」

「俺たちもいるよー」

「お久しぶり……音夢もいるよ……」

「あ……泰山中の方々ですか……！」

現れたのは、肩までかかった銀髪を大仰に揺らす包帯の少女——今となっては久しい1回戦の対戦校、泰山中のキャプテンである棗龍華が、気村や甘塚といった数名の部員たちを引き連れて颯爽と登場した。

思わず声を上げた久良島の元に、棗が歩を進める。そして、数日で完治したその右腕をがっしりと掴んだ。

「貴様たちの活躍は音に聞いている……流石我らを倒しただけはあるな。我らとの試合で見せた素晴らしいセーブ、覚えているぞ」

「あ……ありがとうございます」

照れくさそうにはにかむ久良島に棗が微笑を溢す。穏やかな雰囲気の流れていることを感じ取った梵場が、興味深そうにサングラスをクイツと押し上げた。

「ふむ……子猫ちゃん同士の戯れも中々良いものだね……」

「マジでブレねえなあ、お前……むしろ尊敬するぜ」

呆れ顔で木崎がぼやく。平常運転の彼らに太田が乾いた笑いをあげながらも、ふと違和感を覚えて様崎に向き直った。

「あれ？ これでも人数が足りなくないかい？」

「その心配はねえ」

太田の言葉を杞憂だともいうように、泰山中の面子のさらに奥から男たちが現れる。

後ろに流した金髪と鋭い目。太田にも負けない体格をした男を、彼らが忘れるわけなどなかった。

「うげっ、亜蘭中……!?!」

「もー、そんな反応は失礼しちゃうよ☆」

宵闇が引き攣った声を上げるのも仕方ないだろう。昨日戦ったばかりの落合率いる亜蘭中のメンバーが、堂々と屹立していた。

彼らの複数人は、サッカーで負ったとは思えない傷を何故か負っているが——伊槌は突っ込まないことにした。唯一口を開いた叛月が傷一つないのも奇妙さを助長する。が、やはり全部気の所為ということにした。

「何とねー、私たちのこれからの勝利を願ってということで手伝いに来てくれたんだよ！」

「ハッ……勘違いすんなよ。俺は俺をぶっ潰した奴らが呆気なくやられんのはムカつくからだ。つーか、大人しく踏み台になる気はねえ。食ってやるよ」

「ほぼ同意だ。我らは壮行会に来たのではなく、サッカーをしに来たのだ……。簡単にはやられてくれるなよ？」

落合が、棗が。不敵に笑ってそう言った。

挑発的な発破に伊槌の口角が愉快げに上がる。涙を流していた少女も、泥を這いつくばっていた男も、こちらを食うほどに強い目をしていた。

負けたとて、彼らも成長している——そう思うと、無性に練習したくてたまらない。

「そうこなくちや面白くない。本気でぶつかり合おうぜ」

伊槌も敢然とその宣言に立ち向かう。両者の間に激しく火花が散ったところで、いつのまにかどこかへ行っていた様崎が、手を叩いて注目を集める。

視線を向けると、ガラガラと台車を引く彼女の姿が確認できた。その上には、バンドに括り付けられた鉄の塊と、明らかに金属でできたボールが載っている。

「はいはい、熱くなってるってこ悪いけど……」

言葉を切つて、ひどく重そうに両腕で塊の1つを持ち上げる。そのまま訝しげに見ていた伊槌へと接近し、手持ち無沙汰だったその腕に重りを握らせた。

その瞬間、伊槌の身体が絶大な重量に引つ張られる。

「重っ!？」

「ふふふ……それは10kgの重り! 家にあつたから持ってきたの!」

「んでそんなもんが家にあんだよ……」

よろめいて膝をついた伊槌の横で無籐がもつともなセリフを吐く。心配した久良島が近づいてきたが、伊槌は大丈夫だと手で制した。

彼らの惨状をスルーして、様崎が重りを慣れた手つきで両の太ももに装着する。20kgを抱えてなお彼女は笑みを曇らせない。

「今日はこれつけて練習しようか!」

「いやいやいやいや……身体壊れますよ。病院いくべきじゃないですか? 頭の」

正気とは思えない練習を辛辣にあしらう宵闇。様崎は笑って流した。

膝をついていた伊槌がゆっくり立ち上がる。そのまま、右腕に握った重りを右の足に括り付けた。全身が下へ沈む感覚に襲われる。

「だ、大丈夫ですか……?」

「ああ……!」

伊槌が強がって返事をする。検めるように右足を上げ、さらに台車の上から重りを漁った。

両腕、両足。計40kgの重量を抱えた伊槌が、ゆつくりと立ち上がる。宵闇が怪物を見る目をしていた。

「舐めんな……俺はやるぞ……!」

明らかに顔を歪んでいるが、その目は死んでいなかった。息を強く吐いて、全身に力が籠っている。

「……ハッ、面白エ。俺も引き下がるわけには行かねえなア!」

「コウハイが頑張るのにワタシが逃げるワケ行かないネ!」

それに感化されたように、3年を中心として次々に重りを手に取る。流石に両足の20kgだけだが、それでも絶大な負荷だ。

満足そうに笑みを浮かべた様崎が改めて口火を切る。

「そうこなくっちゃねー! 5バック作ってもらって私たちが攻撃!

それじゃやるぞー!」

「ああ……!」

流れるように言葉を紡いだ様崎が、返答を待たずグラウンドに飛び出していく。それを皮切りに、泰山、亜蘭もいち早く駆け出した。

伊槌もグラウンドへダッシュする。重りをつけ終えた者たちもその後を追い、最後に宵闇が残された。

「……ええ、ああ、もう分かりましたよ……やりますよ!」

実に面倒くさそうにため息をついて、拘束具のようにバンドを括り付けていく。人間のやることとは思えなかった。

「……ふふ」

だが、宵闇は自分が口で言うほど嫌がっているわけではないのも感じていた。今まで共に戦った仲間たちと苦難に向かつていくことが、残念ながら楽しい。

そうして重りをつけ終えた彼女は、最後に自分と同じく残された金属製のボールを持ち上げようとして――

「えっ岩?」

――重過ぎた。先ほどまでの決意など無かったことにして、ただ帰りたくなった。

「はあ……はあ……」

「ぐええ〜……疲れた〜……」

「よーし……そろそろ終わろうか……」

1時間後、練習というより訓練と形容すべきサッカーを終えた憲戸中サッカー部は全滅した。

立ち上がれる者など1人もいない。余裕ぶっていた様崎すら地面に転がって、死屍累々の様子で空を見上げていた。伊槌も口を開くとすら億劫で、身じろぎ1つできない。

「いつまで転がってんだ、情けねえ」

「ぐうっ……」

ぐったりと伸びていた伊槌の手を引いて、落合が荒々しく起き上がらせる。恨めしげな視線を受け流し、鼻を鳴らしてこちらを見た。

「四壁恒星に勝つんだろ？ この程度でへばってんのか？」

「……っ、言ってくれるな……！」

挑発的に口の端を釣り上げる彼の顔を認めた伊槌が、眉を釣り上げて立ち上がる。緩慢な動作で全身の重りを外していき、軽くなった身体を確認するようにその場で跳ねた。

羽が生えたように軽い。心地いい感覚に驚愕と共に口角を上げ、転がっていたボールを引つ掴む。

「ははっ……舐めんな、まだやれる」

「当たり前えだ。その程度の奴らに負けててたまるか」

「……いやあ、元気だねー鳴哉くんは」

伊槌に呼応するように様崎がグツと身体を起こす。余裕そうだった顔は塩をかけられた高菜のようにしおれており、疲労が色濃く出ている。

それでも、立ち上がった。彼女の後ろで、感化されたように他のメンバーも次々に復活していく。

「くう……私も負けませんよ」

「ぼ、僕も……もう諦めない」

誰もが疲弊しているが、その目は死んでいない。初めて会った時には感じなかった頼もしさがそこにあった。

「……今の練習で、ある程度の戦術と基礎能力はついた……次やることは明確だア……」

「ああ、必殺技を磨くぞー!」

おおつ、という声が燃料になり、再び彼らの中に火炎が灯った。

「とはいっても、必殺技の練習って何をすれば……」

宵闇が眉根を寄せて呟く。その声を拾った橘花が、花のようにその顔を綻ばせて足元にボールを転がしてきた。

「とりあえず僕たちは、前の試合で出した技をものにしよう! 反復練習だよー!」

「……なるほど。分かりやすくいいんじゃないですか」

宵闇の少し棘のある言い方にも眉一つ動かさず、橘花が笑みを返す。やりづらそうに顔を伏せた彼女の手を取り、その綺麗な瞳をフードで隠れた宵闇の目と合わせた。

「ち、近い……とりあえず、やるなら早くやりますよ」

「うん、よろしくー!」

その言葉を皮切りに、間を空けて、先ほどまでの和やかな雰囲気霧散させて睨み合う。

グラウンドの一角で、花びらと幻影がぶつかり合う。2人の進化への思いが鎬を削った。

少し離れたところで、3年生たちがボールを中心に顔を突き合わせている。がむしやらに動くより、まずはイメージトレーニングから始めていた。

「僕は……パワーチャージを進化させたいな。どうすればいいだろう」

「エネルギーを増幅させるとか……あとタツクルの方向を変えるとかな?」

「オオタのパワーなら、無理にエネルギー込めなくても大丈夫だと思うよー!」

「そうなると別のアプローチ……エネルギーではなくタツクル自体の

パワーをあげるのがいいだろう」

「方向を変える……真正面からじゃなく、重力を利用したスタンプとかいいかもなア」

三人よれば文殊の知恵。況んや五人であれば。

いつか言っていた無籐のように、彼らも無為に3年を過ごしていない。流石の経験値か、とんとん拍子でイメージが固まっていく。

1つ大きく領いた太田が、ボールを持って立ち上がる。

「スタンプ……いいかもしれない。それで行くよ、練習手伝ってくれるかな？」

「もちろん付き合うよ！」

進むべき道が見えた太田が、自信を持ってそう言う。他のメンバーも結束感を持って当然のように立ち上がり、太田の頬が緩んだ。

彼の顔に、すでに次の試合への恐れはない。瞳の奥にあるのは、誰かによく似た勝利への渴望だけだった。

伊槌の足元で電撃が迸る。破裂するような音と共に、光の球がゴールを襲う。

「電閃ッ！」

焼けつく雷鳴が空気を切り裂く。それを髪に隠れた瞳で恐れずに見据え、右腕を強く握りしめる少女。

奈落のように黒いオーラを溢れるほどに腕に纏わせ、目を焼く光に叩きつけた。

「真っ黒パンチ……！」

爆ぜる雷の塊が腕を焦がす。暴れ狂う嵐のようなパワーに面食らう久良島だったが、地面を離れそうになった足を気合いで固め、殴りつける腕に体重を掛ける。

だが、電閃の威力は衰えない。燃えるような紫電が腕を伝う。

「ぐっ……きやあっ！」

必死の抵抗も虚しく、真っ黒パンチを弾いた電閃が鋭くゴールに突き刺さった。

悔しげに地面を叩く久良島に、スッと腕が伸びる。伊槌だった。

「大丈夫か？」

「……はい、すいません」

その手を借りて久良島が立ち上がる。隠れていて見えないが、伊槌にはその瞳が曇っているように感じた。

なんと声をかけるべきか懊悩していた伊槌に、彼女の控えめな声がかかる。

「私も、新しい必殺技を作ろうと考えているんですが……どういふものがいいと思いますか？」

「ん、ああー……」

予想外の問いに、伊槌が少し硬直する。だがすぐに気を取り直し、毅然とした様子で答えた。

「そうだな……必殺技の開発ってどうすべきだと思う？」

「それは……」

彼女が伊槌の言葉を咀嚼し、困ったように眉をひそめ、助けを求めるように顔をあげる。それを汲んだ彼が言葉を続けた。

「必殺技で大事なのももちろん理想を可能にする身体能力もそうだけど……一番は発想力だ」
イマジネーション

彼女が食い入るように頷くのを見て、伊槌は少し嬉しくなる。言葉に熱を入れながら話し続ける。

「身体が動いても、イメージがないんじゃない。そしてイメージの源泉は今までの自分の中にある。久良島なら真っ黒パンチだな」

「なるほど……」

彼女が右腕を開いたり閉じたりしながら見つめる。すぐハツとしたような表情を浮かべた久良島がこちらに向き直り、苦笑しながら口を開いた。

「それを土台に発展させるんだ。纏わせるオーラを大きくする……両腕でやってみる……もしくは、そのどれとも違うものに挑戦する。ななであれ、その形はお前が見つけないんじゃない」

一言一句逃さないとも言うように集中しながらその話を飲み込んだ久良島が何かを考え始める。成長に貪欲で素直なその様子に、伊槌は可愛い後輩だと好感を持った。

そしてすぐ彼女が何かに気づいたように面をあげ、こちらに向き直って改めて頭を下げる。突然のことに伊槌は少し面食らった。

「えっと……ありがとうございます。少し考えがまとまった気がします」

「そうか、良かったよ」

その言葉に少し微笑んだ久良島が、失礼しますと残して去っていった。辺りを見れば、日が傾いている。他の部員たちも続々と帰宅の準備を始めていた。

「俺も帰るか……」

暗さに気づいた途端少し肌寒くなった空気を肺に取り込み、大きく伸びをする。全身が砕けそうに痛かったが、明後日の試合には、恐らく大丈夫だろう。

気を抜いた途端、背後から息を切らした声で名前を呼ばれた。首だけを背後に向けると、明風が元気にこちらに寄ってきている。

「ふう……呼び止めちゃってすみません、杏奈と何話してたんですか？」

「必殺技の開発について聞かれてたんだ。成長に貪欲で頼もしいよ」
そう返答された明風は目を見開き、次の瞬間には晴れやかな微笑みを浮かべた。

「ほーう、それは私も負けてられませんね！ 試合では期待してくださいよ！」

「ああ、もちろん」

人好きのする可愛らしい笑みを見せる明風につられて、伊槌の頬を緩む。

「堅守謳ってるあいっからから、点取ってやろうぜ」

何気なくそう口について出た。明風は何も返さず、曖昧に笑う。その顔にかかった影に、伊槌が少し気圧された。

だが、それが気のせいだったかのようにすぐに彼女の表情から陰が取れ、先ほどまでと同じ人懐こい表情に変わる。

「はい！ 私が初めてのゴールを奪っちゃいますよ！」

「……あ、ああ」

いつかの河川敷でも見た、あの影。なんとか取り繕ったが、言葉がもつれる。

やり取りのあと、明風が頭を下げて立ち去ろうとする。その時、伊槌の喉が無意識に彼女を呼び止める。青い黒髪が揺れて、優しい顔がこちらに向いた。

何故呼び止めたのかは分からない。だが、何を言うべきかは、驚くほどすらすらと湧き上がってきた。

「サッカーはチームスポーツだ……あんま気負うなよ」

「……？ はい！」

あまり分かっていなさそうな表情だったが、元気よくそう返事をして今度こそ去っていく。

少し欠けた満月が、太陽の光を跳ね返して暗闇の中で輝いていた。

20話：FF青森県予選準決勝 VS 四壁恒星学院中 学

春もまだ過ぎ去らないこの時期に、茹だるような熱気が辺りに充滿する。快晴の太陽が、四壁恒星学院を燦々と照らしていた。

青々と茂った芝を眺めるのは、日本帰つてに来てからは青森附属との試合以来。だが、あの時とは違う大声援が、グラウンドを囲む観客席から辺りに木霊している。

試合会場となる四壁恒星学院に到着し、試合前の最終アップに入ろうかとグラウンドに出てきた憲戸中を迎えたのは、そんな景色だった。

「す……すごいわね。みんな四壁恒星の応援？」

「青森附属と覇を争う強豪校だからな……とんだアウエーだ」

ホープが少し弱々しく言葉を溢したように、声を上げる老若男女は、皆オレンジと黒で飾られたストライプのユニフォームに身を包んでいた。当然と言うべきか、憲戸のユニフォームを着た人間はいない。

誰が見ても、完全なアウエーゲーム。全員の表情が強張る中、伊槌は落ち着きを取り戻すように息を吐いた。

「誰が相手でも、どんな環境でも関係ないさ。俺たちがやるべきことは変わらない」

伊槌がいち早く平静を取り戻したのは、やはり慣れによるところが大きい。動揺を殺してグラウンドに目を向ける彼の姿に、周囲にも落ち着きが伝染していった。

「……そーだね！ 緊張しすぎてでも仕方ないか！」

「へっ、俺は元々緊張してないけどな！」

「フツツ、キザキは大物だね！」

「緊張感が無すぎるのも考えものだがな」

一瞬前までの硬直が嘘のように軽口を叩き合いながら、大歓声を切り裂きピッチに足を踏み入れる。久方ぶりに湧いてくる皮膚が粟立

つような緊張感が、伊槌の身体を心地よく支配した。

「こんにちは。遠路はるばるお疲れ様だね」

「お前は……」

ざくつ、と芝を踏みしめた音と共に、中背の少年が姿を見せる。灰色の短髪と、文字盤の削り取られた時計のように、長針と短針が瞳の中で時を刻む、個性的な目元の男子だった。

その体軀は伊槌と比べても細い。だがしなやかに鍛えられており、観客席を染めるオレンジと黒のストライプユニフォームに覆われている。ただ者ではない。

「僕は御時針也、四壁恒星のキャプテンを務めてる。今日はよろしく」
「うん、よろしく！ あ、私がキャプテンの様崎咲夜だよ！」

軽い挨拶のもと、両校のキャプテンが握手を交わした。2回戦が亜蘭中だったことも手伝って、彼の礼儀正しい行動に伊槌は好感を覚える。

と、同時に。

「……余裕そうだな」

「そりゃあ10年も決勝に行ってるからね……こんなところじゃ負けない自信があるんだろう」

梵場と伊槌の見解が一致する。四壁恒星は決勝しか見据えていない。彼らにとつて憲戸中は、サツカーの女神の悪戯によって、自分達と言う火に誘引された飛んで火に入る夏の虫。

メンバーを落としてはいないが、精神的にはすでに準決勝突破を決めているだろう。そう考えると、御時の目は眼前の様崎を見つづもすでに皮算用を始めているように見えた。

「舐めんなよ……」

業腹だが、好都合。足元を掬ってやる、伊槌の目が鋭く光った。

「こんにちは、今日はよろしくお願ひします」

「……！ ああ、こつちこそ……」

横合いからかけられた聞き覚えのない声によって、伊槌の意識が現実に戻される。

振り向いた彼の目に映ったのは、白いポニーテールを結わえた痩身

の人。大きな翠眼も相まって中性的な容姿をしていたが、橘花という前例を目にしていた伊槌は問題なく目の前の人物を男性だと特定した。

纏うのは御時と同一のユニフォーム。胸元には、10の番号が輝く。彼の背後には赤みがかった茶髪をベンゼン環のような髪留めで括った少女もいる。

「伊槌鳴哉さんですよ？ 僕は神風俊介、あなたと同じFWです」
「……俺を知ってるんですか」

初対面なので、伊槌も流石に敬語を取り繕った。そういえば、サッカー部に入りたての頃はチームメイトたちにも敬語だったがいつの間にか外れていたことを思い出す。

ふと横を見ると、梵場が神風の背中に隠れるような体勢で佇む少女を凝視していた。

少なくともこいつには敬語を使わなくていいだろう。

「君はそこそこ有名だし、知っててもおかしくないだろう？」

穴が開くほど目を開きながら、梵場が口を開く。言葉には領きつつ、彼の目線を切るように少しだけ横に移動した。

「おい伊槌！ なんでそこに立つんだ！」

「あの子がすごく怯えてるからだ！」

あの子とは、言うまでもなく神風を盾にしているベンゼン環の少女だ。大声をあげたからかまた少し小さくなった彼女に申し訳ないと心の中で謝りつつ、どうにかして伊槌をどかそうとする梵場の目を隠す。

「くっ……この！」

「あはは、賑やかですね」

朗らかに神風がそう言う。背中を軽く殴ってくるこの男を見て本気でそう思っているのかと軽く正気を疑いつつ、こちらに目線を合わせてくれなくなった少女へ視線を向けた。

それに気づいたのか、神風が少女に穏やかに微笑みかけ、話を促すように肩に手を置く。

「……ええと、高機、弥雷です。よろしくお願いします」

「彼女は僕と同じ1年生なんですよ」

名前だけつぶやいて高機がぺこりと頭を下げる。神風が補足するように話した内容に、伊槌は少し衝撃を受けた。

彼女の身長は、伊槌よりちよつとだけ低い神風とほぼ変わらず、体つきや雰囲気含めて大人びた風貌をしている。人見知りしているようなその言動は年相応だが、1年生とは思えなかった。

「ハロー、子猫ちゃん。僕は梵場踊太、君と言う一輪の花に心を躍らす、しがない男さ……」

「……？」

「お前は……ほんとに……」

梵場は梵場だった。彼女が前に出た途端目の色を変え、歌でも歌うかのように歯の浮くようなセリフを惜しげもなく並べる。放心する高機と同じく、伊槌もため息をついた。

そんな様子に、神風が優しく笑い声を上げる。

「あはは、でも良かったです」

「……？ 何が……ですか？」

砕けた口調を取り繕うのを思い出したとばかりに、伊槌が丁寧語で口を開く。もう手遅れな気もしたが、神風は気にした様子もなく言葉が続けた。

「会場に吞まれてなくて。お互いの全力を、余すことなくぶつけられることに、安心しました」

「……！」

柔らかく放たれたその言葉に、伊槌の肌が粟立つのを感じる。

「この試合、勝つのは僕たちです。今回こそ、王座は頂く」

「……私も同意します。今回だって、1点も許すつもりはありません」
神風の肩に手を置いてこちらを警戒しながらも、高機も宣戦布告に乗った。熱い言葉が伊槌にぶつけられる。口角が無意識に釣り上がるのを、自分の意思では止められない。

「そうか……悪かった」

「えっ？」

故に、詫びた。余裕をぶっこいて、こちらのことなど眼中にないと

勝手に決めつけていたことに対して、心からそう詫びる。

彼らが気を抜いてこの試合に臨んでいない。勝つためにここに来た——そんな当然のことを改めて突きつけられた。

「なんでもない。……俺も、全力を君たちを倒す！」

敬語も忘れて、伊槌が力強く宣言する。好戦的に口元を歪めた神風の肩を、控えめなタップが揺らした。

振り返った彼らの背後には、襟足を伸ばし、つり目がちな右目を隠すほど長い銀髪を揺らす青年がいた。身長は伊槌よりも高く、端正な顔立ちも相まって伶俐さを感じさせる。

「……そろ、そろ」

「ああ、時間ですか。ありがとうございます、鳥羽君^{とば}」

ぼそりと放たれた声は低く、厳かだ。伊槌はよく聞き取れなかったが、神風は得心いったように頷いていた。

「その人は？」

「……彼は、鳥羽^{とばりきや}仿弥。私たちと同じく、四壁恒星の1年です」

「……よろしく」

仮面のように表情を変えず、鳥羽が手をあげて会釈する。気難しげな雰囲気にならずに少し気圧されながらも、伊槌も名乗って軽く目礼した。

挨拶を終えたと同時に、隣にいた梵場が口を開く。

「そろそろアップの時間だね。伊槌、ここいらでお邪魔しよう。さらばマドモワゼル、またいつか！」

「もうそんな時間か……ああ。また試合で」

「ええ、楽しみにしています」

伊槌は普通に、梵場がキメ顔で別れの言葉を口にして、いつの間にか反対側のコートへ集まっていた仲間達の下に、颯爽と駆けていく。神風たちも踵を返し、彼らに背中を向けた。

神風たちの前で、3人組の選手が話し込んでいる。1人は御時で、もう1人は首から竹編みの笠を提げた長身の男。そして、彼とは対照的な体格をした、緑がかかったセミロングの銀髪で2本のおさげを作る少女の集団だった。

芝を踏む音を耳聴く拾った長身の男が、ゆらりと振り向く。気だるそうな目が開かれた。

「ん？ ああ、1年トリオか。挨拶は済ませた？」

「はい、目標との接触到に成功。有意義な時間でした」

伊槌たちと会話した時とは異なり、高機がはつきりとした口調で答える。相変わらずの硬い言葉遣いに男は苦笑した。

続けて神風たちに気づいた小柄な少女が、澆刺に口を開く。

「おかえりなさいっ、神風くんたち！ 喉が乾いてたりしませんか？

アップの前に、あまーいドリンク作りま——」

「大丈夫です、元気です、元気すぎるくらいです。ですよね鳥羽くん？」

「……そう、だ」

爛漫な笑顔と共に体調を慮るその言葉を、神風が食い気味に遮った。同意を求められた鳥羽も、ぶんぶん擬音が似合う勢いで首を縦に振る。

その様子を見た御時が、彼女の手によって作り出された甘すぎる液体とじやりじやりと口の中で主張を止めない砂糖の感覚を想起し、乾いた笑みを浮かべた。だがすぐに表情を引き締め、手を叩いて脱線しかけている流れを切る。

「よし、じゃあアップを始めよう。湖池、榊月、DFは任せたぞ」

「まあ、やれるだけはやりますよ」

「はい、お任せくださいっ！」

名前を呼ばれた対照的な2人——湖池一舟と榊月まのんがそれぞれ言葉を返す。湖池は脱力した様子だったが、それが彼のスタイルだと知ってる御時は目くじらを立てる事はなかった。

それぞれがボールに触り、身体を温める。乗り越えるべき死闘の前に、静かに闘志の炎に息を吹き込む。

一瞬、御時が憲戸の方へ顔を向ける。キャプテンの様崎の横顔が瞳に映った。

伊槌と神風たちが邂逅していた同時刻。伊槌が聞き漏らしていた中で、ほんの少しの時間で交わした宣戦布告。それを思い出して、胸

が熱くなる。

「私たちのチームは強い、か……」

——望むところだ、と言うように。御時が力強くボールを蹴り出した。

憲戸中スターティングメンバー（3―4―2―1）

――木崎――

――明風――伊槌――

三刀屋――梵場――山本

――無籐――

――様崎――太田――靴木――

――久良島――

四壁恒星学院スターティングメンバー（5―4―1）

――神風――

仲川――川島

――御時――鳥羽――

安岡――木島

――湖池――榎月――赤田――

――高機――

歓声に湧くグラウンドの中央。センターサークル内で、伊槌と木崎が向かい合ってボールに足を乗せる。試合開始の合図を、今か今かと待ち望んでいた。

そんな中で、木崎が大きく息を吐きながら言葉を漏らす。

「しっかし……俺ら大分フォーメーション変えたけど大丈夫か……？」

「対四壁恒星に向けて練習はしてきた……後は野となれ山となれ、だ」
そう返すと、木崎は人懐っこく笑って再び前を向く。その瞳に迷いはもうなかった。

少し背後に視線を向ける。浮き足立っている人間はいない。この強豪相手にも、気圧されず誰もがピッチに立っていた。

「見せてやろうぜ……!」

「おう、勝つのは俺たちだ!」

万雷の声にも負けず、笛の音が空気を切り裂いた。前半開始だ。

伊槌が木崎に蹴り出し、そのまま無籐へバックパス。彼も迷いなく最終ラインの様崎にボールを送った。

「よし、ゲーム組み立てっぞ……!」

——なんでもない、ただのパス回し。その平穩を切り裂くように、様崎に疾風が襲いかかった。

「はあっ!」

「FWのプレス!」

遠い位置にいる伊槌ですらも感じるほどの豪速。鋭く頬を切り裂く風に目を剥いて振り返った。

「わっ、速!」

その正体は神風。姿勢を低く、空気抵抗を極限まで削った体勢で矢のような猛プレスを実現させる。

その鋭い足が驚嘆を隠せない彼女に届く寸前、なんとか久良島にボールを戻す。

「あぶなっ、杏奈ちゃん!」

「逃がさない!」

だが、そのパスすら狙っていたのか神風が全速力で久良島にも圧力をかけた。焦りを隠せない様子で、久良島がボールに向かう。

「くっ……届けっ!」

このままでは先にボールを触られる。そう踏んだ久良島がスライディングでボールを蹴り出そうと試みた。

その瞬間、神風の姿勢がさらに低くなる。一瞬の静止が、不気味さを助長した。

「僕にスピードで勝とうとするなんて……」

久良島の足がボールと接触する、その刹那。

爆発するような音と共に、ボールを奪い取った神風が、久良島の上を飛び越えた。

「えっ……!」

「——何光年も遅いですよ」

久良島すら抜かれたガラ空きのゴール前に、神風が降り立つ。追いつく者など、誰もいない彼だけの景色。

「まずっ——」

「ふっ！」

飛び付こうとした久良島を寄せ付けず、容赦なく神風が右足を振り抜く。鋭いシュートが、当然の如くゴールネットに吸い込まれる——
「はああああ!!」

——ことを許さない、少女が1人。

このフィールドで神風に比肩する足を持つ、たった1人のプレイヤー。
ヤー。

山本希望^{ホー}が、まさしく希望を紡ぐブロックを見せた。

「なっ、MFの位置からブロックに間に合った……!?!」

「何光年も遅いのは、あんたの方だったわね!」

意趣返しのような台詞を吐いて、ホープがセーフティに蹴り出してクリア。

大きく弾かれたボールは、無籐が飛びついてトラップした。彼の頬に一筋の冷や汗が流れる。

「なんっースピード……あれが四壁恒星のカウンターの要か……!」

目に焼き付く神風の走りに悪寒を覚える。だが、すぐに獰猛に笑みを浮かべて整っていない守備陣を切り裂くパスを放った。

「だったらこっちも見せてやろうぜエー! 行け梵場ア!」

「フツ、ここからは僕のステージだ!」

サイドに流れていた梵場にボールが渡る。気を取り直した伊槌も彼をサポートできるポジションに入り、梵場のドリブルを無言で後押しした。

計画通り、梵場の進路をDFの木島が塞ぐ。素早い守備だった。

「抜かせないぞ!」

「フツ、男と踊る趣味はない!」

木島の足が伸びる。自信に違わないいい出足。

だが、読み切った梵場が軽快なルーレットフェイクでそれを振り切

り、半身前に出た。歯を噛み締めながら、木島が手を使ってギリギリでブロックを試みる。

「くっ……！」

「お別れだ、スピニングドライブ！」

それすらも、激しい回転と共に跳ね回る十八番のドリブル技で千切った。手応えと共に、梵場が前を向く。

だが、そこに自由なスペースなどなかった。

「……はあっ……！」

「んっ!? いつの間に……！」

プレスバックしていたMFの鳥羽が最高のカバーを見せる。変わらない鉄面皮で梵場に身体を当て彼の全身を遅らせ攻撃のリズムを崩した。その姿は仕事人と呼ぶにふさわしい。

「ナイス鳥羽！ 挟んで奪うぞ！」

「……ああ……！」

作られた時間を利用され、四壁のディフェンスが整う。鳥羽を背にし、苦しげに表情を歪ませる梵場の視界で、四壁の素晴らしい連動に舌を巻きながら伊槌が手をあげた。

「梵場、逃がせ！」

「……くっ、伊槌！」

寄せ切られる前に、梵場からのパスが伊槌に渡る。

当然逃すつもりは無いのか、彼らも素早くフォーメーションを修正してMFの御時がプレスに来た。だが、問題ない。

「明風！」

「っ、ダイレクトで流したか」

伊槌の周りを衛星のようにポジションニングしていた明風にボールを渡す。ノータイムで御時の逆につき、伊槌が駆けた。

背後から無籐も上がってくる。亜蘭戦でも攻撃の要となったトライアングルが、再び形成される。

「四壁の崩し方もきっちり練習してきた……プラン通りに行くぞ！」

「はい！ 無籐先輩！」

明風もDFが当たってくる前に無籐にボールをワンタッチで繋ぐ。

かわされた御時が無籐にプレスに行こうとした瞬間、今度は伊槌にダイレクトプレー。

「速い……！ 3人で押し上げてくるぞ！」

「ハッ、流石の観察眼だが……」

明風・伊槌・無籐が、フィールドの中央をハイスピードなパス交換で、無理やり食い破る。看破されようが関係ないとばかりに、ワンツールの連続にどんどん四壁のディフェンスを撤退させていく。思い通りのプレーに伊槌の心臓が高鳴った。

「分かっても俺たちの方が早い！ 仕上げるぞ明風！」

「了解です！ はあっ！」

ゴール前までボールを押し上げた伊槌が、明風にパスを出すと同時にトライアングルを放棄してゴール前に飛び込む。攻めの形が変わったことで、一瞬ディフェンスラインが乱れる、

「俺もいるぞお！ パスくれ！」

その混乱に乗じて最前線に張っていた木崎もゴール前に突っ込む。この状況を俯瞰していたGKの高機が、落ち着き払った様子で指示を飛ばした。

「11番と9番のマーク確認、12番の進路を塞いで下さい」

「はいっ、任せてください！」

指示を受けた榊月が素早く明風とマッチアップする。ワンタッチプレーではなくドリブルでペナルティエリアに切り込む彼女が、いつも通り笑って元気よく駆け出した。

そして力強く踏み切り、夜闇が落ちた天空に舞う。空から覗く三日月をなぞって、鮮やかに踊った。

「ドリブルは望むところ！ 三日月の舞！」

「きゃ〜!？」

軽やかな舞から放たれた激しい風が榊月の体を地面に縫い付ける。会心のドリブル突破で、完全にシュートコースが開けた。

「やるじゃん、でもここで終わりだ」

「あはは、そう簡単にはいきませんよね！」

そこに1つの影が強引にコースを消し去る。カバーに入っていた

湖池が、抜け目なく明風と再びマッチアップを作った。

苦笑しながらも、彼女は足を止めない。DFとポジションを競り合う伊槌と遠いサイドに走り込む木崎をチラリと見て、湖池の判断を迷わせた。

(どっちだ——)

湖池の目が鋭く細められる。選択肢はパスとドリブルの2つ。

明風と彼の目が、1秒にも満たない時間合う。その瞬間、湖池が迷いなくボールに身体を投げ出した。

「出さないだろ！」

確信のこもった声色で彼女のドリブルを止めにかかる湖池。だが、明風の口元に浮かべられた不敵な笑みに自分の失敗を察する。

「伊槌先輩には出しません！ 無籐先輩！」

明風と伊槌が押し込んだディフェンスライン。空っぽになったバیتالエリアで、切り離された三角形が再び形成された。策がこれ以上ないほどハマった無籐が、獰猛な笑みを浮かべる。

「ハハハ！ 見せてみるキープ！ 全試合無失点の称号か本物かどうかをよオ！」

「……機動計算、威力算出……止めます」

高機が緊張感を放って構えると同時に、無籐がボールに螺旋回転をかけ、上空に蹴り上げる。けたたましい音と共に、ドリルのビジョンが天空に屹立した。

「食らえ！ スクレイパーブレイク！」

飛び上がった無籐が、激しくシュートを蹴り落とす。ドリルのオーラが空気を破壊しながら、力強く高機に襲いかかる。

何にも塞がれることなくゴールに向かうと確信していた無籐。その視界の中で、獲物に飛びかかる鷹のようなソレが、鋭くボールに食らい付いてきた。

「……はあっ……！」

「なっ、あいつ……！」

伊槌が目を見開く。ブロックの正体は、先ほどまで梵場とマッチアップしていたはずの、鳥羽だった。

「シユートコース読んでたのか……!? その上最短距離でブロックに……!」

そう口に出しつつも、信じられないとばかりに奥歯を噛む。そんなのだとすれば、とんでもない視野の持ち主——無感情なその顔が、伊槌の瞳には恐ろしく映った。

「……くっ」

鳥羽の足が、一瞬の拮抗の末に弾かれるそのブロックはシユートの威力を大きく減衰させることはなかったが、予想外のシユートに揺れていた四壁のディフェンスラインを整えるだけの時間は稼いでいる。稼がれてしまっている。

「計算の時間を取れました……感謝します」

ゴールマウスに立つ彼女はシユートから目を離さない。鳥羽よりも深く、冷徹なほど無感情な瞳を外さず、シユートに悠々と両の腕を伸ばす。その腕は、炎のように赤いオーラに包まれていた。

「……計算完了。要望通りご覧に入れましょう、私とその称号に足るかどうか——防火障壁、展開」

両腕を祈るように合わせる。増幅したオーラが、彼女の周囲を燃え上がらせる。両腕を、打ち下ろされたシユートに向けて振り上げると同時に、真紅の大盾が彼女の手元に出現した。

驚く無籐をよそに、発現させた盾で地面を叩きつける。地面と一体化した盾はさながら血に染まった城壁と化して、スクレイパーブレイクを正面から睨みつけていた。

「ファイアウォール・ランパート」

静かな声と共に、紅蓮色の壁がシユートとぶつかり合う。激しい螺旋回転を伴ったボールが、恐ろしい音を周囲に響かせる。

だが、それも一瞬。刹那の拮抗のうちに、高機の技がスクレイパーブレイクを打ち破り、緩やかに落ちるボールがその腕の中に収まった。

「計算通り。勝つのは私達です」

「……チツ、歯牙にも掛けないって感じだな」

シユートを受けつつ涼しい表情を崩さない高機に、無籐が器用に片

方だけ口角をあげながらも冷や汗を垂らす。渾身のシュートを一瞬で受け止められたことは、流石に彼の精神を揺さぶっていたらしい。

——彼女の機械のような視線が、久良島の立つゴールに向けられたことに伊槌だけが気づいた。強い悪寒が背筋を走り抜ける。

「っ！ デイフェンス警戒しろ！」

伊槌が声を張り上げると共に、高機と御時の視線が交わった。

「——カウンター発動。任せました」

「ああ、いくぞ神風！」

「はい！」

高機の鋭いパントキックが、攻め上がって人数の少ない憲戸陣に蹴り込まれる。落下地点には、アイコンタクトで示し合わせた通り御時が先回りして、トップスピン回転でキレ良く落ちるボールを完璧にトラップ。

同時に神風がデイフェンスラインを強襲する。狩人の表情を浮かべた疾風が、ゴールと線を結ぶ。

「やばっ、みんな！」

「ブチ抜け神風！」

ポジションを上げていたことから、慌てて追い継ぐ様崎の前で、神風の足元にボールが入る。翡翠色の瞳が鋭くその背後を射抜いた。

だが、2つの肉の壁が彼の視線を切った。太田と靴木だ。

「間に合ったぞ……！」

「ここで食い止めよう！」

「速さなら僕は負けない……！ 行きますよ！」

構えたDFたちの前で、神風が力強くクラウチングスタートの姿勢をとる。芝の地面を抉り取るほど激しく地面を踏み抜いた、その途端

「——ゼロヨンッ！」

「えっ——」

——まさしく神風が吹き抜け、一瞬のうちに3人のDFをぶち抜く。対峙していた彼らが、背後から見ていた様崎が、認識すらできず神風を見送った。

「ご、ごめん杏奈ちゃん！」

抜かれたことに遅れて気づいた様崎が声を上げる。すでに神風はゴール前に到達していた。

高機のセーブからあまりにも速すぎるカウンター。四壁恒星の真骨頂に唇を噛みながら、久良島が決意のこもった表情で構える。

「くっ……今度こそ止めます……！」

「今度こそ決める……！」

1vs1を作り出してなおスピードを殺さず、むしろ足をさらに回転させて神風が疾る。芝が巻き上がり土埃が立つほどの速度でボールを大きく蹴り出し、瞬きの間に追いついてパワフルなボレーを叩きつけた。

「貫け、マツハウインドッ！」

音速の弾丸が久良島を襲う。息を大きく吐き、努めて冷静を保ちつつ久良島が右腕を掲げる。真つ黒なオーラがその腕に絡み付いた。

——必殺技はイマジネーション。あの時伊槌に言われた言葉が、脳裏で反芻する。

結局久良島は、新たな必殺技を開発することは出来なかった。だが、イメージの源泉、つまり真つ黒パンチを進化させる発想は、掴んだ。

「もつとオーラを込めて……力強く腕を締め上げる……！」

より深い漆黒のオーラが、彼女を腕を包む。それは彼女の右腕を一回り大きくするほど多くのオーラが込められていた。身体を逸らして、地面を激しく踏みしめながら全身を使ってマツハウインドを迎え撃つ。

「真つ黒パンチ……！」

拳を叩きつけると同時に、爆発的な突風が久良島の身体を押し込まんとする。力強く踏み込んで耐える彼女だが、圧倒的なスピードで生み出されたマツハウインドのパワーは、客観的に見ても前までの真つ黒パンチよりも強力だと認めざるを得ない。

「……？」

——格好を演じていたその時、久良島が自身の腕から力が抜けてい

くことを認識して目を見開く。

最悪なことに、彼女の腕を覆うオーラが、許容量を超えてしまったのかとどんと霧散していく。予想外の光景に、久良島の顔が苦虫を噛み潰したように歪んだ。

「くっ……!?!」

「決まれえー!」

動揺した久良島の体勢が、致命的に崩れる。

このままでは止められない——そう確信した久良島が、握りしめられた右腕を一瞬引き戻し、オーラに覆われていない左腕をボールに叩きつけた。

「はあっ!」

そして、再び真つ黒パンチで横合いに殴りつける。瞬間的に無防備に久良島の身体は衝撃に跳ね返されたが、軌道を逸らされたシユートはポストに激突し、けたたましい音と共にゴールを逸れた。コーナーキックだ。

「なっ……くっ、防がれた」

「ナイスセーブ杏奈ちゃん!」

天を仰ぐ神風が奥歯を噛む。倒れた久良島は様崎に手を貸されながらすぐに立ち上がった。

コーナーキックの守備のために戻りつつ、伊槌が口元を拭う。その顔には驚きが色濃く出ている。

「四壁恒星……ここまで強いのか……」

高機を中心とした堅固な守備陣と、神風を要とした鋭い高速カウンター。開始して間もない中、彼らの実力の一片をすで見せつけられた。

どちらも攻略するのは一筋縄ではいかない。これまでの相手とはまさしく次元が違うと言っても過言ではなかった。

「……面白い」

——だからこそ、伊槌の胸に炎が灯る。

「勝つのは俺たちだ……!」

横目でゴール前に立つ高機を睨みつける。伊槌の脳裏には、その背

後にあるゴールネットが揺れる画が、克明に描かれていた。

前半8分

憲戸 0―0 四壁恒星

21話：見えない光

「ふっー！」

御時が蹴り込んだコーナーキックは、飛び上がった久良島が難なくセーブする。その勢いのままカウンタージュと前を向いたが、すでに四壁恒星の守備陣はとてつもない速さで自陣へと戻り切っていた。絶対的な守備への集中力と、兵隊アリのように統率された意識。それを目の当たりにした伊槌が、やりづらそうに口元を拭う。

「久良島、急がなくていい。ゆっくり作るぞ！」

「……はい……！」

スローイングの動作をキャンセルし、久良島がボールをキープする。前半早々から慌ただしかったゲームに、やっと落ち着きもたらされた。

この隙に、伊槌が状況を整理する。

憲戸中の戦術は、梵場と明風のドリブル力を生かしたサイド突破と、トライアングルでの中央突破を織り交ぜた攻撃。

それは目論見通りゴールまで迫った。だが――

「予想以上のキーパーの実力……！ どうにかしてフリーで俺が打ちたい……！」

高機の圧巻のセービングが戦術の結実^{プラン}にヒビを入れた。伊槌はこうは言ったものの、自分でも確実に突破できると断言するほどの自信は無い。

ただとにかく、シュートを打たなければ何も起こせない――高機とて、冷静な風格を漂わせてはいるが人間だ。疲労からくる限界は必ずある。

このまま攻め続ければチャンスは降ってくるだろう。それを承知しているのか、明風も木崎もいまだ戦意は消えていない。

(だけど……)

前線にポジションをあげた伊槌が、背後を確認する。

様崎が太田から横パスを受けた直後だった。彼女は縦のラインを一瞬見たが、その先に構える神風が目に入り、その柳眉を顰めて靴木

にパスを逃す。

ボールを握っているのに、攻撃が停滞していた。

その理由もすでに分かっている。ストライプの背番号10を、忌々しく見やった。

「カウンター神風俊介の圧力……」

前線に得点源が残っているという状況は、それだけでDFたちの足を鉛のように重くする。あのような鋭いカウンターを見せられた後では尚更だと、伊槌は歯噛みした。

まさに『攻撃は最大の防御』。彼の存在一つが、このゲームを支配している。

前線でプレスに駆け回る神風から逃げるように、靴木が様崎に横パスを出した。

「パスにキレがないですよ！」

「おっ、とー！」

伸びた神風の足を難なく回避する様崎。彼女の技術があれば奪われる心配はないだろう。

だが、このまま怯えて自陣で回しているだけでは勝てない。それを承知している様崎も、時折前線へ視線を向けるが穴を見つけられない。

「どうしよっかな——」

様崎がこぼした言葉に応えるように、1つの影が素早く彼女に寄っていく。

「このままじゃラチが開かねえ！ とりあえず出せキャプテン！」

「……！ オーケー、無籐くん！」

それは無籐だった。

彼の自陣に降りる動きで、完全に抑えられていた中盤に、一筋のパスコースが生まれる。彼女にとつて、それはまさに蜘蛛の糸。

様崎はすかさず無籐にパスをつける。DFが無籐に視線を持っていかれた隙を見逃さず、伊槌も裏へと走りディフェンスラインに圧力をかける。

「無籐！」

「っ……最終ライン！ そいつ抑えろ！」

その動きに釣られた仲川が、迷いからか無籐への寄せを一瞬遅らせる。彼が前を向きドリブルの体勢に入るのに、それは十分すぎるほどの猶予だった。

「隙ありだぜエー！ トレジャークレーン！」

「ぐっ!？」

天から降り注いだクレーン車が大地を揺るがす、無籐の十八番。完壁に決まったそれに足を取られた仲川を抜き去り、無籐が中盤戦を制する。

その動きに対応する様に、一気に前線に攻撃のスイッチが入った。

「前線押し込めエー！ チャンス逃すなよ！」

「ああ、行くぞ！」

その一声に押され、木崎・明風・梵場が前線へと殺到して行く。今日一番の勢いを持った攻撃に、GKの高機が僅かに目を細めた。

だが、四壁恒星も未だ黙って手をこまねくだけでは無い。ボランチの御時が猛然と飛び出し、無籐の前方を完全にシャットアウトした。この勢いを緩めたくは無籐だったが、面倒そうに目を細めて急停止する。

「献身的なプレスだなア、少しくらいサボってろよ」

「生憎、チームのために身を粉にするのが信条でね」

「ハッ、とんだ働き者だな！」

軽口を叩きつつも、無籐の頬には冷や汗が垂れていた。目の前の男からは、とても隙が見つからないからだ。

一人では抜けない——そう結論を弾き出した彼の前に、伊槌が走り込んできた。

「無籐、俺を使え！」

「……ハハッ、ナイスだ伊槌イ！」

流動的に攻め上がる前線の隙について、伊槌は逆に中盤へと降りていた。固い中盤を崩す足掛かりとして、ゲームメイクに参戦するためだ。

(だけどゲームメイクで満足する気はない……決めるのは俺だ……)

！)

胸の奥に燦る闘争心を感じながら、無籐のパスを問題なく受け取る。それと同時に、御時の裏をとって無籐が走った。

「よし、ワンツー——!?!」

「……行か、せない……ぞ」

パスを受けた瞬間——この場面を読んでいたとしか思えないスピードで、ボランチの一角を担っているはずの鳥羽が、伊槌に身体をぶつけた。

腕を使つてボールをキープしながらも、驚愕を隠せない。その鉄面皮を苦々しげに睨みつける。

「完全に剥がしたはずなのに……!」

「……無駄……だ」

鳥羽とやりあう伊槌へ、容赦なく御時が迫ってくる。視界の端で、無籐が舌打ちをしながら伊槌の背後、左サイドを指さしていた。

「……俺には、全部……視えて……る」

髪に覆い隠された、吸い込まれそうなほど黒く深い瞳と正面から向き合う。その奥から、底知れないものを感じた伊槌の背筋に怖気が走った。

「いいぞ、そのまま抑えろ!」

「……くっ、三刀屋!」

「オツケー!」

だが、迫ってくる御時を前にした伊槌はすぐにそれを振り払い、無籐の指示通りヒールパスを背後に流す。ポジション通り、伊槌をサポートするようにサイドを上がっていた彼女が、聴き慣れた声をあげてパスを受け取ろうとする。

「もらった!」

「まづっ、しまった……!」

しかし、ヒールで出した力無いボールは、プレスバックを怠らない川島にカットされる。狙いを成功させた彼が意気揚々と笑みを浮かべドリブルを開始する。が——

「いや、まだまだヨ! 旋風陣!」

「くあつ……!?!」

それでもなお食らいついていた三刀屋が、油断した川島の間隙をつき、逆立ちの体勢でコマのように回転を始める。彼女が生み出した旋風によって彼の足元からボールは引き剥がされ、三刀屋の下へと吸い込まれた。

パスマスを挽回してくれた彼女に心の中で手を合わせ、すぐさま伊槌が密集を抜けて走る。

「戻せ三刀屋!」

「了解だヨ!」

多少崩れた体勢をもとせせず、三刀屋から鋭いパスが放たれた。それを胸トラップで収めた伊槌が視線を前に向けた瞬間、鳥羽が当然のように回り込んでくる。

「逃が……さない」

「しつこいな……!」

未来でも見ているかのように突然現れた鳥羽に対して、腕を伸ばしてボールをプロテクト。猛禽類のような黒目と、伊槌の銀色の瞳が交錯する。

「俺が打開する……!」

背筋を伸ばして、覚悟を決めた視線を鳥羽にぶつける。彼も呼応するように構えた。

素早く右足の跨ぎフェイントを挟み、鳥羽の体勢を崩す。その隙を逃さず、ボールを右に持ち出し身体を素早く捻じ込む。鳥羽の身体を力強く押し返し、一歩前に出る。

「……! 早い……!」

「カバーする!」

予想以上の突破力に、鳥羽が僅かに目を見開く。

抜け出しかけた伊槌を目敏く感知した御時が、鋭く足を伸ばしてくることが素早くプロテクト。ルーレットフェイクで鳥羽の第二波も躲し、少し余裕が生まれる。とはいえ八方塞がりな状況に、伊槌は舌を打った。

「ちつ、どうする——」

「こつち展開しろオ！ 伊槌イ！」

「……！ オツケー、良い位置だ！」

だが、伊槌に寄せる御時の背後。その死角を切り裂いて無籐が疾走する。

鳥羽が急いで無籐にプレスをかけようとするが、もう遅かった。御時を背負った状態のまま、伊槌のパスがフリーの無籐に通る。

「……好きには……させない……ぞ」

しかし、鳥羽の献身は実を結ぶ。決死のスライディングが彼の足元を刈り取らんと牙を剥いた。

それでもなお、無籐は一切焦る様子はない。その目はサイドの一点に向けられていた。

「一步、遅エー！」

雄叫びと共に、ダイレクトフライパスが前線に放られる。鳥羽の足がギリギリ届かない、計算されたパスにやりづらそうに彼の目が細まった。

「ふつ、流石無籐先輩。主役が誰かは分かっているようだね」

「ああやってやれ、俺も助演賞もらうぜエー！」

右サイドに開いていた梵場が、難しいパスを楽々収める。トラップを刈り取るうとしてプレスに来ていたDFの木島がその滑らかなボールタッチに目を剥いた。

「上手いっ……!?!」

「驚くにはまだ早い！ スピニングドライブ！」

一瞬足の止まった木島の間を見逃さず、梵場のドリブルが火を吹く。コマのような高速回転の圧力に怯んだ敵を華麗に抜き去った。

梵場の陽気なサングラスがキラリと光る。小道具すら妙に気取った仕草を起こす。

「ディフェンスフォーメーション修正。直ちに外敵の排除をオーダーします」

「はいっ、任せてくださいー！」

梵場の突破を見た四壁恒星の守備陣は、高機のコーチングの下素早くアクションを起こしてくる。榊月がゴール前に張り付いてシュ-

トブロック役を担い、SBの安岡もエリア内に入って完全防御体制だ。

「守備の穴を埋めるのが早い……流石、一筋縄ではいかないね」

「——ありがたいお言葉だねッ！」

目を細める梵場を急襲したのは、先ほどまで中盤にいたはずの御時。刃物のようなスライディングがアフロヘアーの足元に襲いかかる。

だが——

「フツ、読んでいるさー！」

無籐・伊槌たちとのやり合いでも、献身的に守備に参加していた彼に、警戒を怠るほど梵場は愚かではない。危なげなくその足を回避し、その視線の先にいるのは——

「梵場ッ！」

「俺もいるぜエー！」

憲戸が誇る2つの矛、伊槌と木崎。ゴール前に雪崩れ込む彼ら目掛けて、梵場が鋭いクロスボールを供給する。

「ナイスボール……！」

そのパスは、ニアサイドに詰めた伊槌のランコース上に放たれた。打てる、そう思った瞬間、伊槌の背筋に怖気が走る。背後に視線を向けた先には——

「フリーには……しない……ぞ」

「こいつ……！」

ボランチの鳥羽だ。何度も立ち塞がってくる彼に、伊槌は少々辟易とする。まるでクロスが入る前から伊槌が打つと分かっていたかのような素早いディフェンスだった。

それでも伊槌は奥歯を噛んで右足を引き絞る。刺すような視線で、高機を睨んだ。

「……！」

鳥羽がブロックに入る。計画通り。

振り上げた足を止める。シュートフェイクだ。鳥羽もこれは予想外だったようで、その薄い表情を僅かに歪めた。

視界の端つこでは、明風がペナルテイエリアに侵入している。身体を捻って、即座にパスに繰り出す。

「行け、明風！」

「はいっ！」

だが、明風にボールが渡った瞬間、これまで通り素早く連携したデイフェンスが立ち塞がる。竹編み笠を首に下げたDF湖池こいけいっしゅう一舟が、抜け目なくゴールを塞ぐ。シュートコースを狭められたことに、明風が少し唇を噛むが、すぐに目を見開いてかぶりを振る。

「お前らの攻撃、ここで沈めてやるよ」

「いや、抜き去って点を奪います！」

明風が夜闇に染められた天空に舞う。漆黒の中で昇る三日月が、彼女が天空で描く舞踏のように光り華やいでいた。

「三日月の舞！」

もはや明風の代名詞とすら言えるこの必殺技。天空から疾風の刃が湖池を襲う。だが――

「……そいつはもう見た。同じ手は食わないぜ」

「えっ!？」

右に、左に――川に浮かぶ小舟のように、流麗で軽快なフットワークを持って襲ってくる風の猛攻を凌ぎ切った。まさかの展開に、明風の脳裏を焦燥が支配する。

(こ……このままじゃ取られる!)

「明風ッ、戻せ！」

伊槌の声すら届かない自由落下の体勢で焦る思考が答えを逸る。打つしかない――。

中空で体を捻る明風。その僅かな動作を、湖池は見逃さない。すぐさま指示を飛ばす。

「打ってくるぞ、榎月！」

「よくし、任せてください！ お掃除します！」

飛ぶような速さで榎月がシュートの軌道に割り込む。それを見た明風の眉が僅かに顰められたが、もう打つ以外の選択肢はない。

無理な体勢のまま竜巻を描くように回転し、そのエネルギーによつ

て闇色の炎を纏わせた右足を、力の限りボールに叩きつけた。

「くうっ……ダークトルネードっ！」

黒色の焰が、天空に軌跡を描いてゴールはと一直線に襲いかかる。だが、このシュートはあまりにも素直だ。難なくコースを見切っていた榊月が、当然のように立ち塞がった。

「任せました」

「はいっ！ お掃除、しちやいますね！」

高機の言葉に、榊月が可愛らしく笑みを浮かべて応える。その手には、いつのまにかモップが握られていた。

彼女は身体を大きく捻って振りかぶる。瞬きの後、渾身の力で振られたモップが、台風とすら形容できる突風を吐き出す。

「スイープストームですっ！ ほっ！」

「きやあっ!?!」

暴力的なほどの風圧は、ダークトルネードを包み込み、その背後で自由落下していた明風を地面に叩きつける。思わずといった様子で声を上げた彼女が、はっとした風に、ボールを行方を求めてゴールに視線を投げかけた。

「えへへ、我ながらナイスブロックですね！」

「……くうっ」

完全に威力を殺されたボールが、榊月の足元に鎮座している。歯を噛み締める明風。

——だが、その光景は、明風にとってもある意味予想通りだった。

「……やっぱり、私のシュートじゃ……」

悔しげに目を伏せる彼女の喉が、意図せず震える。誰に向けたものでもないその言葉は、ダークトルネードのように風にさらわれて消える——

「なあ、お前さ」

「……えっ!?!」

——はずだったそれは、意外な人物に拾われた。

明風に声をかけたのは、三日月の舞を凌ぎ切った四壁恒星のDF、湖池だった。どこかぼんやりとした、厭世的な瞳をした彼は、首に下

げた笠をなんとはなしに弄って、明風に視線を合わせている。

「なんで自分で打ったの？」

気怠げな雰囲気はそのまま、湖池がそう疑問を投げかけた。少し言葉に詰まった明風だが、すぐに口を開く。

「それは、私が打つしか選択肢がなかったからで……」

「——いや、中には9番^{木崎}もいた。パスくれた11番^{伊樋}にリターンパスつて選択もあった」

滔々と言葉を並べる湖池に、明風が少し後ずさる。動揺、そして底知れない恐怖からくる反応だった。

話し疲れたのか、湖池が1度ため息を挟む。

「ドリブルは結構上手いけど、シュートは弱い。パス能力はあっても視野はそんなに」

「……………」

湖池の並べる言葉の1つ1つが、ジクジクと明風の心臓に突き刺さる。

——そんなこと、言われなくてもわかってる！

彼女の胸の奥が、その声を上げるが、実際の明風は何も言えず、ただ立ち尽くすのみ。自分の弱点を、無遠慮にあげつらわれる居心地の悪さだけが彼女を支配していた。

「お前さ……………」

「……………な、何ですか……………」

ぼんやりとした、諦観にも似た暗い湖池の目が、明風へ向く。何か猛烈に嫌な予感がした。

彼の言葉を今すぐ遮らなければならないような、そんな予感。だが、明風が何かを言うより、少し早く。

湖池が、爆弾を落とす。

「FW、向いてないんじゃない？」

「……………あ——」

——目を逸らし続けていた真実が、明風を押しつぶした。

22話：諦めろ

彼女の憧れの始まりは、実に平凡なものだった。

父親がサッカー選手だった。ポジションはFW。ピッチをドリブルで鋭く切り裂き、その右足で数多のゴールを奪う、フットボールの揺るがぬ主役。

その姿に憧れた。テレビの中ではなく、いつも庭でボール遊びをしてくれる、目の前にいる人間に憧れた。

物心ついた頃には、すでに彼女もFWの道を歩んでいた。父親に教わったドリブルで、父親に教わったパスで——たゆまぬ向上心と頭から離れない情景が、今も変わらぬ彼女の原動力。

だが、彼女はひとつだけ、父親から受け継げなかったものがある。それは、FWとしては欠かすことのできない、シュート力だ。

——致命的だった。男子に比べて筋力で劣る女子として生まれた彼女では、父親の天性のフィジカルから放たれるキックを模倣することとは出来ない。たったそれだけの差が、いや、それが違ったからこそ、彼女はストライカーになれず、平凡なFWにしかなり得なかった。

言われ続けた。

『MFの方が向いてるよ』

そのどれもが心に突き刺さる。

『ドリブルは上手いんだけど……』

自分の道を信じてくれない、心ない言葉たち。

『シュートするな！俺にパスを出せよ！』

それでも、折れなかったのは、平凡で、だからこそ尊い理由。

『——輝夜は最強のFWになれる！』

いつだって信じてくれた、憧れの言葉。それがいつも、彼女を奮立たせる。

FWとして起用されない悔しさを、特段出来がいいとは言えない頭でも分かる、MFという逃げ道を、全て振り切って、自分の信じた道を貫いてきた。臍に浮かぶ月のような淡い希望を追い続けた。

そして、1人の男と出会う。

それは、まさに憧れたストライカーの体現だった。自由自在にゴールを奪い、勝利をもたらすヘッドライナー。その姿に少女のように憧れ、そひて、ほんの少し嫉妬する。

ああなりたい、負けたくない——その一心。燃える情景が、さらに激しい夢となつて燃え盛る。

だが、隣に立つたたび、ああはなれないと思つてしまふ。分かつて

試合に出るたび、勝てるわけないと思つてしまふ。知つて

目を逸らしていた。いつものように。周囲の不信に対してそうしていたように——

『FW』

そして、終わりはやってくる。夜が明けるように、現実と向き合う時は来た。

『——向いてないんじゃない?』

奇しくも、それは最悪のタイミングで。

「——おい! 明風!」

「……! あ、は、はい!」

榊月がダークトルネードを受け止めてすぐ、伊槌は茫然自失といった様子で明風に対して、声を張り上げる。そしてすぐさま腕を振るつて、『守備をしろ』と言葉なく伝えた。

その伊槌はいち早く動いていた。榊月がブロックの体勢に入ったと同時に彼女にプレッシングを行い、すぐさま奪い返そうとする。

「わっ、早い! 一旦戻しますね、弥雷ちゃん!」

「了解。リスクをとらず、確実にボールを保持します」

だが、流石と言ったところか。彼女は焦りながらも背後にいた高機にパスを出し、GKを含めたDFラインで確実に細かいパスを回し出す。奪えればビッグチャンスだが、彼らの技術もあつてなかなかボー

ルを奪えない。

「そう簡単にはいかないか……」

思わずそうぼやく。すでに試合開始から15分が経過しているが、未だ伊槌にチャンスは———それどころか、憲戸は決定的なチャンスを作り出すことすらできていない。

対する四壁恒星は、開始直後の神風含め、2本のシュートシーンを作っている。客観的にみても、憲戸は完全に押されていた。

「キャプテン！ 10番への警戒緩めるなよ！」

「おっけーだよ無籐くん！」

だが、それでも憲戸の戦意は消えていない。戦術を修正して、神風を様崎と太田の2人がかりでマークしてカウンターを警戒する。

決定機は全て御時↓^{から}神風のホットライン———ここを潰すことこそが、憲戸の狙いだ。事実、それに手をこまねているのか、四壁恒星はDFラインで回すだけで、敵陣にボールを入れることができないでいる。

これなら———手応えを感じる暇もなく、御時にボールが渡った。

「ここは僕が行く！」

神風へのパスではなく、ドリブルを選択してフィールドを突き進む。今までにない形に、伊槌は少し動揺を見せながらもすぐさま立て直して声を上げる。

「ディフェンス頼む！」

「ああ、任せたまえ！」

伊槌の声に呼応したのは梵場。軽快な動きで御時の前方に立ち塞がり、虎視眈々とボールを奪える瞬間を睨む。

だが、御時は慌てるそぶりもなく梵場に向かい合い、パチンツ、と小気味良く指を鳴らした。

その合図を待っていたかのように彼の背後には時計の文字盤が浮かぶ。ローマ数字が彫られた時計は、規則正しく針を回し、時を刻む。

「これは……!?!」

「着いて来れるかい？ ラピッドクロック！」

瞬間、長身が目まぐるしく廻りだす。

それに付随するかのようには、御時の動きは加速して、梵場の認知速度すらも超える。彼は早すぎる目の前の男を目で追うことすらできず、その場に縫い付けられたように硬直してしまう。

気がつけば、御時は既に梵場の背後へとドリブルを成功させていた。

「ぐつ、僕が翻弄されるとは……!」

「気に病むな。ディフェンス、気を引き締めるぞ」

靴木の落ち着いた声がフィールドに伝播する。幾分か冷静さを取り戻した憲戸は絶えず御時にプレスをかける。が――

「鳥羽!」

「……いる」

いつの間にか上がってきた鳥羽が、御時と並走してフィールドを駆ける。衛星のように付き従う彼に、無籐が舌を打った。

「ちよこまかと……! 三刀屋ア、ここで止めるぞ!」

「御意! だヨ!」

無籐と三刀屋のプレスが、嵐のように襲いかかる。同時に、2人は一瞬アイコンタクトを交わす。

「……………」

「ああ、最高だよ!」

「がア、クソっ」

鳥羽が、御時が1番コンビネーションを行いやすいであろう最適なポジションを取り、軽快なワンツーパスが通ってしまう。真正面から無籐たちのディフェンスを食い破り、ついにDF陣の前までドリブルで侵入してきた。

スピードを緩めず突っ込んでくる御時に対して、様崎が、思わず一歩だけ近づく。

「まずいかもね……私が止めに――」

「――ここだッ!」

その瞬間、御時の右足から鋭いフライスルーパスが放たれる。虚をつかれた様崎が、ぎくつと足を止めてそのパスの先を見やると、彼女が警戒を緩めてしまった神風が一直線にパスに突っ込んでいた。

「やばっ……!」

様崎が後悔の声を漏らすも、どうにもならない。

来た——と神風が声に出さない興奮を感じながら、鋭く落ちるボールに足を伸ばす。ワントラップからのシュート——

「はあっ!」

「っ、何だ……!」

——それを辛くも阻止したのは、ゴールマウスから大きく飛び出した久良島だった。

GKにとってゴールを開けることは当然大きなリスクの伴った行動。だが、彼女のこの判断は四壁恒星が巧妙に作り上げた決定機の芽を確実に摘み取る、実に冴えた方法だ。御時が歯噛みする。

「今のが通らないか……!」

「ナイス杏奈ちゃん! ボールカバー!」

ミスを取り返すように、様崎がボールの落下地点に入る。問題なくボールを回収できるポジションだ。

だが、構える少女の顔に、暗く影がかかった。それは、大きく飛び上がった鳥羽の姿だった。

「うそ!?」

「……読んで、た……!」

誰も干渉できない中空で、鳥羽の猛禽類のような鋭い金目が、久良島が飛び出したゴールを射抜く。猛烈な怖気が背筋を伝った。

「久良島、戻れ——」

伊槌の叫びと、久良島の戻りを待つはずもなく、鳥羽が動く。

空を舞ったまま、天へと大きくボールを蹴り上げる。鋭く打ち上がるボールを追うように、空気を蹴って鳥羽がさらに高みへと飛び上がった。

その姿はまさしく鷹。悠然たる空の王者を幻視するほどの威圧感とともに、ボールを追い越した鳥羽が、強烈なかかと落としを放つ。

「……グライドバード……!」

狩りをする肉食鳥のような勢いで蹴り落とされたシュートは、地面へと一直線に向かい、激突する寸前で軌道を急激に変えて低空飛行で

ゴールへと襲いかかる。

「サテライト……っ、ごめん間に合わない！」

様崎がサテライトドローを発動させようとするが、一步遅い。シユートは容赦なく彼女の横をすり抜け、切り裂いた空気が様崎の髪を揺らした。

「くっ……真っ黒——」

「やめろ久良島ア！……ここでハンドしたら退場になるぞ！」

焦った様子の久良島がその右腕に闇のエネルギーを纏わせるも、無籐の言う通り今の彼女はペナルティエリアの外にいる。GKであっても、手を使うことはできない。

それでも、グライドバードは必殺技を使わずに止められるほどヤワなシユートではないだろう。

それに相手は守備に長けた四壁恒星。たがが一失点でさえ敗北を想起させる。

「絶対止めないと……でも……！」

どうすれば——堂々巡りとなった久良島の思考を壊すように、1人の大男が彼女の盾となるように仁王立ちした。

「ここは僕に任せて……！」

「太田先輩……!?!」

その影は太田だ。グライドバードが打ち込まれる前に戻ってきていた彼は、シユートを真正面から見据えて深く息を吐く。

「僕はもう逃げない……逃げたくない！……絶対に守ってみせる！」

雄叫びとともに、グツと身体を締め、体操選手のように回転しながらの跳躍。遠心力と重力によって倍増されたパワーが、両足に黄色いオーラとして宿る。

そして、全体重と渾身の力を込めて、太田がフィールドを踏み抜いた。

「パワースタンプッ！」

踏み抜かれた地面を爆心地に、黄色い衝撃波が円状に伝わっていく。それはシールドとなり、グライドバードと正面から鏖迫り合いを演じた。

パワーとパワーがぶつかり合い、火花を散らす。

だが、均衡は一瞬。じきに威力の勝るパワースタンプの衝撃波が、スピード重視のグライドバードを飲み込んだ。

「……くっ……止められる……か」

「これが僕の……僕たちの新しい必殺技だよ！」

力を無くしたシュートが、風に吹かれて太田の足元に転がる。彼はそのボールに足を乗せ、自らを鼓舞するように大きく声を上げた。

「ナイスだよ、オオタ！ それにその技、ちゃんとカンセイしてたんだネ！」

四壁恒星戦の前に行った特訓の中で、太田が描いていた新しい技のイメージ。彼がそれを、完璧にものにしていたことに三刀屋が賞賛の声を上げる。

太田は少々照れ臭そうにトレードマークの麦わら帽子を被り直し、三刀屋に親指を立てる。

そこに、おずおずと言った様子で久良島が声を上げた。

「あの……フオロー、ありがとうございます、太田先輩」

「気にしないで、杏奈さん。このゴールは僕たちで絶対に守り抜こう」
軽く微笑んで太田がそう返す。そしてすぐに、ミッドフィールドで手を挙げる無籐に視線を移した。

「それで、絶対に勝つんだ！ 後ろは僕たちに任せて攻めてきて、無籐くん！」

「……ハッ、随分頼もしくなってくれたなア！」

太田からのロングパスが、一気に無籐へと渡る。獰猛な笑みとともにそれを受け取って彼は、指揮者のように手を振るって伊槌たちへ声を荒らげる。

「おら、全員攻めろ！ 前半で点取るぞ！」

「おおっ、行くぜえ！」

その言葉で木崎がいの一歩に走り出す。伊槌も遅れないようにディフェンスの裏を狙いながら、無籐のパスを受けられるように慎重にポジションを調整する。

（状況はこっちのカウンター……！ ゴールを奪うチャンス、だが――

伊槌はそこまで考えて、チラリと周囲と、背後の無籐を確認する。無籐には既にデイフェンスとして仲川らがついており、伊槌にもDFが1人マークに来ていた。

「チツ、カウンターなのにデイフェンス多いなア……!」

「当たり前だろ、四壁恒星のモットーは『堅守速攻』だ! いったって俺たちはデイフェンスからリズムを作る!」

デイフェンスに阻まれ、無籐の進軍が止まる。このまま手をこまねいていけば、四壁恒星の守備は仲川の言う通りさらに盤石なものとなってしまう。

なんとそれでも攻撃の糸口を掴む。そのために、伊槌はゴールへ向かう身体を切り返し、急旋回して無籐へパスを要求する。

「無籐、ワンツで打開する!」

「おう、いいポジションだぜ伊槌!」

即座にその動きに反応した無籐からのパスが伊槌に届く。同時に、加速した無籐が対面していたデイフェンスを置き去りにする。

そして即座にパスを戻す――

「…………いや、違うな」

――そうとして、伊槌がある種の本能と共に足を止める。

そして、予感どおりそこに割り込む影が1つ。常に中盤の攻防に絡む仕事人が再び現れる。

「……………単純な、攻撃は。通用、しないぞ」

「チツ、きつきシュートしたくせにもう戻ってきやがった……!」

無籐が思わず舌打ちする。プレスバックを決して疎かにしない意識の高さに、伊槌も舌を巻いた。

だが、今回は確かに読み切った。

「ふっ!」

「ぐっ、しまった……!」

無籐が封じられるや否や、伊槌が背後のDFを軸にしてターンする。鮮やかなボールタッチに、デイフェンスは反応できない。

これで前が開いた。少し遠いが、シュートを狙える位置。

「皆さん、最大限の警戒を。既にシュートレンジです」

「はいはい、分かっているよ。やるだけやるさ」

しかし、それは相手も承知の上だ。高機の淀みない指示が飛び、デイフェンスラインが堅固に形成される。

「このまま打つても、決まらない……」

デイフェンスが多すぎる。無籐のシュートを楽々止めて見せたあのGKなら、伊槌といえどシュートブロックを超えて打ち抜くことは容易ではない。

ならば、と伊槌は高らかに叫ぶ。

「空いてるだろ、明風ッ！」

「っ、はい！」

伊槌につられてデイフェンスは中央に寄っている。ならば必然的に、サイドの明風はフリーとなっていた。彼女の足元に、ノールックで伊槌のパスが届く。

「——おいおい、行かせないっての」

「……くっ！」

だが、湖池が悠々と立ち塞がる。その姿を認めた途端、明風の表情は苦虫を噛み潰したようなものに歪んだ。

前傾の姿勢で構えこそとっているが、明風の身体は縫い付けられたように動かない。脳裏によぎるのは、心に突き刺さったあの言葉。

——FW、向いてないんじゃない？

「っ、やあああ！ 三日月の舞ッ！」

頭の中を支配する真実から逃げ出すように、明風が夜闇に飛ぶ。この試合でも見せた、彼女の十八番だ。

それを目の当たりにしてなお、湖池はその気怠げな眼を見開くことはなかった。

「……なーんで諦めないのかなあ」

明風から放たれる疾風の刃を、水の上を揺蕩うような独特のステツプで掻い潜る。その様子に、明風のような必死さはまるで感じられない。

「才能がないのに頑張ったって辛いだけだろ？ 人生諦めも肝心なん

だよ」

「ッ、そんなこと——ない!」

叩きつけるような言葉とともに、全てをかけて明風が足を薙ぐ。この日一番の強烈な風の刃が、湖池を切り裂きにかかる。

湖池は、細くため息を吐くだけだった。

刹那、素早くしゃがんだ体勢に移った湖池が地面を触る。その指先からは触れる芝の地面から、石を投げ込まれた水面のように同心円状の波紋が、大きくうねりをあげる。

その波に呼応するように、湖池の背後の地面がせり上がり——否、地面が強烈な津波に変化して、あるはずのない自然の暴力が明風の前に姿を現した。

「えっ……!?!」

「この技、俺のポリシーに反するからあんま好きじゃないんだけど」
眼を見開く明風とは対照的に、湖池は酷くうんざりした様子でつぶやく。

「ま、これも先達としての務めってやつかな。呑み込んでやるよ、ダイタルウエーブ」

「うがっ……!?!」

その言葉とともに、大波がフィールドを埋め尽くす。明風の放ったかまいたちごと、彼女の身体を呑み込んで容易くボールを奪い取られてしまった。

明風の身体が、強かに地面に叩きつけられる。

「ぐうっ……わた、しは……」

うめき声をあげて立ち上がるとする明風の頭上に、影がかかる。弾かれたように顔を上げたその瞳の先には、ボールに足を乗せて、シニカルに微笑む湖池が佇む。

湿った前髪の間から覗く明風の瞳を、しっかりと射抜いて、湖池は、重々しく口を開いた。

その言葉を聞くべきではないと本能が訴えたのに、彼女の耳朶は、その優しい声を捉えてしまう。

「やっぱさ、FW向いてないんじゃない?」

——子供を諭すような。才能を嗤うような。

無慈悲な諦観を前にして。

「あ」

明風の瞳は、光を失った。

「明風……!?! どうした……!?!」

湖池とのデュエルに敗北してから一向に立ち上がらない明風を見て、伊槌が焦ったように声を漏らす。だが、怪我でもない様子なために、審判は試合を止めないため、伊槌も動きを止めていられなかった。

湖池がボールを高機に戻す。それを見た無籐が、声を張り上げた。

「あつちのキャプテン御時は俺がつく! デイフェンスラインは10番警戒しろ!」

「流石の対応力だな……」

GKからの攻撃は先ほども見ている。無籐が言うように、常に起点となっている御時さえ潰せば効果的な攻撃は機能しないはずだ。

ボールを持つ高機がゆったりと周囲を見渡す。パスコースを探しているようだが、致命的なところは無い。それに安心して、伊槌は一瞬気を抜いた。

——そう、気を抜いてしまった。

「……」

高機が前を見据える。その視線の先には、御時の姿。

「……ははっ、ああ、やってやれ高機!」

「……許諾を確認。感謝します」

無言で行われる視線の交錯。高機の刺すような目に、御時は少し困ったように微笑んで、頷いて見せた。返答するように、高機が頷い

てより遠くを見据える。

「なんだ……？」

その様子に伊槌はただならぬものを感じるが、動けない。自分が好き勝手に動けば、DF達へのパスコースが広がってしまうからだ。

そして、誰の妨害も受けないまま、高機が力強く右足を踏み込んだ。

「照準、固定完了。エネルギー充填——20%……50%——」

ギリギリと刺すような闘気が彼女の身体から漏れ出てくる。同時に、高機の右足から、右目から、伊槌のものとは違う、されど同じだけのパワーを秘めた青白い電流が炸裂を始めた。

「……これはっ、ヤバい！」

自分の電閃にすら比肩する激しい電撃を放つ様に伊槌が飛び出して高機を妨害しようとする。が——

「させませんっ！」

「ぐっ……！」

四壁恒星の選手たちに、身体を張って止められてしまう。ここまで来れば、彼女の『アレ』が尋常なものではないと嫌でも気づく。伊槌の背中に冷や汗が伝った。

「——帯電効率、エネルギー充填率、共に120%突破を確認」

「……いつら……こんな隠し球を……！」

もはや右足だけにとどまらず、雷鳴による力の奔流が高機の周囲に溢れ出している。右足で弓を引くように、大きく背後に引き絞り、鋭い視線が遥か遠くの久良島を貫いた。

「……っ、来る……！」

「発射準備、オールクリア」

もはや過剰とも思える青電を全身に唸らせ、高機がつぶやく。炸裂と爆破と繰り返すその電流は、もはや暴力と形容するにふさわしい力を振りまいていた。

「——オーバーロード・トライアンフ。 イグニッション 点 火」

——刹那、蒼き豪雷が、閃光となってフィールドを抉った。

「なアツ……!?!」

「やばっ……!」

「ぐっ……!?!」

警戒心をむき出しにしていた憲戸のDF陣が、全く反応できないほどのスピードだった。様崎も、無籐も、靴木も、気づいた頃にはもう遅かった。

馬鹿げた威力を持つ雷電が、濡れた紙を貫通するようにデイフェンスラインを突破し、歯を食いしばって右腕に暗黒のオーラを纏う久良島に襲いかかる。

「久良島さんっ、ごめん、頼む!」

「……はい! 真っ黒、パンチッ!」

未だ進化の糸口を掴めていないながらも、太田の祈るような声に押された久良島の、渾身の拳がシュートを迎え撃つ。紛れもない彼女の全身全霊となる真っ黒パンチが、高機のシュートの鼻っ面を殴った。

だが――

「……! つ、うあぁっ……!?!」

「……切り札は、必ず刺さる場面で切ってこそその切り札なのです」

拮抗は一瞬。炸裂する豪雷が、漆黒の闇を難なく打ち払い、久良島を弾き飛ばす。決った芝と土が、祝福のダイヤモンドダストのように天空を舞っていた。

蒼がゴールネットに突き刺さる。それだけに留まらず、常識はずれのパワーを内包したそれは、なんとネットを突き破り背後の観客席下のフェンスに突き刺さって、やっと動きを止めた。

誰もが、その異常を前に、憲戸の誰もが口を開けない。空気を切り裂くように響いた得点のホイッスルの後、変わらない鉄面皮のまま、しかし口角を少し上げたGKの少女が呟いた。

「ミッション、コンプリート」

GOAL!!?

20分 高機弥雷

アシスト：湖池一舟

憲戸 0―1 四壁恒星

「……あーあ、ほんと。天才ってのは見てるだけで気が滅入るね」
光を失った瞳を思い出しながら、少年は死んだ顔で放った言葉は、
監修の声援に吞まれていった。

23話：夢見る月夜

「嘘だろ……何だ、今のシュートは……！」

フェンスに突き刺さったボールを苦々しい表情で睨みつけながら、伊槌がそう呟いた。

高機はゴール前からシュートを放っている。そうならば当然、その分ボールは長い距離を進むことになり威力の減退を受けるはずだ。だと言うのに――

「や、ヤベエな……今の、伊槌のシュート並……」

木崎がこぼした言葉に伊槌が歯噛みする。感情を噛み殺しながら重く口を開いた。

「いや、最早俺以上だ……フィールドを縦断するシュートは俺には打てない」

「あいつは本当にGKなのか……」

この試合の中でGKとして高い実力を見せた上に、この出鱈目な威力のシュートまで併せ持つ怪物――未だ蒼雷を身に纏って大きく息をつく高機を、伊槌はただ睨むことしかできない。

憲戸陣営に広がり始めた重い空気。それを取り払ったのは、野太く荒い檄だった。

「オオイ！ ビビりすぎんなお前ら！ どんなスーパーゴールでも一点は一点だ！ まだ取り返せる！」

「そうだ、まだ前半も終わっていない。諦めるには早すぎるぞ」

無籐の雄叫びに、靴木は厳かに同調する。

その通りだ、と伊槌は大きく息を吐き、気合を入れ直した。取られたなら取り返す他ない。

伊槌たちの顔色が戻ったことを認めた無籐は、その口角を凶悪に上げながら言葉が続ける。

「考えがある。キックオフと同時に、全員敵陣に走り込め。真正面から守備を突き崩すのは厳しいかもしれないが……これなら可能性はある」

「……おう！ よく分かんねーけど、とりあえず走ればいいだけだな

！ それは俺でも分かったぜ！」

「本当に大丈夫かい、君……」

「へッ、ボールを追い回すことさえ分かってりゃ構わねエ」

木崎の気の抜けた無駄に力強い返事に、いつの間にか近くにあった梵場が肩をすくめた。その緊張感のないやりとりが、伊槌にとっては心地いい。息を漏らすように微笑みを浮かべた伊槌の肩から余計な力が抜けていく。

そして、審判から新しいボールが伊槌に手渡される。センターサークルに視線を向け、その先のゴールを射抜いた。

「……前半の内に一点返す！ 行くぞ木崎、梵場、明風！」

「おう、俺が決めてやる！」

「ふっ、あの子猫ちゃんの子猫ちゃんを射抜くのは僕だよ」

先ほどまでの恐れが嘘の様に、木崎が威勢よく高機の守るゴールを指さす。再構成された四壁のフォーメーションに鋭い視線を向ける憲戸中が、それぞれのポジションに散って、試合再開の用意が整っていく。

「……うん？」

その中で、一つ動かない影を、梵場が認識する。伊槌に名を呼ばれたもう一人である明風が、俯いたまま立ち尽くしていた。

「……私は……」

「どうしたんだい、子猫ちゃん？」

そう声をかけられた明風は、弾かれたように顔を上げ、力無く開いた目を梵場と合わせた。

「……！」

だが、次の瞬間には黒いキャンパスに白のペンキをぶちまけた様に、いつも通りの笑顔に変わる。

「あ、すいません！ なんでもないですよ！ よーし、絶対取り返すぞー！」

「……そうだね、さあ、行こうか！」

はい、と大きく返事をした明風がせかせかとポジションに戻る。いつもと同じ、底抜けに明るい明風と何ら変わらない後ろ姿。

「——明風くん……」

梵場はその姿を、脳裏で雲に隠された朧月と重ねた。

審判の笛が再び鳴る。その合図とともに、伊槌は無籐にボールを預け、一目散に四壁陣内へ駆け出した。木崎もそれに倣う。

「二気に行くぞ……!」

「! 警戒を怠らない!」

伊槌の動きに釣られ、少し四壁の重心が後ろにずれる。それを承知の上で、伊槌たちは足を止めない。

「何を狙ってる……?」

「よし、行くぞお前ら!」

狙いの読めない動きに、御時は困惑を隠せない。その思考が落ち着くのを待たず、無籐がシンプルなロングボールを前線に蹴り込んだ。

ゴールへ一気に向かう長いパスに、木崎と伊槌が我先にと飛び込む。が——

「通すわけ……ない……!」

空中のボールを鳥羽が掻っ攫う。自暴自棄のロングパスなんてものは四壁恒星ちやに通用しないとばかりに、その口角をほんの僅かに上げる。

しかし、その表情はすぐ驚きの色に染め直された。

「——だろうな」

「……!」

この試合、DFのポジションに入っていたはずの靴木が、猛烈な勢いで鳥羽にプレッシングを行う。流星に予想外だったのか、一瞬反応が遅れたのが運の尽き。

「今度こそ……クツキーウォールツ!」

「ぐっ……」

壮大にそりたつた菓子の壁が、大地を揺らして鳥羽の足をもつれさせる。ころりと転がったボールは、靴木の下へ。

奪って、奪われ。目まぐるしく変わる状況に、一瞬四壁恒星の足が止まった。

「来いッー！」

「ああ、走れ！」

狙い通り、当然見逃さない。間髪入れず、再び最前線のFW2人へ強烈なパスを刺す。反応を示したのは、伊槌だけだ。

パシッ、と。パスの勢いを完璧に殺し、次の動作へと最速で移る完璧なトラップ。すぐさまゴールを睨む。

「打てる……！」

視界に映るのは高機のみ。それを認識した伊槌は、素早くボールをリフトアップして電閃の体勢に移り――

「スリープストーム！ どっせえい！」

「電ッ……!?!」

――だが無慈悲にも、その身体はDF榊月の振るつたモップによる突風で『掃除』されてしまった。

「えへへっ、掃除は得意なんですっ！」

四壁恒星のDFは伊達ではない、いつまでも惚けているようなものはいなかった――流石のレベルに、伊槌は砂を噛み締める。

こぼれ球は別のDFがすかさずクリア。そしてそのボールの先には、御時が待っている。

「よ……！」

その時、伊槌は脳裏でカチッ、スイッチが入るような音を幻聴した。御時にボールが入ることが四壁恒星のカウンターのスイッチ。この瞬間だけ、チームの重心は前に寄る。

つまり――チャンス。

「テメエを潰せば、俺らがカウンターの番だよなア！」

「っ、早いッー！」

無籐が力強いチャージを御時にぶつけ、前を向かせない。だが御時も、懸命に身体を、テクニクを使つてボールキープを試みる。

だが、そこに猛進する影が1つ。

「うおらあ！」

「ぐっ、9番^{木崎}!？」

最前線の木崎が、全速力でプレスバックをかけ、渾身のスライディングが御時のボールを大きく弾いた。これには流石の御時の顔にも、動揺が色濃く出る。

「くっ……明らかに、作為的な動き……!」

御時はこの一連の憲戸の守備に、ある意図を見透かしていた。

DFを無視した暴走紛いの2トップ、それに当てるシンプルなロングボール、DFすら出張つてのハイプレス、カウンタースイッチの御時を狙い済ましたダブルプレス——四壁恒星のアンチテーゼのよ
うな、超・攻撃的ディフェンス。

——これらは全て、今日の前で凶悪な笑みを浮かべる、この男に仕
組まれた、と。

「——ハッ、最高だよなあ？ 格上の相手を、策に嵌めて上回るのは」
極めて愉快そうに、無籐は相貌を歪める。凶悪な瞳の奥に、勝利への執念が爛々と光り輝いていた。

無籐が弾いたボールを確保して、背後の梵場へヒールパスで流す。
受け取った梵場は、不敵に笑って無籐を追い越しゴールへと迫ってい
く。

「くっ、行かせるか……!」

DFが急いでプレスをかけるが、度重なる攻守交代に頭がついて
いっていない、明らかに単調なディフェンス。

「フッ、そんな焦るべきじゃないよ。余裕のない男はモテないのさ」
そう言つて梵場は、軽く相手を左右に揺さぶる。警戒を強めて少し
距離を詰めてきたその一瞬を逃さず、ノーマークの頭上をヒールリフ
トで通し、華麗に抜き去った。

「なっ!？」

「さて、このまま行ってもいいが……」

驚愕の声を気にも留めず、梵場がゴール前に視線を向ける。伊槌が
DFと駆け引きをしながらボールを呼び、近くでは木崎が今にも裏に

抜けようと一歩踏み出す。

2人ともディフェンスの射程内。闇雲なパスでは簡単に取られてしまう。どうすべきか、思考を回し続ける。

「追いついた……！」

「おっと、熱烈だねっ……！」

そこに、背後から御時。全速力で駆けながら、梵場にタックルを見舞った。体重の乗ったそれに、梵場が少しバランスを崩す。

もう、時間はない。一番合理的な選択は――

「くっ……受け取りたまえ、明風くん！」

「……わ、わわっ……！」

鋭く地を這うパスは、サイドでぼんやりとポジションを取っていた明風の足元に収まる。だが、明風は逡巡した様子で、次のアクションへの移りが遅い。

「おっと」

「っ……！」

当然、四壁恒星が呆然と眺めている訳もなくDFの湖池が即座にプレスをかける。明風は身体を強張らせて、動きが鈍かった。

「行け、明風くん！ 今度こそ抜いてみせろ！」

倒れ込む梵場から激励。それを受けてやっとなくなっていった頭が戻ったのか、湖池に詰め切られる前に、奥歯を噛んだ明風が動く。

「……うっ、だ、誰か！」

「……くっ、やはり……」

だが、起こされたアクションは闇雲なセンタリング。誰を狙ったものでもないボールを見て、梵場がかすかに呻く。

放られたボールには、CBの赤田が飛び出してヘディングのクリアをしようとする。だが――

「やらせるかっ！」

「な、伊槌鳴哉……!?!」

DFよりも早くボールに飛びついたのは、伊槌。赤田の前に無理やり身体を入れ、そのタックルを受け流し強引に前を向く。フリーでの大チャンス。

「カバー入りますよー！」

「クソ、早い……！」

だが、空中での一瞬の攻防が穴となり、先ほども伊槌からボールを奪取したデイフェンスリーダー、榊月の反応を許してしまう。

しかし、伊槌の目の色は変わらない。このボールを逃すまいと、ボールを軽く浮かして、大きく足を振りかぶる。

「止めてみる……！」

「力比べですか!? でも負けませんよー！」

一瞬呆気にとられる榊月だが、すぐに立て直して必殺技のモーションに入る。先ほどの場面の焼き直しだった。この時までには。

「電——」

「スワイプ——」

瞬間、伊槌がモーションを早める。電閃はまだ完成しきつておらず、このまま打つても楽に止められてしまうだろう。だが、問題ない。伊槌の狙いはシュートではないのだ。

「——閃ツ——」

「ツ——」

スワイプストームが発動する前に、伊槌がボールを地面に叩きつける。電閃は芝を削りながら大きくバウンドし、榊月の頭上を抜ける軌道。必殺技のモーションに気を向けていた彼女では、反応できないコース。

「シュートモーションをドリブルに転用した……！」

高機が構えながら、伊槌の所業に舌を巻く。やはりこの男は、ゴール前で誰よりも危険な存在足り得るアタッカーだ。

「もっかい行くぞー！ 貫くー！」

未だ電撃を纏いながら、伊槌が気を吐く。

だが、対峙する高機は、少し上に視線を向けながら、極めて泰然とした態度で言い放った。

「いえ、そこは彼の守備範囲ですよ」

「何——」

その言葉が紡がれると同時、伊槌の背後、その頭上から、銀の幻影

を伴って鋭く一つの影が飛びかかる。

「……ホーク、クロー……だ」

「ッ！」

それは、豊富な運動量と予測で中盤に君臨する鳥羽の姿だった。背後から急降下とともに放たれた、猛禽類のような飛び蹴りが伊槌のコントロール下からボールを弾く。

クソツ、と悪態を漏らす伊槌が、背後に大きく弾かれたボールを目で追う。四壁恒星DFの木島が、その落下点にすでに入っていた。

「うおおおっ！」

「おわっ!？」

だが、蚊帳の外にいた木崎が執念でボールに食らいつく。助走のついたダツシユジャンプで大きく飛び上がってボールを確保し、木島と対面。そして間髪入れずにその身体から炎が湧き上がる。

「ヒートタツクルッ！」

「ぐっ、まずい……！」

その猛突進を正面から受け止めることはできず、木崎が強引に突破。伊槌の対応で、デイフェンスラインには混沌が生まれており、誰も木崎に寄せることはできない。

千載一遇のチャンスは終わっていない。すぐさま判断した伊槌が、背後の鳥羽と榊月を背中を隠し、木崎のシュートコースを作る。

「わっ、ど、どいてくださいー！」

「今だ、打て木崎！」

「おお！ 言われなくてもかましてやるぜ！」

DFが来ないことを認識した木崎は、強く地面を踏み込んで赤色のオーラをボールに注入する。大腿筋が張り裂けんばかりに力を込めて、無邪気な笑みを浮かべながら、ボールに強く足を叩きつけた。

「グレネードショットオオオ！」

強烈な力の奔流が、四壁恒星のゴールを吹き飛ばさんと唸りを上げる。

それを前にしてもなお、高機は眉ひとつ動かさない。冷徹な機械を思わせる伶俐な瞳で真正面からシュートを射抜き、すつと赤い盾を握

る腕を伸ばす。

「お任せを——ファイアウォール・ランパード」

地面に叩きつけた盾は城壁を作り、グレネードショットを難なく受け止める。焦りの見せない主人と同じように、まさに難攻不落の要塞であった。

「ぐっ、やっぱすげえな！」

「……ありがとうございます。では、お返しのプレゼントを」

木崎の賛美に、少し戸惑った様子で返した彼女の足から、ピッチを縦に切り裂く、低弾道のロングパスが放たれる。

その先にいる『お返しのプレゼント』は——当然四壁恒星の十八番、超高速カウンター。届け先はいつも通りの10番、神風俊介だ。

「ナイスパスです……！ このチャンスは絶対にものにする！」

そう呟く神風の目が凜々しく光る。この試合、神風はここまで2本の決定機を外していることが、彼を燃え上がらせているのだ。

だが、憲戸はそんな彼の激情など知る由はない。即座に様崎が神風の前方を塞ぐ。

「おっとっと、ほんと早いねー。もっとゆつくり行かない？」

「生憎ですが、こういうやり方しか知らないもので」

対峙する様崎と神風。その背中を見る御時は、言い知れぬ感覚に思考を支配されていた。

(ディフェンスに焦りがなすすぎる……エースにボールが入ったのだ)

先ほどのカウンターの場面では、憲戸のディフェンスはもつと浮き足立っていた——今はあの時よりディフェンスの人数も少なく、千尋の谷に落とされる際だというのに、異様なほど落ち着いている。それが、御時の思考に引っかかる。

だが、そうであれど。

「ハア——」

大きく息を吐いて、神風がクラウドチングスタートの体勢に入る。

止められるわけがない。誰よりも早い彼を。誰よりも強い彼を。御時は何よりも、神風を信じていた。

「行け、エース！」

「——ッ！ゼロヨンッ！」

「くっ、はや——」

一瞬の急加速。たったそれだけの動作で、様崎は完全に千切られる。前半だけで何度も猛威を振るうその俊足は、単純ゆえに対策の打ちようがない。

「うおおおっ！」

神風が独走に入る。もう見ているのはゴールだけだ。誰も自分に追いつけるはずがない。彼にとって、それは驕りではなく、経験則から来る絶対的な自信。

目に映る久良島が、汗を垂らしながら深く構える。それを貫くために、少しスピードを緩めてシュートの体勢に移行——

「はあっ！」

「なっ、うわっ!？」

——した瞬間、神風の足が刈り取られる。

突然の事態に、地面に投げ出された神風の思考が追いつかない。混乱のままに動かした目が捉えたのは、小さな金髪の少女。

憲戸が誇るスピードスター、山本希望の姿だった。

「ふふん！ 足が速いのは、あんただけの権利じゃないのよ！」

「……まさか、僕のスピードについてくるなんて……！」

砂を噛む神風を尻目に、ホープが前線に向かってその小さな身体を進める。砂埃を巻き上げるほどのスピードが、流星のようにピッチを裂く。

そして、神風に立ち塞がった様崎のように、御時がホープの進路に身体を割り込ませる。

「君たちの落ち着きは、神風のスピードに勝てる対抗策があったからか……！」

「ええ、あたしのスピードは誰にも負けないもの！」

険しい顔の御時が言う通り、ホープが失点直後に与えられた仕事は二つ。

その一つは、今遂行した神風とのスピード勝負に勝ち、ボールを奪

い取ること。カウンターで意識が前がかりになっている時に攻撃権を奪えば、逆にチャンスとなり得る。

そして、もう一つ。神風を抑える役目と繋がる、その役割を遂行するために、ホープがさらに足を回す。御時が警戒を強めるが、遅かった。

「ライトニングアクセル！」

「……！」

閃光が御時の体をすり抜ける。認識する間もなく、ホープが彼を抜き去った証拠だった。

ホープに与えられたもう一つの役割。それは単純なものだ。

「あたしのスピードで、ディフェンスを混乱させること！ もっかい行くわよ！ ライトニングアクセル！」

「ぐわっ!!? 速すぎる!!?」

指示に従うホープがグングンとボールを運び、自軍のゴール前から数十秒も立たずハーフラインまで爆走してきた。彼女の常軌を逸したドリブルスピードに、四壁恒星の選手がこの日一番の焦りを見せる。

「くっ、人数かけて止めろ！」

「ランコースを塞げ！」

矢継ぎ早に指示が飛び、ホープの周りに3人のディフェンスが襲いかかる。だが、ホープにとってそれは想定内のこと——むしろ、そうあって欲しかったことだ。

「あたしにそんないっぱい来ちゃっていいの？ もっと広い視点で見ないと、ねっ！」

「あっ、しまったパスだ！」

囲まれる直前、ホープのパスがディフェンスの間を抜けていく。そのパスの先にいるのは無籐だ。

「くっ、行かせるかよ！」

「遅エー！」

すぐさま無籐にプレスを試みるも、間髪入れずに前線へロングパスが放たれる。だが、そのボールは単調なものだ。CBの赤田がすぐさ

ま回収に走った。

「この程度のパス、通してなるものか！」

「いや、必ず繋ぐ！」

落下地点に身体を振じ込むその男の姿に赤田が目を剥く。なぜなら、この試合CBとして出場しているはずの靴木が、未だに最前線に攻め残っていたからだだった。

混乱冷めやらぬ中、空中で2人の身体がぶつかり合う。

「ぐっ……………」

「三刀屋！」

虚をつかれたことに加え、その強靱なフィジカルを前に赤田が靴木に簡単に当たり負け、ヘディングで落とされたボールはサイドに開いていた三刀屋の足元へ。

「ヨシ、決めちゃつて！」

「行動が早い……………」

素早くSBが三刀屋のカバーに入るが、計算通りというように、空いたディフェンスラインにスルーパスが通される。それはゴール前でボールを待っていた伊槌の足元へ。

「よし……………」

しかし、ここまで時間を使えば、前線の選手たちも続々帰陣してくる。それが四壁恒星のアイデンティティ。

「……………ここまで……………」

中盤の鳥羽が、伊槌の前に立ち塞がる。それに少し顔を顰めた伊槌が、細かく視線を動かし――

「明風っ！」

「……………」

左サイドでフリーになっていた、明風へのパス。適切な強さで放たれたそれは、パスと彼女の足元に収まる。

だが、明風は動かない。ボールを保持したまま、唇を小刻みに震えさせながら、何もすることができない。

「明風……………!? どうした――」

「――急流下り」

明風の様子に唯ならぬことを感じ取った伊槌が、パスを戻させようと近づいた直後、揺らめく波のようなスライディングが彼女からボールを奪い取った。

それは明風に何度も辛酸を舐めさせたD F、湖池の技。抵抗もしないまま地面に倒れる明風を視界に収めて、小さくため息をつく。

「お前もいい迷惑だよな」

「……え？」

突然の言葉に、明風が顔だけを上げて湖池に視線を向ける。下から覗き込む体勢からか、湖池の被る笠のせい、陰が落ちたその表情は窺えない。

「応える力もないのに期待されて、無駄なプレッシャーに押しつぶされて……どうして諦めてくれないんだって、思ってるだろ？」

「そんな、こと……」

「ない。と言葉が続けることができない。」

ただ茫然と口を開く明風を見て、湖池は場違いなほど優しい微笑みを作った。

「俺もお前も同じだ。才能のある『持ってる奴ら』の踏み台になることしかできない」

「悔しいけど仕方ない。夢を見るだけ辛い。天才のそばにいて、勘違いしちまうのも全部」

「——もう終わらせてやるよ。俺たちがさ」

湖池の言葉が、じつとりと明風の脳髓に染み込んでいく。彼女はただ彼の言葉に耳を傾け、黒い表情の奥の、澱んだ虚無の瞳を見ていた。

「……さあトドメだ、キャプテン」

デイフェンスラインから一気に中盤の御時へ、大きなロングパス。攻めに転じていた憲戸の中盤は空いており、御時はフリー。誰にも咎められることなく、彼のもとにボールが渡る。

「いくぞ、カウンター！」

「くっ、皆戻って！」

御時にボールが渡ってしまい、カウンターのスイッチが入ってしまった

う。せめて一瞬でも遅らせようと、太田が勢いよく御時にチャージを入れようとするが、華麗な身のこなしでそれをいなされる。

そして返す刃もあつた。御時が背後に時計を出現させ、その針が尋常ではない速さで回り出す。そして――

「ラピッドクロック！」

「……っ!？」

警戒していた太田ですら反応できないほどの速さで、いつのまにか突破して見せた。慌てて追うももう遅く、前線に走る鳥羽へボールが。

「……!？」

「ナイス！」

間髪入れずに神風へ。得意の形に持っていかれるのを阻止しようと、様崎がその前に立ち塞がる。

「もう君は対策済みだよ！」

先ほども見せたディフェンスの形。様崎が時間を稼ぎ、ホープがスピードで勝って奪う。先ほどと同じでは、二の舞だろう。

だが、それがどうしたとばかりに、神風が再びクラウチングスタートの体勢を取る。流星に、様崎が少し驚いたような声を上げた。

「来る気なの……!？」

「一度勝ったくらいで攻略した気になるのは……甘いですよ！――ゼロヨン！」

スタートを切ると同時に、爆発的加速。また、ほぼ同じくして様崎がホープちゃん、と大きく声を上げると、快速の少女が、やはり神風に並走して来た。

「懲りないわね……!？」

「ええ、これが僕の十八番なので……!？」

ここまでは先ほどのカウンターの焼き増し。ここからが、憲戸が講じた対策を超えるための策だ。

それを裏付けるように、神風が広大な背後のスペースにヒールパスを送る。予想外の動きに、ホープが転がったボールに目をやる。

「……行く……ぞ」

「っ、なるほど」

そこに走り込んできたのは、鳥羽だ。パスモーションに入っていることから、神風の狙いは――

「単純なよーいどんってこと!？」

「その通り……! ドリブルでないなら僕も全力疾走できる……!」

そう言葉を残して、神風がぐんぐん加速する。そのスピードは凄まじく、今まで何とかついて来たホープでは追いつけないほどの速さだ。

それでも、諦めるわけにはいかない。血の味がして来た口内を黙らせるように、歯を食いしばる。

「こんのお……舐めんじゃ、無いわよお!」

「――来た」

ホープがさらに加速――した瞬間、神風が減速して、ホープに追い抜かせる。そして、悠々と鳥羽からのパスを受けた。

「えっ!？」

「そして――」

驚きで足を止めたホープを嘲笑うように、再び急加速。あっ、と間の抜けた声を上げる彼女を、今度こそ完全に置き去りにすることに成功した。

「スピードは走るだけのものじゃないですよ!」

「ヤベエ、止めろ久良島ア! 2点はまずい!」

「……はい!」

完全な1on1。ここで決められてしまえば、守備力に優れる四壁恒星から3点を奪わなければならなくなってしまう。つまり、敗色濃厚。

反対に勝利へ近づくため、神風がさらに気合を入れて足を回す。神風はこの試合で数多くのチャンスを演出しながらも、ゴールを奪えていないのだ。その気合いが、覇気のように久良島に襲いかかる。

「エースとして……! 絶対に決める!」

「……止めます!」

神風がボールを大きく蹴り出しながら、ゴールへと疾走。そして、

破壊的なほどのスピードを伴って、突風を従えるシュートが青き風と共に、久良島へと放たれる。

「——マツハウインド！」

「う、おおおおお……！」

この試合、久良島はまともにセーブすることができていない。ホープのスーパークリアに救われ、必殺シュートは土壇場の起点でギリギリ凌いだけだ。真正面から力で勝てていない。

だから、ここは力で抑えなければ——そんな強い思いわ、腕に込めるも、やはり普段の真っ黒パンチと変わらない。

「くっ……！」

どうしても、進化するためのイメージネーションが足りない。そう感じて、久良島は強く奥歯を噛む。

今更、新しく必殺技を作り出すことはできない、だったら、もう——

「はああああ……！」

「何だ……!?!」

過剰なほどに、右腕に漆黒のエネルギーを溜め込む、らそのほとんどは固定化できず、空中に霧散していく。

だが、それでも確実に。一部のエネルギーは、久良島の右腕に巻きつく。激しくエネルギーをロスしても、不格好でも、強くなりたいと願う拳だ。

「真っ黒パンチ——V2！」

一回り大きくなった拳を、死力を持ってマツハウインドにぶつけた。とてつもない衝撃にのけ反りそうになり、激しく体力を消耗した身体がくずおれそうになる。だが——

「ぐう……うおおおお！」

バゴン、という爆発音のような激しい音と共に、久良島の右腕を振り抜かれた。マツハウインドを、真正面から殴り飛ばしたのだ。

「まさか……!?!」

茫然とする神風の髪を揺らして、パンチングされたボールはピッチを縦断する。しかし、そのボールを収めるために割って入り込んだ影

は、御時の物が一番早い。

「貰った……！」

そして、ボールは再び御時の下に――

「させるかあ！」

「なっ!?」

――渡らなかつた。

梵場が決死の雄叫びを上げ、御時を押し除けてボールを奪う。普段の彼からは考えられないほど必死、そして泥臭いプレーだった。

梵場のサングラス越しの視線が、未だ自失状態の明風に向く。届くかどうか分からない言葉を、彼は叫んだ。

「明風くん！ 君が何をそんなに思い悩み、無気力の中に囚われているのか、悔しいことに僕は分からない！」

湖池との会話を預かり知らない梵場には、分からなかつた。

たかがミスしたただけ、ボールを奪われただけ。彼の知る明風輝夜という少女は、その程度で折れてしまうほど脆い少女ではなかつた。故に、どうすれば彼女の闇を祓えるのかさえ今の梵場には分からない。それでも、と。

「だが、君という月が翳るならば、闇が君を覆い隠すならば！」

梵場が走り出す。ただ一つのゴールを目指して。

「必ず照らして見せる！ 僕が――僕たちが！」

自ら噛み締めるように、力強く、宣誓する。少し曇っていた空が割れ、微かな陽光がピッチに降り注いだ。

「やられてたまるか！」

「生憎先約が埋まっついてね！ スピニングドライブ！」

一気呵成に攻め上がる梵場にディフェンスも食らいついてくるが、彼の勢いは止まらない。細やかなテクニックを活かし、ぶつかってきた木島を置き去りにする。

だが、四壁恒星のディフェンスラインは、まさに壁。木島のカバーに入っていた榎月がすぐさま梵場にチェックに来て――

「梵場ア！ 俺が空いてる！」

「俺もいるぞー！」

「さ、3人も……！」

しかし、梵場と並走する無籐、そして裏抜けを狙う伊槌のことを認識して、その足が一瞬止まる。だが、梵場から視線は外さず、次の動作に素早く反応出来るよう、最大限の集中を高めていた。

一瞬のアイコンタクト。そして、無籐が一気に榊月の裏を狙い走る。

「無籐先輩！」

「読めてますっ！」

梵場から無籐へのボール。それを察知していた榊月は無籐に身体を当て、空中の競り合いに持ち込もうとする。これで無籐が抜け出すことは不可能。

だが、予想に反して無籐はその場で停止し、榊月を背負う形になる。仰天する彼女に対して、トレードマークの凶悪な笑みを浮かべた無籐が、ボールを胸でコントロール。

「ハッ、今の俺は助演専門だ！」

そしてすぐさま梵場にリターンパスを返した。無籐の動きにより、フリーとなった梵場がさらに勢いよく四壁恒星の陣内を切り裂いていく。それに合わせて裏抜けを狙う伊槌にもディフェンスは目を離せない。必然、梵場の道は開いていく。

そして、ドリブルでペナルティエリア目前まで迫った彼の前に、最後のディフェンスが立ちはだかる。

「まったく、ほんと諦めが悪い……！」

それはやはり、湖池一舟だった。面倒そうに眉を顰めて、梵場と真っ向から正対した。

「なんで分かんないかな……無駄なんだよ、どれだけ頑張っても、どうにもならないことはある。ここで俺を抜いたって、高機から点は取れない」

そう口に出した湖池の表情からは、背後で構えるGKの高機への信頼に溢れている——ようには、どうにも見えない。

そんな湖池の複雑な胸中など知ったことではないと言うように、梵場は不敵に笑った。

「無駄かどうかなど……君が決めることではないよ」

梵場の視線が明凧に向く。サイドで走ってはいるが、やはり一向にボールを受けにこないその姿は、いつもの爛漫な様子は見られない。自信を失っている様子だ。

「結果は出なくとも、誰かにとつて意味のないものでも——」

明凧に届くかは分からないが、梵場は最高の笑みを浮かべた。心配するなどでもいうように。

そして湖池に視線を戻し、急激な加速と共にドリブル突破を図る。

「——僕の勇姿を、届けたい子猫ちゃんがいるのでね！ スピニングドライブッ！」

コマのような高速回転。梵場がこれまでの試合で幾度となく放った必殺技が、壁となる湖池に襲いかかる。

しかし、彼に焦った様子は見られない。泰然と構えたまま、波に揺られる船のように、ゆらりゆらりと体を揺らす。

そして、回転の合間を縫うように、飛沫のようなスライディングが、逆に梵場へと牙を向いた。

「——急流流し」

「っ、おっとー！」

だが、そのスライディングに間一髪で反応した梵場が、ボールを両足に挟み背後にジャンプ。ボールを保持して、湖池から距離を取る。

だが、好機は逃さないと、湖池から追撃のチャージ。

「ぐっ……！」

「ほら、通用しない。持つて生まれなきや、必ず壁に当たる」

体勢を崩しかけるも、ギリギリで湖池のステイールを交わす。そひて諦めずに、足技を混ぜながら突破を試みる。

「見えてる」

「っ、うおっとー！」

それも通じない。再び瀬戸際でボールを奪われはしなかった。

だが、これ以上時間をかけてはいられない。もうすぐ突破したディフェンスが帰陣してくるだろう。そう考えて、再び梵場が特攻を仕掛ける。

「……何なんだよ」

湖池が苛立ちの声を上げる。静かに、されど耳に残る声だ。

「報われない努力に、俺が現実を教えてやるつてのに……そんな泥まみれになるほど頑張つて……」

憎むような、羨むような複雑な声音。梵場はその言葉を認識して、口の中で笑った。

確かに、今の梵場はぶつかり合ったことでユニフォームを汚し、汗もひどい。サッカーを始める前の梵場なら、『美しくないと片付けていた、そんな姿だろう。』

(だけど——)

いつだって楽しさを忘れず、自由なプレーを見せてくれるキャプテン。

そのキャプテンの横に立って、朗らかに見守ってくれる少女。

勝利を心から追い求め、絶対に思考を止めない貪欲な少年。

ストイックに自分を鍛え続け、いつだって無骨に己が役割を果たす少年。

優しく力強く、そしてついに、自らを縛る殻を破り浮かした少年。

そんな彼らと共にサッカーをして、梵場の中にも、滾るものがあった。無謀でも見たい夢があった。

——そんな折に現れた。この夢を現実にしてくれるかもしれない、一筋の雷鳴が、彼らの下に。

その背中に夢を見た。振り抜く足に希望を見た。始めてサッカーを見た少年のように、胸を躍らせた。

「——なりたい」

自分も、夢を見るだけじゃない。見せる存在に。

「全部、押し流してやるよ……! ダイタルウェーブ!」

感情を押し殺したような瞳で、湖池が天を貫く波を呼ぶ。間違いない、湖池最強のブロック技。

「先輩たちのように——伊樋のように……!」

梵場は怯まない。津波に迷うことなく突進する。血迷ったとしか思えないアクション。

そして、梵場が大きくボールを蹴り上げる。そのボールが、空中にハマったかのように、高く上がった一点に固定された。

「子猫ちゃんたち^風に夢を見せる存在にッ！」

突如、ボールから七色の光が輝き出す。ミラーボールの閃光が、太陽のように上空から降り注いだ。

この土壇場で、梵場の新たなる必殺技かま炸裂した、ら

「ぐっ……!?!」

光に幻惑された湖池が、目を覆って集中を切らしてしまう。それと同時に、波が引いていく。そうなれば、梵場を遮る壁は、もうない。

ゴール前のフリーで、高機との1 on 1だ。

「ゴールは割らせません」

「おおおおッ！」

G Kと相対しても梵場はスピードを緩めない。高機は低く構えて待ちを選択した。

まだ引きつける、まだ飛び出さない、まだ、まだ——

「……………」

目を見開き、梵場との距離を一気に詰め——そしてその選択が誤りであったと、息を呑む。

「——クライマックスは譲るぞ、伊槌！」

「任せろ！」

梵場の背後、丁度高機から隠れるような位置で、ディフェンスを抑えていた伊槌にヒールパスが通る。体勢を崩した状態で、エースストライカーと相対する。奥の手は使えない、高機の明晰な頭脳は、この状況が絶体絶命であると絶えず警鐘を鳴らす。

「くっ、止める、高機アアア！」

御時の悲壮な声が、高機の耳朶を打つ。それと同時に頭がサツと冷えていった。

そくだ——引くわけにはいかない。

「このボールは絶対に沈める……! 行くぞ！」

「止められるかは微妙……それでも」

伊槌の足から、金色の稲妻が迸る。雷撃の熱波が、高機の身を焼く。

高機の手の内には、すでに矍鑠のエネルギーが集っていた。

そして、竜虎相搏つ。

「――電閃！」

「――ファイアウォール・ランパード」

雷撃と赤壁がぶつかり合う。けたたましい破碎音が周囲に轟き、衝撃が振動となってゴールネットをばさりと揺らした。

拮抗は全くの五分と五分。こうなればもう、両者の意地と精神の戦いだ。

「五分五分なのは計算済み……！　だとしても、絶対ゴールは……！」
「くっ、押されてる……！」

そして、その戦いで優位を取ったのは高機。無失点のプライドか、GKとしての責任感か。ファイアウォール・ランパードが徐々に電閃を押し返し始める。

唇を噛む伊槌。拳を握って趨勢を見守るそこに、手を出す影が一つあった。――梵場だ。

「伊槌！　僕を蹴り出せ！」

「はっ！」

だが、その提案は正気とは思えない。伊槌も一瞬、その意味を解せなかった。

あの壁にぶつかるといふのは、怪我だけで済むかも分からない。それが分かっているの発言か――と、問いかけを投げようとした伊槌は、梵場の目を見て、すぐさま迷いを捨てた。

「……行くぞ梵場！」

「フツ、やはり主役は僕になるようだね！」

いつも通りの軽口を叩きながら、2人が同時に飛び上がる。空中で一回転、そしてお互いの足を裏を合わせて平行に。射出の狙いは、拮抗するボールただ一点。

グググ、と両足に目一杯のエネルギーを凝縮して、堰を切るようにその力を解放した。

「行けえ、梵場アア！」

伊槌の雄叫びに押されて、梵場の顔面がボールにめり込む。予想外

の衝撃に、高機が目を見開いて体勢を崩した。

「ぐっ……!? 予想外、計算修正——!」

ビシリ、と音が鳴る。同時に、高機の目が、この試合で一番大きく見開かれた。動揺の色だった、ら

それに押されるように、頭を強かに打った梵場が、首を振るう。ボールに最後の一押しを加えるために。

「——きやあっ!」

クリスタルが割れるように、硬質な音を伴って、壁が砕け散る。赤の宝石がゴールを飾るように乱反射し、梵場の頭に押された電閃は、彼の身体ごと、ゴールネットに突き刺さった。

「……ぐうっ」

「梵場!」

よろめく梵場の身体を、急いで伊槌が支える。それと同時に揺れる頭がホイッスルの音を拾った。前半終了のようだった。

「フツ……やつ、たな」

「……ああ!」

伊槌の肩を借りながら、梵場がゆらりと歩を進める。無茶をした梵場の下に、憲戸のメンバーが続々と走り寄って来たのを、何とか認識した。

「とんでもねえことしやがって……」

「無謀とも言える策だ……だが、いい攻撃だった」

「というかそんなこと言ってる場合じゃないよ! 運んであげなきや!」

様崎が小柄な梵場の身体を横抱きに持ち上げる。霞む視界と、朦朧とした意識の中で、梵場の目がやっと明凧の姿を捉えた。

やはり、まだ元気な様子はない。しかし、その目は光を宿し、梵場を見つめて震えている。それを見て、梵場は笑った。

「ふふ……月は、昇るね……」

梵場の努力は、天まで届いて報われた。

GOAL!!?

30+1分 梵場踊太

アシスト：伊槌鳴哉

憲戸 1-1 四壁恒星

24話：逆境のマインド

「——よオし、前半のうちに得点できたのは僥倖だなア」

「ああ、奇策に近い形だったが……何にせよイーブンに戻せたのは大きい」

ハーフタイムに入り、後半を見据える憲戸のベンチでは、前向きな様子で前半の総括が行われていた。

これまで一点も失ってこなかった四壁恒星からのゴール。それがチームに与える影響は大きいものだ。高機のスーパールゴールを食らった時から想像できないほど、チームの全員が自信に満ちていた。

得点以外のプレーも通用している部分は多い。このまま行ければ勝てる、と、伊槌は胸の中で囁み締める。

だが、懸念はある。伊槌はベンチに腰掛ける梵場に目をやった。

「……ふう、すまないね子猫ちゃん。僕としたことが、熱くなりすぎたかな？」

「はあ……意外と元気じゃないですか」

視線の先では、いつもの様子で宵闇に絡んでいる。だが、やはりその身体は重そうだった。ファイアオール・ランパードに対して、捨て身のシュートチェインを行ったのだ、無理もないだろう。

「元気があるのだとしても、梵場は替えるべきだ。大事をとってな」

「うん、そうだねー」

靴木の言葉に、梵場を含めて反対の意はなかった。全員を代表して、様崎がその言葉に返す。

そして、梵場を下げるのだとすれば代役は——

「橘花さん、行けるかい？」

「……はい！ 任せてくださいー！」

監督として放たれた月並の言葉に、橘花が力強く応える。その言葉を受けて、彼の横に座っていた宵闇が、小さな声を溢す。

「……出るからには活躍をお願いしますよ。私たちも出来るつてこと、見せてきて下さい」

「うん！　ありがとう、宵闇さん！」

皮肉っぽい宵闇の檄に、橘花のやる気は一層漲つたらしい。胸の前で両手を強く握って気を吐く。この様子なら、ピッチに立つても物おじすることはないだろう。伊槌の懸念は杞憂だったと、頬を緩める。

そして、伊槌はもう一つの心配事の原因——何か思い悩むような表情を浮かべる、明風の肩に手を置いた。

「わっ!?　あ、い、伊槌先輩……?」

「悪い、驚かせたか」

軽く謝罪を入れつつ、伊槌は真剣な表情を作って口を開く。

「何か悩んでるのか？」

その言葉に、明風の表情が曇る。

——明風の脳裏に呼び起こされるのは、この試合幾度となくマッチアップした、湖池の言葉。

その数々は、彼女にとって到底受け入れられるものではない。だが、それが的を射ていると感じてしまう自分がいるのもまた事実で——明風輝夜は、自分を見失っていると言つてよかった。

まごついたまま言葉を返せない明風を見て、伊槌がどうしたものかと頭を悩ませる。

それでも、伊槌が口火を切った。

「明風、相手は失点して気を引き締めてくるだろう。梵場の捨て身で点を取れたが、次も奪える保証はない」

考えて、考えた末。結局は、自分の思いをストレートにぶつけるしかない、伊槌は辿り着いた。

たかが他人に言えることは限られているし、それは伊槌も同じだ。だが、今は同じピッチに立つものとして、同じ目線で目標を見据える仲間だと思っている。

「だから、後半は俺たちFWが鍵を握っているんだ。お前も、木崎も」明風が深い霧の中にいるのなら、そこから救い出したいと伊槌は思う。仲間だからだ。

この言葉が彼女の救いになるかは分からない。それでも伝えるべきだと、伊槌は辿り着いたのだった。

「明風、俺はお前を信じてる」

「……………」

ハーフタイムの終わりを知らせる主審の音が、耳朵を打った。明風の背中を優しく叩いて、ベンチから立ち上がる。

「勝とう、明風」

「……………」

言葉はなくとも、明風はピッチに歩を進めていく。迷いは晴れなくとも、進むべき道は見えたようだった。

伊槌も早くピッチに出ようと、歩き出そうとする。そこに、梵場の声がかけられた。

「伊槌」

「ん、どうした？」

振り返れば、少しくたびれた様子ながら、いつものようにキザったらしい微笑みをたたえる梵場の姿。

彼の視線が一瞬、遠くなった明風の背に向き、すぐに伊槌に直される。

「頼んだよ」

「…………ああ、任せとけ」

腕を伸ばして、二人の手のひらを打ち付ける。そして今度こそ、伊槌は戦場へと力強く走り向かっていった。

「ハッ、あちらさんはどうも表情が硬いな」
「それだけショッキングなのだろう。公式戦無失点のGKが抜かれたのはな」

無籐たちの言葉通り、ピッチに立つ四壁恒星イレブンの雰囲気は異様だった。だがそれは消沈しているわけではなく、むしろ、静かに燃え上がっているように伊槌は感じた。

「油断するなよ、必ず点を狙ってくる」

「おう、まずは守っていくか!」

当然、憲戸も気を抜くわけがない。四壁恒星がキックオフと共に仕掛けてくるだろうことを予測して、集中力を高める。

「準決勝で負けるわけにはいかない……必ず僕が点を取る!」

「うん……行くぞ!」

ついに後半開始のホイッスルが鳴る。御時にボールを渡した神風は、一気呵成に憲戸陣内へと高速で侵入してくる。

だが、想定内。伊槌は背後に軽く視線を向けて、すぐさま小さな金色の風が、神風を捕まえたのを確認した。

「このホープちゃんの目が速いうちは、あんたの好きにはさせないわよ!」

「目が黒いうちでしょう……!」

ホープと神風のマッチアップ。単純な走力では神風に分があるだろうが、ランコースを的確に切るホープの動きに捕まえられスピードに乗れない。これなら、ロングパスからの攻撃は鈍る。

この隙に、伊槌たちも四壁恒星陣内でプレスを開始。木崎と共に、御時に迫っていく。

「……鳥羽、一旦落ち着かせる!」

「……了、解」

だが、御時たちもそれを察知して細かいパス回しでプレスを回避してくる。鳥羽や他の中盤の選手が距離を詰め、セーフティなボールキープ。冷静な判断に、伊槌が舌打ちをした。

「木崎、無籐! 気は抜くな、ボールを進ませないようにするぞ!」

「分かってる!」

憲戸も中盤に人数をかけて、真っ向から攻防を開始。だが、むしろそれを待っていたとばかりに、鳥羽が一人空いたサイドのスペースへ疾走する。連動して、四壁恒星MFがパスを狙う。

「鳥羽!」

「行かせないヨ!」

すぐさまディフェンスに来た三刀屋を静かに一瞥。そして背後か

ら来たボールを見ずに、ワンタッチで横のスペースに流した。

「ナイス！」

「っ!？」

そのボールを、御時が手にしてドリブルを開始する。予想外の連携に三刀屋が慌ててスライディングをするが、一手遅かった。

「ラピッドクロック！」

「クッ……！」

御時の背後に出現した巨大な時計がその針を高速で回すのに連動して、早送りのように動く彼が三刀屋を抜き去る。やられた、と言う暇すら惜しく、伊槌たちはすぐさま反転して陣内へと戻っていく。

「……！」

「っ、何を……！」

御時が突破すると同時、神風が突如大きくバックステップを踏み、ホープと距離を離す。負けじと詰めようとするホープを意に介さず、御時とアイコンタクトを取り——悪寒を感じた伊槌が声を荒げた。

「そんな程度であたしのマークから逃げれる訳——」

「詰めるなホープ！」

伊槌の声に反応する前に、ホープが一步大きく踏み出す。その動きに呼応して、神風がスピードに乗って、一気に彼女の背後へと走り出した。

「今です！」

「うえっ!？」

いくら走力で互角に渡れるとしても、重心の逆を突かれては追いつくことなどできない。単純なスピードだけでは勝てないとすぐ判断した神風は、緩急でホープを手玉に取ってみせたのだ。頭の回るやつだと、伊槌は一種の感嘆を抱いていた。

そして、フィールド中盤から、御時の神風宛ロングパスが放たれる。この試合何度も炸裂したホットラインが再び火を吹こうとする。

「通行止めっ!！」

「……！」

だが、爆走する神風の眼前に様崎が立ち塞がる。あらかじめ低い位

置を取ってホープのカバーに入っていたのだ。

パスカットは難しいが、ブロックなら出来るポジション。トラップ際に刈り取ろうと待ち構える彼女に、神風の表情が歪む。

「このままじゃ……!」

「……神風!」

御時の声が、神風にぶつけられる。それだけのことだが、彼の中にあった迷いが弾けるような感覚があった。歪んだ口角が、力強く引き締まる。

「……そうだ、僕が決める……! 信頼に応えるために……!」

神風が強く歯を噛み締める。自らの不甲斐なさを食らうように食いしぼり、その瞳をさらに鋭く変えた。

そして、姿勢を低く構え、背を押されたようにさらに速く走る。トラップを狙ってくるなら――

「もっと深く、速く、鋭く――」

胸中の不安は拭いきれない。だが、それでもストライカーである自分が果たすべき責任のため――神風はジョーカーを切る。

「はあっ!」

「っ、直接……!」

緩く落ちてきたボールに、最高速で飛びつく。ボールと足が癒着せんばかりに強くぶつけ、槍をつくように、鋭く深く、ダイレクトボレーを打ち抜いた。

「行け! テンペストランスッ!」

神風が振り抜いた渾身のノートラップシュートは――急いで距離を詰めてきた様崎の横を、光のような速さですり抜けた。

「速っ!」

「うっ――」

愕然とした表情で、様崎が叫ぶ。辛くも反応した久良島が、角を狙って放たれたシュートに飛びつこうとする。だが、それは速すぎた。

誰の反応も許さずゴールを強襲したテンペストランスは、ゴール右隅へと吸い込まれるように飛んでいき――クロスバーに激突して、

ネットを揺らせず、コーナーを割る。

「……っ、クソっ……！」

「あ、危なかった……」

悔しげに地面を叩く神風を尻目に、憲戸イレブンは九死に一生を得た気分だった。

ディフェンスの誰もが反応できない超スピードのシュート。あんなものをゴールに放たれていたら、防ぐ術など考えつかない。外したところを見るに、難易度が高いのが唯一の救いだらう。

「悪い神風、こつちのパスも悪かった！ 次こそ決めよう！」

「……はい、僕に任せてください！」

しかし、このシュートをきっかけに、四壁恒星イレブンは活気付く。神風も思考を切り替え、引きずった様子もなくプレーに戻っていた。

苛立ちを抑えるため、乱暴に頭を搔く。何とかしなければ——伊槌のその思考を読んだように、無籐が手を叩きながら大きく声をあげる。

「ビビんな！ 失点はしてねエ、集中しろ！」

「うん、守備は僕達に任せて、攻撃に専念して！」

三年生による積極的な声かけが、チームに少し安定をもたらす。浮き足だった感覚が引いていくのを、確かに感じた。

そうだ、何にせよ得点を奪わなければ勝ちはない。大きく息を吐いて、伊槌は気を取り直す。

「木崎、明風！ ……ここで点取るぞ！」

「おう！」

「……」

言葉こそ無いが、明風からも確かな闘志を感じる。ならば大丈夫だ。伊槌は前線に貼り、パスをゴール前で待つ。

「はあっ……！」

久良島からのゴールキックが、中盤の深くで構えていた橘花に通る。途中出場特有の硬さこそ残っているが、確かに磨かれた技術で浮き玉をトラップし、迫っていたディフェンスを剥がす。

「上手い……!?!」

「よし、行ける……!」

そのままスピードに乗って反転し、ドリブルで持ち上がっていく。その姿は落ち着き払っており、このフィールドに立つに相応しい静かな熱意に溢れている。

「ここで止める!」

だが、ここでFWの仲川が自陣まで戻って守備に参加してきた。それを見た橘花は、繊細なボールタッチで徐々に彼我の距離を詰めていく。

ドリブルにも、パスにも移行できる隙のない姿勢。目の当たりにする仲川は迂闊に動けない。

「橘花ア!」

「はい、無籐先輩!」

「くっ、しまった!」

手をこまねいていた時間を使って、上がってきた無籐とのワンツーで橘花が突破。予想外の連携に仲川は悪態をつくほかない。

「いや、まだ僕がいる!」

しかし、その突破すらも予期していたのか、キャプテンの御時は抜け目なくカバーにやってきた。今度は無籐との距離も少し遠い、手助けは期待できない。

それでも、と橘花は力強く目を見開く。

「僕だって、ただぼんやりベンチに座ってただけじゃない!」

瞬間、橘花の身体が、周囲が吹き荒ぶ花卉に包まれる。ピンクに反射する桜の花びらが、まるで壁となるように御時の視界を覆い隠した。

「なっ、これは!?!」

「サクラフブキ!」

花びらが散る頃には、すでに橘花は御時を抜き去っている。そのことに遅れながらも気づいた彼が、くっとう喉を鳴らす。

前線の伊槌は三人を無力化した橘花のドリブルに心の中で拍手を送った。亜蘭戦で片鱗を見せていた技をものにしたこともそうだし、

何より基礎技術が上がっている。それに――

「橘花!」

――彼のパスならば、一気に自分まで来る。

信頼と共に、一気にデイフェンスラインを食い破る。

「……伊槌先輩っ!」

その読み通り、中盤を切り裂くベルベットパスが橘花から放たれた。

そのケアは怠っていなかったのだろう。ボランチの位置に下がって守備をしていた鳥羽が、待っていたとばかりにインターセプトを試みる。が――

「……っ、一歩……」

まさに針の穴を通すパス。つま先を掠め、伊槌の足元に収まった。間髪入れず、ボールを軽くリフトアップ。体勢こそ難しいが、無理やりでも打つしかない。

「ナイスパス、行くぞ! 電――」

「ザ・スリーパー! ええ〜い!」

――しかし、流石というべきか。四壁恒星のデイフェンスは、伊槌の想定以上に分厚かった。

榊月の気の抜ける声とは裏腹に、手に持ったモツプで豪快に大地を叩き割り、その衝撃が伊槌の身体を吹き飛ばす。器用にも、ボールは彼女の足元に収まっていた。

「――ぐっ……!?!」

「えへへ、お掃除完了ですっ!」

強かにフィールドに叩きつけられた伊槌が悔しさを吐き出す暇もなく、彼女はボールをセーフティにサイドラインにクリア――

「……うおおおおおっ! ホープちゃんを忘れてるんじゃないのっ!?!」

「ええっ!?!」

「ホープ……!?!」

――しようとしたボールを、奥底から神速で駆け上がってきたホープが、ギリギリで回収した。驚いた伊槌だが、神風のマークを捨てて

でも、この攻撃に賭けるホープの熱意に、言い知れない感動を覚えた。かつてとは違う、勝利へと強く掲げられた想いに応えるべく、痛む身体を押して、プレーを再開する。

「……ホープ！ 中央にー！」

「はあっ、はあっ……行くわよー！」

流星に体力が尽きかけているのか、多少ふらつきながらも、ホープが伊槌にパスを折り返す。当然、榊月も気を取り直しているため、このままではシュートまで持っていけない。

「無籐！」

「おオー！」

故に、彼女を片手で抑えながら、上がってきた無籐へのパスを選択。瞬間的に反転してゴールへ向かい、伊槌への警戒は解けない榊月も引きつれる。

だがこれで、フリーとなった無籐の選択肢は無限大だ。

「おら、明風ー！」

そんな中彼が選んだのは、サイドでフリーになっていた明風へのパス。明風ならドリブル突破からのクロスで、伊槌たちに繋げるという判断だ。明風も、自分にかけられている期待は分かっている。

だが――

「おっと」

「……っ！」

―― 相対するDF、湖池を目の当たりにした瞬間、足が止まってしまった。

「まだやる気？ 何度やっても同じだ、凡人が突然天才になることはない」

「くっ……」

行かなければ。頭では分かっているのに、身体に染みついた敗北の感触が彼女の動きを鈍らせる。

どこか満足そうに、湖池が必殺技のモーションに入った。

「そうだ、それでいい。急流――」

「テルヨー！」

突然、背中からぶつけられた声に、明凧が無意識のうちにパスを出す。

そのボールは、彼女を追い越していくチームメイト、三刀屋が確かに受け取った。

「ナイスパス！」

「……！」

パスを受けた瞬間に放たれた三刀屋の言葉が、明凧の深くに染み込むような感覚がした。

そして、オーバーラップからパスを受けた彼女は、すぐさまペナルティエリアに視線を向ける。木崎と、伊槌と、多数のDF。ただ放り込むだけでは簡単に跳ね返される。ならば――

「行くヨッ！」

「触らせるなよ！」

三刀屋の足から、ふわりとした弾道のクロスが、遠くのサイドまで流れていく。そこに待つのは、木崎だ。

「くっ、おおお！」

DFと押し合いながらも、木崎が懸命にボールに飛びつく。だが、このクロスではシュートに持つていくことはできない。

どうすれば――それが頭をよぎった時、高速のステップで楯月を置き去りにした伊槌が、目の端に現れた。

「俺だ！」

「っ！ 伊槌イ！」

木崎による決死のポストプレーから、伊槌がゴール前でボールを持った。高機と完全なる1on1、フリーでのペナルティエリア内。完璧な舞台設定に、伊槌がより強く奮い立つ。

ホープの頑張り、無籐の繋ぎ、明凧と三刀屋の連携、木崎の献身――このボールは、ストライカーとして、必ず沈めなければならぬ。右足のリフティング。そして目にも止まらぬ速さでボールの下を擦り上げ、雷撃が迸る。奥歯を噛み締め、全霊を込めて、その激情を蹴り抜いた。

「電閃ッ！ おおおおッ！」

憲戸中に来てから、これまで放ってきたシュートと比べても、これこそが最高の一撃。伊槌は胸を張ってそう言える電閃——それを前にして、高機は静かに佇んでいた。

「……謝罪します。私たちは、あなた方を心のどこかで見くびっていました」

滔々と、堂々としたその態度に、伊槌は油断ではなく、底知れなさを感じる。それほどまでに、高機から放たれるオーラは、凧のような落ち着きとは似つかない、ひどく激しいものを発していたのだ。

「その代償が、先ほどの失点——認めましょう、憲戸中の皆さん。あなた方は、本気でぶつからなければ勝てない」

高機が、強く握りしめた右腕を天に掲げる。その手首からは、青白く光る近未来的な0と1のホログラムが、3本の線となって空を衝く。

「故に、私の全霊を持って宣言します」

右手が開かれる。それと同時に、空間が軋むほどの衝撃と共に、蒼い巨大な手が、雄々しく現出した。

「——ここから先は、一点も許さない。デジタル・ザ・ハンド」

静かな宣告に導かれるように、巨腕が電閃に振り下ろされる。金色を力強く握る蒼穹のカイナは、今まで相對してきたキーパーとは一線を画すほどの強烈なパワーを内包していると伊槌は直感した。

だが、破れる——

「——第一リミッター解除、第二リミッター解除……！」

——そんな伊槌の思惑が、どんどんと青ざめていく。

手首から伸びる線が音を立てて弾けるたび、手を巨大化していく。二本目が碎けると共に、さらに、さらに大きく。

「最終リミッター……解除ッ！」

最後のホログラムが掻き消え、さらに一際大きく、大きく大きくなった右腕が——電閃を真っ向から握りつぶした。

「なっ……!?!」

「……ミッシェンコンプリート」

これまでも、電閃が破られることは何度かあった。

だがそれは、ブロックに入られたり、伊槌が本調子を取り戻していなかったころの話。これは、違う。

完全な敗北が、伊槌の芯に食らいついた。

「……チャンスと見ます」

「……っ！」

凍りつく憲戸イレブンを尻目に、高機がキャッチしたボールを足下に落として、片足を弓のように大きく背後に引く。その光景に、伊槌はあのシュートのモーシヨンだと勘づき、すぐさま現実へと意識を引き戻した。

「くそ、やらせるか！」

「——ええ、そう来ることを待っていました」

伊槌が素早く高機と距離を詰めて、失敗を悟る。高機は始めから、伊槌を釣ることが目的だった。

初歩的なキックフェイントで伊槌を抜き去り、ペナルティエリアを脱するほど勢いを持ってドリブルで上がる。まずい、と伊槌が声を張り上げた。

「カウンターだ！」

「ビッグチャンスです、御時先輩」

伊槌が慌ただしく怒号をあげるも、もう遅い。

ゴール・トウ・ゴールが可能なキック力を持つ高機なら、前線に上がっていた御時への超ロングパスすらも可能だ。ほとんどの人数が攻め上がっていた憲戸陣内で、パスの起点である彼にボールが渡った。

「くっ、俺が止める、様崎、太田は10番を——」

「遅い、神風！」

ほとんどダイレクトで、最前線を疾走する神風へとパスが放たれる。ホープのマークを外れた今、様崎も太田も追いつけない、完全なフリーダム。

「これが、僕ら四壁恒星の高速カウンターだ！ テンペストランスッ！」

そして、神風が神速のダイレクトボレーでゴールを襲う。今度は外

れないコース、先ほどのような命拾いは起こらないだろう。

すでに必殺技のモーションに入っている久良島が、齒を食いしばって迎え打つ。

「杏奈ちゃんっ！ 止めて！」

「はい……！ 真っ黒パンチ改っ……！」

一回り大きい漆黒の拳が、嵐の槍に叩きつけられる。だが——
「……っ!? きゃあっ……!?!」

——伊槌と高機の攻防とは裏腹に。一瞬の拮抗もなく、神の如き風を纏った槍が、暗黒を打ち払ってネットに突き刺さった。

「っ、よしっ！ やった、やったぞ！」

「流石だ神風！ 決まったな！」

再三の決定機を逃していた神風が、ついに来たとばかりに喜びを爆発させる。エースが見せるその歓喜は、四壁恒星全体に波及し、輪となったイレブンの中心で彼は揉みくちやにされていた。

対照的に、憲戸は絶望とすら形容できるほどの空気が伝播していた。

「くそっ……!」

無理もないだろう。最大火力である電閃が真っ向勝負で負け、相手のエースはチャンスをものにした。その差が、伊槌の肩に重くのしかかる。

今はただ、不甲斐なさから来る怒りを、芝を掴んで耐え忍ぶことしかできないかった。

GOAL!!?

38分 神風俊介

アシスト：御時針也

憲戸 1—2 四壁恒星

「お、おい。どうする伊槌……お前のシュートでもぶち抜けないなんてやべーだろ」

「僕たち、これ以上どうやって点を取れば……」

「……やっぱり、私じゃダメなんだ」

憲戸陣内に皆が戻る際、そんな不安が口々に漏れ出していく。一度追いついた上で、再び突き放されたのだ、メンタルの部分で、より強いダメージを受けるのは必然と言えた。

その上、ゴールの算段も、デイフェンスの部分ももう何も無い。敗北を確信してしまうことも責められない。

惨憺たる光景に、無籐が痺れを切らして、いつものように喝を入れようとして――

「諦めるな！」

――伊槌の檄が、それを遮った。

「確かに俺たちは二点取られてる、状況はすごく辛い！ だけど、俺たちだって一点取ってる！ 無敵の相手と戦ってるわけじゃないんだ！」

悔しさを飲み込むように、伊槌が奥歯を噛み締める。自分が決められていれば、皆こんな暗い感情を抱くことはなかった。いつだって、自分の力不足ほど苛立ちを覚える時はない。

だけど、その無力感、試合を諦めていい理由にはならない。

「その一点を残してくれた梵場の意思に報いるためにも、俺は最後まで戦う！ 皆も、最後まで諦めないでくれ！」

叩きつけるように、伊槌はそう叫んだ。

「……うん、もちろんだよ」

静かな声が応える。意外と言うべきか――それは太田だった。

「始めから諦めるだけは、もう辞めたんだ。……僕は戦うよ！」

「はあ……ふふん、あたしも、諦めろって言われたって勝ちに行くわよ！」

満身創痍ながらも、ホープも力強く拳を突き出す。それに感化されていくように、憲戸イレブンにかかっていたモヤが晴れていく。

「フフツ、コウハイにここまで言われたら、やるしかないよネ、サクヤ！」

「あははっ、ほんとだよ。キャプテンの仕事取られちゃった」

「……守備は俺たちに任せておけ、取ってこい、伊槌」

「……はい、私も……次こそは、絶対止めます」

活気を取り戻した守備陣が、背中を押すような言葉を次々に投げかけてくれる。誰の目からも闘志は消えてなどいない。

「……そうだよな、やるしかねえよな！ よしっ、伊槌がダメでも俺がぶち抜いてやるぜ！」

「僕も、頑張ります！ 途中出場でバテてたらかつこ悪いですもんね！」

向こうのエースがプレーで火をつけるなら、伊槌鳴哉は言葉でチームに火をつける。絶望を背にしても、憲戸は息を吹き返した。

安堵を抱いて息を吐く伊槌の肩を、無籐ががさつに叩く。驚いてそちらを見ると、凶暴な笑みを浮かべた彼が、無言で拳を差し出してくる。「よく言ったじゃねエか」と、無言で語っているように見えた。

はっ、と笑みをこぼして、握り拳をその手に打ちつけた。

「試合、再開します！」

「……よし、行くぞ！」

投げ渡されたボールを持って、伊槌と明風がセンターサークルに入る。そこで、伊槌は少し冴えない表情をする彼女に声をかけた。

「明風」

「……あつ、はい！」

すこし驚いた様子で彼女は答える。抱えている何かを完全に振り切ることはできていないようだ。それでも――

「お前の力も必要だ、頼むぞ」

その言葉に、明風は一瞬躊躇して、視線を下に落として――小さく、されど確かに頷いた。それで伊槌は満足だった。